

京都府遺跡調査概報

第73冊

1. 黒部遺跡
2. 舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡)
3. 長岡京跡右京第526次
4. 第二京阪自動車道関係遺跡
内里八丁遺跡
5. 木津地区所在遺跡
釜ヶ谷遺跡第3次

1996

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成6～8年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局、舞鶴市教育委員会、京都府乙訓土木事務所、日本道路公団大阪建設局、住宅・都市整備公団の依頼を受けて行った黒部遺跡、嶋遺跡、長岡京跡右京第526次、第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)、木津地区所在遺跡(釜ヶ谷遺跡第3次)に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、弥栄町教育委員会・舞鶴市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・八幡市教育委員会・木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成8年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | | |
|-------------------------|--------------------|----------------|
| 1. 黒部遺跡 | 2. 嶋遺跡 | 3. 長岡京跡右京第526次 |
| 4. 第二京阪自動車道関係遺跡(内里八丁遺跡) | 5. 木津地区所在遺跡(釜ヶ谷遺跡) | |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 黒部遺跡	竹野郡弥栄町黒部小字仲谷・金屎	平6.4.18～ 平7.3.3 平7.4.11～ 7.11	農林水産省近畿農政局	増田 孝彦 岡崎 研一 柴 暁彦
2. 嶋遺跡	舞鶴市大字千歳小字嶋	平7.6.19～ 12.22	舞鶴市教育委員会	田代 弘
3. 長岡京跡右京第526次	長岡京市天神一丁目	平8.5.23～ 7.12	京都府乙訓土木事務所	竹下 士郎
4. 第二京阪自動車道関係遺跡 内里八丁遺跡	八幡市内里小字八丁・日向堂	平7.4.20～ 平8.2.28	日本道路公団 大阪建設局	森下 衛
5. 木津地区所在遺跡 釜ヶ谷遺跡第3次	相楽郡木津町大字木津小字釜ヶ谷	平7.4.17～ 8.21	住宅・都市整備公団	有井 広幸

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

目 次

1. 黒部遺跡平成6・7年度発掘調査概要-----	1
2. 舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡)平成7年度発掘調査概要-----	57
3. 長岡京跡右京第526次発掘調査概要(7ANKJC-2)-----	61
4. 第二京阪自動車道関係遺跡平成7年度発掘調査概要-----	67
内里八丁遺跡-----	68
5. 木津地区所在遺跡平成7年度発掘調査概要-----	99
釜ヶ谷遺跡第3次-----	99

挿 図 目 次

1. 黒部遺跡

第1図	調査地及び周辺の主要遺跡分布図-----	2
第2図	黒部遺跡遺構配置図-----	4
第3図	A地点遺構配置図-----	5
第4図	黒部1～3号製鉄炉実測図-----	7
第5図	黒部2号炭窯実測図-----	9
第6図	黒部3・4号炭窯実測図-----	10
第7図	黒部5～8号炭窯実測図-----	11
第8図	黒部9号炭窯実測図-----	13
第9図	黒部10・11号炭窯実測図-----	14
第10図	黒部12号炭窯実測図-----	14
第11図	B地点遺構配置図-----	15
第12図	黒部4・7号製鉄炉実測図-----	16
第13図	黒部5・6号製鉄炉実測図-----	18
第14図	黒部13号炭窯実測図-----	20
第15図	C地点遺構配置図-----	21
第16図	黒部30号炭窯実測図-----	22
第17図	黒部29号炭窯実測図-----	23
第18図	黒部32号炭窯実測図-----	23
第19図	黒部33号炭窯実測図-----	24
第20図	黒部35号炭窯実測図-----	25
第21図	E地点遺構配置図-----	26
第22図	黒部14号炭窯実測図-----	27
第23図	黒部15号炭窯実測図-----	28
第24図	黒部16・17号炭窯実測図-----	28
第25図	黒部1号住居跡実測図-----	29
第26図	黒部2号住居跡実測図-----	29
第27図	黒部3号住居跡実測図-----	30
第28図	F地点遺構配置図-----	30
第29図	黒部18・19号炭窯実測図-----	31

第30図	黒部20～22号炭窯実測図	-----	32
第31図	黒部23号炭窯実測図	-----	33
第32図	黒部24号炭窯実測図	-----	34
第33図	黒部25号炭窯実測図	-----	35
第34図	黒部26号炭窯実測図	-----	35
第35図	黒部27号炭窯実測図	-----	36
第36図	黒部4号住居跡実測図	-----	36
第37図	黒部5号住居跡実測図	-----	37
第38図	J地点遺構配置図	-----	38
第39図	黒部38号炭窯実測図	-----	39
第40図	H地点遺構配置図	-----	39
第41図	黒部46号炭窯実測図	-----	40
第42図	黒部47・48号炭窯実測図	-----	41
第43図	黒部1・39・43～45号炭窯実測図	-----	43
第44図	出土遺物実測図(1)	-----	44
第45図	出土遺物実測図(2)	-----	46
第46図	製鉄炉関係遺物実測図(1) 黒部1号製鉄炉：炉壁・炉底滓	-----	47
第47図	製鉄炉関係遺物実測図(2) 黒部2号製鉄炉：炉壁・炉底滓	-----	48
第48図	製鉄炉関係遺物実測図(3) A・B地点、黒部2号製鉄炉：炉壁・炉底滓	-----	49
第49図	製鉄炉関係遺物実測図(4) 黒部1号製鉄炉排滓場出土	-----	50
2. 舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡)			
第50図	調査地位置図	-----	57
第51図	調査地平面図	-----	58
第52図	遺構配置図	-----	59
第53図	嶋遺跡出土遺物実測図	-----	60
3. 長岡京跡右京第526次(7ANKJC-2)			
第54図	調査地及び周辺遺跡分布図	-----	62
第55図	調査地平面図	-----	63
第56図	調査地土層断面図	-----	64
第57図	出土遺物実測図	-----	65
4. 第二京阪自動車道関係遺跡			
内里八丁遺跡			
第58図	調査地周辺遺跡分布図	-----	69
第59図	調査地位置図	-----	71
第60図	試掘調査地土層図	-----	72

第61図	第4・5遺構面遺構配置図	73
第62図	出土遺物実測図(1)	74
第63図	S H025実測図	74
第64図	S H087実測図	75
第65図	S H090実測図	75
第66図	出土遺物実測図(2)	77
第67図	第3遺構面遺構配置図	78
第68図	S H050・S H051実測図	79
第69図	S H052実測図	79
第70図	S H054・S H059実測図	80
第71図	出土遺物実測図(3)	82
第72図	出土遺物実測図(4)	83
第73図	第2遺構面遺構配置図	84
第74図	S B002実測図	85
第75図	S B033・S B034実測図	85
第76図	S B036・S B064実測図	86
第77図	S H048実測図	86
第78図	出土遺物実測図(5)	88
第79図	出土遺物実測図(6)	89
第80図	出土遺物実測図(7)	90
第81図	第1・2遺構面遺構配置図(11世紀末葉～12世紀後半)	91
第82図	S B001実測図	92
第83図	出土遺物実測図(8)	94
第84図	第1遺構面遺構配置図(13世紀以降)	96

5. 木津地区所在遺跡

釜ヶ谷遺跡

第85図	調査地位置図	100
第86図	トレンチ配置図	101
第87図	第3トレンチ断面図	103
第88図	6～9bt、13・15bt平面図	105
第89図	6bt平面図	106
第90図	17・18・21bt平面図、出土遺物実測図(1)	108
第91図	N R01断面図	109
第92図	出土遺物実測図(2) 木製器	111
第93図	出土遺物実測図(3) N R01墨書土器	113

第94図	出土遺物実測図(4) 土師器-----	114
第95図	出土遺物実測図(5)-----	115
第96図	出土遺物実測図(6)-----	116
第97図	出土遺物実測図(7)-----	117

付 表 目 次

1. 黒部遺跡

付表1	黒部遺跡炭窯規模一覧表-----	55
付表2	黒部遺跡住居跡規模一覧表-----	56
付表3	黒部遺跡製鉄炉規模一覧表-----	56
付表4	鉄滓重量集計表-----	56

5. 木津地区所在遺跡

釜ヶ谷遺跡

付表5	瓦出土点数表-----	109
付表6	出土遺物観察表-----	118

図版目次

1. 黒部遺跡

- 図版第1 (1) 仲谷地区全景(西から) (2) A地点全景(北から)
- 図版第2 (1) 黒部2号製鉄炉排滓坑近景及び1号製鉄炉近景(東から)
(2) 黒部1号製鉄炉近景(西から)
- 図版第3 (1) 黒部2号製鉄炉炉底滓検出状況(北から)
(2) 黒部2号製鉄炉炉底滓検出状況(東から)
- 図版第4 (1) 黒部2・3号製鉄炉近景(南東から) (2) A地点炭窯全景(北西から)
- 図版第5 (1) B地点製鉄炉全景(南から) (2) 黒部13号炭窯近景(北から)
- 図版第6 (1) 黒部5・6号製鉄炉近景(南南西から)
(2) 黒部4・7号製鉄炉近景(北北東から)
- 図版第7 (1) 黒部4号製鉄炉炉内堆積状況(南西から)
(2) 黒部4号製鉄炉断ち割り状況(南西から)
(3) 黒部5号製鉄炉炉内堆積状況(東から)
(4) 黒部5号製鉄炉炉内堆積状況(南西から)
- 図版第8 (1) E地点全景(南から) (2) 黒部14号炭窯近景(南から)
(3) 黒部15号炭窯近景(南から)
- 図版第9 (1) F地点全景(南西から) (2) 黒部20～22号炭窯近景(南西から)
(3) 黒部23号炭窯近景(南西から)
- 図版第10 (1) 黒部24号炭窯近景(南西から)
(2) 黒部24号炭窯内炭検出状況(北東から)
(3) 黒部27号炭窯近景(南西から) (4) 黒部5号住居跡近景(南西から)
- 図版第11 (1) 黒部29～35号炭窯遠景(南西から) (2) 黒部29～35号炭窯全景(南から)
- 図版第12 (1) 黒部29・30・32号炭窯近景(南南東から)
(2) 黒部34・35号炭窯近景(南南東から)
- 図版第13 (1) J地点全景(南東から) (2) 黒部38号炭窯近景(南から)
- 図版第14 (1) 黒部46～48号炭窯全景(南西から)
(2) 黒部47・48号炭窯近景(南西から) (3) 黒部46号炭窯近景(南西から)
- 図版第15 (1) 黒部1号炭窯近景(西から) (2) 黒部44号炭窯近景(北西から)
(3) 黒部39号炭窯近景(南西から) (4) 黒部45号炭窯近景(南西から)
- 図版第16 出土遺物

図版第17 製鉄炉関係遺物(黒部1号製鉄炉炉壁・鉄滓)

図版第18 製鉄炉関係遺物(黒部2号製鉄炉炉壁・炉底滓・鉄滓)

2. 舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡)

図版第19 (1)嶋遺跡遠影(南東から) (2)嶋遺跡遠景(北から)

(3)弥生時代海岸線検出状況(南西から) (4)同上

図版第20 (1)弥生土器出土状況(前期) (2)弥生土器出土状況(中期)

(3)土層堆積状況 (4)作業風景

3. 長岡京跡右京第526次(7ANKJC-2)

図版第21 (1)調査前全景(南から) (2)重機掘削状況(南から)

図版第22 (1)S D52602検出状況(北から) (2)S D52602完掘状況(北から)

(3)S D52602堆積状況(東から)

図版第23 (1)東壁土層堆積状況(西から) (2)調査風景(北から)

図版第24 (1)完掘状況(南から) (2)南グリッド完掘状況(西から)

4. 第二京阪自動車道関係遺跡

内里八丁遺跡

図版第25 (1)試掘調査第1トレンチ全景(西から)

(2)試掘調査第1トレンチ土層堆積状況(南西から)

図版第26 (1)試掘調査第1トレンチ噴砂検出状況(南から)

(2)試掘調査第3トレンチ全景(東から)

図版第27 (1)D2地区第4遺構面遺構検出状況(北上空から)

(2)D2地区第4遺構面遺構検出状況(南から)

図版第28 (1)D2地区第4遺構面SH025全景(北から)

(2)D2地区第4遺構面SH090全景(北から)

図版第29 (1)D2地区第4遺構面SH092検出状況(西から)

(2)D2地区第4遺構面SH087全景(西から)

図版第30 (1)D2地区第3遺構面遺構検出状況(北上空から)

(2)D2地区第3遺構面調査地南半部遺構検出状況(真上から)

図版第31 (1)D2地区第3遺構面調査地北半部遺構検出状況(真上から)

(2)D2地区第3遺構面SH051全景(南東から)

図版第32 (1)D2地区第3遺構面SH052全景(北西から)

(2)D2地区第3遺構面SH054全景(南東から)

図版第33 (1)D2地区第2遺構面遺構検出状況(南上空から)

(2)D2地区第2遺構面調査地北半部遺構検出状況(真上から)

図版第34 (1)D2地区第2遺構面調査地南半部遺構検出状況(真上から)

(2)D2地区第2遺構面SB002検出状況(北から)

- 図版第35 (1) D 2 地区第 2 遺構面調査区北東部遺構検出状況(南から)
(2) D 2 地区第 2 遺構面 S B 036・S B 064 検出状況(北から)
- 図版第36 (1) D 2 地区第 2 遺構面 S H 048 全景(西から)
(2) D 2 地区第 2 遺構面 S D 032 全景(北から)
- 図版第37 (1) D 2 地区第 2 遺構面 S E 042 検出状況(南から)
(2) D 2 地区第 2 遺構面 S E 073 検出状況(北から)
- 図版第38 (1) D 2 地区第 1 遺構面遺構検出状況(南から)
(2) D 2 地区第 1 遺構面鳥畑 2 検出状況(東から)
- 図版第39 (1) D 2 地区第 1 遺構面鳥畑 1 検出状況(南から)
(2) D 2 地区第 1 遺構面 S B 001 検出状況(東から)
- 図版第40 (1) D 2 地区第 1 遺構面 S K 003 検出状況(北から)
(2) D 2 地区第 1 遺構面 S E 035 完掘状況(南から)

5. 木津地区所在遺跡

釜ヶ谷遺跡

- 図版第41 (1) 調査前風景 1～13bt 付近(南西から) (2) 調査前風景 13～21bt 付近(北西から)
(3) 1 bt 全景(北西から) (4) 2～4 bt 東壁(南西から)
- 図版第42 (1) 4 bt 南壁(北西から) (2) 7～10bt 東壁(北西から)
(3) 13bt 全景(西から) (4) 13・15bt 全景(東から)
- 図版第43 (1) 13・15bt N R 01 全景(西から) (2) 17・18・21bt 全景(南から)
(3) 17・18・21bt 全景(北から)
(4) 18bt 付近 N R 01 上層遺物出土状況(南西から)
- 図版第44 (1) N R 01 断面弥生土器出土状況(18bt 付近、南から)
(2) 17・18・21bt N R 01 丸太材出土状況(東から)
(3) N R 01 断面(17bt 付近、南から)
(4) 17・18・21bt 北壁 N R 01 遺物出土状況(南西から)
- 図版第45 (1) 6～9 bt 全景(北から) (2) 6～9 bt N R 01 遺物出土状況 1 (北から)
(3) 6～9 bt N R 01 遺物出土状況 2 (東から)
(4) 6～9 bt N R 01 遺物出土状況 3 (東から)
- 図版第46 出土遺物(1)
- 図版第47 出土遺物(2)
- 図版第48 出土遺物(3)
- 図版第49 出土遺物(4)
- 図版第50 出土遺物(5)
- 図版第51 出土遺物(6)
- 図版第52 出土遺物(7)

1. 黒部遺跡平成6・7年度発掘調査概要

1. はじめに

黒部遺跡は、竹野郡弥栄町黒部小字仲谷に所在する。弥栄町内には、多くの製鉄遺跡が存在するが、調査地は、古代の製鉄遺跡として著名な遠所遺跡と、竹野川を挟んだ対岸に位置する。調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の黒部団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。

黒部団地造成に伴う調査としては、平成4年度に仲谷古墳群、平成5年度には黒部製鉄遺跡(石熊地区)、平成6年度に黒部製鉄遺跡(仲谷地区)・糖谷城跡、平成7年度には黒部遺跡(仲谷・金屎地区)をそれぞれ実施している。平成6年度までは黒部製鉄遺跡としていたが、さまざまな遺構・遺物が出土することから、黒部遺跡に名称を変更した。

仲谷古墳群は、5か所の古墳状隆起をなす地形が認められたため、試掘調査を行った。試掘の結果、自然地形や太平洋戦争中に射撃場の銃座として改変された地形であることが判明するとともに、直径0.8mほどの円形伏焼式炭窯が1基(黒部1号炭窯)検出された。試掘調査のため、遺構の掘削は平成7年度調査で実施することとなった(第2図)。

石熊地区の調査では、仲谷古墳群の銃座に対して、的場として部分的に削平を受けていたが、製鉄炉(長方形箱形炉)2基・登り窯状炭窯2基、及びその灰原1か所の調査を実施した。また、この地区の谷奥の造成地外にも、2基の炭窯(登り窯状炭窯?)が存在することを確認している。

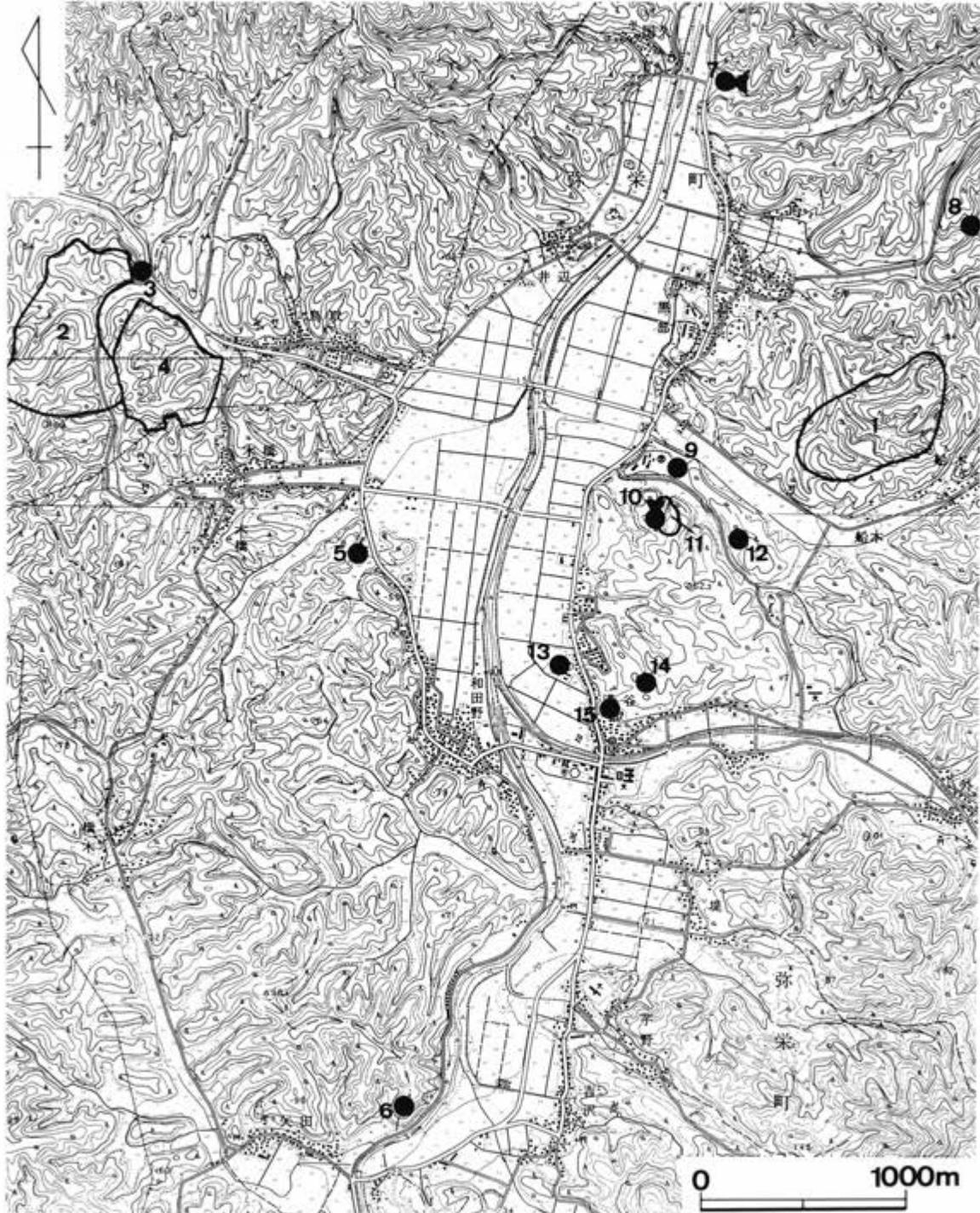
時期的には、製鉄炉の廃滓場から出土した土器から、9世紀前半頃に操業されていたと考えられる。炭窯については、土器の出土が認められないものの、規模的にも小さいことから製鉄炉と同時期のものと考えたい。

糖谷城跡は、黒部団地造成予定地の北端に位置し、城跡に伴う建物跡などは検出されなかったが、人工的な地形の改変は確認できた。これとともに、直径1mほどの円形の小型炭窯1基を検出した。周辺から出土した土器から、8世紀後半のものと考えられるが、仲谷・石熊地区とはかなり離れているため、これらの地区の製鉄炉に伴う炭窯ではなく、別の製鉄遺跡のものと考えられる。これから北側には、かせ谷遺跡、金谷遺跡といった製鉄遺跡が存在する。以上の調査については、概要を報告済みである。

平成6年度調査となった仲谷地区は、石熊地区から山一つ越えた南側の狭長な谷部にあたり、京都府教育委員会による試掘調査の結果、遺構はA～F地点の6地点で認められた。調査は、平成6年4月18日からA・B地点で開始し、平成6年9月27日まで実施し、9月9日には現地説明会を行った。平成6年9月28日以降は、E・F地点の調査へと移行し、平成7年3月3日まで調査を実施した。調査地全体の掘削面積は、遺構周辺まで行ったため約8,000㎡にも及んだ。調査

は、調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、調査員河野一隆が担当した。工事計画との関係上、C・D地点の調査は平成7年度に実施することとなった。

平成7年度調査は、仲谷地区C・D地点と、仲谷古墳群で検出されていた円形炭窯(黒部1号炭窯)と、仲谷地区から山一つ越えた南側の狭長な谷(金屎地区)が対象となったが、ここは、平



第1図 調査地及び周辺の主要遺跡分布図

- | | | | | |
|-----------------|------------|----------|-----------|-------------|
| 1. 黒部遺跡 | 2. 遠所遺跡群 | 3. ニゴレ古墳 | 4. ニゴレ遺跡 | 5. オテジ谷古墳 |
| 6. 大田南古墳群 | 7. 黒部銚子山古墳 | 8. かせ谷遺跡 | 9. 奈具遺跡 | 10. 奈具岡北1号墳 |
| 11. 奈具岡遺跡・奈具谷遺跡 | 12. 奈具墳墓群 | 13. 丸山古墳 | 14. 溝谷古墳群 | 15. 龍淵寺古墳 |

平成6年度に京都府教育委員会が試掘調査を実施しており、その成果を受けて当調査研究センターが平成7年4月11日から7月11日まで調査を実施し、6月28日には関係者説明会を行った。調査は、調査第2課調査第1係長伊野近富、同調査員岡崎研一・柴 暁彦が担当した。なお、仲谷地区D地点は埋め戻し保存されることになり、表土掘削と一部試掘調査を行い、本格的な調査は実施しなかった。今回は、以上の平成6・7年度調査について、概要を報告する。

また、平成8年度には、金屎地区の谷奥に当たる長芝原地区の調査が予定されており、京都府教育委員会による試掘調査の結果、5か所で遺構・木炭の堆積が確認されている。

概報執筆にあたっては、各地区担当者が分担執筆し、末尾に記した。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には作業員及び補助員・整理員として作業に従事していただいた⁽¹⁸³⁾。また、調査にあたっては、弥栄町教育委員会をはじめとする関係諸機関のご協力を得ることができ、現地でも多くの方々のご協力とご指導を賜った。改めて感謝の意を表したい。

なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(増田孝彦)

2. 位置と環境(第1図)

弥栄町の中央部には、丹後半島最大の河川である竹野川が肥沃な氾濫原を形成しながら北流し、丹後町境付近で狭隘部が形成されている。この肥沃な氾濫原を挟んだ東西の低丘陵には、西岸に位置する遠所遺跡の調査を契機として、多くの製鉄遺跡が存在することが明らかになってきた。現状では、丹後半島全体で製鉄・製鉄関連遺跡54か所が確認されており、このうち古代と考えられる遺跡は49か所で、大半の遺跡が弥栄町内に集中している。丹後半島内の製鉄開始時期は、遠所遺跡⁽¹⁸⁴⁾の6世紀後半を最古とする。しかし、同遺跡内には製鉄炉は確認されなかったものの、5世紀末～6世紀初頭に製鉄を行っていた可能性を示唆する部分も認められている。周辺にはニゴレ遺跡⁽¹⁸⁵⁾、小峠遺跡・カジヤ遺跡などがある。

黒部遺跡は、遠所遺跡と竹野川を挟んで存在する2大製鉄遺跡となった。周辺には、福谷遺跡、金谷遺跡、船木A・B遺跡、奈具・奈具岡遺跡といった多くの製鉄遺跡に囲まれた製鉄銀座の中央部でもある。また、調査の結果、一部の製鉄炉は遠所遺跡群に先行し、過去に調査を実施した遺跡に対して、製鉄・製炭・祭祀など、さまざまな相違が認められたが、丹後半島内での製鉄炉・炭窯の変遷を明らかにすることができた。

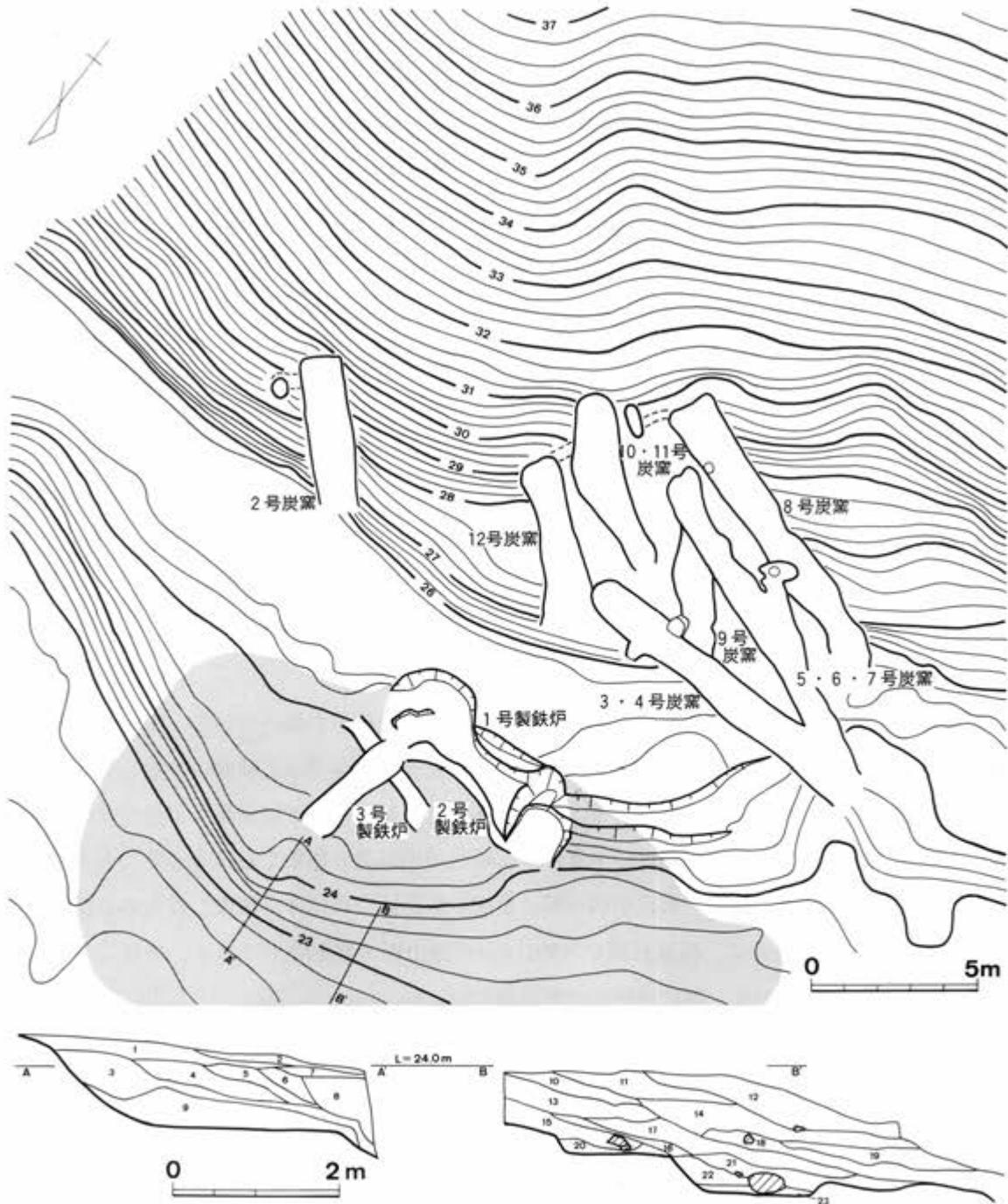
(増田孝彦)

3. 調査概要

黒部遺跡は、調査地が広範囲にわたることや、検出した遺構が多数にのぼること、平成8年度にも金屎地区に隣接する長芝原地区の調査が予定されていることから、小字名によって調査地区を設定し、調査地点はアルファベットで表記することとした。遺構番号はすべて通し番号を付けた。各々の遺構規模については、末尾の付表1～3に記載している。



第2図 里部遺跡遺構配置図



- | | | |
|----------------|-------------|----------------|
| 1. 明黄白色土 | 9. 黄白色粘質土 | 17. 黒褐色粘質土 |
| 2. 炭褐色粘質土 | 10. 黄灰色粘質土 | 18. 淡黒褐色粘質土 |
| 3. 炭混じり茶褐色土 | 11. 灰褐色粘質土 | 19. 淡灰黒色粘質土 |
| 4. 炭混じり暗茶褐色土 | 12. 淡黄灰色砂質土 | 20. 黄灰色粘土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 13. 暗黄褐色土 | 21. 灰緑色粘質土 |
| 6. 炭混じり淡黄灰色砂質土 | 14. 黒褐色粘土 | 22. 炭混じり黄褐色粘質土 |
| 7. 茶灰色粘質土 | 15. 暗茶褐色粘質土 | 23. 灰黒色粘土 |
| 8. 暗灰色粘質土 | 16. 黄褐色粘質土 | |

第3図 A地点遺構配置図

遺構の調査では、製鉄炉本体と排滓溝は6分割、作業面は4分割、住居跡については2分割して調査を行った。また、炉本体内の調査では、炉内の堆積物を層別に採集し、水洗いを行い、内容物の採集を行った。炉内・廃滓場出土遺物については、末尾に重量計量表(付表4)を記載しているが、細かい分類はできていない。小型炭窯については2分割、大型炭窯については長軸方向に2分割し、天井部の崩落状況、作業面の回数、窯体の修理状況の確認を行って作業面・灰原の調査も行った。天井部が残存するものについては、崩落しつつ残存するものと、作業当時のまま残るものとの判断が非常に困難で、大半は天井部を切り取り内部の調査を行った。天井部をそのまま残して調査を行ったものも4基あるが、崩落防止のための養生を行いながら掘削を行った。炭窯の調査では、現存する自然地形斜面から炭窯床面までの高低差がかなりあり、降水後は調査壁が自然崩壊し、断面の観察ができなかったものも多数ある。

調査の結果、仲谷地区で製鉄炉8基・登り窯状炭窯29基・小型円形炭窯4基・竪穴式住居跡5基が検出された。金屎地区では登り窯状炭窯4基・小型円形炭窯7基が検出された。

黒部遺跡で検出された製鉄炉・登り窯状炭窯の調査数は、丹後で製鉄遺跡の調査が平成元年度から開始されてから検出した数を上回るものである。

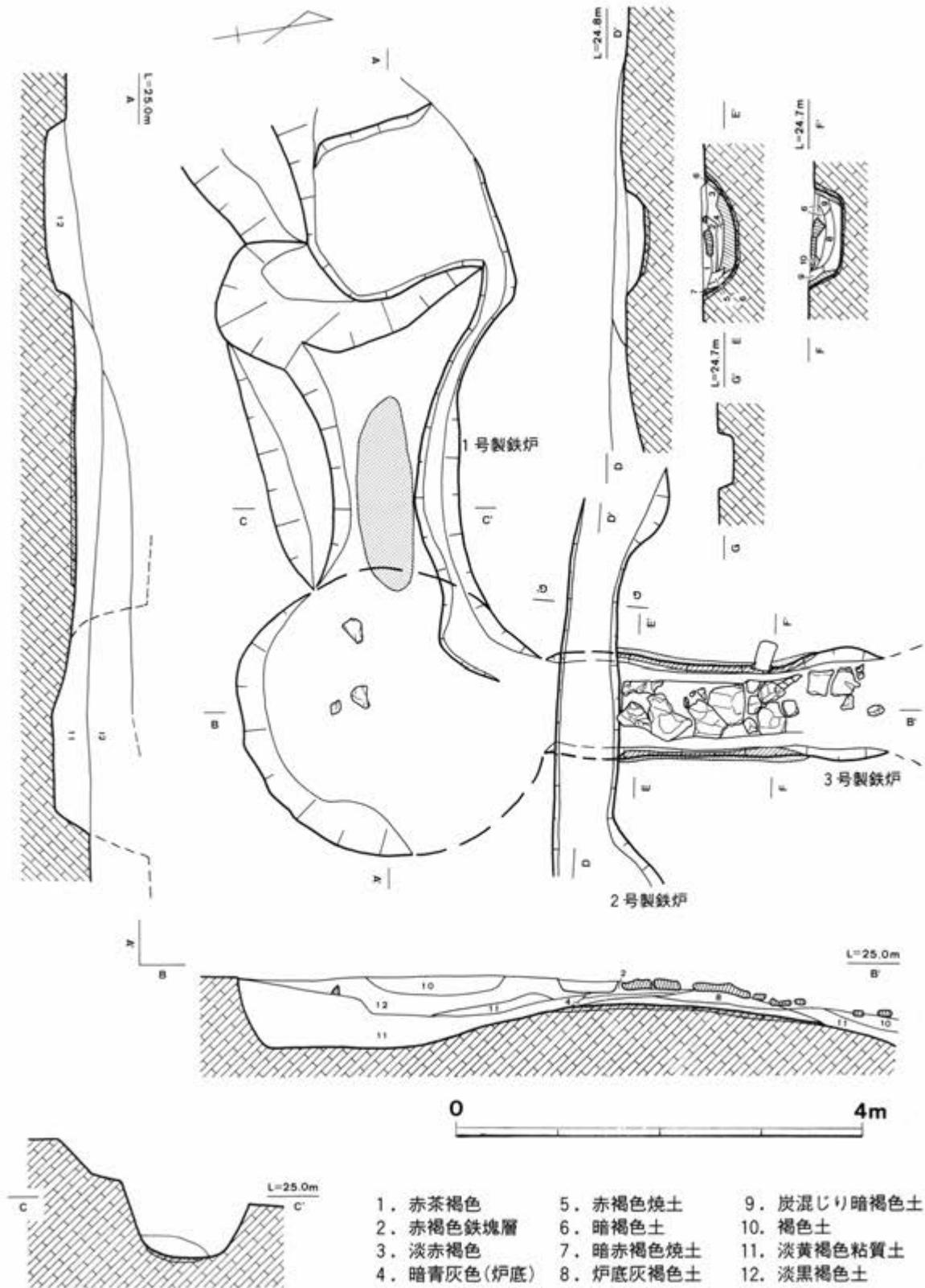
(1) 仲谷地区の調査

① A地点(第3図、図版第1)

丘陵裾近くの緩傾斜地を削平し、平坦部を設けて3基の製鉄炉を築いている。平坦部下方の湿地部分は、廃滓場となっているが、開墾によって削平を受け、廃滓は広範囲に分散している。背後の丘陵斜面には、切り合い関係を有する登り窯状炭窯11基と、単独で位置する登り窯状炭窯1基の計12基が検出された。平坦部は、全体が平安時代後期以降の開墾などによって、大きく二段にわたって削平を受けており、製鉄炉の一部、炭窯の灰原はこれに伴い消失したのも認められる。製鉄炉を検出したのは、現地表面から約1.0mの地山面・整地層上であり、後世に盛り土と削平が交互に行われており、製鉄炉付近が最も著しい。

黒部1号製鉄炉(第4図、図版第2) 長方形箱形炉と考えられる。東側に3号製鉄炉の排滓坑を再使用した排滓坑、西側には排滓溝を有しているが、後世の土坑が掘られたことで削平を受けている。排滓坑側の一部を2号製鉄炉の排滓溝のため、また本体部分も2号製鉄炉を築いたとき、さらにその後の破壊を受けたため、部分的にしか知ることができない。最もよく残存する本体中央部分と考えられるところでは、炉本体部分を掘削した後、掘形部分全体を焼き固めたようである。2号製鉄炉及び後世の開墾が、部分的に炉内にまで及んでいるため、炉内基礎部分の全体を知ることはできないが、排滓溝・炉内とも最下層の状態は部分的に観察された。いずれも最下層には、鉄滓・鉄塊系の遺物が少量混入し、炉内と考えられる部分では粉炭及び砂とともに突き固められた粉炭層が一部認められる。

黒部2号製鉄炉(第4図、図版第2～4) 1号製鉄炉にはほぼ平行して築かれており、3号製鉄炉の排滓坑付近の一部を削平する。長方形箱形炉と推定されるが、下部構造を有さない。地山を



第4図 黒部1～3号製鉄炉実測図

浅い溝状に掘り窪めた後、粘土を充填し焼き固めたようで、幅0.5～0.6m・長さ2.8m・深さ0.1mにわたって灰白色・淡青灰色に酸化・部分的に還元された溶結粘土床が検出された。単に焼き固めただけでは還元状態になるとは考えられないので、これを基礎(炉底)として炉を築いていたため、還元状態になったと推定される。この粘土中からも、熱を受けた砂鉄が若干採集された。炉の上方及び排滓溝は、開墾のため存在しないが、東・西側部分にはその残骸と考えられる浅い溝状の掘り込みが認められ、谷側面に向かってゆるく傾斜していく。東側部分の最下層では木炭を多く含む層から流動滓が出土している。粘土床の形状からも、両側に排滓溝が設けられていたと推定される。炉周辺の作業面から錆の多く付着した鉄滓が出土した。下部構造を有しない製鉄炉は検出例がなく、黒部遺跡以外では、竹野川西岸にあるニゴレ遺跡でほぼ炉底付近の完存するものが4基ほど検出されている。

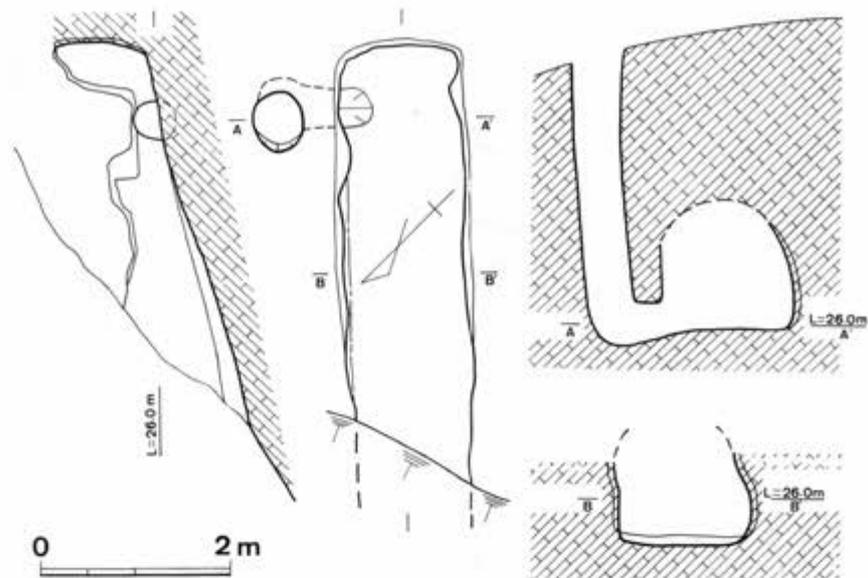
2号製鉄炉周辺で確認された廃滓について少しみると、1・3号製鉄炉では鉄滓はすべて割られて斜面・谷部の廃滓場に堆積していたが、2号製鉄炉の場合、下部構造を有さない製鉄炉であるためか、異なる廃滓が確認された。東側排滓溝と考えられる部分、すなわちその先端付近からは、1・3号製鉄炉で見られたような流動滓・炉底滓の一部・炉壁が検出された。一方、炉周辺の作業面では、赤錆びた鉄滓で操業後選別されて残された鉄塊系の遺物を思わせるような極小のものから、ゴルフボール大のものが全面に敷き詰められたような形で検出された。選別の際に不要としたものようであり、それを利用して炉周辺の整地をはかったと考えられる。同じような下部構造を持つニゴレ遺跡でも、同様な鉄滓が大量に出土し、ここでは谷部の廃滓場に堆積している。通常の廃滓場に比べて、より広く赤錆びた廃滓場が形成されている。量的に見ると、通常の鉄滓よりも赤錆びたもののほうが多くなっている。このようなことから見ると、下部構造を有さない製鉄炉では、通常の炉に対して若干異なる生成物が生じるとも考えられ、このようなことからすれば、2号製鉄炉周辺から出土する鉄滓は廃滓場のものである可能性がある。

黒部3号製鉄炉(第4図、図版第4) 削り出した平坦面の先端付近に位置し、1・2号製鉄炉が等高線に対して平行して築かれていたのに対し、直交して築かれる。長方形箱形炉と考えられ、1号製鉄炉と同様、本体部分を掘削後に焼き固める。粘土質の地山上に位置しており、掘り込み側壁には粘土を貼り付ける。この焼き固めた上に、少量の鉄滓や砂鉄・鉄塊系の遺物を混入させた粉炭層が厚く突き固められ、その上に炉底の溶結粘土が形成されている。溶結粘土上には、1.8m×0.55mにわたって炉底滓が残存しており、これによると炉の内法は、幅0.6mの大きさが推測される。この炉底滓上には鉄塊系の錆膨れした鉄の付着も認められた。炉底滓自身の重量は約110kgである。炉底滓は、谷側に向かって約7°の傾斜で堆積しているが、炉底滓自身の厚さはほぼ均等である。また、焼き固められた本体部分も、炉底滓同様の傾斜である。

北側は、排滓溝で平坦部分下方の斜面まで掘削されている。掘り込み側面は焼けていない。南側は、排滓坑となっていたようであるが、1号炉の排滓坑再掘削に伴い消滅しており、原形をとどめていない。

切り合い関係から見たA地点の操業順は、3号製鉄炉→1号製鉄炉→2号製鉄炉となる。

1・2・3号製鉄炉の廃滓場では、製鉄炉の存在する平坦部周辺を取り巻く形で湿地部分に多量の鉄滓の集積が認められたが、水田の開墾に伴って削平されており、個々の製鉄炉に対応する廃滓場は確認できなかった。廃滓場や



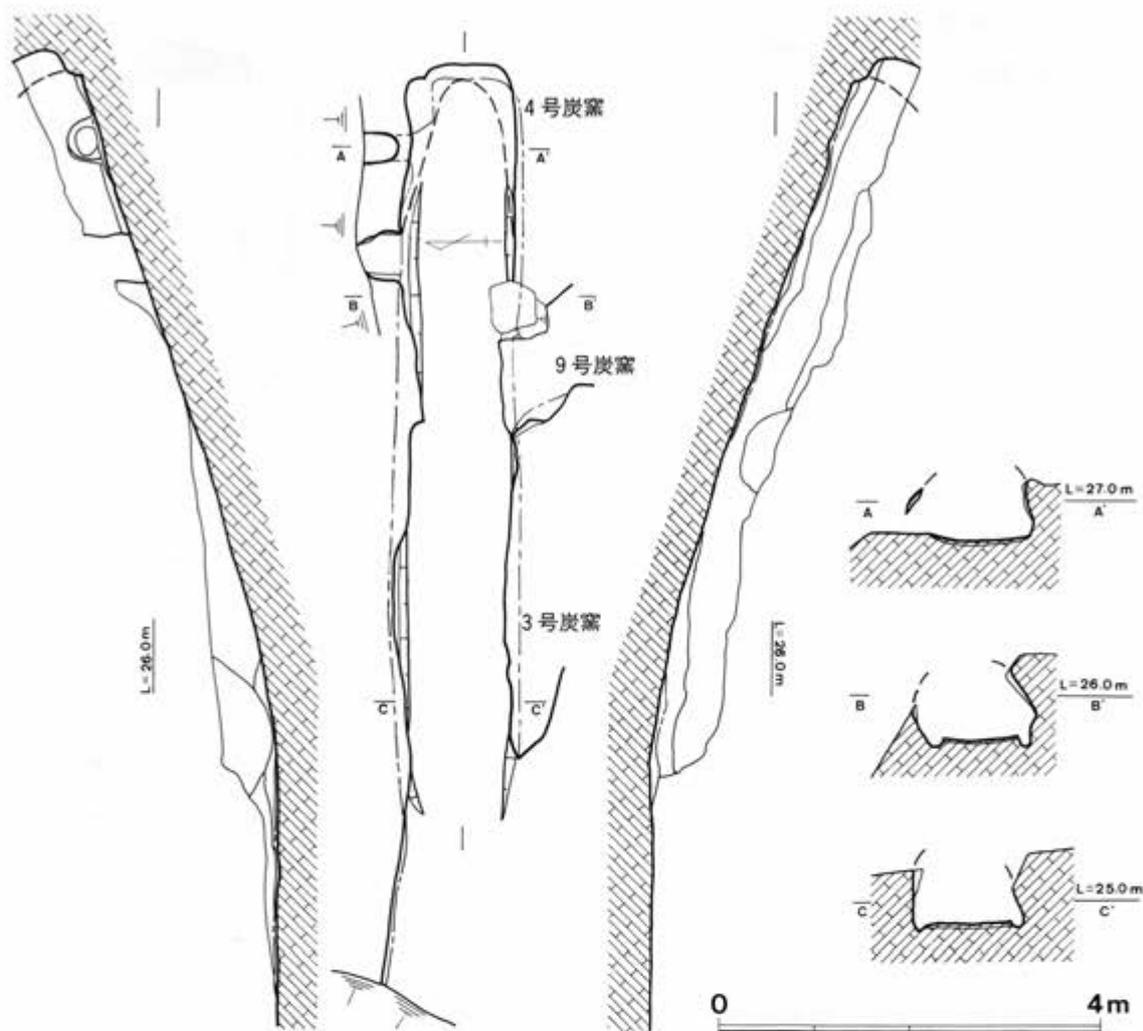
第5図 黒部2号炭窯実測図

製鉄炉周辺からは、須恵器・土師器が出土した。時期的には8世紀後半と9世紀初頭で、3基の製鉄炉の操業時期を示すと思われる。

黒部2号炭窯(第5図、図版第4) 単独で築かれた登り窯状炭窯で、主軸は等高線に直交せず、 $N-132^{\circ}-E$ である。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。窯体には粘土の貼り付けは行わない。炭化部の平面形は長方形をなし、奥壁までほぼ等幅で掘削される。焚き口部・灰原は後世の開墾で削平されているが、灰原の先端と考えられる部分が2号製鉄炉を築いたときの整地層の下層からその一部が確認された。煙道は、奥壁から手前0.6mの床面左側(奥壁に向かって)に取り付く。煙道は窯体内部及び外部の両方から掘削されている。天井部はすべて崩落していた。窯体内の堆積状況であるが、黄褐色砂質土の崩落土を除去すると、床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層は操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認された。木炭の出土量はそれほど多くはない。操業時期は、2号製鉄炉の整地層下層に灰原が広がることから、2号製鉄炉に先行すると考える。

黒部3・4号炭窯(第6図、図版第4) 炭窯が密集する部分の最も低いところに位置する。窯本体は、等高線に直交せず、 $N-90^{\circ}-E$ である。同一場所に2基の炭窯が重なっており、初期のものを3号炭窯、操業に伴い拡張されたものを4号炭窯とする。窯体は地山の粘土を掘削し、窯体には粘土の貼り付けを行う。炭化部の平面形は長方形を呈し、奥壁までほぼ等幅で掘削される。焚き口部・灰原は、南側に位置する5号炭窯の灰原作業面となっているため存在しないが、灰原の先端と考えられる部分の一部が5号炭窯の下層から確認された。炭窯が増築されたことを物語るように、煙道側の奥壁コーナー部分にズレが認められる。

煙道は、奥壁に向かって3号炭窯が奥壁から手前1.4m、4号炭窯が0.8mの床面左側に取り付く。排煙口側は、開墾によって斜面低位側が削平されているため明確でないが、旧地形から判断すると、窯体内部及び外部の両方から掘削されたと推定される。天井部はすべて崩落していた。



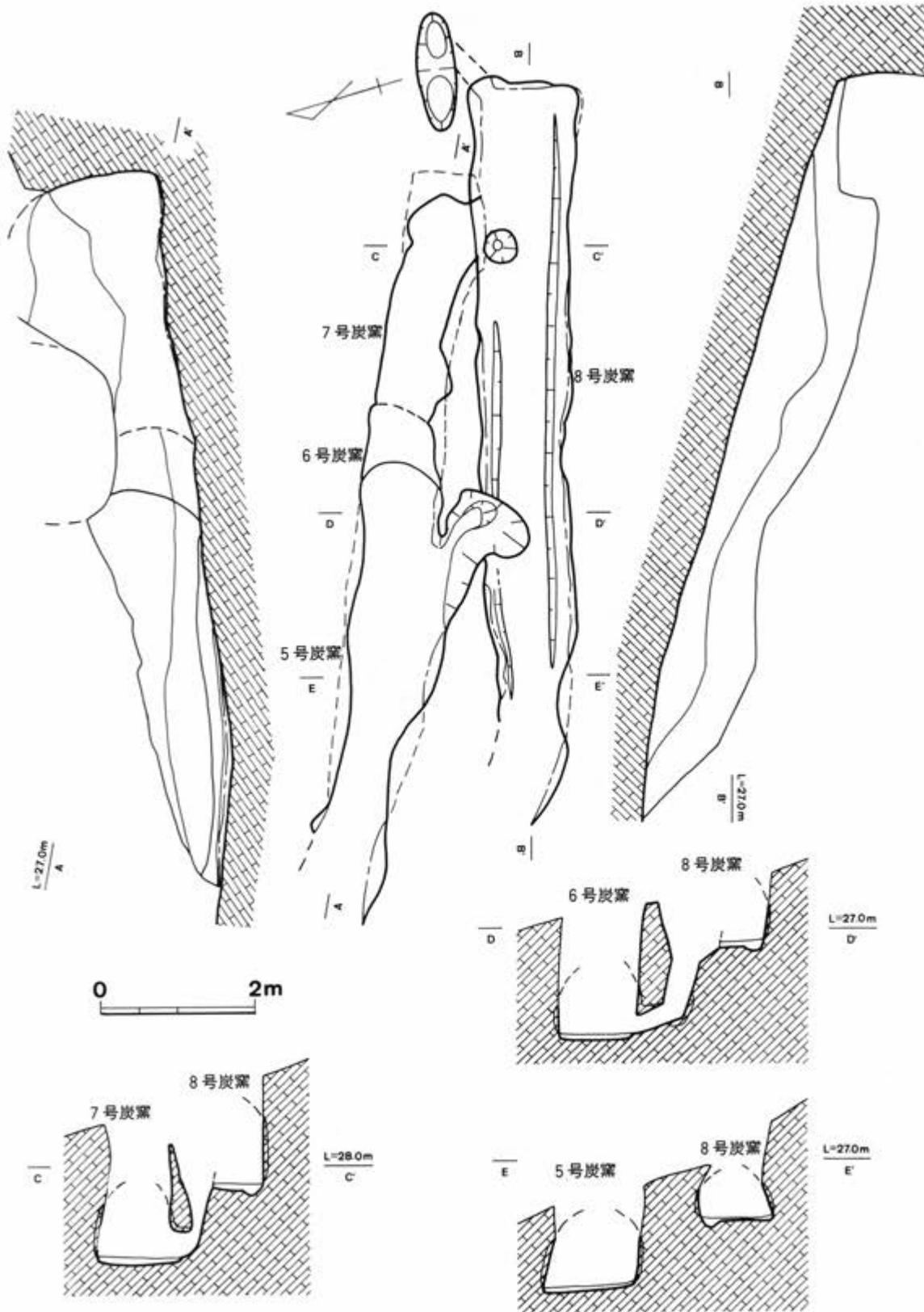
第6図 黒部3・4号炭窯実測図

窯体内の堆積状況は、黄褐色砂質土の崩落土を除去すると、床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層は操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認された。地山の粘土を掘削した床面は、3号炭窯では煙道付近まで熱を受けている。窯体掘削後に空焚きされたと考えられるが、粘土層では空焚きを行っても窯体の表面の剥離はなく、床面上に直接木炭の堆積が認められた。

3号炭窯床面では、奥壁近くから焚き口と考えられる部分まで、両側壁に沿って幅16cm・深さ5cmの排水溝を検出した。この排水溝は、空焚き後に掘削されたようで、溝自体は酸化被熱の跡はない。奥壁付近に見られる平面的なズレや段差は、3号炭窯操業後に拡張されたものであり、焚き口閉塞除去の際に天井部が崩壊し炭化部が縮小したため拡張されたと考えられる。遠所遺跡検出の古墳時代の登り窯状炭窯では、1回あたりの操業で、焚き口が40～50cmずつ窯体内に進行している例も見られたが、ここでは進行したようすは確認されなかった。

操業時期については、5号炭窯の灰原・作業面下層に本炭窯の灰原が広がることから、5号炭窯に先行すると考える。

黒部5・6・7号炭窯(第7図、図版第4) 5号炭窯は、黒部遺跡中最も新しいと考えられる



第7図 黒部5～8号炭窯実測図

炭窯で、この炭窯の延長上には同一場所にあと2基の炭窯が重なっている(黒部6・7号炭窯)。窯本体は等高線に直交せず、N-117°-Eである。最も奥に位置する初期の奥壁側1/3が残存するものを7号炭窯、これを改変し奥壁付近のみ残存するものを6号炭窯とした。また、7号炭窯の上部には6号炭窯が重なっている。

5号炭窯は、6号炭窯の本体部分をほとんどそのまま利用したようであるが、奥壁部分、煙道部分は新たに掘削している。このことは、5号炭窯の奥壁崩落土が一部スサ入り粘土で補強されていたことからもうかがえる。6号炭窯と7号炭窯境付近から、一部7号炭窯側は花崗岩の岩盤となる。また、6号炭窯の一部は粘土の貼り付けを行うが、床面は粘土層上のため、空焚きした際の赤色酸化被熱部分が一部認められる。炭化部の平面形は、残存部分で見る限り3基とも長方形で、奥壁までほぼ等幅で掘削される。5号炭窯焚き口付近には、6号炭窯操業に伴う赤褐色土と炭層の堆積が約10cm、天井部崩落土の堆積が約10cmあり、その上に5号炭窯の操業に伴う赤褐色土・炭層の堆積が20cmほど認められ、操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3~4面ほど確認された。天井部はほとんど崩落していたが、5号炭窯の焚き口付近と考えられる部分では高さ約1.3mの天井部がドーム状に残存しており、調査の安全上除去した。

初期操業の7号炭窯は、奥壁から1m手前の床面右側に煙道を設け、隣接する8号炭窯へ煙道が抜かれており、操業時の床面から8号炭窯の築造時床面まで酸化被熱の跡がある。これから上方の煙道部分は、8号炭窯炭化部をそのまま煙道としたのか、崩落後新たに掘削されたかは確認することはできなかった。6号炭窯は、7号炭窯の天井部が一部崩落した後、掘削されているようであるが、他の炭窯に見られるような側面に煙道痕跡が認められないため、奥壁から上部に向かって煙道が設けられていたと考えられる。

出土遺物は、5号炭窯最終操業時床面上の堆積土中から13世紀頃に相当する瓦器碗(第44図9)が出土した。操業時期を示す資料となる。

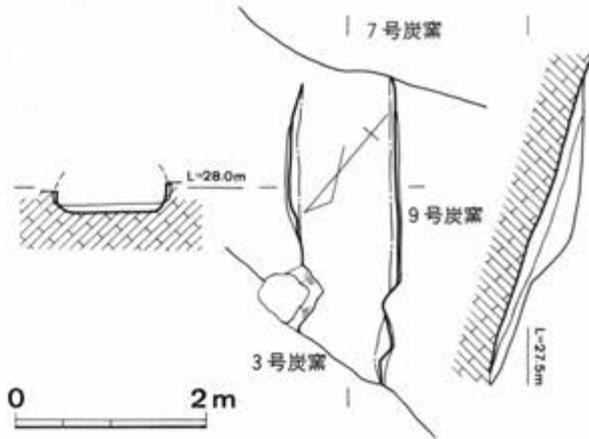
黒部8号炭窯(第7図、図版第4) A地点の南端に位置し、5~7号炭窯と切り合い関係にあり、4基中最も初期に操業されたものとなる。窯本体は等高線に直交せず、5~7号炭窯とほぼ平行する。窯体は、地山の粘土を掘削しただけの素掘りである。5号炭窯の煙道付近から焚き口にかけては粘土層となるため粘土を貼り付けるが、その他の部分には粘土の貼り付けは行わない。炭化部の平面形は長方形で、奥壁までほぼ等幅で掘削され、焚き口はやや幅をせばめる。作業面・灰原は隣接する5号炭窯の灰原作業面となっているため存在しない。

煙道は、奥壁左側床面コーナー部分から上方に延びるが、途中10号炭窯の煙道と合流し1本となり外上方へ抜ける。煙道は、窯体内部及び外部の両方から掘削されたと推定される。天井部はすべて崩落していたが、窯体内の堆積状況は、黄褐色砂質土の崩落土を除去すると床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層は操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3~4面ほど確認された。地山である粘土を掘削した床面は、煙道付近まで熱を受けている。床面には、奥壁近くから焚き口と考えられる部分まで、両側壁に沿い幅25cm・深さ10cmの排水溝を検出した。この排水溝は、空焚き後に掘削されたようで、溝自体は酸化被熱の跡

がない。

遺物としては、木炭片が少量と、焚き口付近で須恵器(第44図4)が出土した。

黒部9号炭窯(第8図、図版第4) 炭窯が密集する斜面中位に位置し、3・6・7号炭窯崩壊後に築造されており、奥壁と焚き口付近が流出したり、後世の開墾によって消失し、炭化部中央付近のみ残存する。主軸は、等高線に直交している。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。窯体には、粘土の貼り付けは行わない。炭化部は、長方形を



第8図 黒部9号炭窯実測図

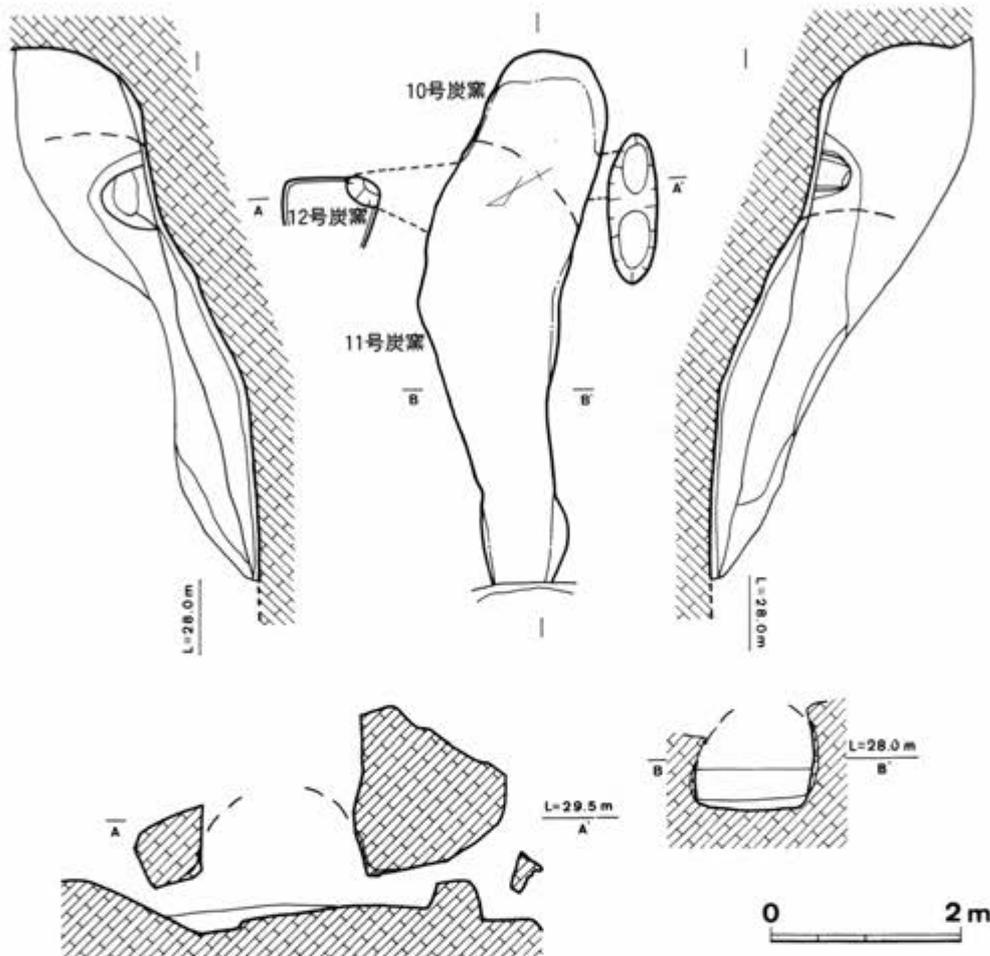
なし、ほぼ等幅で掘削される。床面規模・傾斜角などからすると、天井部はかまほこ状を呈していたと推定される。窯体内の堆積状況は、崩落土を除去すると、床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層は操業に伴うと考えられる薄い赤褐色土と炭層が互層となって確認された。地山を掘削した床面には被熱の痕跡がなく、約10cmの厚さで炭と酸化被熱した赤褐色土粒の堆積が確認された。

黒部10・11号炭窯(第9図、図版第4) 炭窯が密集する部分の最高所に位置する。窯本体は等高線にほぼ直交する。同一場所に2基の炭窯が重なっており、初期のものを11号炭窯、操業に伴い拡張されたものを10号炭窯とする。窯体は地山の岩盤に掘削しただけの素掘りである。窯体は、10号炭窯が焚き口付近ほど狭く、奥壁煙道近くほど幅が広がるナスビ形をしており、拡張された11号炭窯は、10号炭窯の煙道付近で「く」字状に南側に曲がり、奥壁までほぼ等幅で掘削される。焚き口部・灰原は、南側に位置する9号炭窯の窯体となっているため存在しない。炭窯が増築されたことを物語るように、11号炭窯の煙道付近で床面傾斜角が大きく変わる。

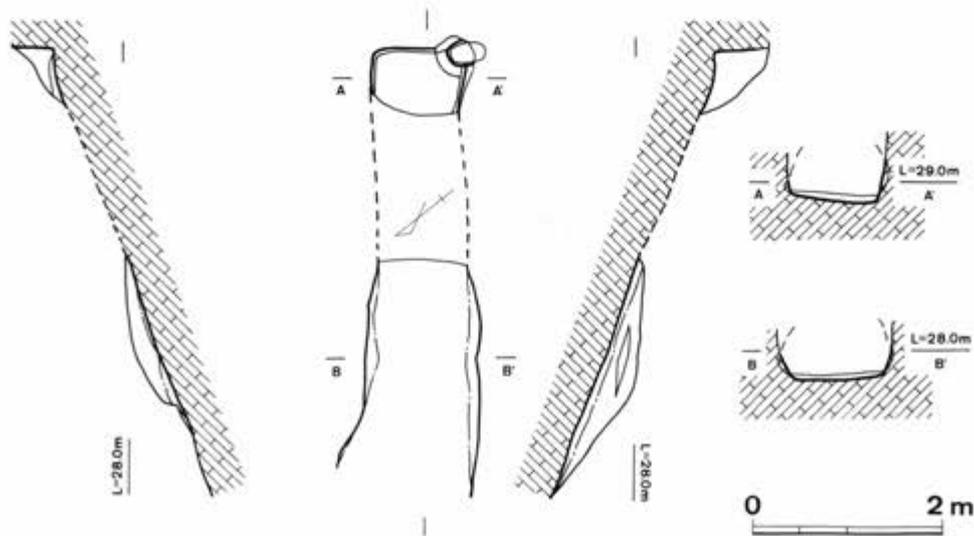
煙道は、11号炭窯が奥壁から手前1.2mのところ、床面左側から12号炭窯奥壁右コーナーにつながっている。10号炭窯では、奥壁から手前0.6mで床面右側に設けられる。10号炭窯の煙道は、8号炭窯の煙道と排煙口を同一にしている。掘削状況から見た場合、8号炭窯の操業後に設けられており、窯体内部から掘削されたと推定される。11号炭窯の煙道は、12号炭窯の天井部崩壊後、新たに掘削されたものである。窯体天井部はすべて崩落していたが、焚き口付近では11号炭窯空焚き時に窯壁の剝離した堆積が約10cmあり、操業時の赤褐色土・炭層の堆積が約20cm、廃絶後の窯体の崩落土の堆積が約10cmあり、その上に11号炭窯の操業に伴う堆積が15cm認められた。10・11号炭窯とも操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認されている。10号炭窯の天井部はすべて崩落していた。11号炭窯では奥壁付近の天井部が完全に残存していたが、調査の安全上除去した。10・11号炭窯とも焚き口と燃焼部の距離が短く、炭化部も幅の割に長さが短く、E地点や石熊地区検出の炭窯と規模・形態とも類似している。

黒部12号炭窯(第10図、図版第4) 炭窯が密集する斜面中位北端に位置し、奥壁から0.65～

2.25mまでの部分と焚き口付近が崩壊・流出している。主軸は等高線に直交せず、 $N-130^{\circ}-E$ である。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。炭化部は長方形をなし、ほぼ等幅で掘削される。奥壁に向かって右側コーナー部分に11号炭窯の煙道が掘削されている。煙道は残存しないが、地形からすると左側の崩壊した部分に設けられていた可能性がある。残存状況が悪



第9図 黒部10・11号炭窯実測図



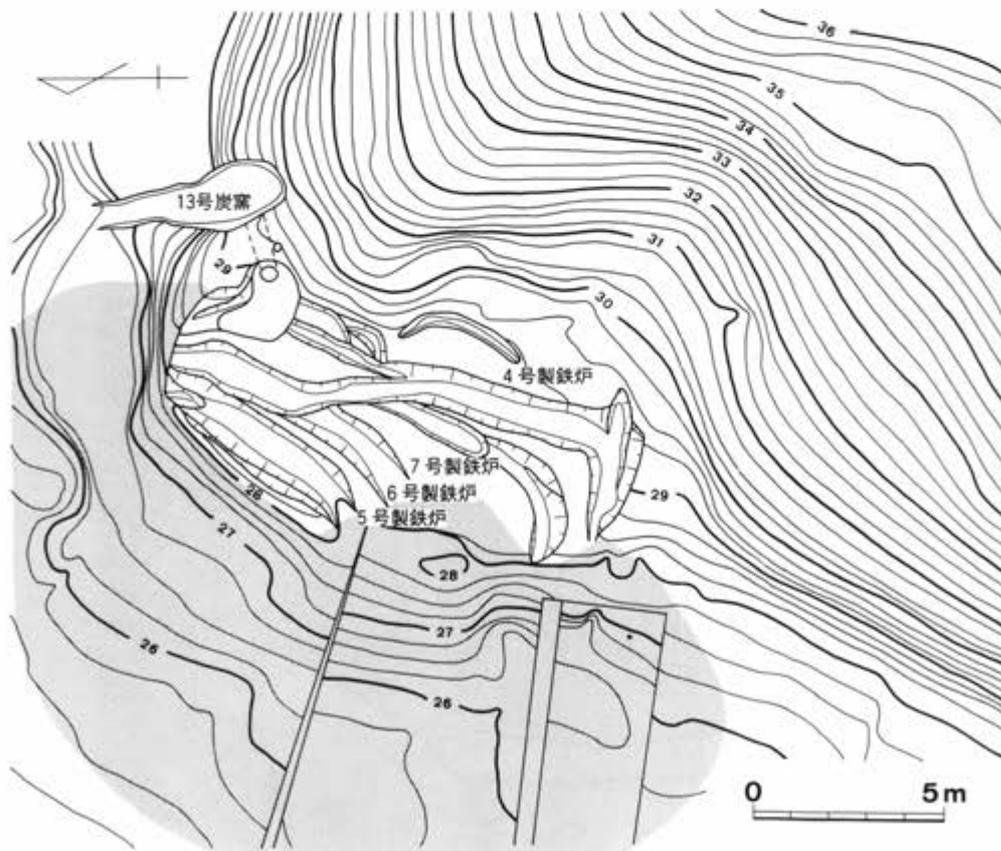
第10図 黒部12号炭窯実測図

いが、床面規模・傾斜角などからすると、天井部はかまぼこ状を呈していたと推定される。窯体内の堆積状況は、崩落土を除去すると、床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層は操業に伴うと考えられる薄い赤褐色土と炭層が互層となって確認された。地山を掘削した床面には被熱の痕跡がなく、約10cm炭と酸化被熱した赤褐色土粒の堆積が確認された。

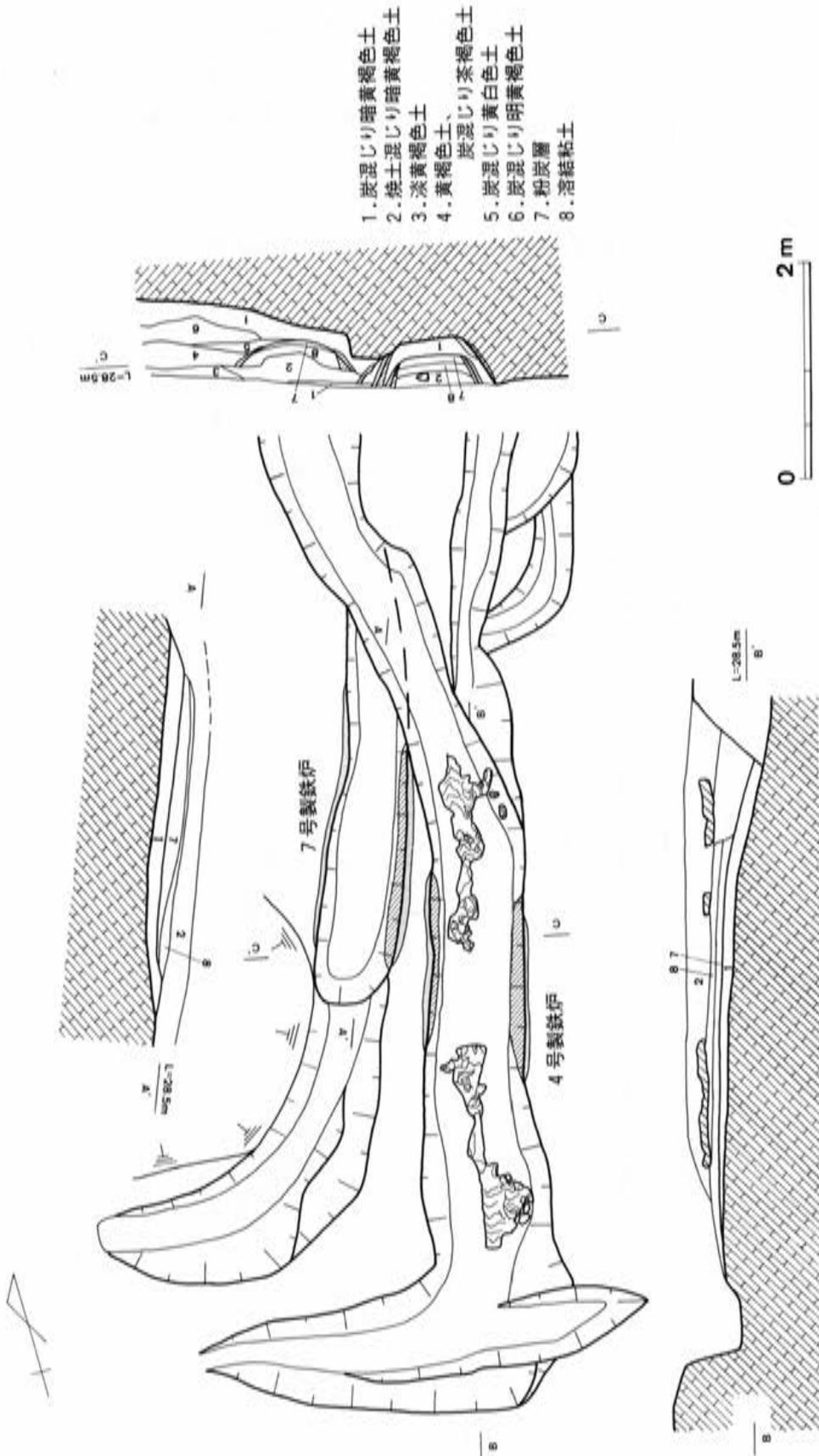
②B地点(第11図、図版第5)

A地点同様、丘陵裾近くの緩傾斜部を削平し、平坦部を設けて4基の製鉄炉(4～7号製鉄炉)を築いているが、うち1基は同一場所で4回ほど造り替えている。平坦部下方の湿地部分は平坦部全体を取り囲むように廃滓場となっているが、開墾によって削平され、広範囲に鉄滓が散乱している(第11図、スクリーン・トーン)。東端では、単独で位置する登り窯状炭窯1基が検出された(13号炭窯)。平坦部全体が後世の土地利用に伴う開墾などによって削平を受けており、製鉄炉検出面は、現地表面から0.3m下の地山及び操業に伴う整地層上である。

黒部4号製鉄炉(第12図、図版第6・7) B地点で最も新しい製鉄炉であり、削り出した平坦部及び盛り土上に築かれている。製鉄炉は、平坦面中央からやや山側に設けられている。長方形箱形炉と考えられ、両側に排滓溝が設けられている。北側は、6号製鉄炉の炉本体半分を再利用した排滓溝となっているが、途中で途切れるため廃滓坑ともいえる。南側排滓溝は、直線的のびた後、直角に曲がり谷部斜面へと続く。



第11図 B地点遺構配置図



第12図 黒部4・7号製鉄炉実測図

製鉄炉は、炉本体部分を掘削した後、掘り込み側壁に粘土を貼り付けて焼き固める。土層観察の結果、同一場所で規模を縮小しながら4度ほど製鉄炉を造り替えた痕跡が確認された。掘り込み側壁は、防湿用にその都度粘土を貼り付けて焼き固めている。下層の製鉄炉は、全体が残っていないためその規模は不明であるが、幅はほぼ計測できる。最下層のものは幅1.2m、その後幅1mの規模のものに改変されている。それに伴い、深さも順次浅くなっている。

最終操作の状態は、最下層に鉄滓・鉄塊・砂鉄・粉炭・砂を混ぜてつき固めた粉炭層が約15cmの厚さで認められ、その上に炉底である溶結粘土が残る。3号製鉄炉ではこの上に炉底滓が残っていたが、4号製鉄炉では炉底滓の代わりに両側の排滓溝に流出滓が残存していた。流出滓は、炉本体から流れ出した状態で残存しており、排滓溝の先に行くほど扇状に波を打ったようになっているが、本体側はすぼまって流動性が認められない部分があり、この部分はさらに細くなっている。この部分が廃滓穴となる炉壁部分を指すものと考えられる。その内側の炉内側では、炉壁中の廃滓穴で見られる滓の形状とは異なっている。これから考えられる廃滓穴部分の炉壁の厚さは、約30cmである。残存していた流出滓の重量は、北側排滓溝のものが約23kg、南側のものが約39kgである。

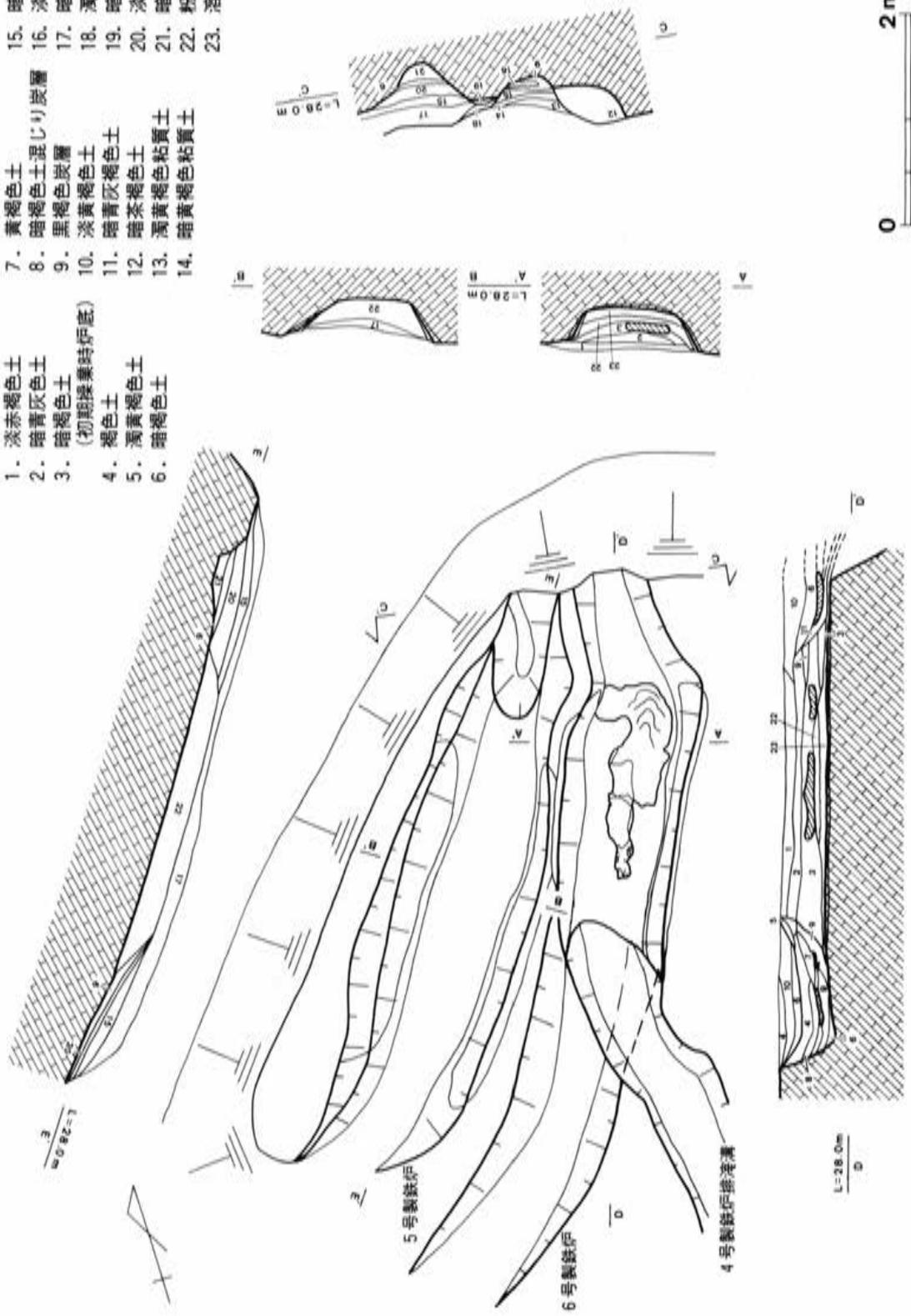
廃滓場では、北側の5・6号製鉄炉上を埋めて整地していくような状態で捨てられているが、ほとんどは下方の湿地部分に捨てられる。

黒部5号製鉄炉(第13図、図版第6・7) 黒部遺跡の中で最も古いと考えられるもので、6号製鉄炉とほぼ平行し、平坦部先端に位置する。北側排滓溝と西側の開墾によって削平を受ける。平坦面と丘陵斜面との境には「コ」字状に排水溝が設けられていたようであるが、13号炭窯及び6号製鉄炉を築いた際に削平されたようである。両側に排滓溝を設ける長方形箱形炉と考えられるが、北側排滓溝は炉本体床面に対し一段深く掘り込まれており、7号製鉄炉と逆の形となっている。炉は、本体部分の床面が平坦であり、排滓溝はゆるい傾斜をもつ。掘り込み側壁は、粘土を貼り付けて焼き固める。最下層に粉炭層が認められ、溶結粘土は下層及び上層の2層にわたって確認し、修復操作された痕跡が部分的に認められた。

黒部6号製鉄炉(第13図、図版第6) 削り出し平坦面の先端付近に位置する長方形箱形炉である。北側排滓溝付近は開墾で削平を受けている。丘陵斜面との境には「コ」字状排水溝が設けられているが、13号炭窯煙道掘削時に削平を受ける。炉本体約1/2南側は、4号製鉄炉の排滓溝として再利用されており、本体下部構造は不明である。残存する北側排滓溝付近で見た場合、本体部分を掘削後、掘り込み側壁には防湿用の粘土を貼り付け、焼き固めるようである。他の炉同様最下層は、粉炭層でつき固められている。炉北端には4号製鉄炉で見られた流出滓と同様のものが存在するが、南側では認められなかった。流出滓は、流動性の確認される部分と、急にすぼまる部分(炉壁相当部分)、さらに炉内と考えられる部分とに分かれており、これからすると排滓穴付近の炉壁の厚さは約30cmと思われる。

黒部7号製鉄炉(第12図、図版第6) 4号製鉄炉のすぐ西側に平行して築かれた炉で、4号製鉄炉よりも先行する。平坦面のほぼ中央の整地層上に位置し、削り出し平坦面と丘陵斜面との境

- | | | |
|---------------------|--------------|-------------|
| 1. 淡赤褐色土 | 7. 黄褐色土 | 15. 暗茶褐色粘質土 |
| 2. 暗青灰色土 | 8. 暗褐色土混じり炭層 | 16. 淡黒色炭層 |
| 3. 暗褐色土 | 9. 黒褐色炭層 | 17. 暗黄褐色土 |
| 4. 褐色土
(初期操業時炉底) | 10. 淡黄褐色土 | 18. 濁灰褐色 |
| 5. 濁黄褐色土 | 11. 暗青灰褐色土 | 19. 暗褐色 |
| 6. 暗褐色土 | 12. 暗茶褐色土 | 20. 淡黒褐色粘質土 |
| | 13. 濁黄褐色粘質土 | 21. 暗褐色粘質土 |
| | 14. 暗黄褐色粘質土 | 22. 粉炭層 |
| | | 23. 溶結粘土 |



第13図 黒部5・6号製鉄炉実測図

には、「コ」字状に排水溝が設けられていたようであるが、4号製鉄炉を築いたときに南側の1/2が削平されている。排水溝と炉との間には、約2.3mの平坦面が存在するため、輪座などの施設が考えられるが、確定できるような痕跡は認められなかった。製鉄炉は、両側に排滓溝をもつ長方形箱形炉と考えられるが、北側の排滓溝は4号製鉄炉の排滓溝によって削平されて存在しない。炉は、南側排滓溝と直線上に並ばず、本体となる部分のみ排滓溝から一段深く掘り下げており、北側の排滓溝とは直線的である。整地層上に本体を掘削した後、掘り込み側壁に粘土を貼り付けて焼き固める。最下層は、粉炭層が約15cmにわたってつき固められ、その上に炉底である溶結粘土が残っていた。溶結粘土上では炉底滓などは認められず、細片化した鉄滓・炉壁・鉄塊が出土した。廃滓場は、北側の5・6号製鉄炉を埋めて整地していくような状態で捨てられたが、大半は下方の湿地部分に捨てられたと考えられる。

この7号製鉄炉南側排滓溝がゆるくカーブする付近に登り窯状炭窯が存在していたようで、灰原が7号製鉄炉南側の排滓溝先端斜面の鉄滓層から検出された。築炉に伴って削平を受け、消滅したと考える。

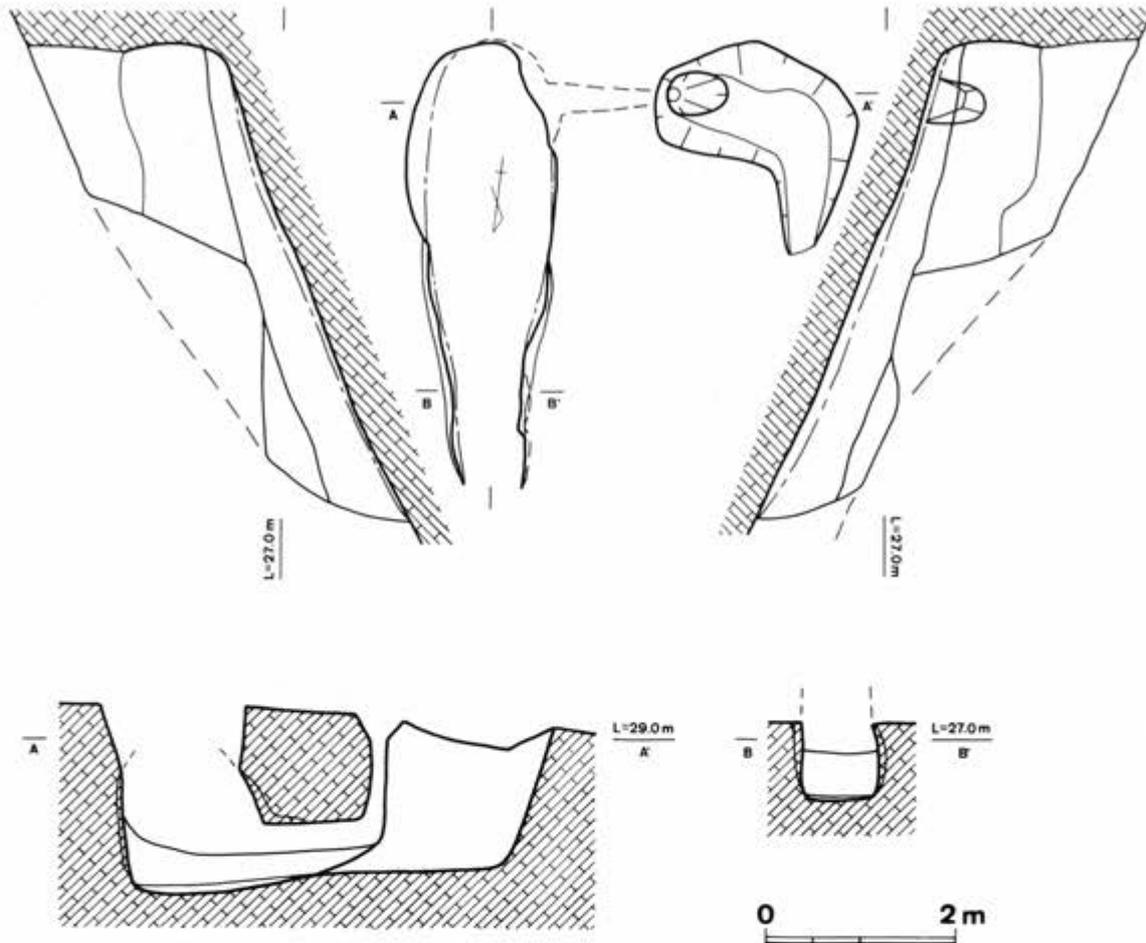
B地点の製鉄炉は、A地点と比べて規模はかなり大きく、1号製鉄炉ほどではないが残存状況が良好で、ほぼ完存しているといえる。A地点の製鉄炉では、片側に排滓溝がつくもの(2号製鉄炉)がみられたが、B地点ではすべて両側に排滓溝がつく。総数4基の製鉄炉を検出したが、いずれも切り合い関係を有している。5・6・7号製鉄炉には、尾根を削り出した平坦面との境に「コ」字状に排水溝が設けられている。5・6号製鉄炉の廃絶後、5・6号製鉄炉の作業面が廃滓場として利用されている。また、4号製鉄炉や5号製鉄炉には炉底滓は残存していなかったが、排滓穴から排滓溝までの流出滓が作業後そのままの状態に残っており、排滓穴付近の炉壁の厚さは約30cmであったと推定される。

廃滓場は、削り出した平坦面下方の谷部を利用しているが、炉の数が多いことと、廃滓が何層にも堆積していることから、個々の製鉄炉に対応する層を特定できなかった。ただ、4・7号製鉄炉南西側の廃滓場付近の最下層では、木炭を多く含む灰層・焼土層・窯壁層が検出され、製鉄炉以前には登り窯状炭窯が存在し、4号製鉄炉を築いたときに破壊されたと考えられる。また、4号製鉄炉作業時には5号製鉄炉が排滓溝として利用されている。

製鉄炉周辺や廃滓場からは須恵器・土師器が出土している。これらの土器から見ると、製鉄炉は、8世紀中頃～後半にかけて作業されたことがわかる。

切り合い関係から見た作業順は、6→5→7→4号製鉄炉となる。

黒部13号炭窯(第14図、図版第5) 平坦部の東側で検出したもので、主軸は等高線に直交し、ほぼ南北方向である。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。窯体には粘土の貼り付けは行わない。平面形は、焚き口付近ほど狭く奥壁に向かって幅が広がるナスビ形をしている。焚き口付近・灰原は、後世の開墾のため存在しない。煙道は、奥壁から手前0.6mの床面左側に取り付く。煙道は、窯体内部及び外部の両方から掘削されているが、掘削穴がかなり大きく、窯体側では初期作業時には排煙口の調節をしなければならないほど大きく掘削されている。外面



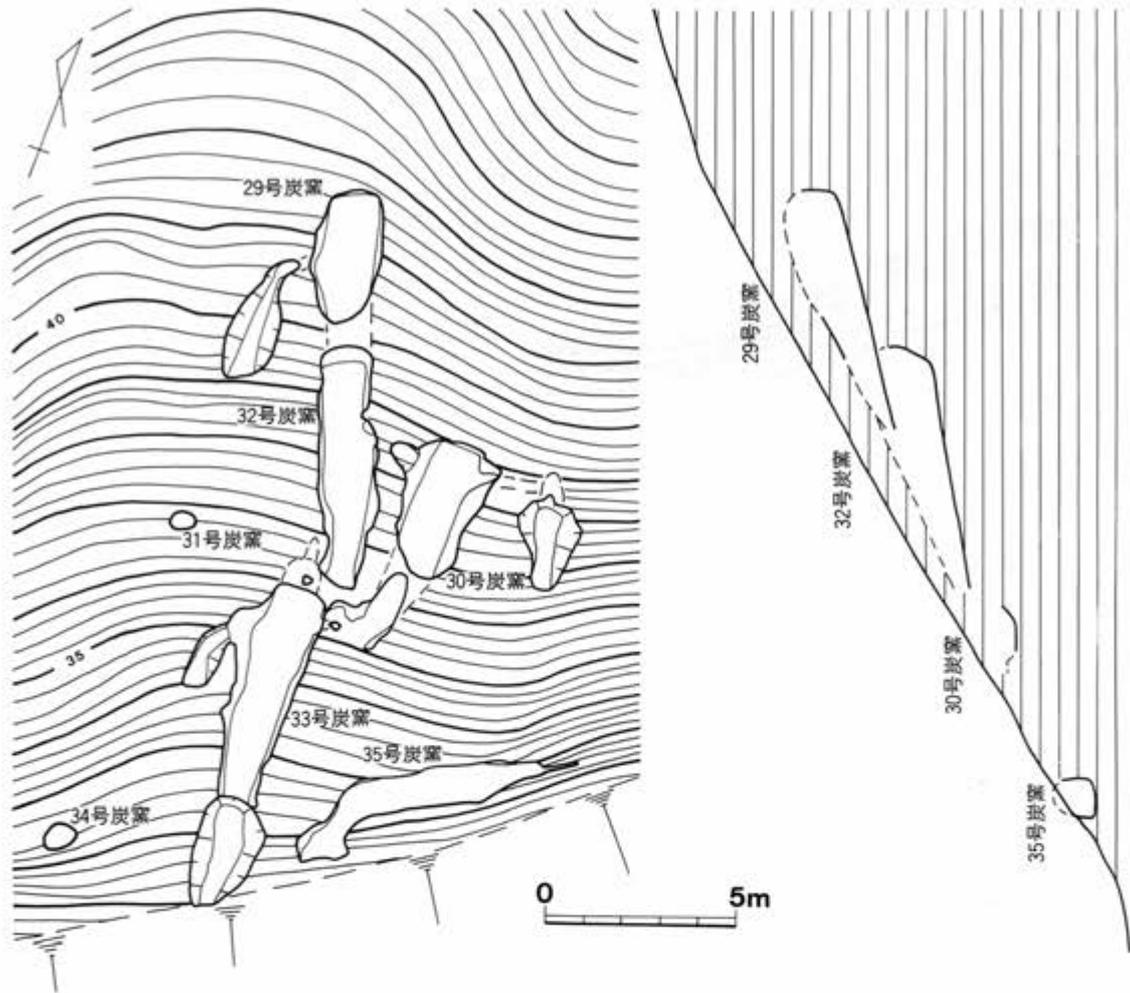
第14図 黒部13号炭窯実測図

からは、5・6号製鉄炉の溝を壊す。2m×1.5mの大きな掘形を持ち、掘削後、煙道部分のみを残し後は埋め戻している。天井部はすべて崩落していたが、窯体内の堆積状況は、崩落土を除去すると、床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層からは操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって4～5面ほど確認された。地山を掘削した床面は、被熱の痕跡がなく、約10cmの炭と酸化被熱した赤褐色土粒の堆積が確認された。この時点での初期操業に伴う煙道口の排煙量を調節した痕跡は認められなかったが、操業を示す互層の中から酸化被熱した石材や、粘土塊が出土したため、排煙口の調節は行っていたと考えられる。出土遺物としては、木炭片が少量出土した。操業時期は、5号製鉄炉の溝や作業面を破壊していることなどから考えると、4号または7号製鉄炉に伴う木炭窯と考える。

(増田孝彦)

③C地点(第15図)

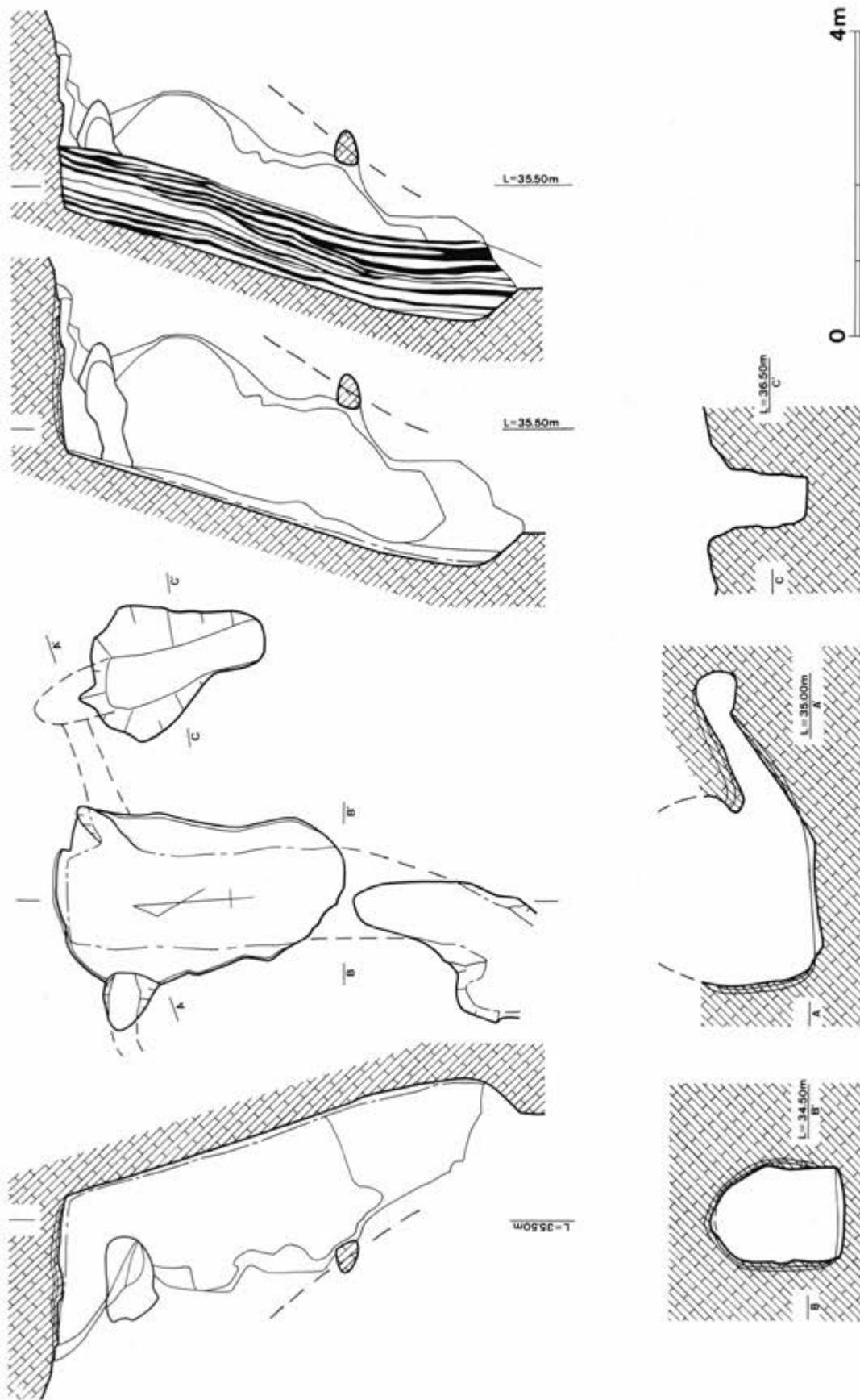
29号炭窯～35号炭窯は、製鉄炉を確認したB地点の向かい側の丘陵に位置し、南側斜面中位から裾部にかけてまとまって構築されていた。後世に水田部を広げるために丘陵を一部削っており、現在の等高線は東西方向に平行にめぐると、窯が築かれていた頃は、30・35号炭窯東側が南東方



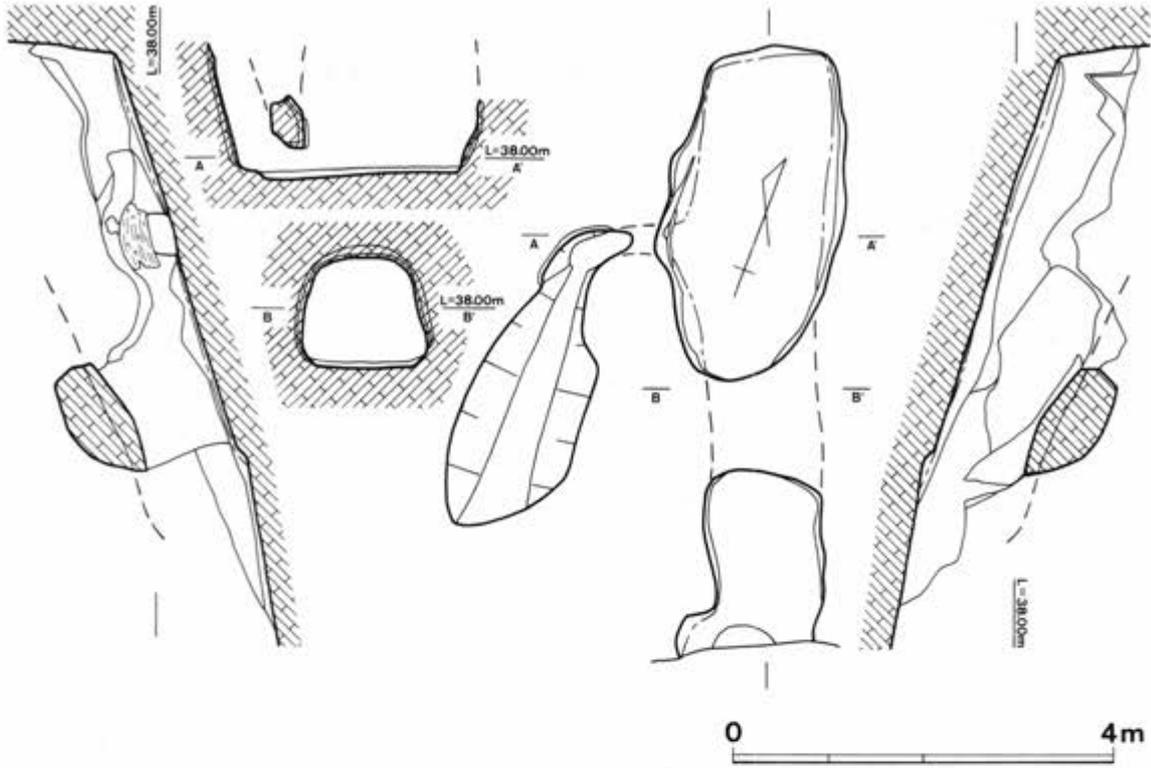
第15図 C地点遺構配置図

向にせり出していたと思われる。調査時には、35号炭窯は等高線に沿って築かれたように見えるが、本来は斜面に対して斜め方向に築かれた窯である。これに対して、29・30・32・33号炭窯は、等高線に直交する形で構築されていた。また、煙道を奥壁側にもつ33・35号炭窯と、側壁にもつ29・30・32・33号炭窯が混在している状況である。調査の結果、29・30・32号炭窯の3基については、切り合い関係や灰原の堆積状況、また操業後に窯体を煙道として再利用した痕跡などから、30号炭窯→32号炭窯→29号炭窯と、丘陵裾部から中位へと移行していったことが明らかになった。33・35号炭窯は、灰原が後世に削平されており、先の3基の窯に先行して操業されたかは不明である。

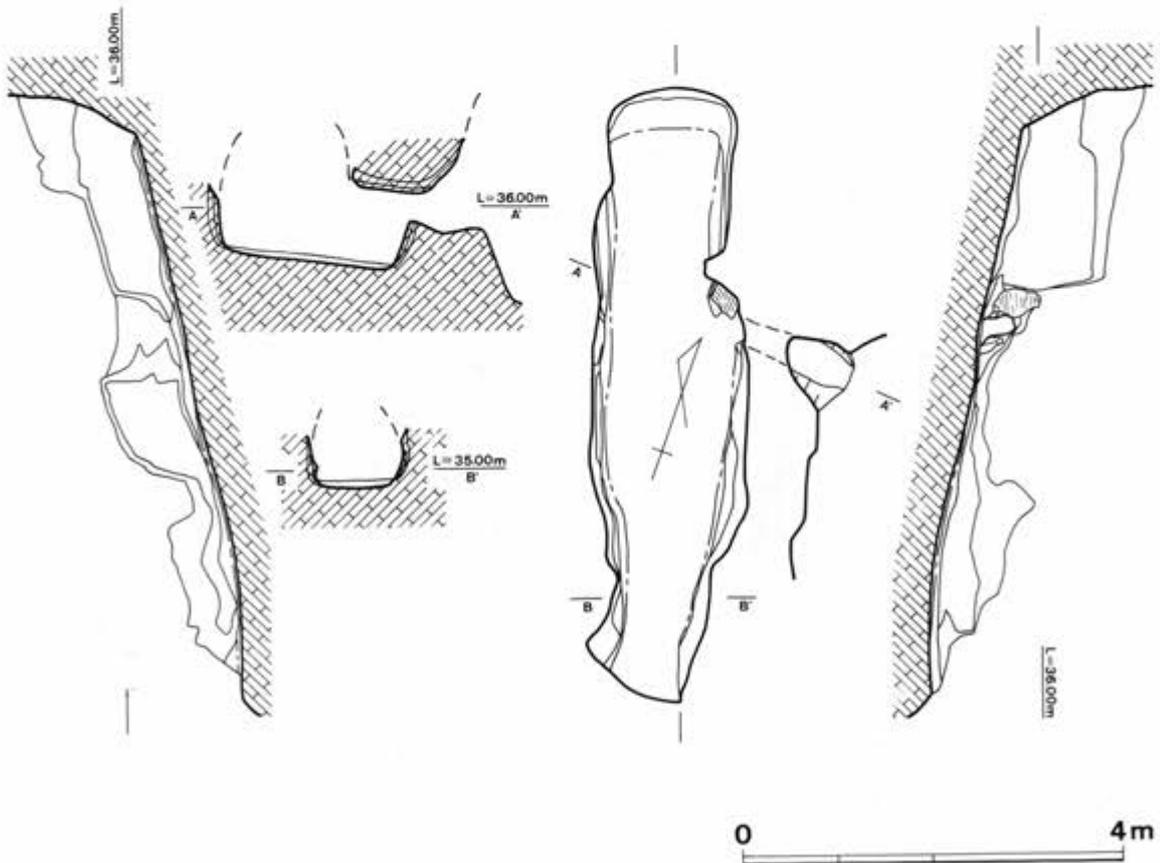
黒部30号炭窯(第16図、図版第11・12) この窯は、32号炭窯東側に築かれた地下式の登り窯状炭窯である。この窯は、炭化部で部分的に天井部が残っており、奥壁の焼けた範囲から見ても、かなり高さのある窯であった。窯体は、炭化部と焚き口部境付近で「く」字状に屈曲しており、炭化部の主軸は $N-5^{\circ}-E$ である。煙道部は、東側側壁奥から東方(奥壁から手前0.8mの床面右側)に設けられており、床面から縦長の煙道を掘り抜いていた。これは、窯を築く時から長期操業を予定してのことか、あるいは煙道部を設ける際にこのような形になったのかは不明である。



第16図 黒都30号炭窯実測図



第17図 黒部29号炭窯実測図

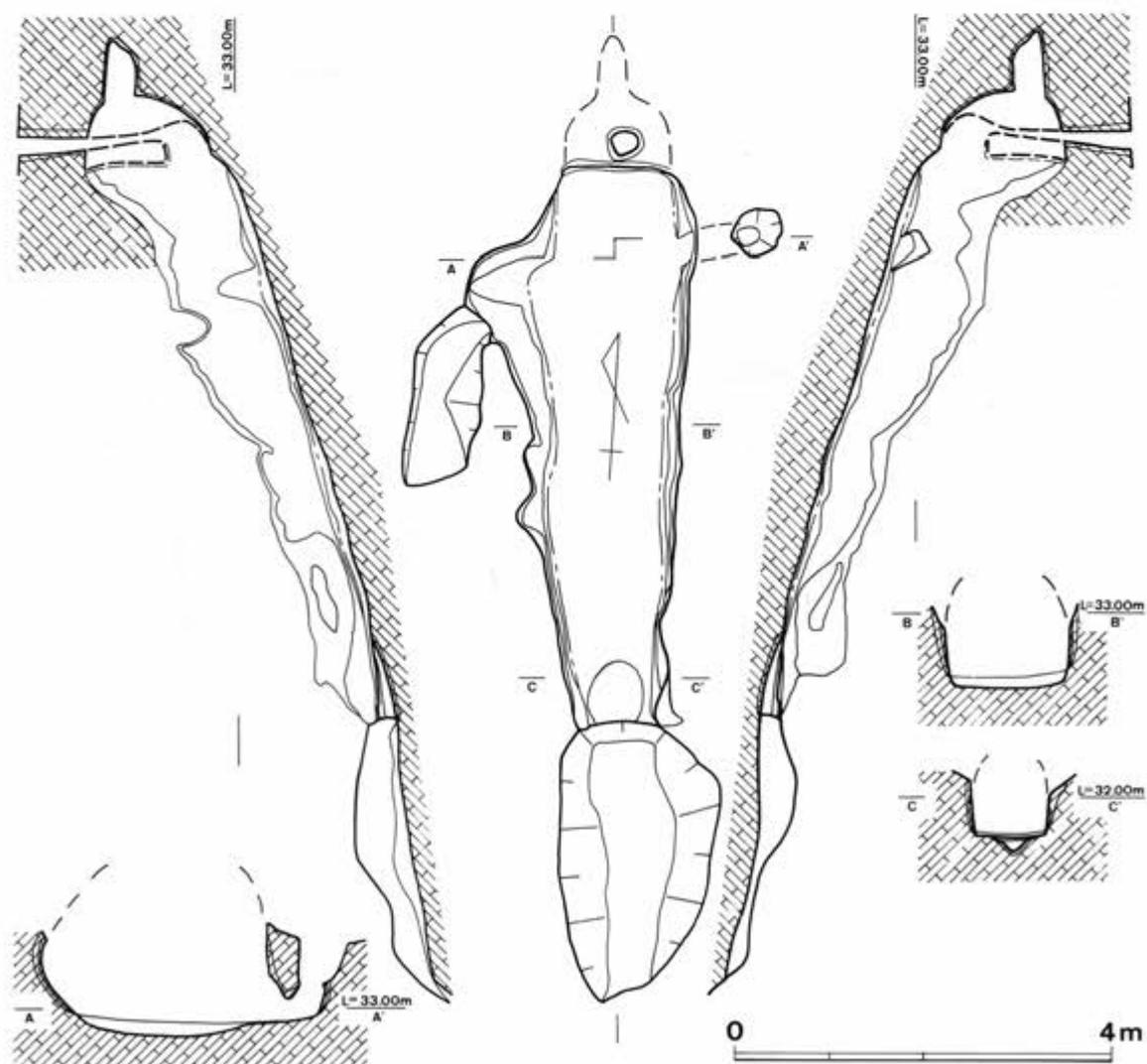


第18図 黒部32号炭窯実測図

ただ、最終操業時の床面が煙道部上端まで達しており、操業ごとに徐々に床面が高くなっても使用できるように、縦長の煙道部を設けていた可能性もある。初期操業時には、炭化部での推定高は約2.4mであるが、最終操業時には約1.5mであり、工人が焚き口部から入ることが困難となった時点で、廃棄したようである。

黒部31・34号炭窯 いずれも径約0.7mの小型の炭窯である。非常に残りが悪く、その全容については不明である。

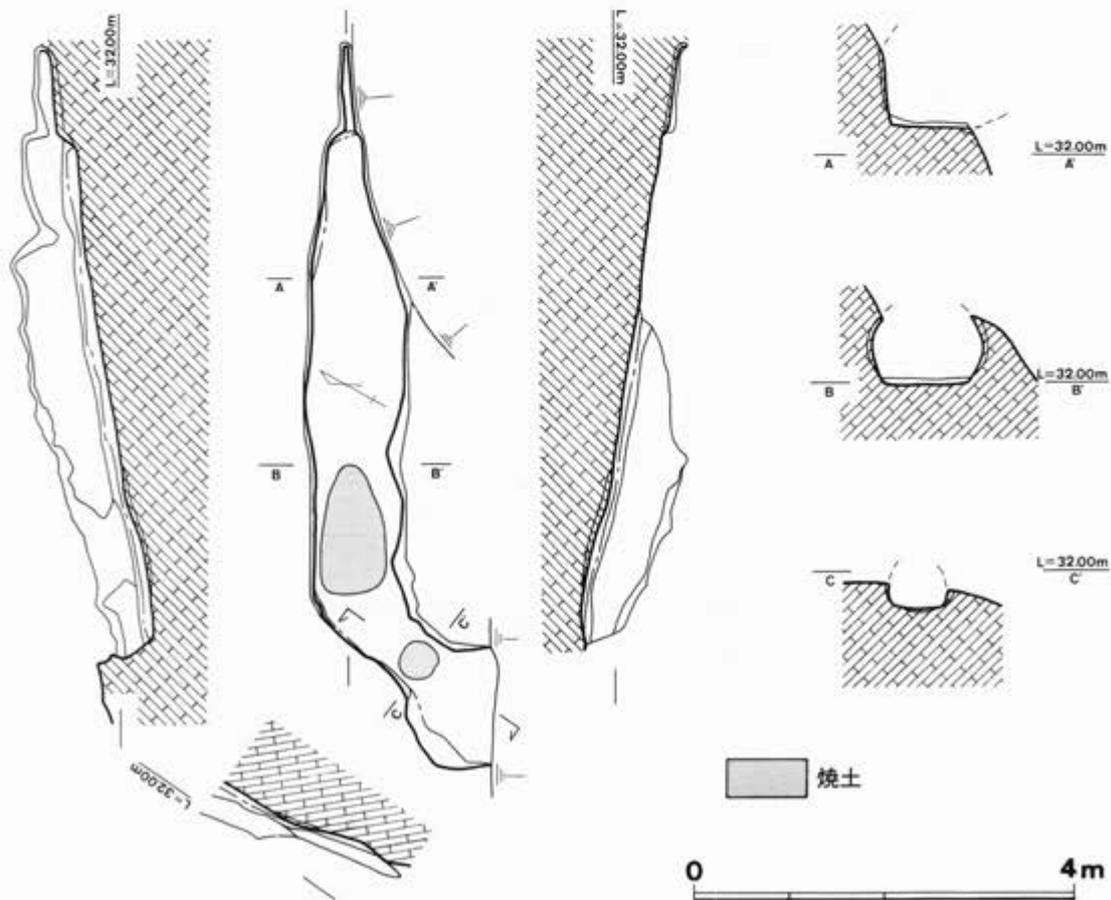
黒部29号炭窯(第17図、図版第11・12) この窯は、C地点で最も高所に築かれた地下式の登り窯状炭窯である。煙道部は、炭化部半ばの西側側壁から西方(奥壁から手前2mの床面左側)に設けられており、粘土の貼り付けによる補強が炭化部にのみ施されていた。窯体の主軸は、 $N-20^{\circ}-W$ である。非常に残りがよく、炭化部で部分的に天井部が残っており、床面から天井部まで約1.2mあった。29号炭窯の焚き口部は、32号炭窯と重複しており、32号炭窯埋没後に29号炭窯が築かれた。窯体内の炭の堆積状況から、少なくとも2回の操業が行われたと思われる。焚き口部前面に広がる灰原は、大半が後世に流失して確認できなかった。



第19図 黒部33号炭窯実測図

黒部32号炭窯(第18図、図版第11・12) この窯の奥壁部が、29号炭窯に重複するように築かれた、地下式の登り窯状炭窯である。窯体は、焚き口付近でわずかに屈曲する。主軸はN-20°-Wである。煙道部は、炭化部半ばの東側側壁(奥壁から手前2.6mの床面右側)に設けられており、東側に隣接して築かれた30号炭窯本体を掘り抜き、30号炭窯操業後に窯本体を煙道の一部として再利用していたことがわかった。これは、30号炭窯操業後に32号炭窯が築かれたことを示す。焚き口部前面に広がる炭の堆積状況からも確認されるが、30号炭窯から掻き出した炭の堆積後、わずかな間層が認められた上に、32号炭窯の炭が堆積していた。したがって、30号炭窯→32号炭窯と続けて操業されていたと考えられる。窯体内の炭の堆積状況から、少なくとも2回の操業が行われたと思われる。

黒部33号炭窯(第19図、図版第11) 丘陵裾部に位置する地下式の登り窯状炭窯である。窯体は、焚き口付近が狭く、奥壁が広がっている。主軸は、N-5°-Wである。この窯は、前庭部まで残っており、焚き口部床面を一度修築した痕跡を確認している。この窯の炭化部から奥壁にかけては、かなり修築しながら操業していたようで、煙道部も両側壁奥と奥壁に設けるなど、煙道の数によっても3回の操業が行われたものと思われた。煙道は、奥壁からまっすぐ上にのびるものと、奥壁から手前0.8mの床面右側から東方にのびるものと、奥壁から手前1.4mの床面左側から西方にのび、途中90°屈曲して焚き口方向にのびるものを確認した。



第20図 黒部35号炭窯実測図

黒部35号炭窯(第20図、図版第11・12) 丘陵裾部から「く」字状に掘り込まれた地下式登り窯状炭窯である。窯体の主軸は、 $N-63^{\circ}-E$ である。煙道部は奥壁から等高線に沿ってのびるが、窯の大半が後世に削平され、全容は不明な点が多い。炭化部床面の一部に赤色の焼土を確認した。

④D地点(第2図)

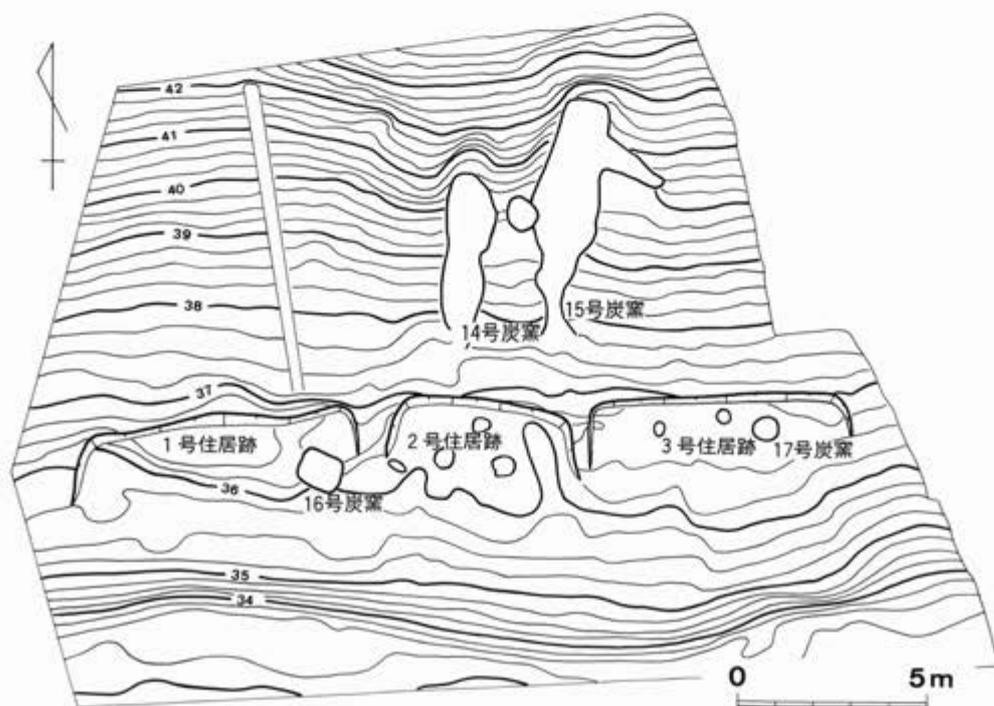
C地点の北東約50mの北側斜面にあたる。試掘調査を行った結果、製鉄炉1基(黒部8号製鉄炉)、小型炭窯1基(黒部36号炭窯)、登り窯状炭窯1基(黒部37号炭窯)を検出した。調査途中で団地造成計画が変更され、D地点はすべて保存されることになったため、その時点で調査を終えた。各遺構の規模などについては不明である。

(岡崎研一)

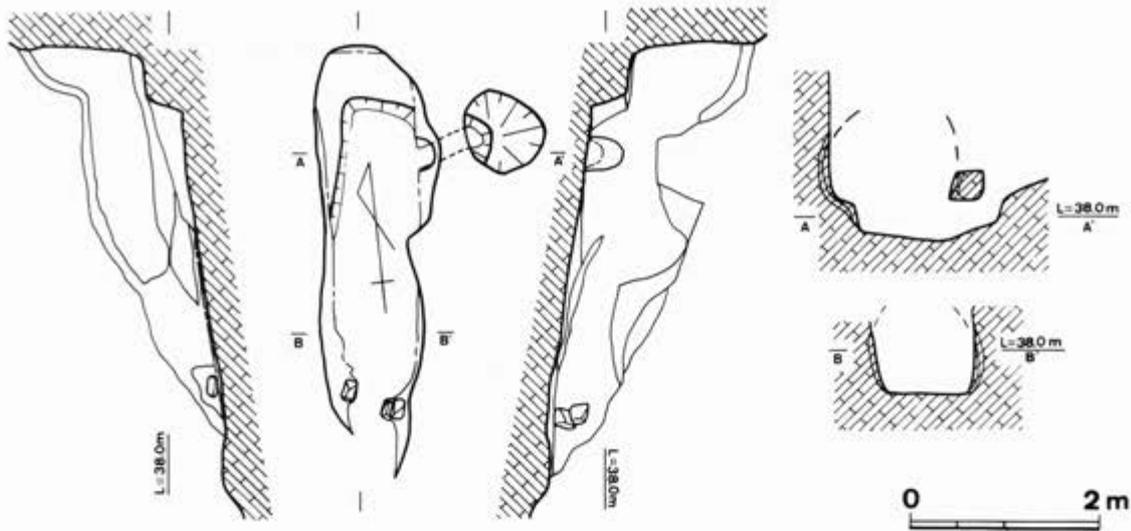
⑤E地点(第21図、図版第8)

丘陵先端の斜面を利用して、竪穴式住居3基が造られ、その後この住居が埋まった後、これを作業面として、登り窯状炭窯2基、小型円形炭窯2基が築造されている。

黒部14号炭窯(第22図、図版第8) 主軸は等高線に直交し、ほぼ南北方向である。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。窯体には粘土の貼り付けは行わない。平面形は、焚き口付近ほど狭く、奥壁に向かって幅が広がるナスビ形をしている。奥壁から0.6m手前までは炭化部から一段高くなるが、操業に伴う拡張部分とは認められず、築窯当初からの形状と考えられる。この段部分にも木炭や焼土粒が認められることから、下段の炭化部と同様に使用されたと考えられる。焚き口は、奥壁から3.8mの位置にあって、焚き口付近は平坦面であり、側壁に粘



第21図 E地点遺構配置図



第22図 黒部14号炭窯実測図

土を貼り付けて床面幅をせばめ、粘土塊・鉄滓によって固定したようである。焚き口の幅は約30cm・高さ約40cmが残存する。隣接する15号炭窯との前後関係は明確でない。同時操業の可能性もある。

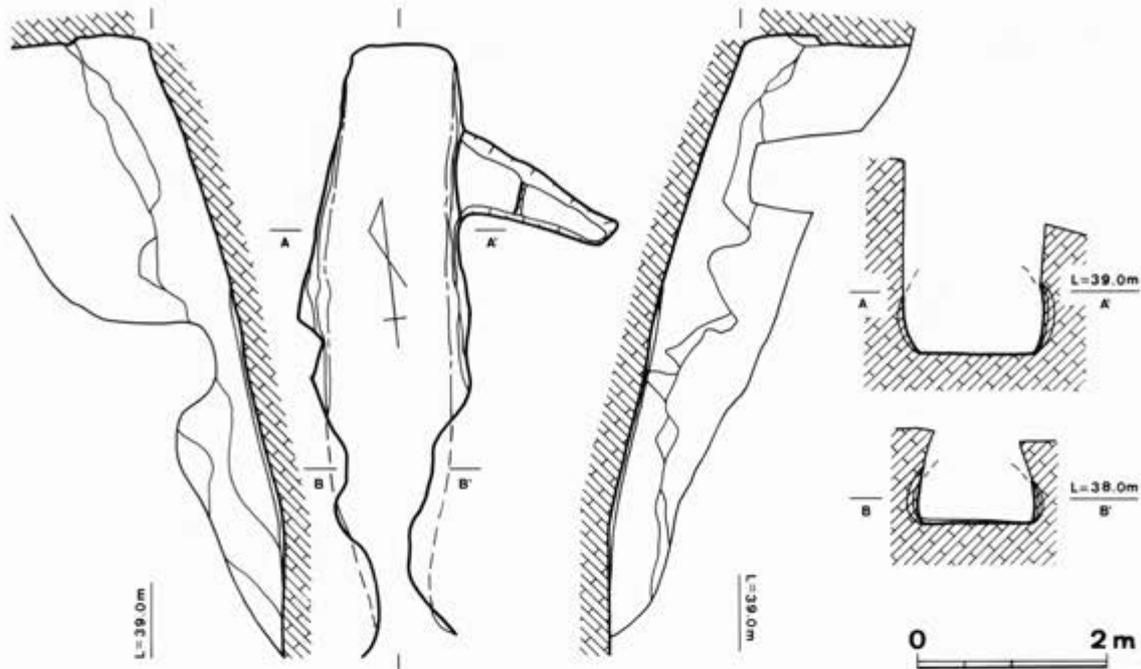
煙道は、奥壁に向かって奥壁から手前1.2mの床面右側に取り付く。煙道は窯体内部及び外部の両方から掘削されているが、掘削穴が大きくなりすぎたためか、排煙口天井部・両側面に石材を置き調節する。天井部は、すべて崩落していたが、窯体内の堆積状況は、崩落土を除去すると、床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層は操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認された。地山を掘削した床面は、被熱の痕跡がなく、約10cmの炭と酸化被熱した赤褐色土粒の堆積が確認された。

黒部15号炭窯(第23図、図版第8) 14号炭窯に平行して並び、形態・堆積状況もほとんど変わらない。異なる点は、全長がやや大きいことと、床面傾斜角がやや急なことである。焚き口部分が14号炭窯では粘土を貼り付けて幅を狭くしていたが、15号炭窯では掘削時から狭く造られており、その部分は平坦面となっている。焚き口を覆う施設は残存しない。

煙道は、奥壁に向かって奥壁から手前1.2mの右側、床面から上方60cmのところに取り付く。煙道は、その形状から窯体内部から掘削されたと考えられる。窯体内の堆積状況は、14号炭窯とほぼ同様である。

黒部16号炭窯(第24図) 1号住居跡の埋土上から検出したもので、平面形状は方形を呈している。素掘りの炭窯で粘土を一部貼り付ける。窯壁は被熱によってところどころ赤変している。上部は窯壁が良好に残存しているが、谷側は地山層から掘り込まれていないためほとんど残存していなかった。底部は熱を受けておらず、また底面から上方15cmは窯壁に被熱痕跡が認められず、炭混じりの焼土粒が混じった埋土となっている。登り窯状炭窯と同様、窯体焼き締め時に剥がれた埋土の上で操業したと考える。

黒部17号炭窯(第24図) 3号住居跡埋土上で検出した。16号炭窯に隣接する。平面形態は円形



第23図 黒部15号炭窯実測図

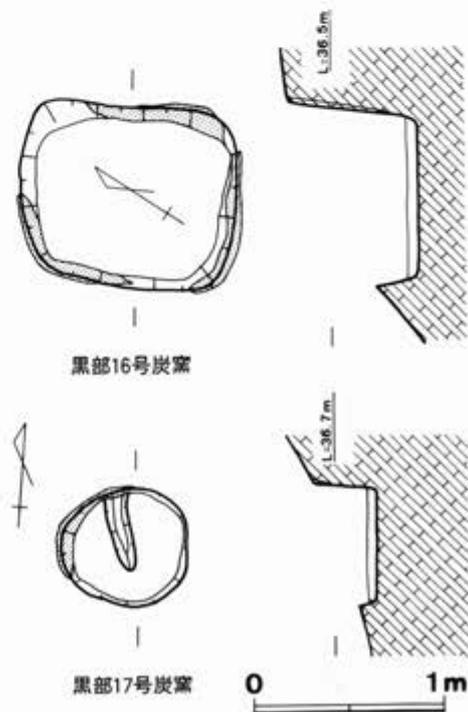
を呈し、16号炭窯と比べるとかなり規模が小さい。内部の状況は、16号炭窯とよく似ている。

黒部1～3号住居跡(第25～27図) 14・15号炭窯灰原下層から検出した。1・3号住居跡は、14・15号炭窯の灰原中から検出した16・17号炭窯によって住居跡床面の一部が壊されている。平面形は、隅丸長方形を呈し、等高線に平行して斜面を「L」字状にカットしている。2号住居跡には周壁溝を設けている。本来は、地形からすると、方形を呈していたと考えられるが、流失したのか残存していない。堆積土は2層からなり、壁際の堆積状況から自然堆積と考えられる。3号住居跡検出面付近から、須恵器甕が出土している。

⑥ F地点(第28図)

丘陵先端の南側斜面にA地点同様、登り窯状炭窯が密集して10基検出され、裾付近からは竪穴式住居跡2基が検出された。

黒部18・19号炭窯(第29図) 窯本体は、等高線にはほぼ直交する。同一場所に2基の炭窯が重なっており、初期のものを18号炭窯、操業に伴い拡張されたものを19号炭窯とする。窯体は、地山の粘土を掘削しただけの素掘りである。窯体には粘土の貼り付けは行わない。18・19号窯とも同位置で操業している。炭化部は、奥壁まではほぼ等幅で掘削されるが、焚き口付近は徐々にすぼまる。焚き

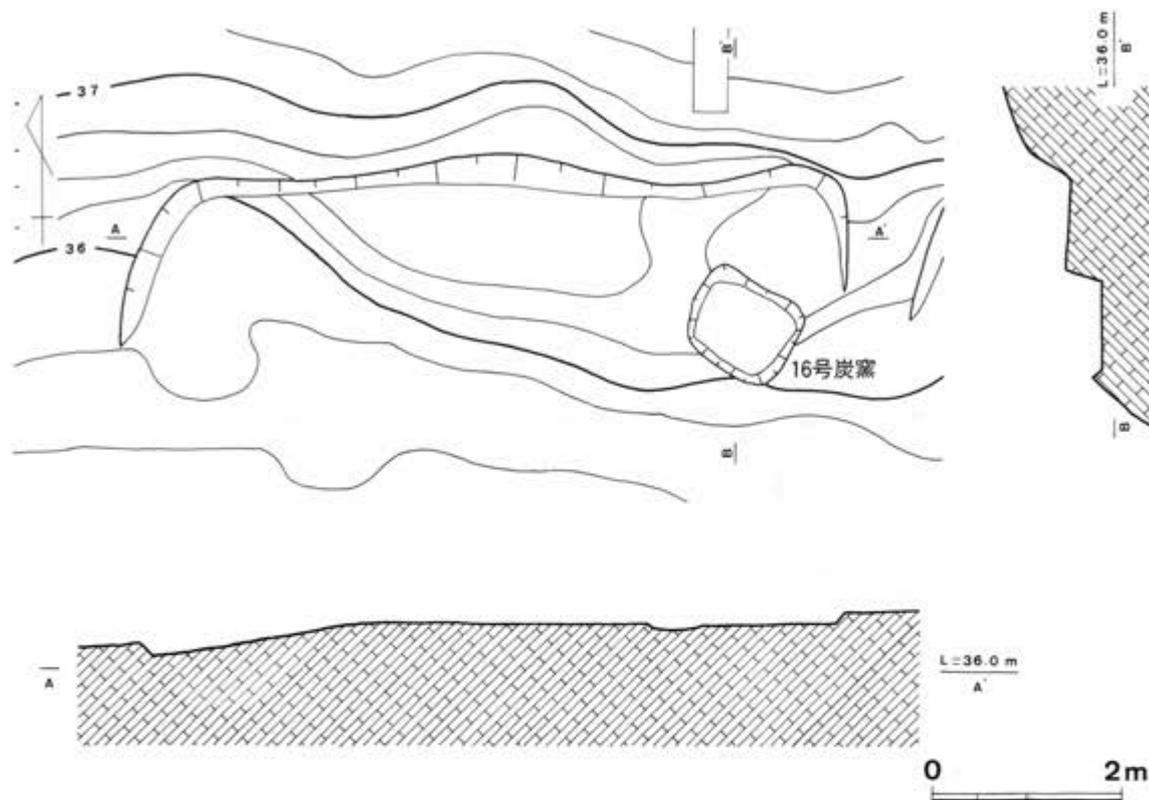


黒部16号炭窯

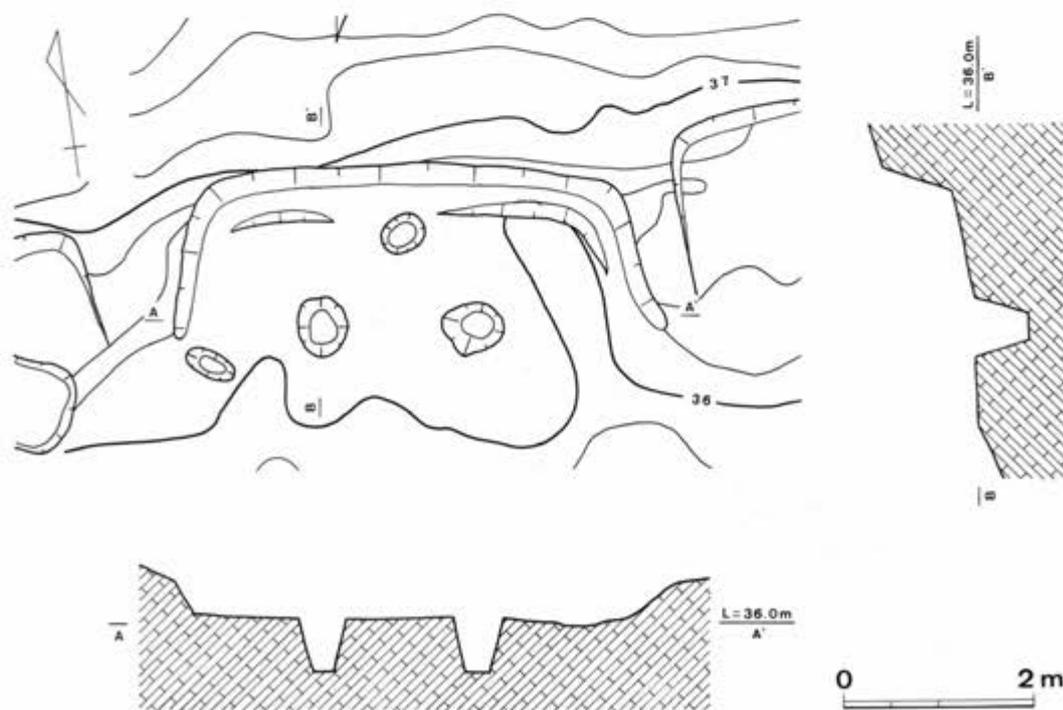
黒部17号炭窯

第24図 黒部16・17号炭窯実測図

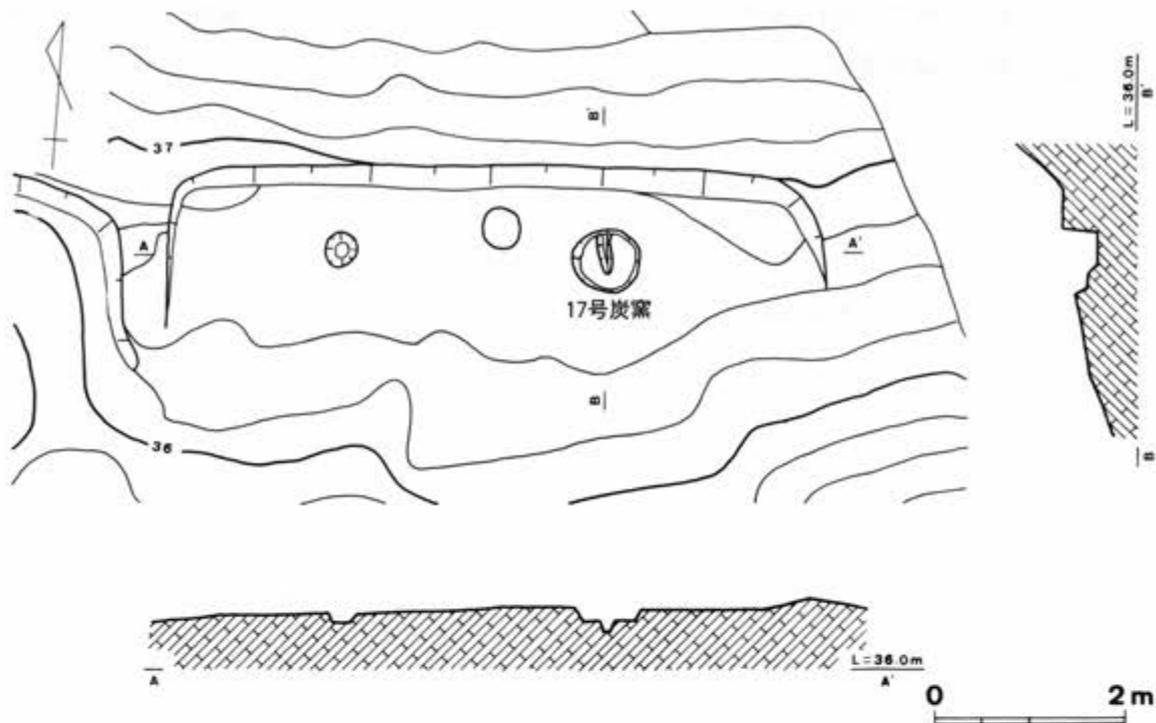
口部は、床面から高さ0.6m・長さ1.7mにわたって天井部が残存していた。灰原は、南側に位置する22号炭窯の灰原作業面と重なっているが、焚き口正面部分で厚さ0.5mにわたって堆積していた。煙道は、18号炭窯が奥壁に向かって中央部右側の床面から上方70cmのところで広範囲に崩落し、21号炭窯炭化部方向にのびている。19号炭窯拡張後に煙道部が崩落したと考える。19号炭



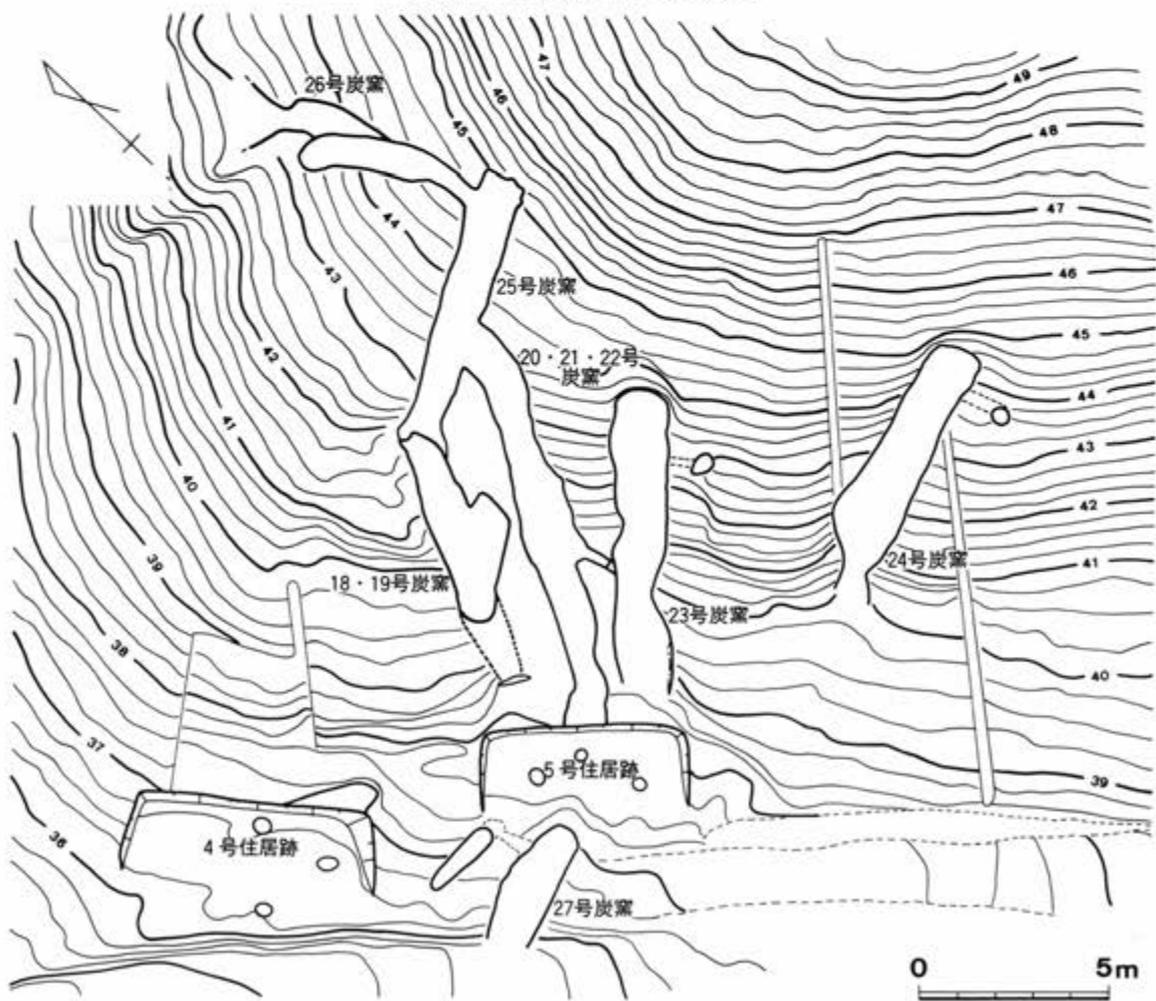
第25図 黒部1号住居跡実測図



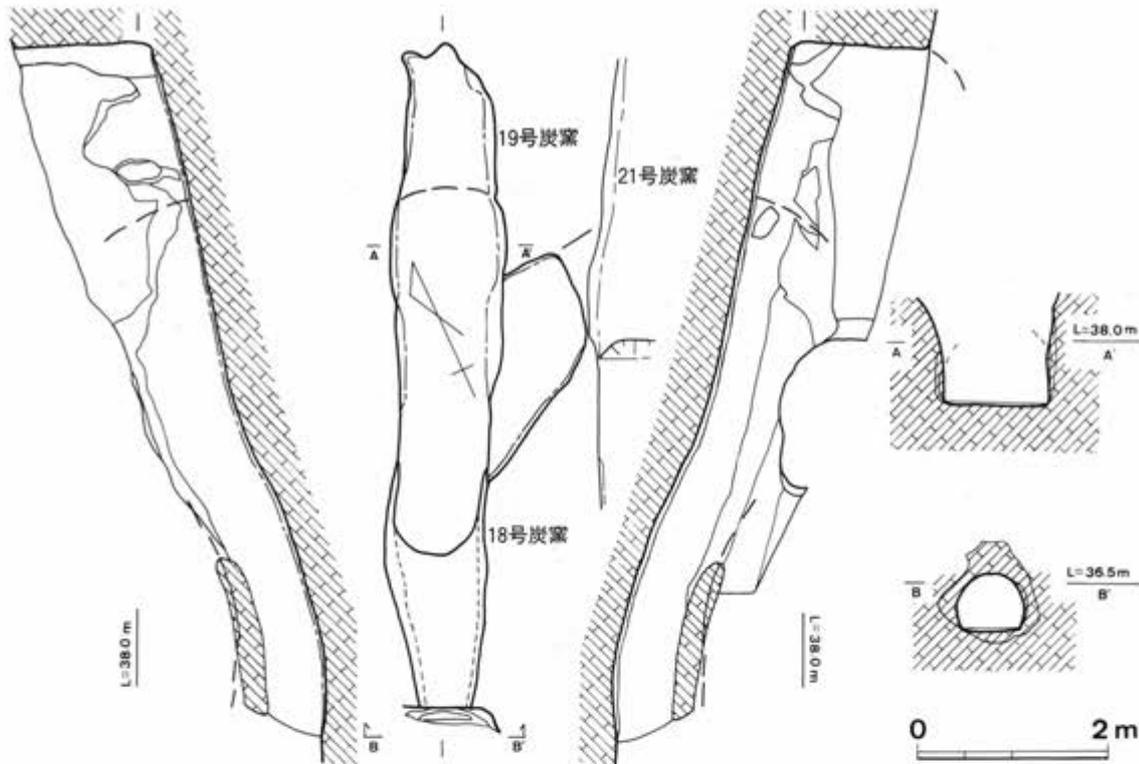
第26図 黒部2号住居跡実測図



第27図 黒部3号住居跡実測図



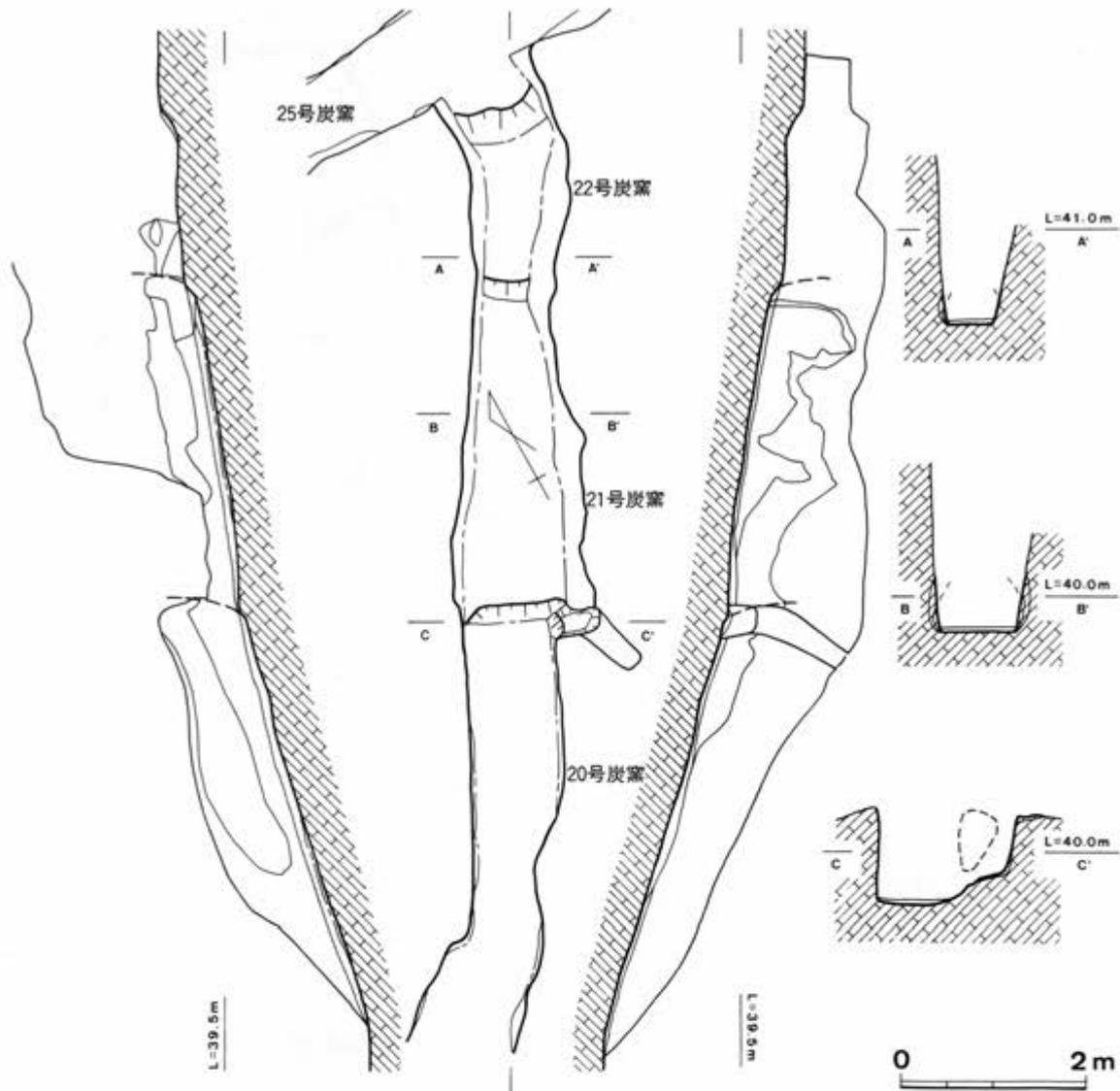
第28図 F地点遺構配置図



第29図 黒部18・19号炭窯実測図

窯の奥壁は、炭化部であったとも考えられるが、幅が狭くなることや、床面に木炭や堆積層が少ないことから、煙道掘削のための拡張部分とし、奥壁付近から0.4m手前が本来の奥壁と考えられる。形状から排煙口は、窯体の天井部に設けられていたと考える。外側は、25号炭窯によって削平を受けている。両炭窯とも、煙道は内部及び外部の両方から掘削されたと推定される。焚き口部分を除く天井部は、すべて崩落していたが、奥壁・側壁の遺存状態は良好で、奥壁は直立ぎみに内傾しながら立ち上がり、側壁は平坦な床面から内湾しながら立ち上がる。断面は、側壁が天井のアーチ部分の立ち上がり付近まで遺存していることから、その形状からかまぼこ状を呈していたようである。ただ、焚き口付近の天井部はかなり低く、炭化部に至って急激に高くなる形状をしていたことが推定される。窯体内の堆積状況は、崩落土を除去すると床面上に天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層には操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認された。

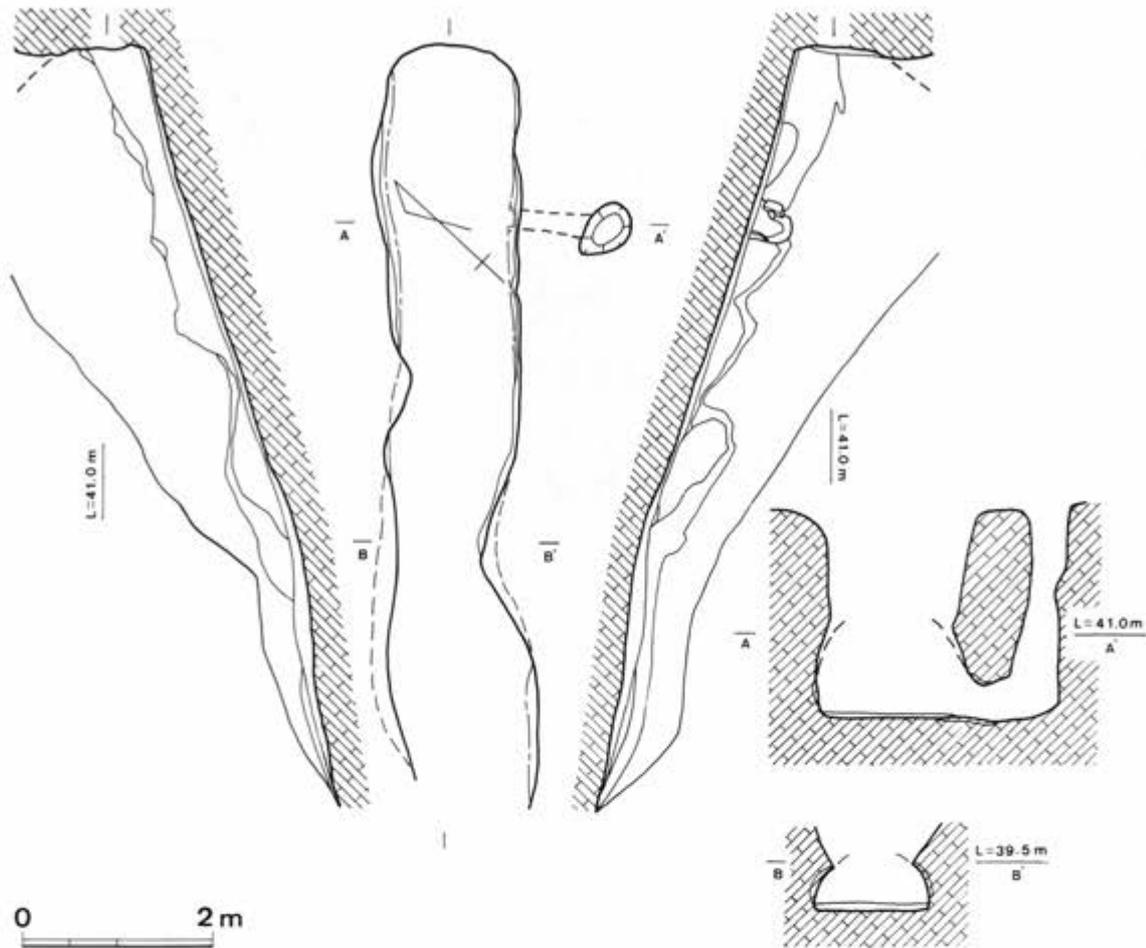
黒部20～22号炭窯(第30図、図版第9) 18・19号炭窯と23号炭窯とに挟まれた中央部分に位置し、これらの炭窯と平行して並ぶ。初期に築造された一群である。最も初期の操業のものを20号、順次奥に拡張されたものを21・22号とした。窯本体は、等高線に直交する。花崗岩の岩盤をくり抜いただけの素掘りである。炭化部は、奥壁までほぼ等幅で掘削されるが、22号炭窯の焚き口付近と20号炭窯の煙道付近は徐々にすぼまる。煙道部は、20号炭窯と21号炭窯とは明確な傾斜変換点が認められ、この傾斜が変換する付近が20号炭窯の奥壁となり、奥壁に向かって床面右側に付く。途中で段差が認められるため、煙道掘削は、内外両側から行ったと推定される。21号炭窯の煙道は、奥壁部分ですぼまった後、さらに前方へのびている。煙道であったことを示すように、



第30図 黒部20～22号炭窯実測図

床面から1m上方までは壁面に内湾しながら立ち上がる酸化被熱の部分が観察された。20号炭窯同様、煙道が掘削された部分と考える。22号炭窯としたものは、21号炭窯の煙道掘削用の補助坑かもしれないが、掘り込み側壁が酸化被熱しており、床面には木炭が少量堆積することから、炭窯とした。この掘削された部分は、25号炭窯の側壁にまで及んでおり、25号炭窯の方が先行する。窯体内の堆積状況は、20号炭窯が天井部崩落土を除去すると、赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認された。21号炭窯は、20号炭窯の天井部崩落部分の上に作業面が設けられ、天井部崩落土を除去すると、20号炭窯と同様な堆積状況が確認された。

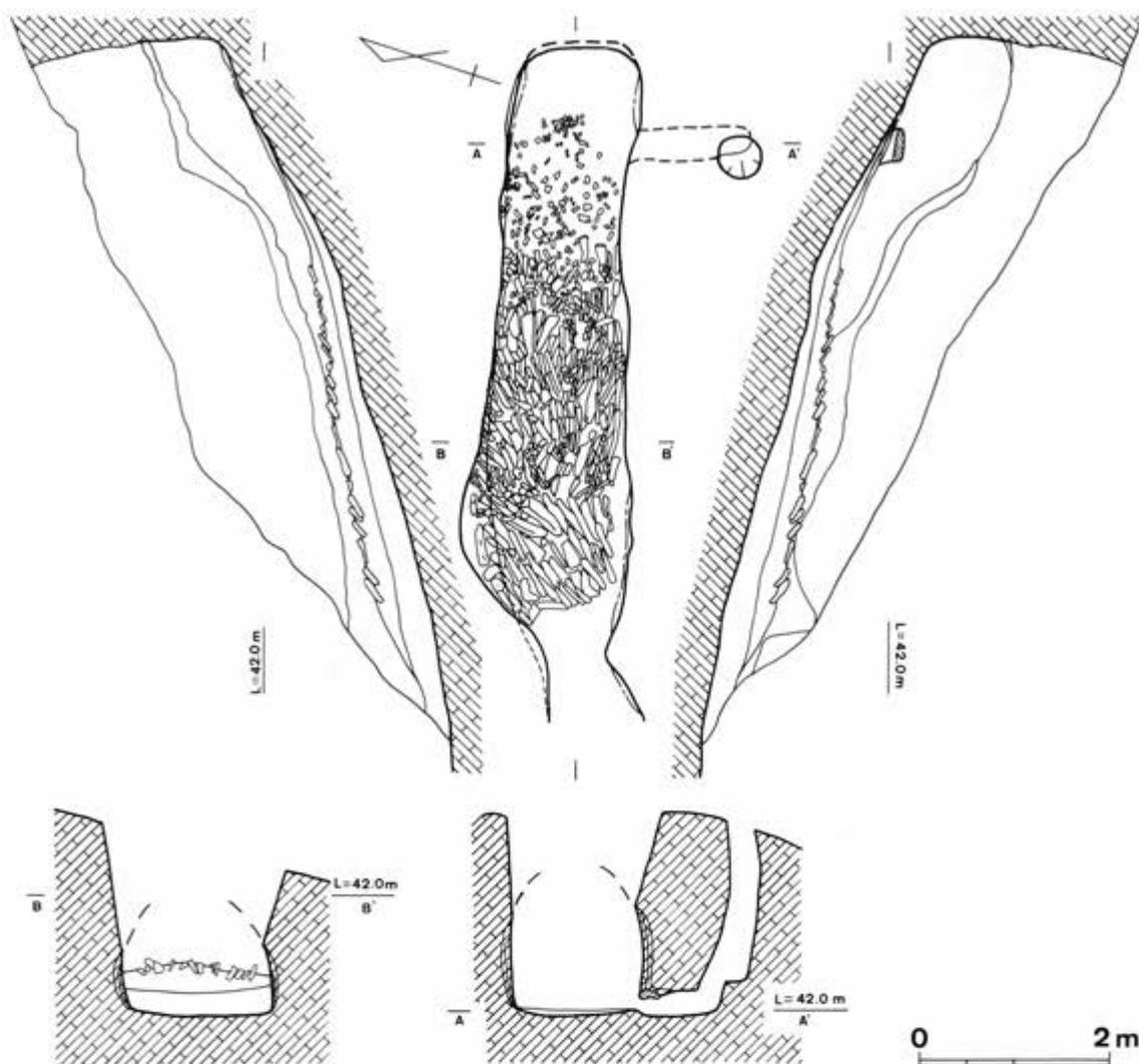
黒部23号炭窯(第31図、図版第9) 炭窯が密集する部分の最も南東側に位置する。単独で築かれた炭窯で、本体は等高線に直交する。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。窯体には粘土の貼り付けは行わない。焚き口から奥壁まではほぼ等幅で掘削される。炭化部の平面形は長方形を呈する。焚き口部は、土圧によるためか、炭化部に比べて、天井部までの立ち上がりが低い。灰原は、隣接する22号炭窯ともどもかなり厚く、0.6mほど堆積していた。煙道は、奥



第31図 黒部23号炭窯実測図

壁に向かって奥壁から手前1.8mの床面右側に取り付き、窯体内部及び外部の両方から掘削されている。排煙口は、側面天井部に扁平な石材を置き、排煙量を調節している。奥壁から手前5.5mのところは、床面傾斜が異なるため、この付近が炭化部と燃焼部の境目と考えられる。天井部はすべて崩落していたが、窯体内の堆積状況は、崩落土を除去すると床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められた。その下層は、操業に伴うと考えられる赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認された。

黒部24号炭窯(第32図) 単独で築かれた炭窯で、本体は等高線に直交せず、N-72°-Eである。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。窯体には粘土の貼り付けは行わない。炭化部は、奥壁までほぼ等幅で掘削される。この焚き口付近では、炭化部主軸に対し、「く」字状に屈曲し、炭化部に対して焚き口部は極端にすぼまる。焚き口には天井部が床面から0.6m上方に幅0.7mにわたって残存していたが、調査上危険となるため除去した。灰原は、ほとんどなく、焚き口付近に厚さ5cm、長さ・幅とも約1mほどの範囲に広がっていた。煙道は、奥壁に向かって手前1mの床面右側に取り付く。煙道は、窯体内部及び外部の両方から掘削されている。炭化部の平面形は長方形を呈しているが、煙道から手前2.5mのところ奥壁側と焚き口側の床面傾斜角が異なる。天井部はすべて崩落していたが、窯体内の堆積状況は、崩落土を除去すると、



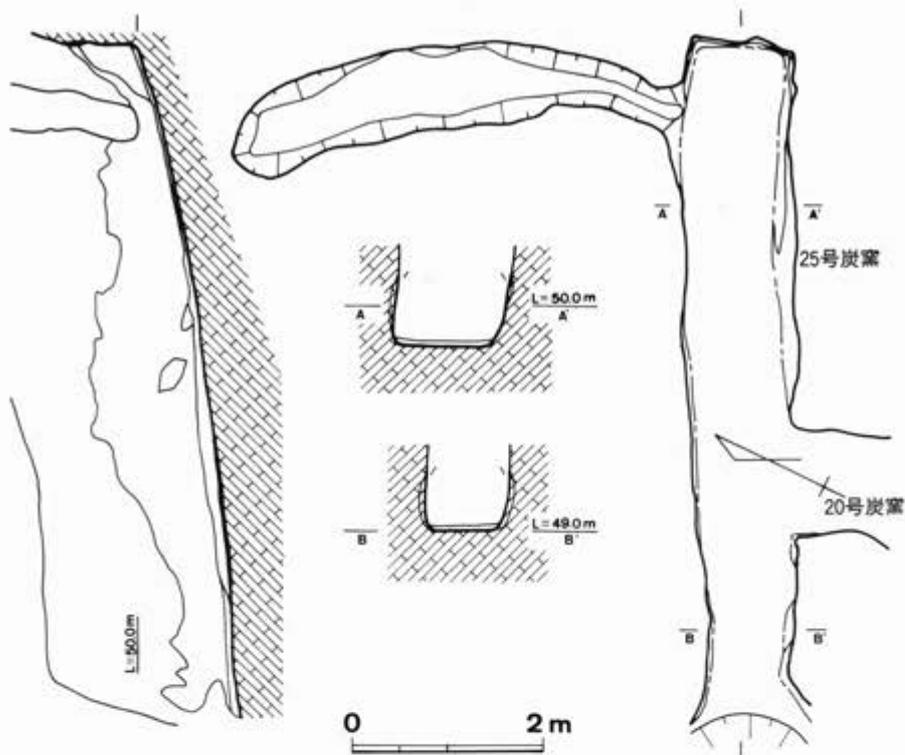
第32図 黒部24号炭窯実測図

焚き口付近から煙道部にかけて天井部崩落に伴い放棄された作業当時のまま残る木炭層が検出された。木炭は、焚き口から奥壁方向に向かって斜めにもたれかかるように堆積しており、焚き口付近の天井部から奥壁に向かって天井が崩落していったようすがわかる。奥壁から煙道部までの間、手前0.8mは木炭の出土はほとんど認められなかった。当初からなかったと考える。炭材として、直径7～10cm・長さ0.8m前後のものが使用されていた。木炭を除去すると、約0.4mの炭と酸化被熱した赤褐色土粒の堆積が確認された。地山を掘削した床面には被熱の痕跡はない。灰原・窯体内の堆積状況から1回の作業で放棄されたと推定される。

黒部25号炭窯(第33図) 19号炭窯上方、21号炭窯と切り合い関係を有する。尾根稜線のコーナー付近に位置するため、本体は等高線に直交する。平面形は長方形を呈するが、焚き口部分はややすぼまる。

煙道には、奥壁から1m手前の床面左側に排煙口がある。煙道自体が細長く外へのびているため、内・外側の両側から掘削されたと考えられる。

窯体内の堆積状況は、赤褐色土と炭層が互層となって3～4面ほど確認された。南西側壁は、

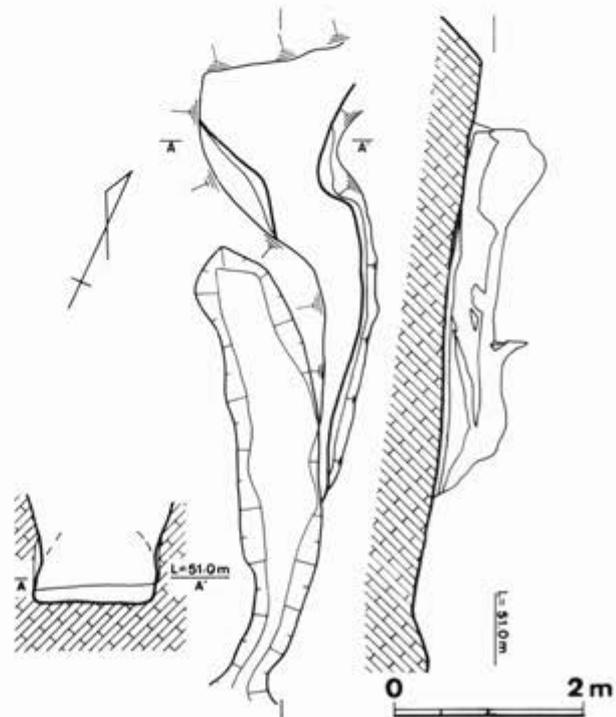


第33図 黒部25号炭窯実測図

21号炭窯の煙道によって削平を受けていることから、21号炭窯に先行する。

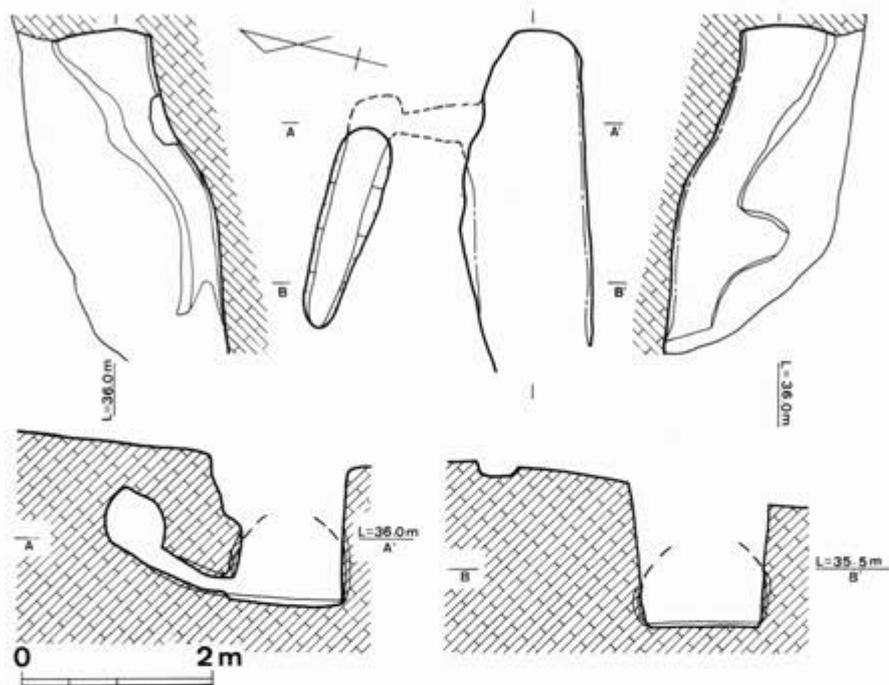
黒部26号炭窯(第34図) 25号炭窯煙道と重なり合っているが、尾根稜線のコーナー付近に位置しており、大半が流失している。残存する形状で見ると、焚き口付近のみ残存し、炭化部がなくなったと思われる。25号炭窯崩落後に再掘削されたものである。

黒部27号炭窯(第35図、図版第10) 最も低位に築造され、規模的にも最も小さい。主軸は、等高線にほぼ直交する。窯体は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りである。窯体には粘土の貼り付けは行わない。炭化部は長方形で、煙道部から奥壁側はやや幅が狭くなる。焚き口部・灰原は、流出や後世の開墾によって存在しない。煙道は奥壁から1m手前の床面左側にあるが、約1.2mほど掘削したのち、焚き口方向に向かって約90°曲がり上方にのびる。この部分は、外側から煙道掘削のために掘られた補助坑と考えられる。床面傾斜は、煙道付

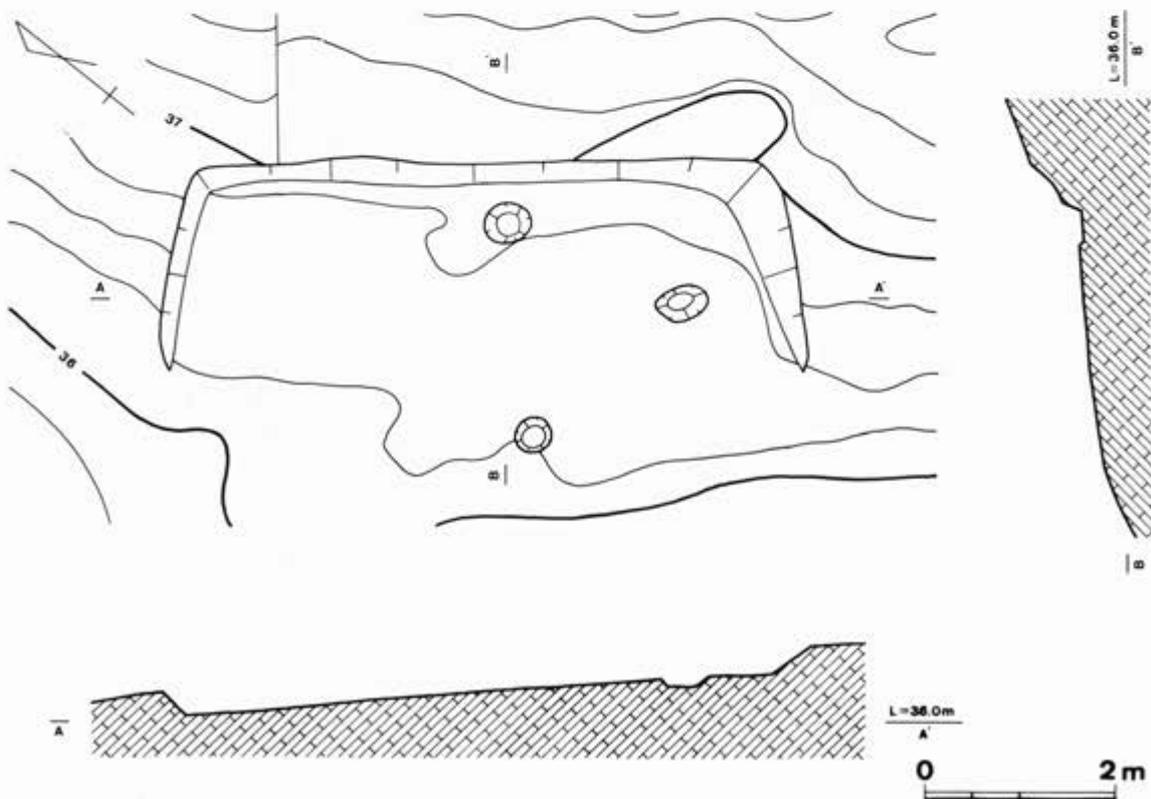


第34図 黒部26号炭窯実測図

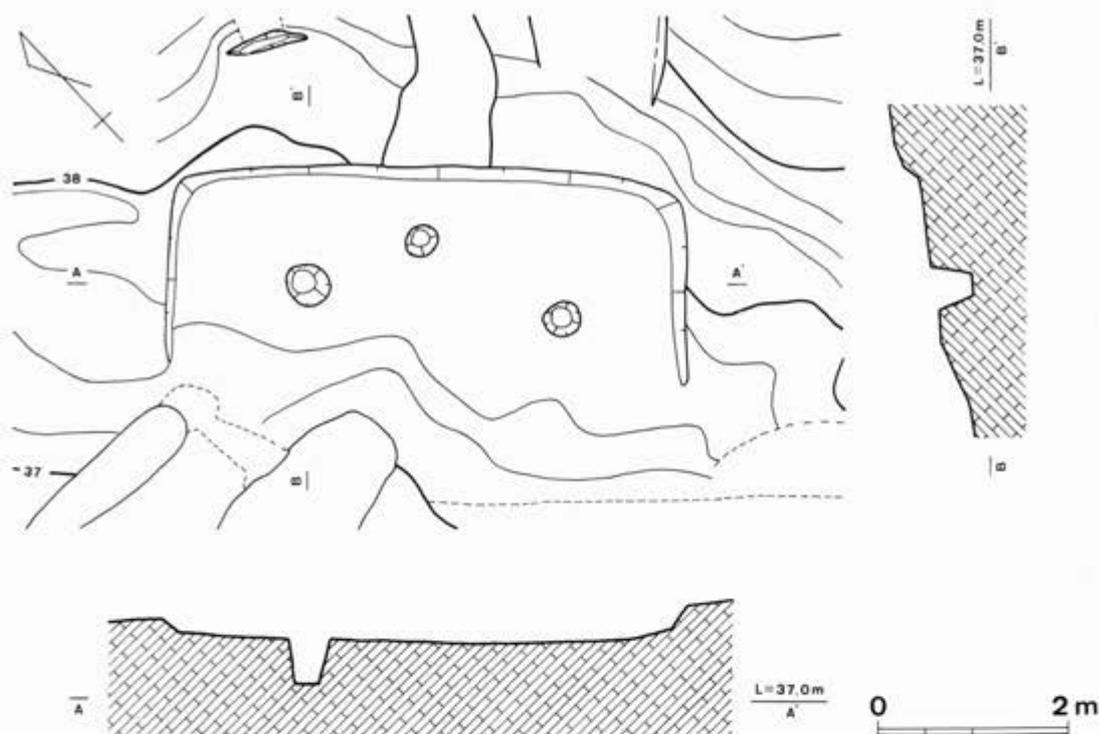
近で奥壁側と焚き口側では異なる。天井部は、すべて崩落していたが、窯体内の堆積状況は、床面上には天井部の酸化被熱した赤褐色土が認められ、その下層は操業に伴うと考えられる薄い赤褐色土と炭層が互層となって2～3面確認された。



第35図 黒部27号炭窯実測図



第36図 黒部4号住居跡実測図



第37図 黒部5号住居跡実測図

黒部4・5号住居跡(第36・37図、図版第10) 19・22・23号炭窯灰原下層から検出され、平面形が隅丸長方形を呈し、丘陵裾部分を「L」字状にカットしている。本来は、地形からすると方形を呈していたと考えられるが、流失したのか残存していない。堆積土は2層からなり、壁際の堆積状況から自然堆積と考えられる。粘土層上に立地することから、製鉄・製炭用に粘土を採集した採土穴であったところを利用して住居とした可能性がある。4号住居跡からは須恵器杯身の小片が出土しており、1～3号住居跡と同様、8世紀中頃～後半までのものとする。

(増田孝彦)

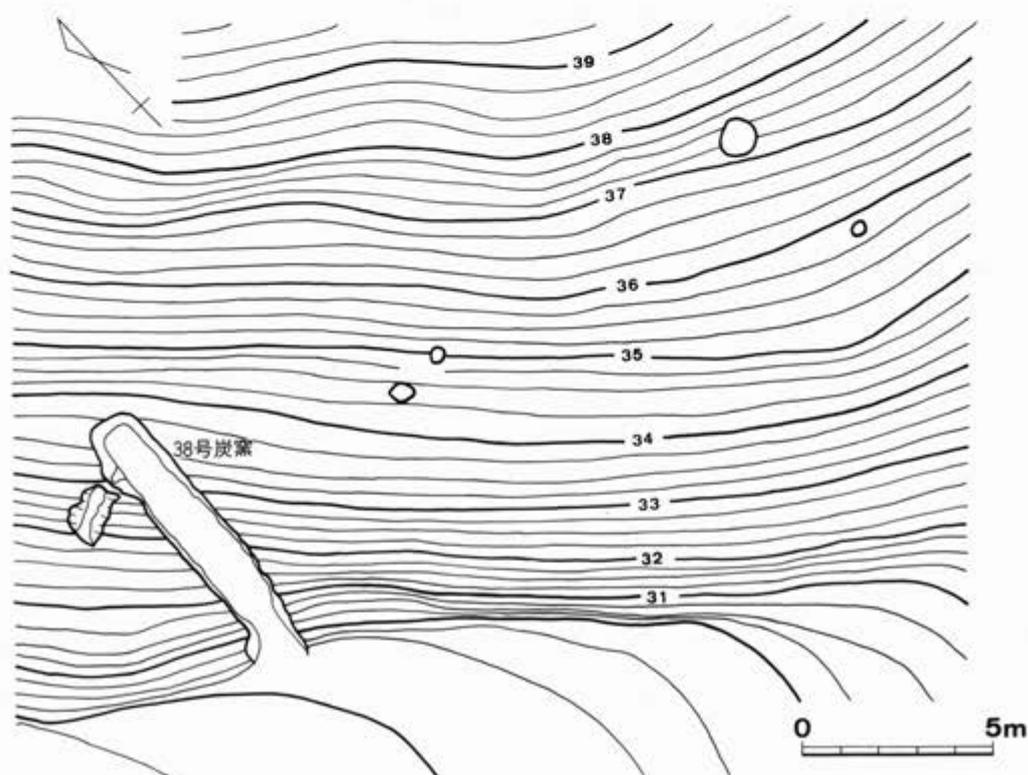
(2) 金屎地区の調査

この地区は、大きく2筋の谷地形からなる。J・I地点が位置する谷と、G・H地点が位置する谷である。前者の谷地形では、最初に谷部及び丘陵斜面の4か所で重機による試掘調査を行った。その内、谷部に入れた試掘トレンチで鉄滓・炉壁片・炭が出土する場所(灰原部分)を確認したため、その上部斜面を面的に重機で掘削した。その後人力で溝掘りをしながら、炭窯の有無を確認した結果、丘陵南斜面の調査地では、登り窯状炭窯1基と炭窯4基を検出した(J地点)。また、北西斜面の調査地では斜面を同様に重機で表土掘削、その後、人力で遺構検出をしたところ、炭窯を2基検出した(I地点)。その他、斜面2か所、また、谷奥部分で地形的に炭窯の存在しそうな斜面を重機掘削し、人力で溝掘りを行ったが、炭窯などの遺構は見られず、調査の結果、自然の窪地地形に堆積した黒ボク層と確認した。G・H地点の位置する谷地形では、京都府教育委員会の試掘部分を合わせて、丘陵の斜面に炭窯の存在が考えられたため、斜面調査の排土置き場

を考慮し、まず、水田部分で遺構の有無を確認することとした。水田部分では、谷の上部から合計3か所の試掘トレンチを重機によって掘削した。水田耕作土の下には灰褐色粘質土が約1m堆積していたが、遺構は確認されず、須恵器の杯身・杯蓋、線刻の入った木製品が1点出土したのみだった。さらに現地表下約2.5mほど深掘りをしたが、谷部に堆積した腐植土や自然木がみられるのみで、遺構は確認できなかった。そのため、水田部分を排土置き場として利用し、丘陵斜面の窪地状の地形を呈している部分の合計5地点を重機で表土掘削をした。その後、人力により溝掘りをした結果、北東斜面では登り窯状炭窯2基を検出し(H地点)、北斜面では炭窯1基を単独で検出した(G地点)。また、平成4年度に実施した試掘調査時(金屎谷丘陵稜部のテラス状地形)に確認した炭窯1基(黒部1号炭窯)を今年度に合わせて調査した。

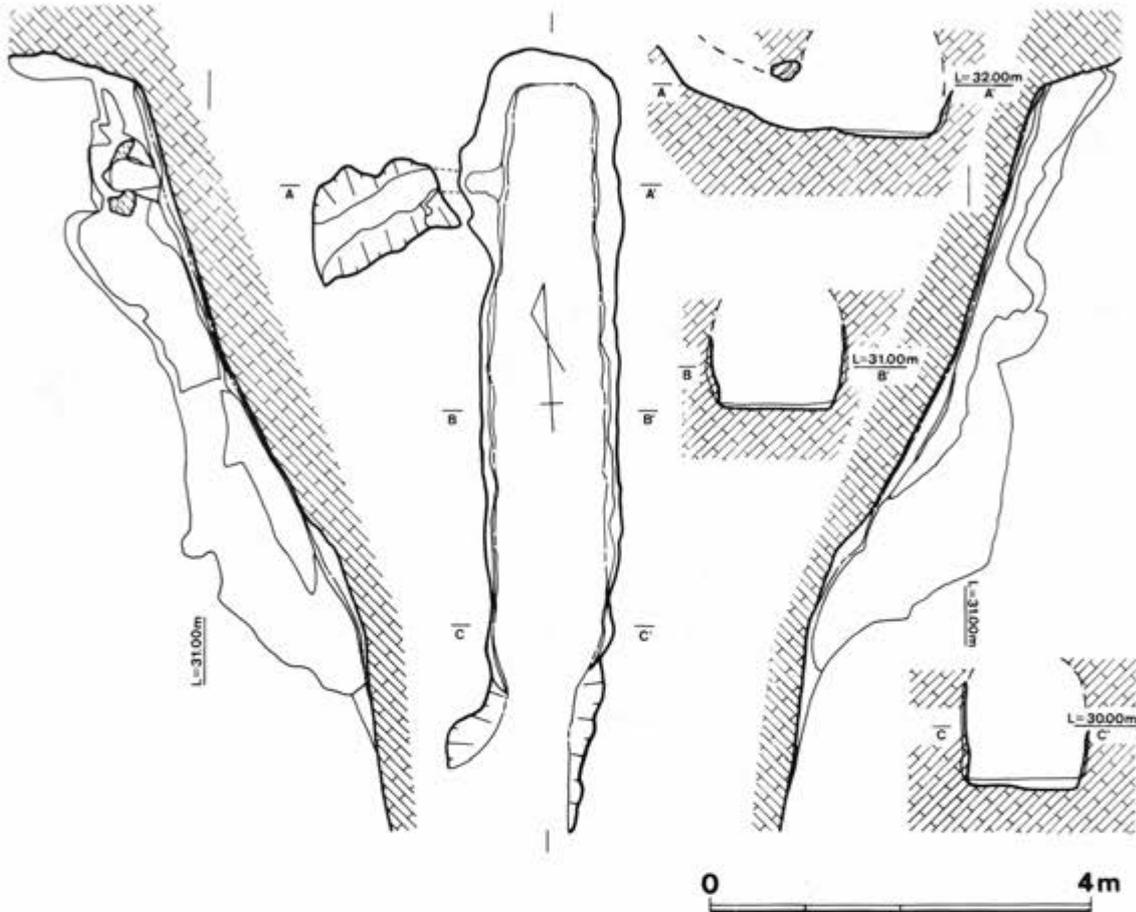
①J地点(第38図、図版第13)

黒部38号炭窯(第39図) この炭窯は地下式の炭窯である。主軸は、 $N-3^{\circ}-E$ である。壁体の状況は、地山の岩盤を掘削しただけの素掘りであり、窯体には特に粘土の貼り付けなどは見られなかった。炭化部は、奥壁までほぼ一定の幅で掘削され、焚き口部で一旦すぼまり、灰原部分で裾広がりとなる。煙道は、奥壁から手前1.5mの床面左側に取り付く。煙道は、窯体内部及び外部の両方から掘削されたと思われる。煙道口の下部は、地山である岩盤を掘削していたが、上部は粘土を貼り付けて補強されていた。焚き口部分には閉塞用の礫と礫間を充填するための粘土が比較的良好に残存していた。一方、天井部はすべて崩落しており、崩落土を除去すると、床面

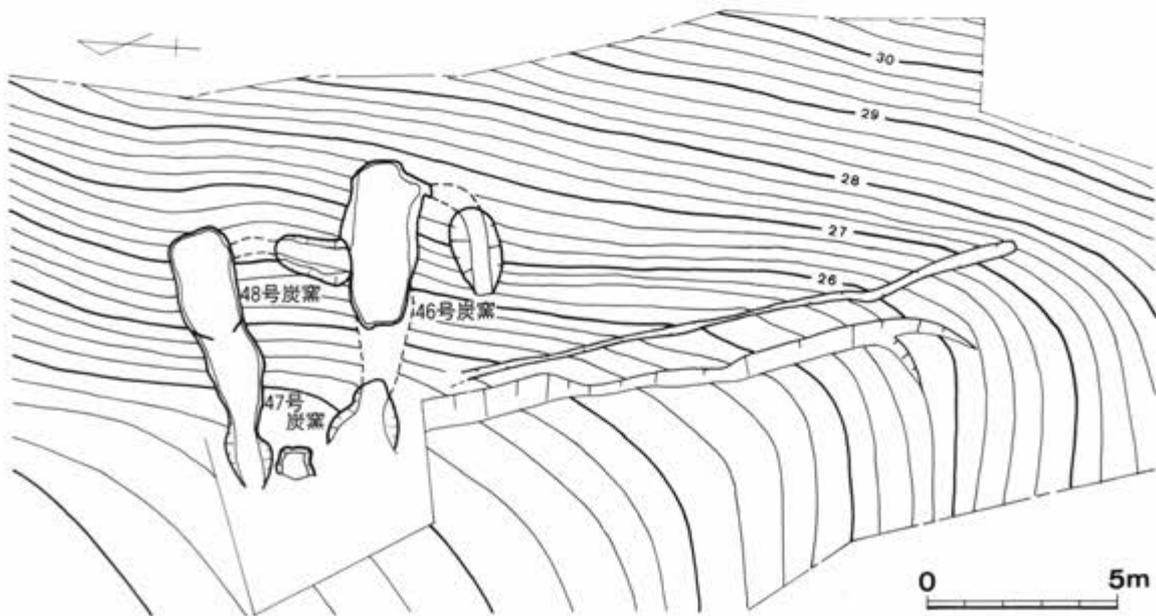


第38図 J地点遺構配置図

上には被熱した赤褐色土と炭層が互層となって確認された。岩盤を掘削した床面には被熱の痕跡が認められず、直上で炭の堆積が確認されたことから、窯の完成後窯体焼き締めのため空焚きされ、その際窯体の表面が剥離して床面に堆積した上で、操業されたと思われる。この初期操業面



第39図 黒部38号炭窯実測図

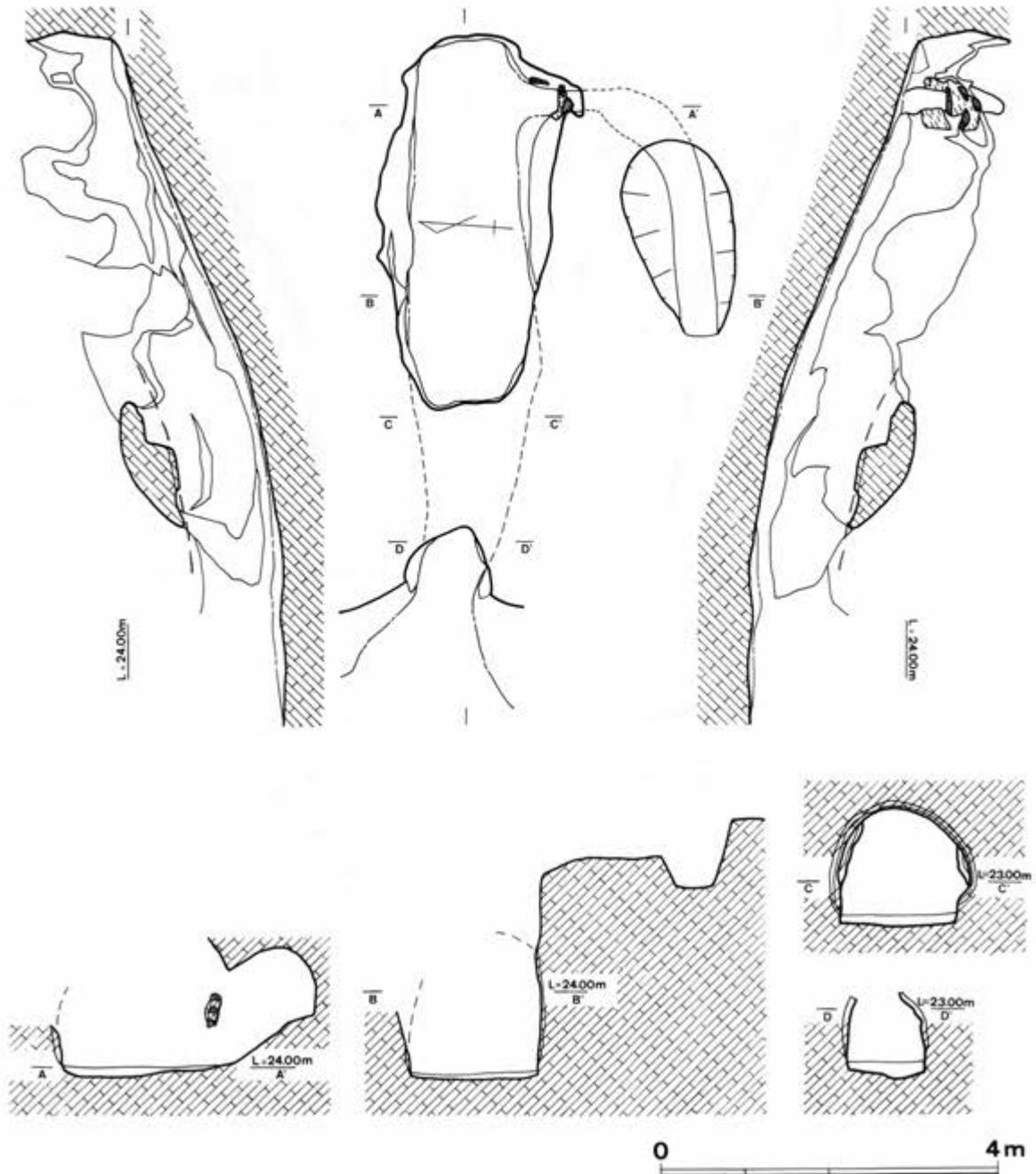


第40図 H地点遺構配置図

の炭層上部には、3層の炭層及び焼土が見られることから、操業回数は3回はあったと思われる。遺物は、煙道の埋土から土師器の甕が1点出土している。操業時期は、9世紀と考えられる。また、灰原部分から鉄滓が少量出土しており、出土場所から祭祀的な意味合いは考えられない。今回、製鉄炉は見つからなかったものの、近辺に製鉄炉が存在していたと考えられる。

②H地点(第40図)

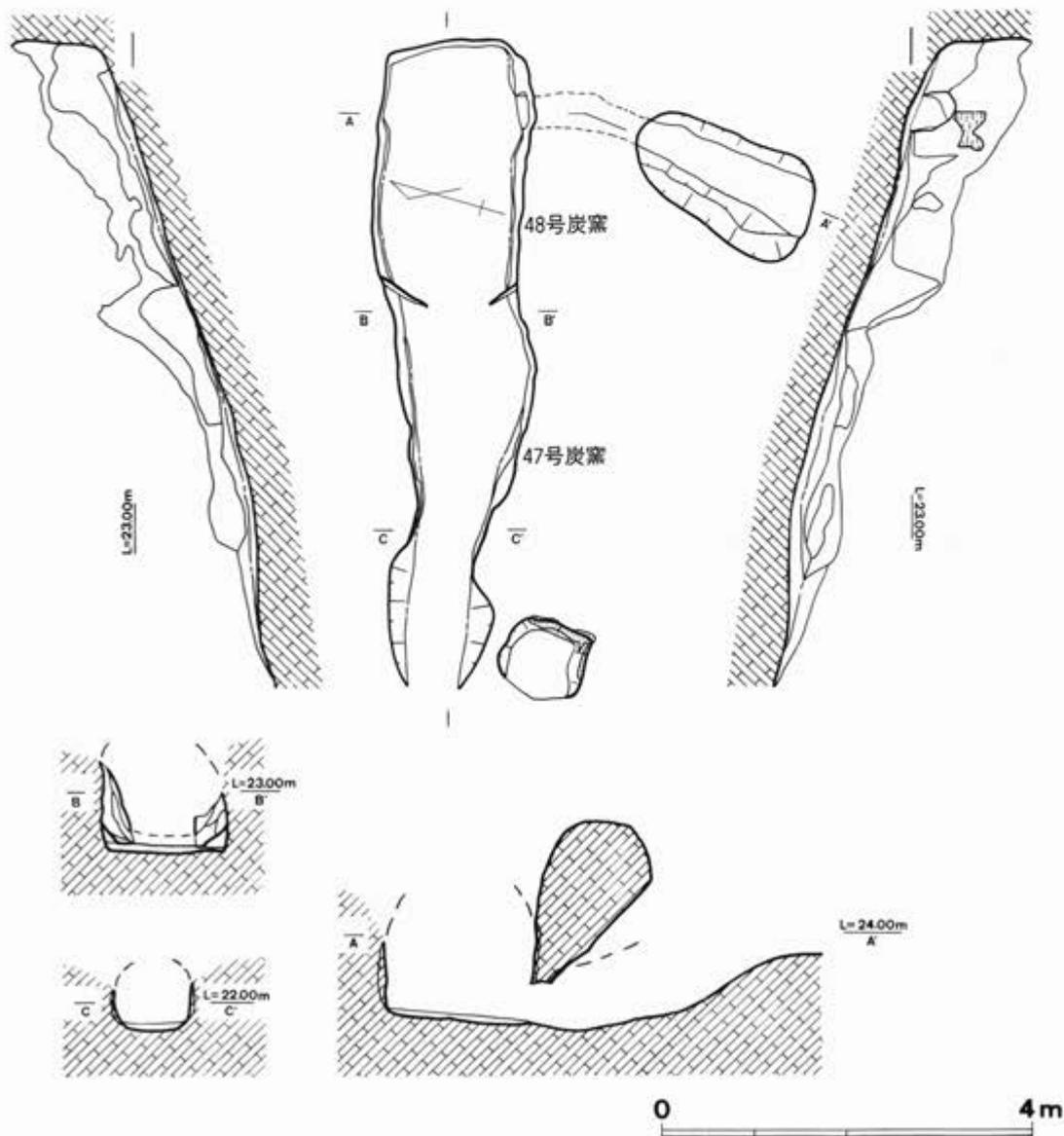
黒部46号炭窯(第41図、図版第14) N-85°-Eの炭窯である。焚き口から焼成部は比較的幅が狭く、炭化部も短い。煙道は、奥壁から手前0.8mの床面右側に取り付く。煙道の方向は、窯



第41図 黒部46号炭窯実測図

壁を直に掘削した後、窯体とほぼ平行に谷方向に向かい掘削する。これは、土量を動かす作業量を削減させるための措置と考えられる。煙道は、窯体内外面から掘削されたと思われる。煙道口は、窯壁である花崗岩の岩盤を掘削し、上部は扁平な礫と粘土で補強する。焚き口から燃焼部にかけて高さ約0.7mのドーム状の天井が残存していたが、炭化部の天井は崩落していた。窯体内の崩落土を除去すると炭層の下に赤褐色の天井崩落土があり、その下に2面の赤変した床面が最大で10cmの厚さで堆積した炭層直下に見られる。他の炭窯同様、最下層の炭層は床面に被熱の跡がないことから、窯体焼き締めのための空焚きに伴うものと考えられる。この堆積状況から見て、操業回数は3回と思われる。出土遺物は、天井崩落後の窯体内の流土中で印刻花文の入った緑釉陶器碗片1点が出土した。土器は、地山流入土である黄褐色土中で比較的上層から出土しており、参考となる程度の資料ではあるが、操業時期は土器から見て9世紀後半以前と考えられる。

黒部47・48号炭窯(第42図、図版第14) 前記の46号炭窯の北側で検出した、N-75°-Eの炭



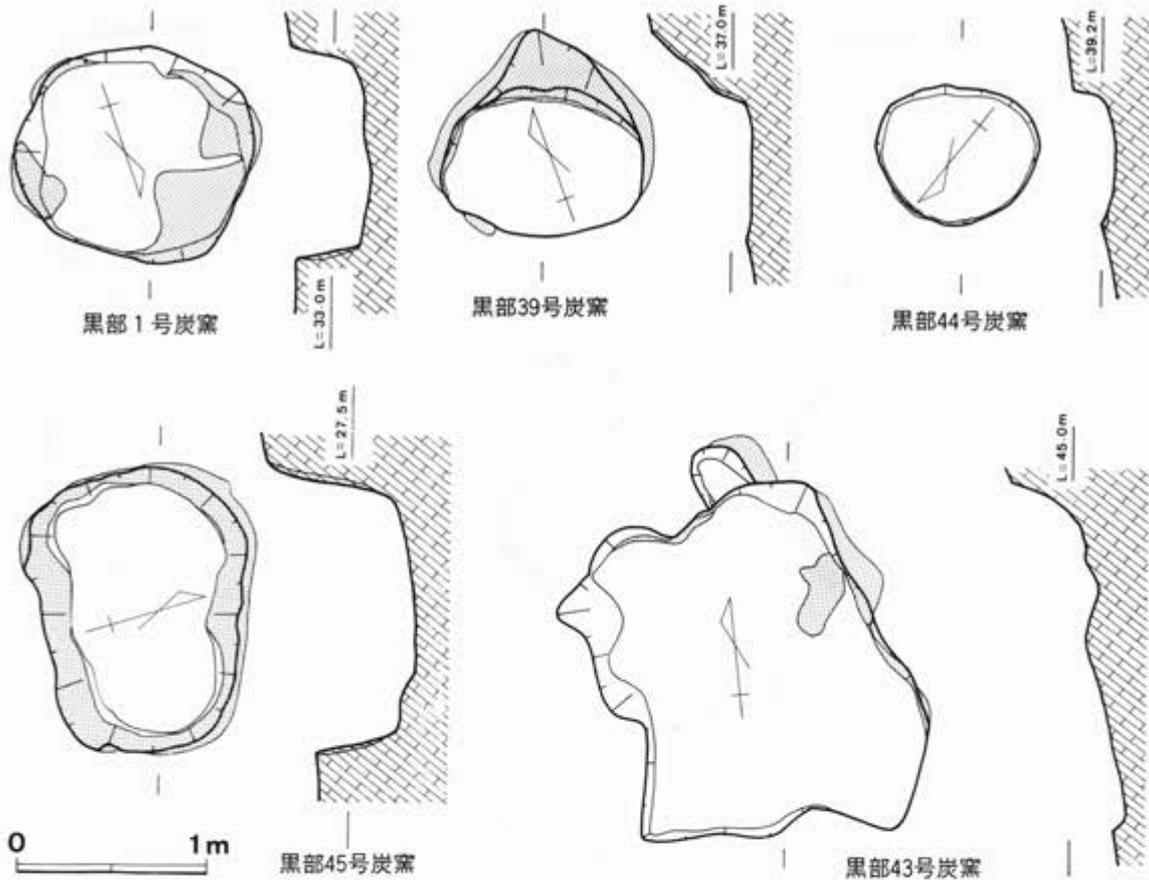
第42図 黒部47・48号炭窯実測図

窯である。この炭窯も焚き口と燃烧部の距離が短く、炭化部も幅の割に長さが短く、46号炭窯と規模、形態とも類似している。煙道は、奥壁から手前0.7mの床面右側に付く。煙道口は床面に接して地山である岩盤を掘削している。上部は、粘土を貼り付けて補強している。煙道の煙出し部分は48号炭窯の窯壁を切っている。おそらく46号炭窯の操業停止後間もなくして、掘削されたと考えられる。最終床面からの窯体内の土層には、最大約10cmの厚さの炭層の堆積が3枚見られる。岩盤を掘削した床面の直上には、約5cmの炭層が見られるが、床面に被熱痕跡が見られないため、窯体内焼き締めのための空焚きを行った際に生じたものと考えられる。また、奥壁から焚き口側に向かって約2.9mのところエラ状の張り出しが見られる。これは、炭焼きの規模縮小に伴い、窯体内に焚き口を粘土で構築した痕跡である。操業回数は、初期操業の窯の時に3回、規模縮小をして1回の計4回はあったと思われる。出土遺物が見られないため、詳細な操業時期については不明であるが、炭窯の規模・形状の点から48号炭窯と時期差はほとんどないものと思われる。また、これとは別に炭窯の焚き口の右脇に0.8m四方、深さ約0.5mの土坑状の掘り込みが見られる。東側の壁面の一部が被熱により赤変している。炭窯とは異なるものであり、恐らく焚き火跡かと思われる。

③黒部1号炭窯・G・I・J地点(第2図)

黒部1・39・43～45号炭窯(第43図、図版第15) 炭窯は、8基を検出した。その中で主なものを図面で掲載したが、図示していないものは、炭窯規模一覧表で扱っている。

金屎谷の尾根線上の階段状テラス部分で確認した1号炭窯は、3年前の試掘調査で確認し、昨年度に調査を行った。平面形状は楕円形を呈している。素掘りの炭窯で粘土の貼り付けは見られない。窯壁は、被熱によりところどころ赤変し、底部も赤変したところが認められる。39号炭窯は、斜面に築かれており、地山面を「L」字状にカットしている。斜面上部は、窯壁が良好に残存しているが、谷側は後世の削平によってほとんど残存していなかった。炭窯の窯壁には粘土を貼り付けており、被熱によりかなり赤変していた。底部は熱を受けていなかった。埋土の下層には20cmの厚さで炭層が見られた。埋土中から少量の炭が出土した。44号炭窯は、地山を掘削した素掘りの炭窯で、窯壁に粘土の貼り付けは見られなかった。窯壁の周囲は、部分的に被熱したところが認められる。しかし、床面には被熱の痕跡は見られなかった。単独で検出した45号炭窯は、今回確認した炭窯の中では大型のものである。窯壁の周囲には粘土を貼り付けている。窯壁は、上部1/2はかなり赤変していたが、下部から底部までは及んでいない。埋土中には炭層が見られた。43号方形炭窯は、窯の構築された場所が軟弱な花崗岩の風化土であり、平面プラン自体が捉えにくく、円形炭窯として検出した。窯体の窯壁には被覆粘土が見られ、埋土中には炭を取り出す際に窯体内に崩落し、赤変した窯壁が拳大の塊状となって残存していた。東側には一部煙道状に張り出す赤変部分が見られた。この窯の周囲には、斜面上部に平面帯状に炭粒を含む層が確認された。断ち割りの結果、この炭層がこの炭窯の地下に潜り込んでいく状況が見られたが、この炭層流入本体は調査区外の上部にあり、炭窯本体は調査区外斜面上部にその存在を想定できた。



第43図 黒部1・39・43～45号炭窯実測図

しかし、断ち割りで確認した炭の流入量からみて、登り窯状炭窯の存在は考えられず、この炭窯構築以前に他と同様の小型円形炭窯があった可能性を考えたい。

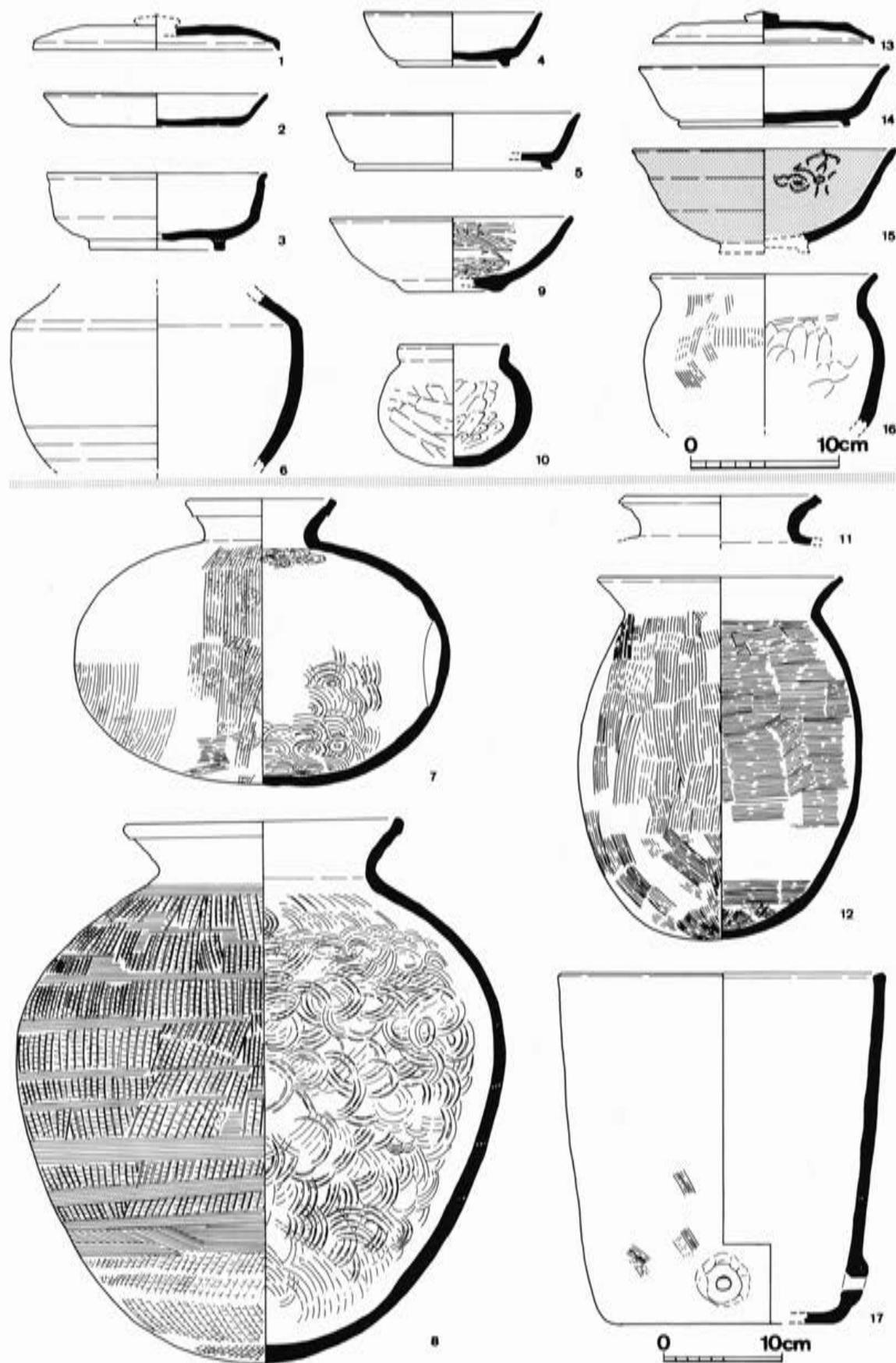
(柴 暁彦)

4. 出土遺物(第44～49図、図版第16～18)

製鉄炉及びその周辺からは、炉壁・鉄滓(炉底滓・流動滓・鉄塊・砂鉄など)・須恵器・土師器があり、廃滓場からは炉壁・鉄滓(炉底滓・流動滓・鉄塊など)・須恵器・土師器、木炭窯からは木炭・鉄滓・須恵器・黒色土器、住居跡からは須恵器・土師器が出土した。金屎地区からは、須恵器・土師器・緑釉陶器・石器が出土した。

①土器

須恵器(1)は、A地点廃滓場から出土した。平坦な天井部から外下方に降り、口縁部で下方に屈曲する。天井部には、宝珠つまみが付くが、欠損していた。形態から8世紀後半から9世紀初頭のものと思われる。須恵器皿(2)は、A地点廃滓場から出土した。平坦な底部と外上方に短く立ち上がる体部からなる。口縁端部は丸い。8世紀後半のものと思われる。須恵器杯(3)は、B地点廃滓場から出土した。貼り付けによる輪状高台を持つ。平坦な底部と「く」字状に屈曲する体部からなる。口縁端部は、外上方に大きく屈曲し、丸い。高台は底部外縁から内側をめぐる。

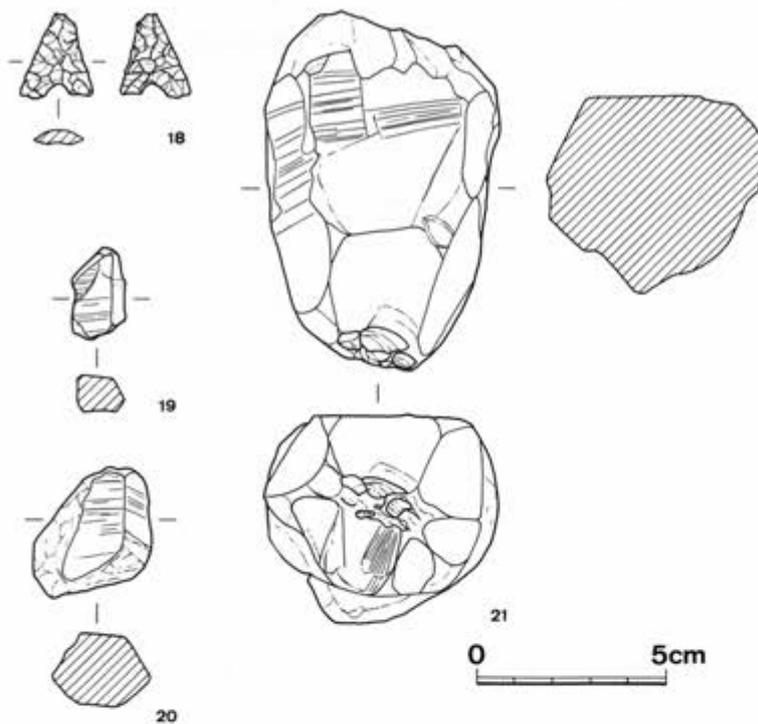


第44図 出土遺物実測図(1)

8世紀中頃のものと考えられる。須恵器杯(4・5)は、高台をめぐらすもので、平坦な底部と外上方に立ち上がる体部からなる。口縁端部は丸い。高台を底部外縁からやや内側に貼り付けていたことから、8世紀後半のものと考えられる。4はA地点廃滓場から出土し、5はB地点廃滓場から出土した。須恵器壺(6)は、E地点の3号住居跡内から出土した。肩部の張る壺である。体部のみ出土であったため、全体の形態は不明である。須恵器横瓶(7)は、B地点廃滓場から出土した。俵状の体部と逆「ハ」字状に開く口縁部からなる。体部内外面には、一面にタタキが施されていた。須恵器甕(8・11)は、卵形の体部と逆「ハ」字状に開く口縁部からなる。体部内外面にはタタキが施されており、外面の一部にカキ目が残る。8は、E地点3号住居跡検出面から出土し、11はB地点廃滓場から出土した。瓦器椀(9)は、A地点5号炭窯出土である。黒部遺跡で製鉄が終焉を迎えた後の土器である。13世紀に相当する。底部から内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸い。底部から体部の内面にヘラ磨きが施されていた。土師器壺(10)は、E地点3号住居跡床面から出土した、小型の短頸壺である。球状の体部と上方に短く立ち上がる口縁部からなる。非常に厚手の作りであるが、体部内外面にはヘラ削りが施されていた。土師器甕(12)は、B地点廃滓場から出土した。縦長の体部と外上方に開く口縁部からなる。口縁端部は平坦である。体部内外面にはハケ目が施されていた。須恵器蓋(13)は、H地点から出土した、扁平な宝珠つまみを持つ蓋である。平坦な天井部と下方に降りる体部からなる。口縁部は、下方に大きく屈曲し、端部は丸くおさめる。色調は青灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に砂粒を含んでいる。土器の形態から、8世紀後半から9世紀初頭のものとする。この土器は、金屎地区の水田部の試掘調査時に出土しており、この地区の炭窯操業後に流出し堆積したものと思われる。須恵器杯(14)は、H地点から出土した。底部から斜め上方に立ち上がり、口縁部はやや外反しながら端部は尖り気味におさめる。高台は外側に踏ん張る。高台の断面形状は方形を呈している。色調は青灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土にわずかに砂粒を含んでいる。高台の貼り付け位置から、8世紀後半の土器と思われる。緑釉陶器椀(15)は、H地点から出土した。復原口径17.8cmを測る。全体の1/4程度の破片であるが、口縁部から高台部分まで残存する。外反しながら「く」字状に屈曲して斜め上方に立ち上がる。端部は丸くおさめる。外面には二条の鈍い稜が残る。口縁部内面には印刻花文が施されている。内外面とも淡緑色の釉が良好に残存している。内外面ともていねいに仕上げられている。緑釉の色調から京都市左京区岩倉産のもの可能性がある。土師器甕(16)は、E地点の15号炭窯から出土した。復原口径約15cmを測る。外面はハケ、内面は指押さえの圧痕が見られる。土師器鉢(17)は、C地点から出土した、用途不明の土器である。平坦な底部と外上方にまっすぐ立ち上がる体部からなり、口縁端部は平坦である。体部下部に円形に粘土を貼り付け、中央に1.5cmほどの穴を穿孔していた。体部外面には部分的にハケ目が残っていた。

②石器

石鏃(18)は、長さ約2.3cm・最大幅1.9cm・厚さ約0.4cmを測る。凹基無頸鏃である。先端部分及び茎部分は、シャープさに欠ける。青灰色のチャートを使用している。19・20は、水晶の原石



第45図 出土遺物実測図(2)

である。19は、長さ約2.4cm・幅1.4cm・厚さ0.9cmを測る。色調は白濁しており、柱状の2面に結晶面がみられる。20は、やや黒みがかかった煙水晶の原石である。長さ約3.45cm・幅3.1cm・厚さ約1.9cmを測る。3面に結晶面を持っている。いずれも使用された痕跡は見られなかった。水晶製ハンマー(21)は、長さ約9.5cm・幅約6.2cm・厚さ約5.5cmを測る。六角錐状の頂部はハンマーとして使用されたらしく、表面が貝殻状に薄く剥離している。そのほ

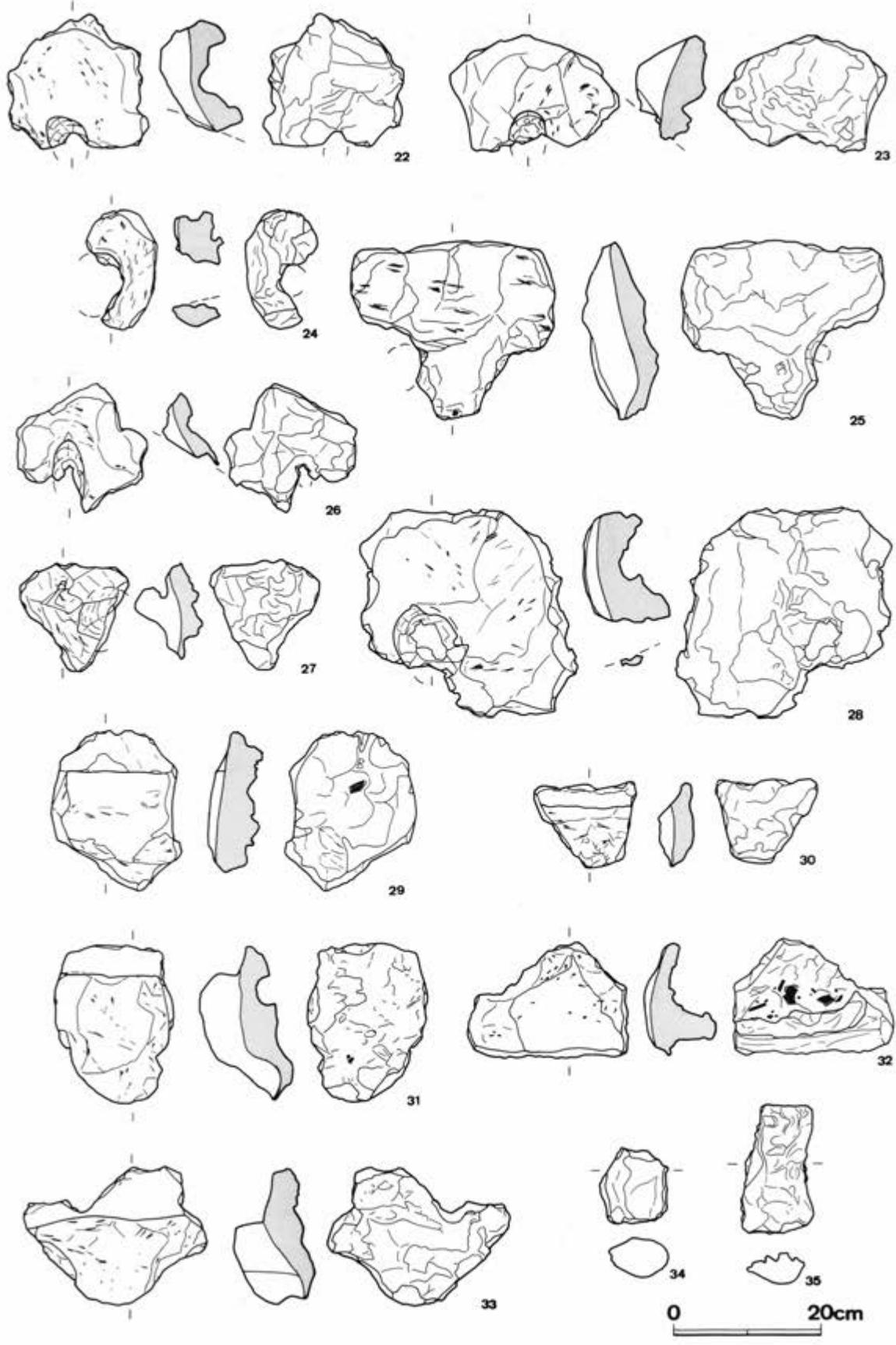
かの六角柱状の各稜部は磨滅して丸くなっている。水晶の結晶体としては結晶面が未熟で石英に近い面も見られるが、ハンマーの用途として握ってみると、非常に使いやすいかたちをしている。

(岡崎研一・柴 暁彦)

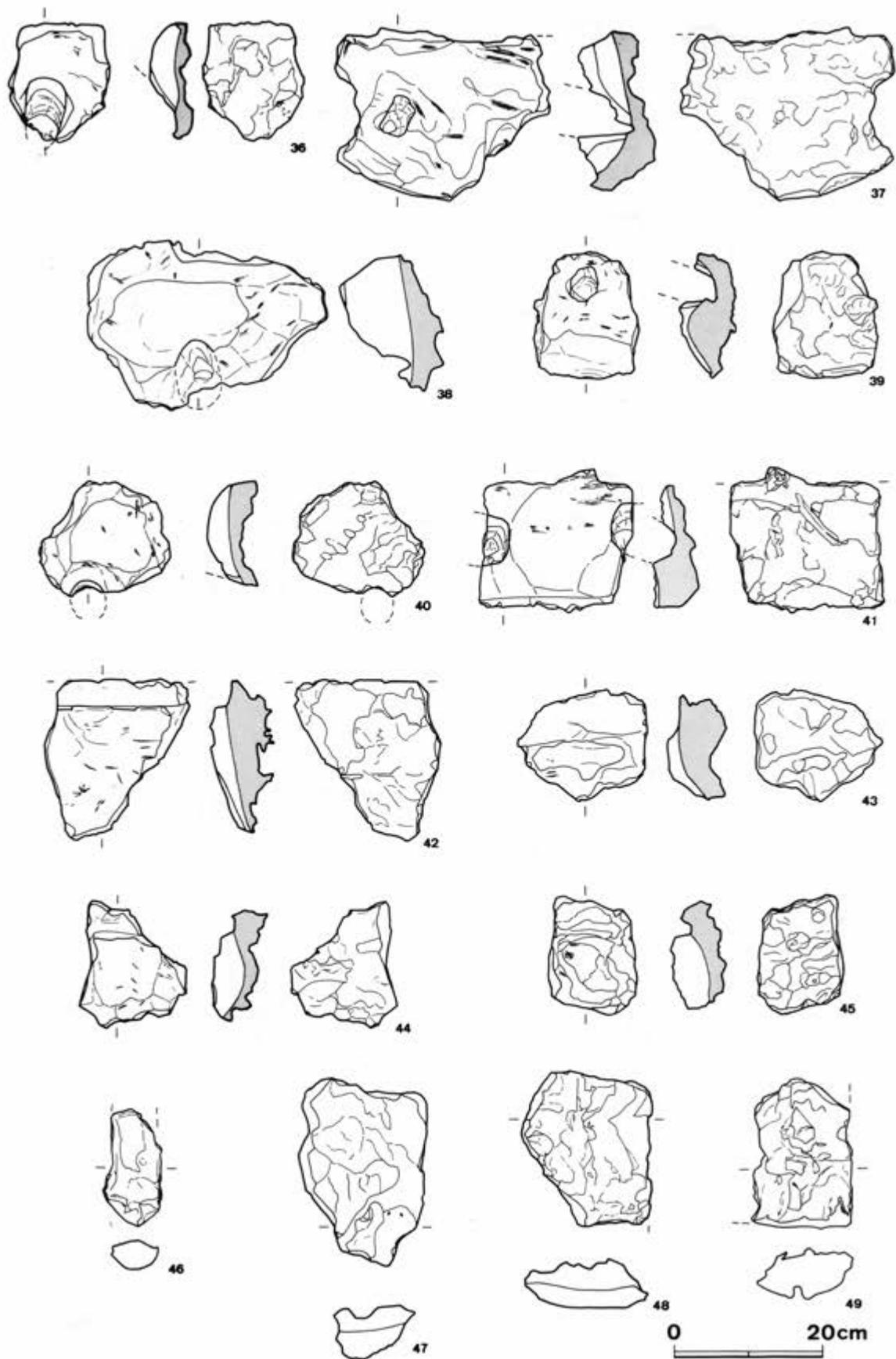
③製鉄炉内堆積物

製鉄炉内の堆積物については、土砂を全量採集し水洗し、強力磁石により反応するものと、反応しないものに分類し、内容物の採集に努めた。その結果、鉄滓・炉壁・鉄塊系遺物・砂鉄・木炭・砂などが採集されたが、砂については防湿用の粉炭層及び一部排滓溝付近のものも含まれることや、泥状になって流出したものがあため計量は行ったが、一覧表では除いた。同様に木炭も流出するため除いている。したがって、採集されたものは砂鉄・鉄滓・炉壁・鉄塊系遺物の4種となるが、完全に水洗いできなかつたものや、一部混同したものもあり、計量一覧表の数値はあくまで採集できた量と考え、各製鉄炉の目安としたい。

炉底となる溶結粘土下層の粉炭層中から出土する堆積物には、砂鉄・鉄滓・鉄塊系の遺物があるが、これらは量的には多くなく、また製鉄炉の操業に伴い自然に堆積するものでもなく、明らかに意識的に混ぜられており、炉の防湿効果をねらったとも思えるが、それよりも製鉄炉に対する祭祀的な意味合いが強いと考える。すなわち、前回の製鉄炉の操業の成功を新炉にも求め、同様の成功を求めた祈りを込めたものと考えたい。丹後半島内で調査を行った製鉄炉には共通して認められる製鉄炉に対する祭祀であると考えられる。このほかに、遠所遺跡では製鉄炉・鍛冶炉周辺で祭祀遺物、ニゴレ遺跡では製鉄炉そのものを模倣した祭壇状の遺構(祭祀遺構)が検出され、鉄



第46図 製鉄炉関係遺物実測図(1) 黒部1号製鉄炉：炉壁・炉底滓

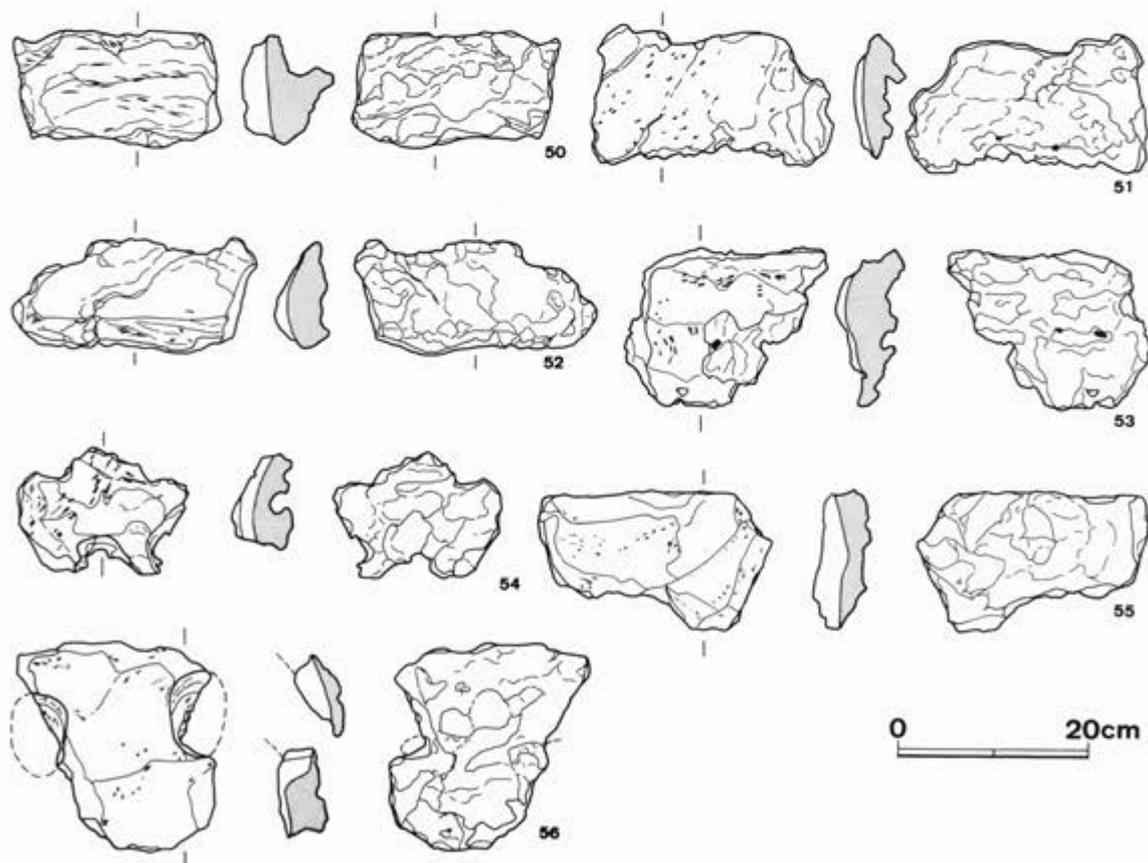


第47図 製鉄炉関係遺物実測図(2) 黒部2号製鉄炉：炉壁・炉底滓

生産そのものに対して祭祀が行われた。黒部遺跡では、このような痕跡は認められない。

A地点、B地点の廃滓場から出土したものの内訳は、最も多いのは鉄滓である。分析結果ではいずれも製錬滓であり、次いで流動滓・炉内滓・炉底滓・炉壁・砂鉄となる。その他に先に述べた須恵器・土師器が少量ある。一覧表では炉壁・鉄滓としたが、鉄滓とした資料の中には一部炉壁も含まれる。炉底滓は、炉底の浅い椀状の形状を残し、炉底の溶結粘土が付着するもの、流動滓は液状に溶解したものが流れた痕跡をもつが、鉄滓とし、また鉄塊状のものも鉄滓として区分し、計量結果を末尾の一覧表に記載した。さらに、炉内及び作業面で出土した遺物も同様の区分をしている。各々の製鉄炉の廃滓場が限定できないため、炉底滓・流動滓の個別の出土量や磁性を帯びるのも区分はできないため、廃滓場一括出土遺物の計量である。A地点2号製鉄炉作業面の鉄塊状の遺物は、大半が磁性を帯びている。

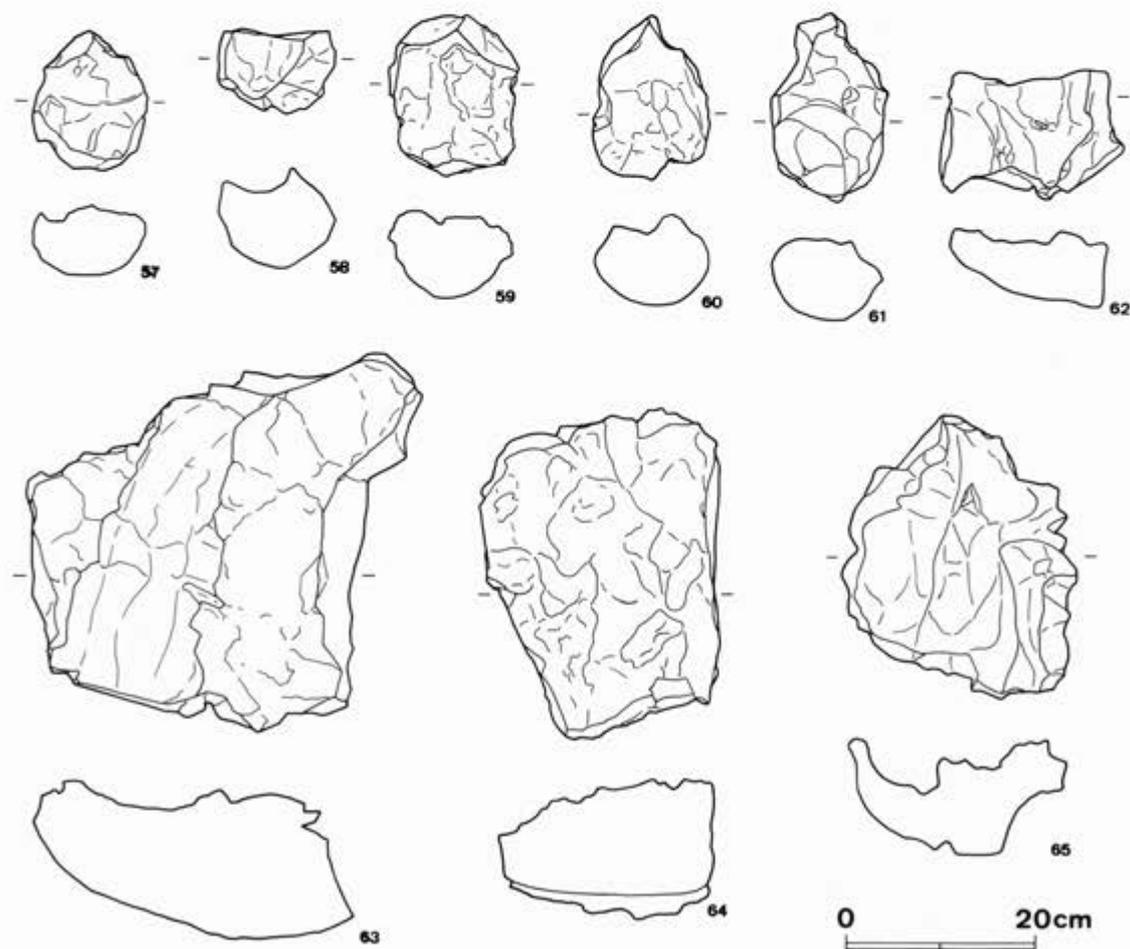
炉壁は、スサ・砂を混ぜた粘土塊で、炉内の鉄滓・ガラスなどが溶結しているが、製鉄炉上端はスサを混ぜない粘土塊となっているためこれも含まれる。操業後に製鉄炉が破壊されるため、原形をとどめるものはない。また、出土時は大型片であっても、その後乾燥し崩壊し小片化したものが多数ある。製鉄炉上端は、スサを混ぜない粘土によって積み上げられている。中位付近は、鉄滓・ガラス質などの溶解物とともに木炭が付着したものが認められる。低位付近は炉壁侵蝕が著しく、送風口が認められる。送風口は大半が目詰まりしている。送風口の角度は不明である。乾燥により崩壊する前の資料では、20cm間隔で送風口が3口並んだ資料も認められた。比較的大



第48図 製鉄炉関係遺物実測図(3) A・B地点、黒部2号製鉄炉：炉壁・炉底滓

型品の炉壁を観察すれば、ある程度面を持つものが確認されることから、ブロック状の粘土により築炉され、その上に内外面とも上塗りし、ブロック状粘土で築けない炉上端のみ粘土を輪積みした可能性がある。1単位の大きさは不明であるが、ブロック状粘土塊を積み上げることで築炉作業を軽減し、解体を容易にしたと考える。すなわち、ブロック状粘土塊を積み上げた後、内外面とも上塗りをするが、内面は作業に伴い、上塗り粘土が還元剤として侵蝕され接合面にガラス滓が進入している。これによって作業後の炉の解体を容易にしたと考えられる(塊状に壊れる)。遠所遺跡・ニゴレ遺跡では、このブロック状粘土塊相互の接合は、資料的には少ないが、棒状のもので接合された痕跡がある。このブロック状粘土塊は、スサ入りであるが、炉の下方は鉄滓・土器・木炭を混入させ強度を増している(遠所遺跡)。また、少量ではあるが、炉壁を水洗いしてみると、原料砂鉄を混ぜているものもみられた。祭祀に伴うものであろうか。送風口はブロック状粘土塊を作る時点で設けるようで、送風口付近は土器を混ぜ補強するものも遠所遺跡では認められる。送風口の間隔、数については不明である。ニゴレ遺跡では15cm間隔で4本並ぶブロック状粘土塊の出土もある。送風口は認められるが、羽口・送風管の出土は認められなかった。

炉壁以外に、炉底の溶結粘土と考えられるものもあるが、作業ごとに貼るのではなく数回または4号炉のように炉の造り替え、5号炉のように初期の炉底の上に新たな炉底を設けているもの



第49図 製鉄炉関係遺物実測図(4) 黒部1号製鉄炉廃滓場出土

もあり、量的には少ない。炉底は、スサを含まず砂を多く含む。粘土自体が精良でよく焼け締まり、青灰色または灰青色を呈し、表面に酸化した鉄、鉄塊状のものが付着する。この炉底内にも砂鉄・鉄滓などを混入させるものも見られる。

燃料となる木炭や原料砂鉄は、開鑿により製鉄炉作業面が削平されているため、その置き場所については不明である。しかし、削り出し平坦面下方の廃滓場斜面から鉄滓に混じって多く出土することから、操業終了後、選鉱に伴って炉壁・炉底滓などとともに廃棄された可能性がある。

木炭は、33基の登り窯状炭窯、11基の小型炭窯を検出したが、窯内・灰原とも細片化した木炭しか残存していなかったため、製炭状況を知ることはできなかったが、唯一、木炭が完全に窯内に残存していた24号炭窯から見ると次のことが明らかになった。

炭材の樹種鑑定はできていないが、一見して多種多様の樹木が見られることから、炭材となるものはどんな樹木でも使用したと考えられる。炭材の太さに関しても多様で、細い小枝状のものから直径15cmほどのものまであり、平均直径約10cmのものが多く使用されている。長さも一定でなく、長短さまざまである。ただ、24号炭窯は1回の操業で崩壊していることや、窯内に残された炭材から復原すると、床面に残された炭材と天井部の間には、かなり空間が認められることから、本格的な操業ではなく、仮の操業であった可能性もある。

3. ま と め

黒部遺跡は、竹野川右岸では大規模な製鉄遺跡の調査となった。左岸に位置する遠所遺跡に先行する製鉄炉・炭窯も存在することが判明し、過去に調査を実施した製鉄遺跡と比較すると、いろいろな特徴・問題点が提示されることとなった。

また、平成7年度調査となった金屎地区では多量に水晶が発見された。この地から南西900mのところでは、弥生時代中期後半の大規模な水晶製玉作り工房も同時に発掘調査されており、水晶原料の産地として考えた場合、黒部遺跡が最も近くにあり、注目される場所でもある。

この産出した水晶は、ところどころ欠損し粘土層から単体で出土しており、熱水床が地上に吹き上げる際に、水晶脈を打ち破り持ち上げてきた結果であるとされた^(注6)。

以下、調査結果を簡単にまとめてみたい。

製鉄炉 切り合い関係を有する製鉄炉8基を検出した(うち、7基を調査)。炉周辺や廃滓場から出土した土器から、8世紀後半～9世紀初頭にかけての操業年代が推定される。その他、切り合い関係から見た個々の操業ではA地点の最古のものは3号製鉄炉、B地点最古のものは5号製鉄炉となり、最も新しいものは、A地点では2号製鉄炉、B地点では4号製鉄炉となる。これを炉の形態・規模から考えていくと、5→6・3→7→4・1→2の操業順が考えられる。このことから製鉄炉をみると、8世紀中頃から後半にかけて最も規模が大きくなり、下部構造も充実している。その後、3号炉に見られるような製鉄炉(長さに対して幅がせまく、下部構造も小さいもの)に移行し、石熊地区検出の製鉄炉と同じような状況となる。この時期では、製鉄炉の設置場所状況により両側排滓溝か、片側のみ排滓溝で、片方は排滓坑になるものと分かれるよう

ある。その後、2号炉に見られるような下部構造を有さない製鉄炉が出現すると考えられる。下部構造を有する製鉄炉に共通することは、粉炭層中に少量ではあるが、鉄滓・砂鉄・鉄塊系の遺物が木炭・砂とともに突き固められている。分析結果からすると、共通する砂鉄と鉄滓であり、過去に製鉄した際の副産物を新たな製鉄炉に用いて、過去同様の成功を祈る祭祀的な意味合いが強いと言える。対岸のニゴレ遺跡では、製鉄炉そのものを模した祭祀遺構も検出されている。

炉壁(第46図22~33、第47図36~45、第48図50~56)については、遠所遺跡・ニゴレ遺跡などでは炉壁内にスサ・砂鉄・鉄滓・土器・木炭などを混入させ、強度の補強を図ったものが認められた。しかし、黒部遺跡ではスサ・砂鉄・木炭の混入は認められたものの、土器・鉄滓が混入するものは認められなかった。また、ブロック状の粘土塊による1単位ごとの築炉を想定したが、出土した時点では単位として確認はできたものの、風化・崩落してしまい図化することはできなかった。送風口に関しても、3孔が接続するものは確認されたが、同様に図化できなかった。炉壁の上端は、遠所遺跡・ニゴレ遺跡同様スサを混ぜない粘土を輪積みしているようである。送風管・竈羽口は出土しなかった。

多量に出土した鉄滓の中で少量ではあるが、細長い棒状のものが認められた(第46図34・35、第47図46、第49図57~61)。この棒状の鉄滓は、幅12cmほどのもので、断面が半円状をなし、上面が流動状を呈している。下面には砂粒が付着する。通常の排滓溝・坑から流出した流動滓とは明らかに形状が異なっている。操業最盛期には炉底滓の高さを一定に保つために、排滓溝・坑から滓を抜くだけでは追いつかないために、炉壁に新たに穴を開け、補助排滓溝として炉底の半溶融状態の滓を抜き、炉底滓の高さを一定に保つたと考えられる。この半円状をなす部分は、炉外で溝状に掘られた部分が流れたものと考えられ、溝より上面外は外側に広がっている。また、操業終了時まで炉壁内に残存していたと思われる流動性のほとんどない棒状の鉄滓もある。その補助排滓溝は、粘土により閉塞が行われていたと考えられるが、一部石材も用いられたようで、周辺から拳大~幼児の頭程度の酸化被熱した石材が出土している(粘土で押さえ、石材はこれを固定させたものであろうか)。

製鉄炉の規模縮小に関しては、周辺での調査結果をもとに推定すると、9世紀前半段階ではすでに縮小している。このことは、対岸の製鉄遺跡でも同様な傾向があり、遠所遺跡の事例を参考にすると、出土木簡から8世紀後半段階までは国衙工房であった可能性が指摘されているが、9世紀以降は遺跡群全体が衰退していく傾向にあり、この時期に丹後での鉄生産が私的な鉄生産に移ると考えることである。それに伴い工人たちが在地に定着し、規模を縮小して生産を続けていたのではないかとと思われる。

また、遠所遺跡のように鍛冶工房まで有していないことから考えると、生産された鉄は別の鍛冶工房に運ばれたと考えられる。8世紀後半段階は遠所遺跡と平行するが、同一集団であったかどうかは不明である。

木炭窯 黒部遺跡全体では、登り窯状炭窯33基・小型炭窯11基の計44基が検出された。登り窯状炭窯はすべて地下式で、過去に調査を実施したものと大差は認められない。いずれも奥壁・側

壁は内湾しながら立ち上がり、側壁が天井部のアーチ部分の立ち上がり付近まで遺存していることから、その形状はカマボコ状を呈していたと考えられる。地山の粘土を掘削した床面は、3号炭窯では煙道付近まで熱を受けている。窯体掘削後に空焚きされたと考えられる。花崗岩の岩盤を掘り抜いたものは、空焚きの際に窯体の表面が剝離し床面に堆積したその上で、操業されているが、粘土層では空焚きを行っても窯体の表面の剝離はなく、床面の上に直接木炭の堆積が認められた。

炭化部の煙道口は、大半の炭窯が奥壁から手前0.6～2.6m付近の床面に設けられており、奥壁及び奥壁天井部に設けていたと考えられるものは少ない。奥壁に煙道を設けたものに関しては、炭化部全体に炭材が置かれていたと考えられる。しかし、奥壁から手前に煙道を設けたものは、煙道付近を境に奥壁までは、焚き口付近までの床面傾斜角よりも急になっている。また、木炭片や灰の堆積もほとんど認められないものがあり、煙道口から奥壁にかけては炭材を置いていなかった可能性がある。

煙道掘削は、いずれも内外面から行われたと考えられるが、等高線にほぼ直交する形で本体を設けたものは、丘陵斜面がかなり急なため、窯体上の斜面からその掘り込みまで掘削するにはかなりの深さになる。そのため、作業スペースを確保し効率をあげるため、外面が漏斗状に掘削されたり、補助坑を設けたものが見られ、煙道掘削の困難さを示していた。これに対し、等高線に直交しないものは、いずれも丘陵低位側や、先に操業された炭窯に煙道が設けられており、煙道掘削の手間を省いている。等高線に直交しない炭窯は、鉄生産に伴う需要の増加に伴い簡略化されたのであろうか。ただ、先に操業された炭窯に煙道が抜けるものは、煙道掘削時に炭窯本体が空洞であったか崩落した跡であったかは、確認することはできなかった。

炭の掻き出しを行った作業面ならびに灰原は、後世の開墾や山道の開削の際に削平され、大半が消失していた。

これら炭窯の操業年代は、8・13号炭窯については土器の出土によって、8世紀後半と確認できたが、その他の窯からは出土遺物がなく、不明である。しかし、製鉄炉に伴う遺構からは、8世紀中頃から9世紀初頭にかけての土器が出土することから、製鉄炉に伴うと考えられる炭窯の操業年代もこの時期に求めることができると思われる。

遠所遺跡に比べると登り窯状炭窯が多く、小型炭窯が少ない。炭窯が広範囲に分布せず比較的まとまりがあり、登り窯状炭窯が製鉄炉にごく近接して営まれている。同じ炭窯が何度も造り替えられ、切り合い関係を有している。仲谷・石熊地区に比べると、金屎地区は炭窯の分布密度が低く、仲谷地区の木炭の不足を補うために分散したとも考えられる。また、フラスコ状の平面形のものや、全長に対しかなり幅の広いものや、全長の短いものなど、大型のものに対して小型のものが認められる。このことは、製鉄炉の規模縮小に関連すると推定される。

竪穴式住居跡 全体で5基の竪穴式住居跡を検出したが、いずれも仲谷地区E・F地点で検出した。金屎地区でも、古墳時代の須恵器は確認されているが、遺構の検出はなかった。いずれも丘陵裾付近に位置し、少量の遺物が出土したのみで、どのような性格を持つかは不明である。鉄

生産に伴うものとも考えられるが、いずれにしても住居跡内・周辺から出土する遺物が少ないことから、定住目的の住居とは異なるとも考えられる。

古墳時代後期に丹後では製鉄が開始され(遠所遺跡)、以後、連綿と鉄生産が行われているが、黒部遺跡で調査された遺構は、遠所遺跡とニゴレ遺跡との製鉄空白時期を埋めることができるものであり、製鉄炉・登り窯状炭窯の変遷を知る上で重要な資料を提供したといえる。

(増田孝彦)

注1 河野一隆「4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 増田孝彦「6. 糖谷城跡」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注3 調査参加者(順不同、敬称略)

城下則行・高原与作・平林秀夫・菱川 實・石井 清・米田武志・今西茂満・稲岡徳次・松村仁・森 秀夫・小國喜市郎・嵯峨根清一・岩佐正一・吉村 保・安達哲也・堀江登喜雄・河戸久夫・森野美智代・藤原多津子・熊谷千代子・由良里枝・沖 とみこ・村上五月・坪倉愛子・安達睦枝・大下成子・山副まつ江・藤原敏子・尾崎二三代・横島 迪・藤原ヒサエ・石田寿子・石嶋文恵・谷口勝江・上田照子・金保真由美・松村和美・河崎祐子・金久真弓・谷辻相代・上田奈智子・伊熊佐知子・有田美恵子・馬場行幸・吉岡美秋・吉岡真喜子・吉岡千恵美・谷口圭太・上田英雄・土田昌人・中川 寧・森本雅人・藤原 諭・藤沼孝弘・可児直典・西 智宏・奥田栄吉・松原一哉・丹新千晶・小田栄子・山中道代・山下敦子・溝井麗子

注4 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注5 岡崎研一「丹後あじわいの郷関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第71冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注6 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター中沢圭二副理事長の御教示による。

付表1 黒部遺跡炭窯規模一覧表

地区名	地点名	遺構名	残存長	炭化部幅(最大幅)	燃焼部幅(最小幅)	床面傾斜角	形態
仲谷地区		黒部1号炭窯	長軸1.3m、短軸1.15m、深さ0.4m				炭窯
	A地点	黒部2号炭窯	4.70m	1.24m		18.0°	登り窯状炭窯
		黒部3号炭窯	7.80m	1.40m		19.0°	登り窯状炭窯
		黒部4号炭窯	7.90m	1.40m	0.68m	19.0°	登り窯状炭窯
		黒部5号炭窯	6.00m	1.20m		18.5°	登り窯状炭窯
		黒部6号炭窯	6.90m	1.20m	0.74m	18.5°	登り窯状炭窯
		黒部7号炭窯	3.20m	0.90m		17.0°	登り窯状炭窯
		黒部8号炭窯	9.80m	1.40m		15.5°	登り窯状炭窯
		黒部9号炭窯	3.30m	1.15m	0.53m	18.0°	登り窯状炭窯
		黒部10号炭窯	5.60m	1.32m		14.0°	登り窯状炭窯
		黒部11号炭窯	4.70m	1.56m		26.0°	登り窯状炭窯
		黒部12号炭窯	4.88m	1.20m		21.0°	登り窯状炭窯
	B地点	黒部13号炭窯	4.70m	1.60m	0.60m	22.0°	登り窯状炭窯
	C地点	黒部29号炭窯	6.40m	2.00m	1.05m	15.0°	登り窯状炭窯
		黒部30号炭窯	6.30m	2.20m	0.79m	18.0°	登り窯状炭窯
		黒部31号炭窯	直径0.7m、深さ0.2m				炭窯
		黒部32号炭窯	6.50m	1.60m	0.85m	11.0°	登り窯状炭窯
		黒部33号炭窯	6.65m	1.80m	0.80m	16.0°	登り窯状炭窯
		黒部34号炭窯	全壊に近く規模不明				炭窯
		黒部35号炭窯	7.70m	1.00m	0.53m	8.0°	登り窯状炭窯
	D地点	黒部36号炭窯	造成地外のため未調査				炭窯
		黒部37号炭窯	造成地外のため未調査				登り窯状炭窯
	E地点	黒部14号炭窯	4.60m	1.30m	0.30m	8.0°	登り窯状炭窯
		黒部15号炭窯	6.50m	1.50m	0.36m	15.0°	登り窯状炭窯
		黒部16号炭窯	長辺1.1m、短辺0.9m、深さ0.45m				炭窯
		黒部17号炭窯	直径0.65m、深さ0.2m				炭窯
	F地点	黒部18号炭窯	7.20m	1.00m		11.0°	登り窯状炭窯
		黒部19号炭窯	5.70m	1.10m	0.54m	18.0°	登り窯状炭窯
		黒部20号炭窯	2.10m	1.10m		2.0°	登り窯状炭窯
		黒部21号炭窯	3.50m	1.50m		7.0°	登り窯状炭窯
		黒部22号炭窯	4.90m	1.00m	0.72m	15.0°	登り窯状炭窯
		黒部23号炭窯	8.00m	1.40m	1.24m	18.0°	登り窯状炭窯
		黒部24号炭窯	7.10m	1.50m	0.63m	15.5°	登り窯状炭窯
		黒部25号炭窯	7.20m	1.20m	0.82m	10.0°	登り窯状炭窯
		黒部26号炭窯	4.40m	1.30m		6.0°	登り窯状炭窯
		黒部27号炭窯	3.40m	1.40m		6.0°	登り窯状炭窯
		黒部28号炭窯	登窯状炭窯の残欠か？ 規模不明。				
金屎地区	G地点	黒部45号炭窯	長軸1.55m、短軸1.0m、深さ0.6m				炭窯
	H地点	黒部46号炭窯	6.80m	2.00m	0.80m	22.0°	登り窯状炭窯
		黒部47号炭窯	7.00m	1.60m	0.68m	20.0°	登り窯状炭窯
		黒部48号炭窯	2.90m	1.60m	0.66m	17.0°	登り窯状炭窯
	I地点	黒部43号炭窯	長辺1.5m、短辺1.3m、深さ0.25m				炭窯
		黒部44号炭窯	長軸0.87m、短軸0.72m、深さ0.15m				炭窯
	J地点	黒部38号炭窯	8.30m	1.50m	1.15m	20.0°	登り窯状炭窯
		黒部39号炭窯	長軸1.05m、短軸1.1m、深さ0.3m				炭窯
		黒部40号炭窯	直径0.46m、深さ0.23m				炭窯
		黒部41号炭窯	長軸0.42m、短軸0.3m、深さ0.12m				炭窯
		黒部42号炭窯	長軸0.34m、短軸0.25m、深さ0.2m				炭窯

※床面傾斜角度については、炭化部の窯築造時の角度である。

付表2 黒部遺跡住居跡規模一覧表

地区名	地点名	遺構名	規模	備考
仲谷地区	E地点	黒部1号住居跡	7.5m×2.0m	床面から16号炭窯を検出。
仲谷地区	E地点	黒部2号住居跡	5.0m×1.8m	
仲谷地区	E地点	黒部3号住居跡	7.0m×1.8m	床面から17号炭窯を検出。
仲谷地区	F地点	黒部4号住居跡	6.8m×2.2m	
仲谷地区	F地点	黒部5号住居跡	5.5m×2.1m	

付表3 黒部遺跡製鉄炉規模一覧表

地区名	地点名	遺構名	長さ	幅	深さ	排滓溝	炉形	操業時期
仲谷地区	A地点	黒部1号製鉄炉	2.50m	1.20m	0.80m	両側	長方形箱形炉	8世紀後半
仲谷地区	A地点	黒部2号製鉄炉	3.50m	0.90m	0.35m	両側	長方形箱形炉	9世紀初頭
仲谷地区	A地点	黒部3号製鉄炉	2.70m	0.60m	0.10m	両側	長方形箱形炉	8世紀後半
仲谷地区	B地点	黒部4号製鉄炉	3.40m	0.90m	0.40m	両側	長方形箱形炉	8世紀後半
仲谷地区	B地点	黒部5号製鉄炉	2.80m	1.40m	0.40m	両側	長方形箱形炉	8世紀中頃
仲谷地区	B地点	黒部6号製鉄炉	2.70m	1.10m	0.40m	両側	長方形箱形炉	8世紀中頃
仲谷地区	B地点	黒部7号製鉄炉	2.90m	0.80m	0.30m	両側	長方形箱形炉	8世紀後半
仲谷地区	D地点	黒部8号製鉄炉	試掘調査時に検出。調査対象地外となったため規模・形態等は不明。					

付表4 鉄滓重量集計表(kg)

仲谷1号炉出土遺物重量集計

	作業面	炉内	溶結粘土	粉炭層	排滓溝	計
砂鉄		49.50			33.30	82.80
鉄滓	1473.35	313.40			613.35	2400.10
炉壁	268.10	4.65			5.05	277.80
鉄塊		12.85			5.60	18.45
計	1741.45	380.40			657.30	2779.15

仲谷6号炉

	作業面	炉内	溶結粘土	粉炭層	排滓溝	計
砂鉄	0.65	2.60	5.71	1.55	7.75	18.26
鉄滓	22.30	37.00		3.80	99.85	162.95
炉壁		18.20				18.20
鉄塊	0.75	1.97				2.72
計	23.70	59.77	5.71	5.35	107.60	202.13

仲谷3号炉

	作業面	炉内	溶結粘土	粉炭層	排滓溝	計
砂鉄		0.50	4.85		1.00	8.80
鉄滓	19.30	73.15		2.30	6.20	100.95
炉壁		16.70				16.70
鉄塊		3.05	2.75	5.55		11.35
計	19.30	93.40	7.60	10.30	7.20	137.80

仲谷5号炉

	作業面	炉内	溶結粘土	粉炭層	排滓溝	計
砂鉄	1.60	1.25	2.62	5.91	2.25	13.63
鉄滓	14.55	8.05	2.35	16.95	145.25	187.15
炉壁	1.30					1.30
鉄塊	5.58	1.45	6.01	4.70	6.40	24.14
計	23.03	10.75	10.98	27.56	153.39	226.22

仲谷4号炉

	作業面	炉内	溶結粘土	粉炭層	排滓溝	計
砂鉄	26.00	33.55	6.35	5.81	55.10	126.81
鉄滓		37.20		13.20	341.14	391.54
炉壁	66.25	39.25		5.60	63.75	174.85
鉄塊	5.35	12.08	2.05	5.25	69.57	94.30
計	97.60	122.08	8.35	29.86	529.56	787.50

仲谷7号炉

	作業面	炉内	溶結粘土	粉炭層	排滓溝	計
砂鉄			1.85	0.50	0.40	2.70
鉄滓			9.40		3.15	12.55
炉壁		3.00				3.00
鉄塊					1.45	1.45
計		3.00	11.25	0.50	5.00	19.75

炉内堆積物は完全に水洗いできなかったものや、一部混同したものもあり、計量数値はあくまで採集できた量で各製鉄炉の目安である。2号製鉄炉の堆積物は採集していない。

上記の計量値には3号炉炉底滓、4号炉南北排滓溝出土流出滓の重量は含まれない。

A地点廃滓場出土遺物

鉄滓	3565.30
炉壁	1429.50
計	4994.80

B地点廃滓場出土遺物

鉄滓	5689.35
炉壁	1898.95
計	7588.30

2. 舞鶴発電所関係遺跡(嶋遺跡) 平成7年度発掘調査概要

1. はじめに

舞鶴市の北郊に位置する浦入湾に、関西電力による火力発電所の建設が計画された。舞鶴市教育委員会は、火力発電所建設に先立ち、予定地内の分布調査、試掘調査を実施した。その結果、浦入湾岸の各所に、縄文時代から近世にわたる人々の生活の痕跡が残っていることがわかった。特に、湾の北東部には平安時代の大規模な製塩遺跡があり、これに関連する多様な遺構と遺物の存在が予想された。これらの遺跡群は、浦入遺跡群と総称された。

舞鶴市教育委員会は、平成7年度から浦入遺跡群の発掘調査を本格的に開始し、当調査研究センターに浦入遺跡群M地区(嶋遺跡)の調査を依頼した。当調査研究センターでは、このM地区(嶋遺跡)の性格を解明するとともに、記録保存に付することを主たる目的に発掘調査を実施した。なお、昨年度は、N地区(浦入遺跡)についても一部調査を開始したが、調査は、今後継続して行っていく予定であり、調査成果については省略した。

今回、調査を実施した嶋遺跡は、京都府舞鶴市大字千歳小字嶋に所在する。調査面積は、約3,200㎡である。調査機関は、平成7年6月19日から同年12月22日までである。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、同調査員田代 弘が担当した。なお、調査に伴う経費は、舞鶴市教育委員会が負担した。

2. 遺跡の位置(第50図)

大浦半島は、舞鶴湾の東岸にあり、若狭国との境をなす半島である。この半島の西岸には入り組んだ海岸線が発達し、小規模ながら随所に天然の良港が形成されている。佐波賀、千歳、大丹生、浦入などの港があり、漁業で賑わう。対岸の白杉、青井、吉田などの地域と海上交通で結ばれ、固有の民俗文化を形成する地域である。

半島西岸の舞鶴湾口近くに、浦入湾がある。浦入湾の南西部には、南東方向に約300mにわたって形成された砂嘴がある。浦入湾は舞鶴市字浦入に所在するが、この砂嘴のみが字千歳の飛び地となっており、嶋という小字名がついている。砂嘴の先端は松ヶ崎とよばれる。



第50図 調査地位置図(1/50,000 国土地理院)

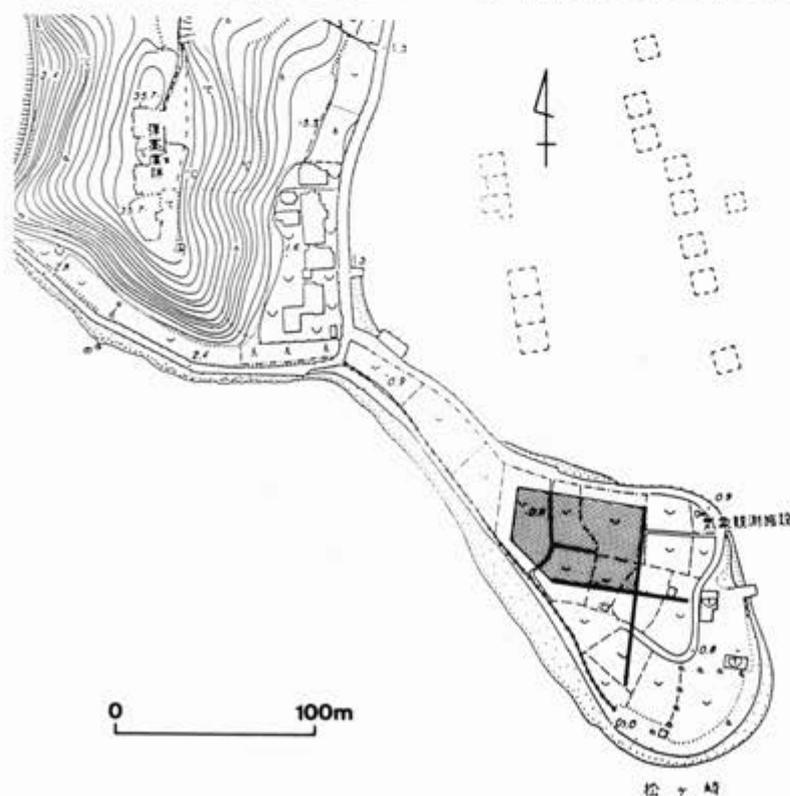
今回の調査地である嶋遺跡は、この砂嘴上に形成された遺跡である。

3. 調査の経過と概要

試掘成果に基づき、砂嘴の中ほどにトレンチを設定して掘削を開始した(第51図)。試掘調査では、地表下30cm前後までのところに、柱穴などの遺構の存在が予想された。したがって、重機を用いてトレンチ全面の表土を掘削し、その後、人力で清掃、精査し、遺構の検出につとめた。調査の結果、ピット、土坑などの遺構を検出した(第52図)。遺物が伴うものはS K08のみで、ほとんどが時期不明のものであった。N-15～I-14地区にかけて暗茶褐色砂層上に弥生時代前期から中期後半にかけての遺物を含む黒色粘質土層があった。この周辺で検出されたピットや土坑は、弥生時代に属する可能性がある。今回の調査地は、遺構の分布は希薄であった。しかし、縄文時代中期から後期・晩期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代、奈良時代の遺物を検出したことから、この遺跡が縄文時代以降、長い間にわたって形成されたことが明らかになった(第53図)。

一定の面まで調査が完了した時点で、断ち割りをして土層の観察をしたところ、遺構のベースの一部をなしている暗茶褐色砂層が、トレンチの北側(湾内)に向かって傾斜することがわかった。また、暗茶褐色砂層は安定した状態で、水準下1m以下に及ぶこともわかった。傾斜面上層には、明黄白色砂が堆積していた。明黄白色砂は現在の湾内の汀線を形成する海岸砂層と一連の堆積状況にあり、暗茶褐色砂層以下の堆積環境とは明瞭な違いが認められた。

上述のように、暗茶褐色砂層上には黒色粘質土が薄く堆積しており、ここには弥生時代前期から中期にかけての遺物が包含されていた。暗茶褐色砂層が弥生時代の遺構面をなしていることから、



第51図 調査地平面図

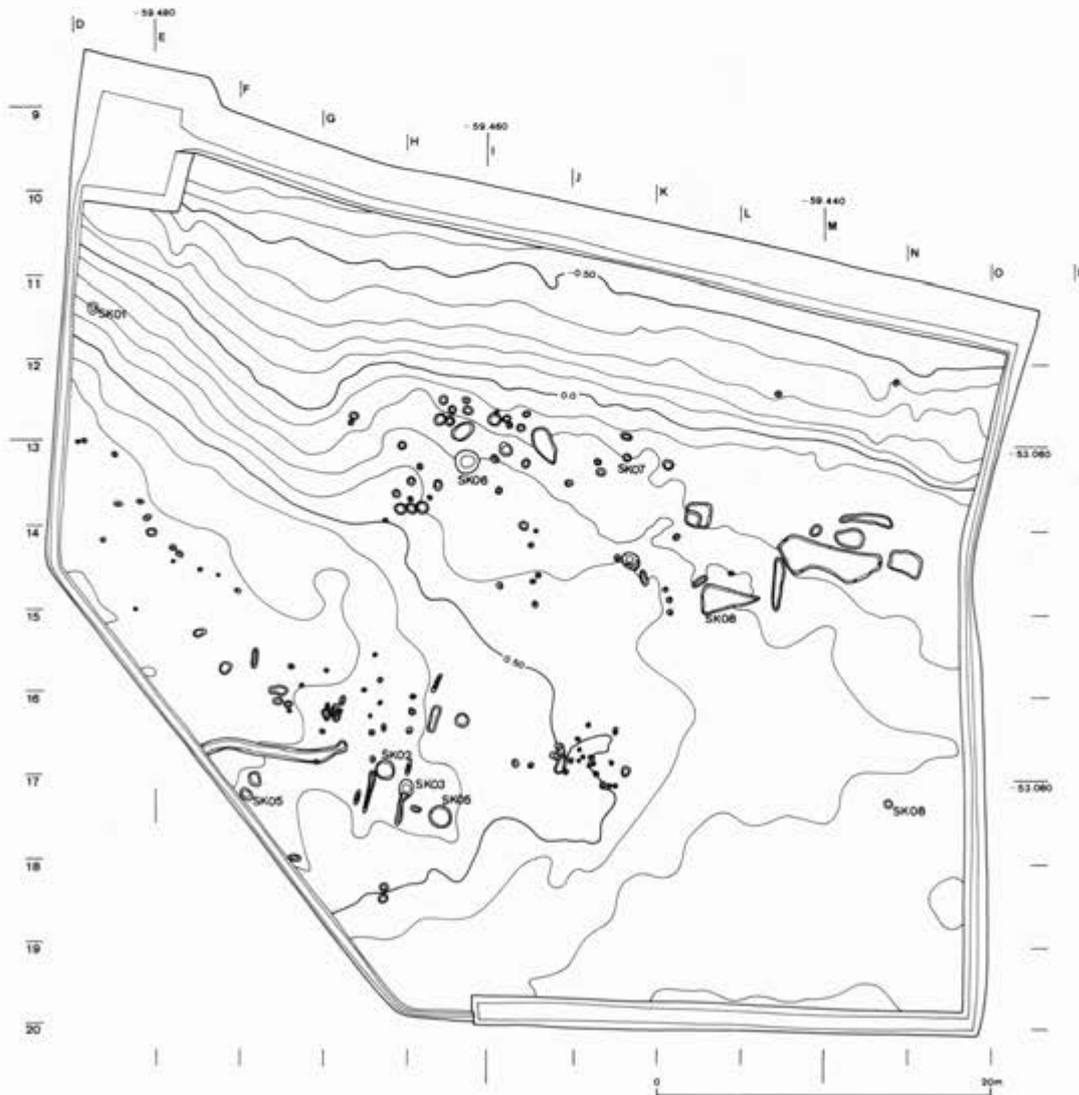
遺物が海水面下でも出土することが予想された。そこで、遺物の有無、斜面の状態とその性格を明らかにするために明黄白色砂を除去し、傾斜面を全面にわたって検出することにした。その結果、東西約60m、調査トレンチ全体にわたって傾斜面を検出した。海岸堆積物が脆弱であり、また、海水の浸水が著しいなどの安全上の問題から、傾斜地末端を確認するにはいたらなかった。しかし、水準下約1mの地点まで検出することができ、傾斜面がさらに北側

に向かって続いていることを確認した。水準下で、漂着物とみられる木片や貝殻など自然遺物とともに、少量ながら遺物を検出した。遺物は、縄文時代晩期末頃を上限とし、弥生時代中期頃までの土器である。体部破片が主であるが、磨耗がなく器面の状況は良好である。

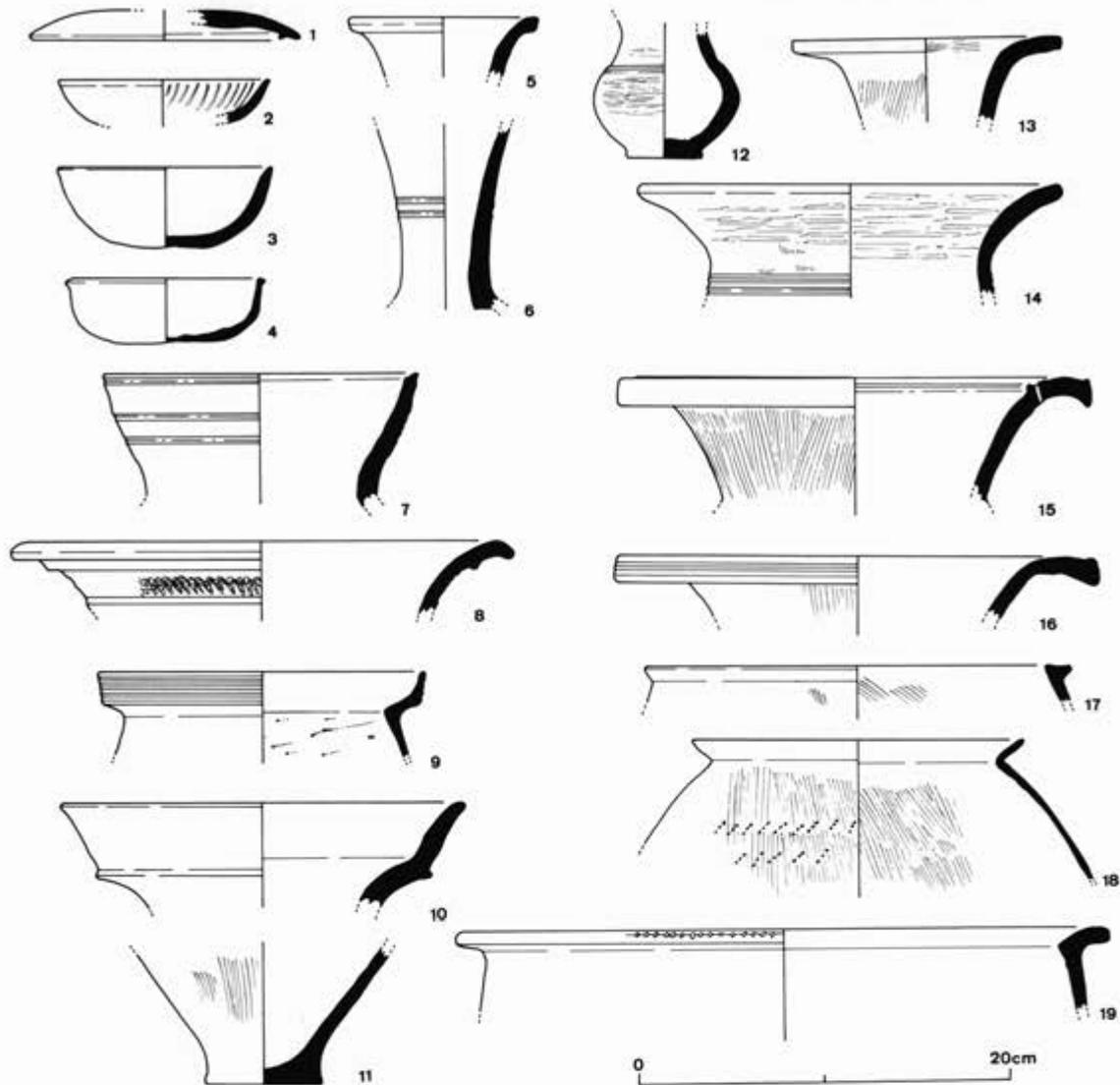
この傾斜面は、弥生時代中期以前に形成された汀線である可能性が考えられた。つまり、これは嶋遺跡の立地する砂嘴の北側に形成された弥生時代の海岸線であり、この海岸線を埋没させている明黄白色砂層は、海水準変動の変化を示すものと予想された。

この後、舞鶴市教育委員会との協議の結果、砂嘴の南側の状況について、土層堆積状況と遺構、遺物の有無を確認する作業を行った。嶋遺跡調査トレンチの東端に沿って南北のトレンチ、南端に沿って東西のトレンチを設定、掘削をして観察を行った。

堆積土層の検討の結果、砂嘴は縄文時代前期の海進に伴って形成されたと考えられている松ヶ崎礫層をベースとし、幾度か水没と陸化を繰り返しながら堆積し、砂嘴が形成されたことを確認した。この堆積層は、おおむね水平であるが、ある時期からこの層を削って、北側に顕著に傾斜



第52図 遺構配置図



第53図 嶋遺跡出土遺物実測図

する堆積がはじまることがわかった。そして、この傾斜する堆積層のうち最も安定するものが、先に弥生時代の海岸線と推定した土層であることがわかった。

3. おわりに

嶋遺跡で確認した最古の遺物は、縄文時代中期にさかのぼる可能性がある土器である。嶋遺跡の立地する砂嘴は、縄文時代前期の海進で形成されたと考えられているから、砂嘴形成後、ほどなく人々の往来が始まったと推定される。また、低水準を示す弥生時代の海岸線は、縄文時代後期頃から弥生時代前～中期ごろにかけての気候の寒冷化に伴う海退現象に対応して形成された可能性が高い。このように、嶋遺跡の性格を明らかにするためには、砂嘴の成立、変遷の過程を同時に検討する必要がある。土層のサンプリングをして、放射性炭素年代測定法、花粉分析など自然科学的方法で、現在検討を進めている。出土遺物の詳細、検討結果など、後日、報告する予定である。

(田代 弘)

3. 長岡京跡右京第526次発掘調査概要 (7ANKJC-2地区)

1. はじめに

この調査は、都市計画道路石見下海印寺線の街路改良工事に伴って、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて、実施した。八条ヶ池東側の工事該当部分については、平成4年度以来、当調査研究センターが数回の調査を実施しており(右京第411次^(注1)、第440次^(注2)、第474次^(注3)、第498次^(注4))、今回の調査はその南端部分にあたる。調査対象地は、京都府長岡京市天神一丁目に所在しており、長岡京跡の条坊復原案によると、右京六条三坊五町(旧呼称六条三坊七町)に相当し、西三坊坊間小路が西側に隣接する位置にあたる。

調査は、平成8年5月23日に開始し7月12日に終了した。調査面積は、約280㎡である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員竹下士郎が担当した。

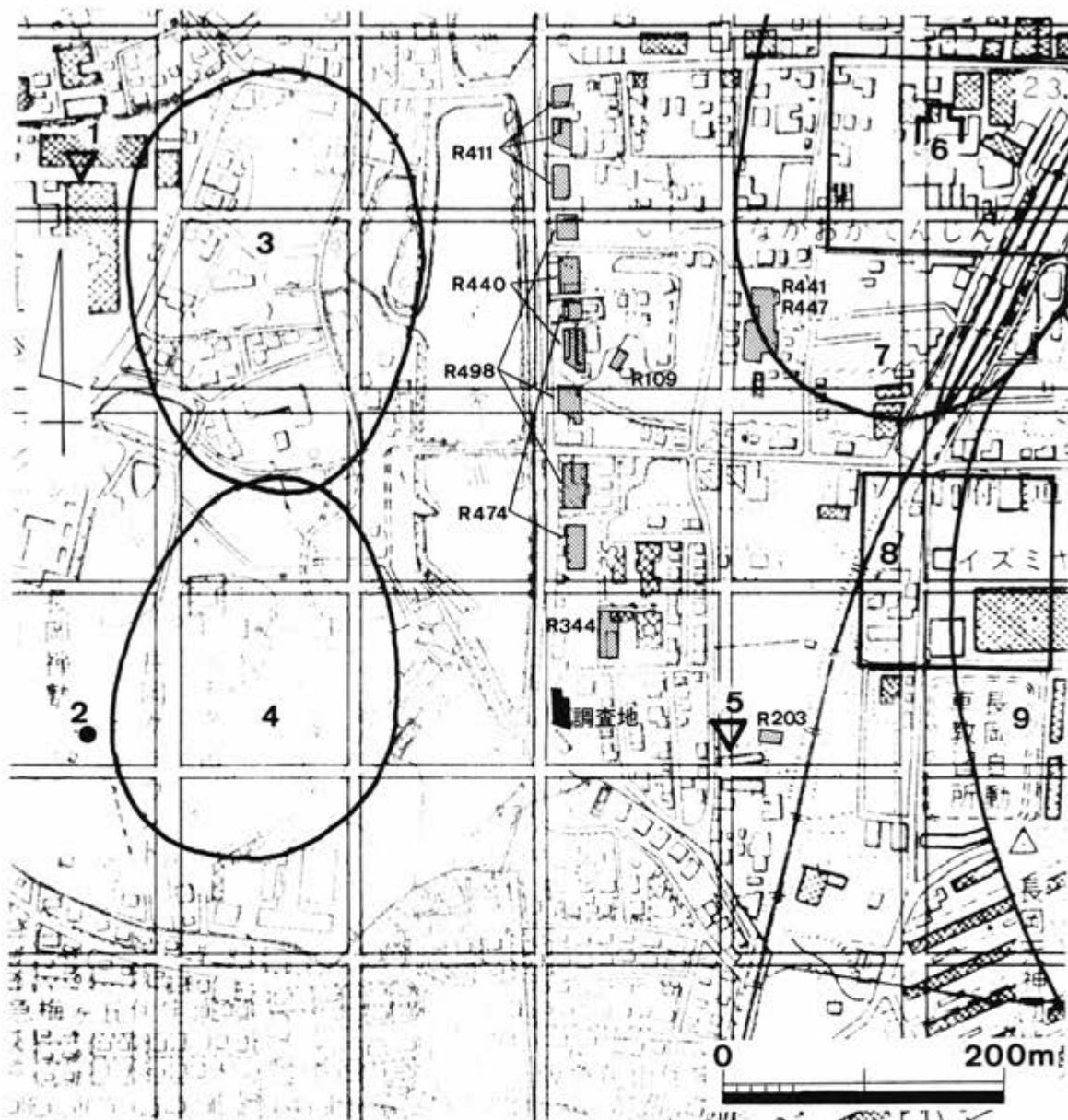
今回の調査にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係諸機関をはじめ、調査地近隣の方々、また学生諸氏の協力^(注5)を得た。記して感謝したい。なお、調査に関わる経費は、京都府乙訓土木事務所が負担した。

2. 周辺の遺跡と調査

調査地の東側には、十三遺跡が所在する。この遺跡は、調査地から東約150mの右京第203次調査^(注6)、また北東約30mの右京第344次調査^(注7)によって確認された。ここでは、かつて犬川の支流として流れていた泉殿川の流路堆積中から、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代中期から晩期の土器が出土した。旧石器については、調査地から南西の下海印寺遺跡、東方の開田遺跡、北方の小池下遺跡などの近隣の遺跡からも出土しており、さらに右京第498次調査でも国府型のナイフ形石器が出土している。

長岡京期についてみると、右京第344次調査で、六条条間南小路(旧六条条間北小路)の側溝と推定される溝跡(S D34401: X=-119,824.6、S D34402: X=-119,833.75)が検出されている。また、調査地の北約300mに位置する右京第411次調査のCトレンチでは、西三坊坊間小路東側溝の可能性のある溝跡(S D41108: Y=-28,163.0)が検出されている。さらに、右京第474次調査では、第1トレンチで鑄造炉の炉壁片の存在を確認しており、これまでの右京第109次調査^(注8)や右京第447次調査^(注9)などの調査成果から言われる、周辺での大規模な金属器生産に係わる官営工場の存在の可能性を追認した。また、第2トレンチでは、桁行3間・梁間3間の総柱の建物跡などが検出されている。

このほか、調査地の周辺には、平安時代の泉殿跡、弥生時代から中世にかけての集落跡である



第54図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/5,000)

- | | | | | |
|-----------|------------|----------|----------|---------|
| 1. 西陣町西遺跡 | 2. 天神山古墳 | 3. 西陣町遺跡 | 4. 天神山遺跡 | 5. 十三遺跡 |
| 6. 開田城跡 | 7. 開田城ノ内遺跡 | 8. 和泉殿跡 | 9. 開田遺跡 | |

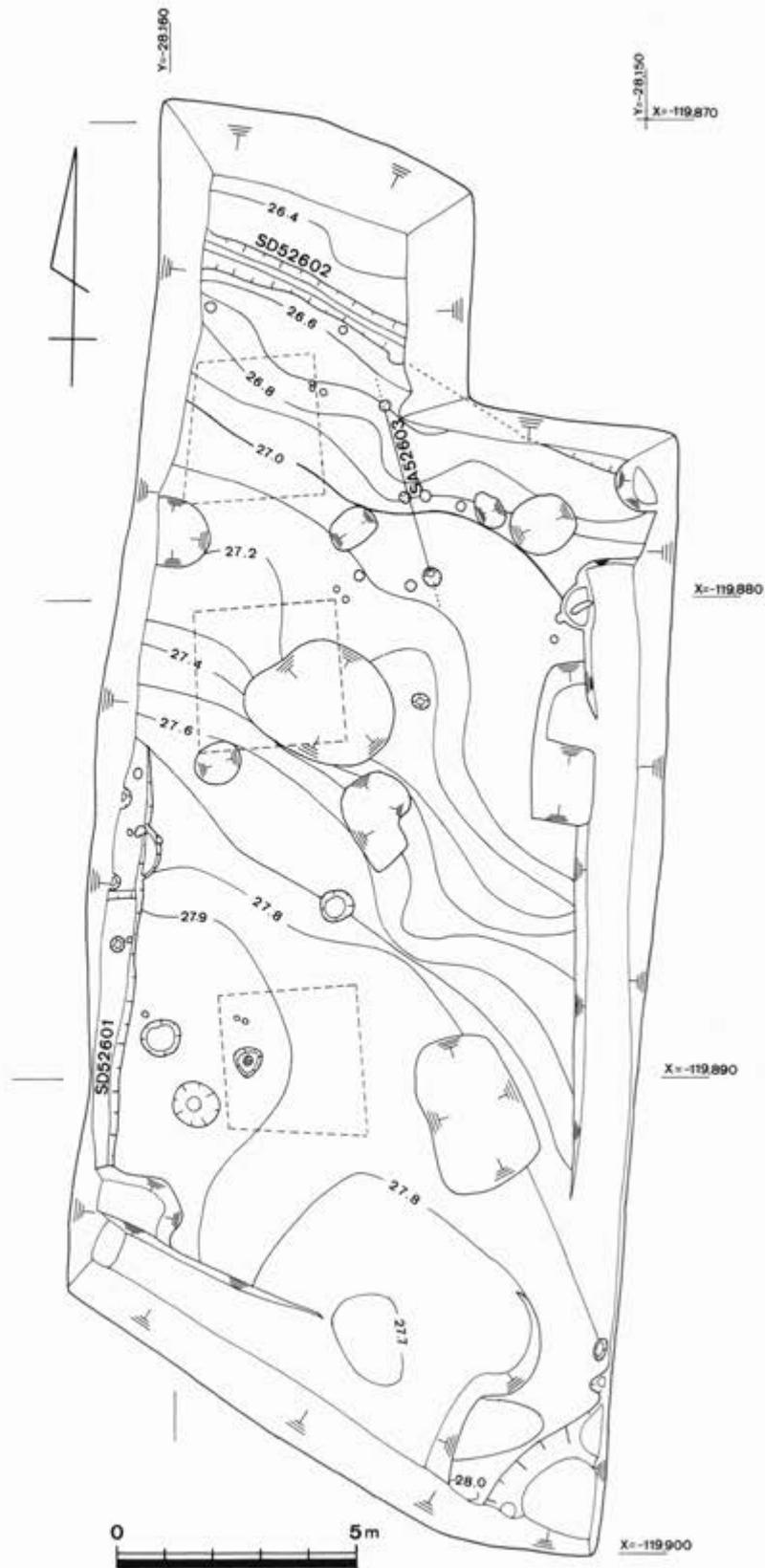
開田城ノ内遺跡、中世の城館跡である開田城跡などが所在している。さらに、周辺の調査地では、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の各時代に関連する遺物や遺構が検出されており、この調査地でも旧石器時代以降の各時代の遺構・遺物の存在が予想された。

3. 調査概要

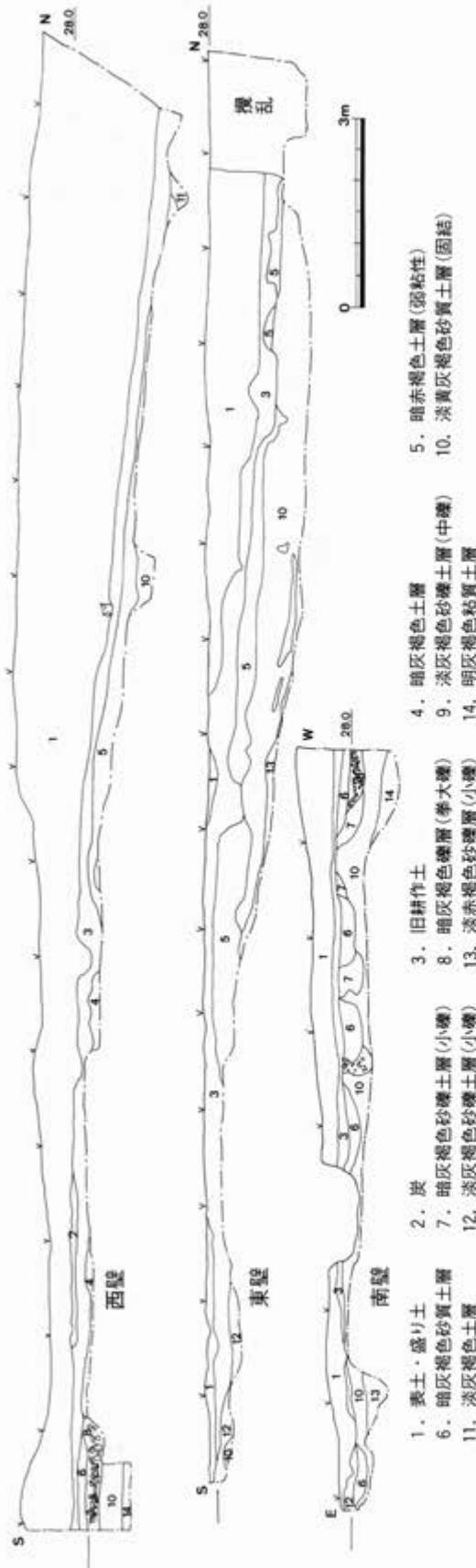
当調査地は、西山丘陵裾部から舌状に南東に向かってのびる高位段丘層の北東側の斜面^(F10)にあり、調査前は一軒の宅地であったところである。現在の標高は約28.0～28.5mである。調査地のすぐ西隣りには、南北に二車線の道路(都市計画道路石見下海印寺線)が南に向かってゆるやかな上り坂となっている。この道路を隔てて西側は八条ヶ池の南端となる。

調査は、現表土層、盛り土層、旧耕作土層を重機で除去した後、人力による掘削を行った。その結果、調査地全面にわたって旧宅地の浄化槽や井戸、それに伴うパイプ埋設溝などの攪乱が多くあることが確認された。

調査地内では、南西部分で旧耕作土の上に盛り土が見られ、南東部分では旧耕作土が現表土として露出しており、その直下が黄灰色の地山層となる。調査地内の南半分は、地山面がほぼ平坦となっており、後世に削平されたと思われる。北半分も、旧耕作土の直下で黄灰色の地山層が確認されるが、北側に向かって落ち込む斜面となっている。盛り土は、調査地の中程から北にいくに従い厚くなり、調査地の北端では、盛り土の厚さが約2mにもなる。この斜面は、現地形から見ても、さらに調査地の北東に向かって落ち込んでいくと思われる。この斜面上では数か所の樹木の抜き取り痕を確認した。この樹木抜き取り痕は、最大で直径約1mを測り、根跡が地山層に食い込んでいた。旧耕作土と同様の暗黒褐色土が埋土であり、旧耕作地を形成する際に樹木を抜き取ったのであろう。今回の調査では若干の遺構を検出したが、遺物も乏しく、いずれもそ



第55図 調査地平面図(1/150)



第56図 調査地土層断面図

- 1. 表土・盛り土
- 2. 炭
- 3. 旧耕作土
- 4. 暗灰褐色土層
- 5. 暗赤褐色土層(弱粘性)
- 6. 暗灰褐色砂礫土層(小礫)
- 7. 暗灰褐色砂礫土層(中礫)
- 8. 暗灰褐色砂礫土層(大礫)
- 9. 淡灰褐色砂礫土層(中礫)
- 10. 淡灰褐色砂質土層(固結)
- 11. 淡灰褐色土層
- 12. 淡灰褐色砂礫土層(小礫)
- 13. 淡灰褐色砂礫土層(小礫)
- 14. 明灰褐色粘質土層

の時期や性格については不明である。

また、今回の調査では、周辺の調査地で旧石器の出土が見られることから、調査最終段階で調査地内に新たに一辺3mのグリッドを3か所設定し、固くしまった灰褐色砂質土まで約50cmを人力により掘り下げたが、旧石器などの遺物は検出できなかった。

(1) 検出遺構

溝跡 S D 52601

地山層を掘り込んでおり、調査地南西の壁面下で東肩の部分のみを検出した。西肩の部分は、調査地外となるため検出できていないが、断面「U」字状の溝になると思われる。検出部分での深さは約20cmで、中央部で約10cmの段があって落ち込む。北に向かって約9mを検出したが、平坦面が途切れるところから北側では検出していない。埋土は、旧耕作土と類似した暗灰褐色土で、遺物は検出できなかった。

溝跡 S D 52602

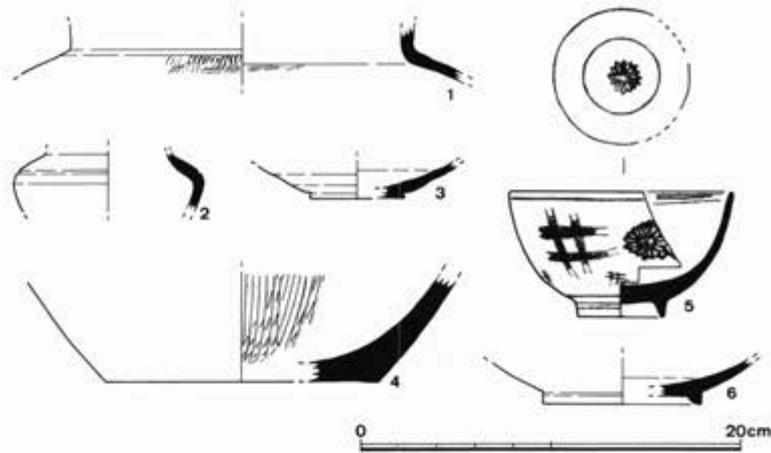
調査地の北端で検出した、東西方向に地山層を掘り込んだ溝跡である。北東部の壁面下で検出した北側への落ち込みも埋土が同様であり、この溝と連なるものと考えられる。検出部分では、幅約1m・深さ約0.2mを測る。埋土は淡灰褐色土で、埋土中から須恵器と土師器の小片を検出したが、時期や性格は不明である。

欄列 S A 52603

調査地の北東部の斜面で検出したもので、直径約25~35cm・深さ約20cmの柱穴が並ぶ。それぞれの柱穴は、地山層を掘り込んでおり、柱間は約1.8~1.9mを測る。埋土は、暗赤褐色粘質土である。柱穴の一つから須恵器甕の頸部と思われる破片1点が出土した。

(2) 出土遺物

今回の調査で検出した遺物はわずかな数であり、そのほとんどが攪乱坑から出土した。図示した中でも、遺構に伴うものは1のみで、他はすべて攪乱坑から出土した。



第57図 出土遺物実測図

1 は、柵列 S A 52603の柱穴から出土

したもので、須恵器甕の頸部と考えられる。白灰色を呈し、頸部径は約18cmである。2 は、須恵器壺の胴部と思われる。上半部に1条の沈線が認められる。3 は、須恵器碗の底部で亲切り底をもつ。高台径は、約5.1cmである。4 は、暗褐色を呈する播磨鉢の破片である。底部径は、約14.3cmになると思われる。5 は、コンニャク印判を用いる伊万里染め付け碗である。口径11.8cm・器高6.7cm・高台径4.6cmを測る。6 は、須恵器碗の底部で、削り出し高台をもち、内外面ともにミガキが施されている。高台径は約8.4cmとなる。

4. ま と め

今回の調査では、調査地北側で段丘斜面であることを確認したのみで、顕著な遺構や遺物は検出できなかった。しかし、攪乱坑中とはいえ数点の須恵器なども出土しており、この近隣で何らかの営みがあったことが推察される。また、前述したように、周辺には各時代に及ぶ多くの遺跡が所在しており、各調査地でも古代の人間の生活の何らかの痕跡が確認されている。今後、さらにこの周辺地域での調査と、その成果が積み重ねられていくことを期待したい。

(竹下士郎)

注1 石尾政信「長岡京跡右京第411次発掘調査概要(7ANKZ-2地区)」(『京都府遺跡調査概報』第53冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注2 石尾政信「長岡京跡右京第440次発掘調査概要(7ANKZ-4地区)」(『京都府遺跡調査概報』第58冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注3 野島 永「長岡京跡右京第474次発掘調査概要(7ANKZ-7地区)」(『京都府遺跡調査概報』第66冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注4 奈良康正「長岡京跡右京第498次発掘調査概要(7ANKZ-8地区)」(『京都府遺跡調査概報』第70冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注5 補助員、整理員として次の方々に協力いただいた(順不同、敬称略)。
尾田洋子・岡 浩正・山田一郎・山本弥生・井上 聡・伊達優子

- 注6 木村泰彦「長岡京跡右京第203次発掘調査概要(7ANKJS地区)」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 注7 小田桐淳「長岡京跡右京第344次発掘調査概要(7ANKJC地区)」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1991
- 注8 小田桐淳「長岡京跡右京第109次発掘調査概要(7ANKNZ地区)」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983
- 注9 小田桐淳「長岡京跡右京第447次発掘調査概要(7ANKNZ-6地区)」(『長岡京市文化財調査報告書』第32冊 長岡京市教育委員会) 1994 第447次調査は、同地において行われた第441次調査の中で製鉄炉群となることが予想される遺構の一部が検出されたため、第441次調査の調査地を拡張して調査したものである。
- 注10 植村善博・日下雅義「長岡京市域地形分類図」(『長岡京市史 資料編一 付図』長岡京市) 1991

4. 第二京阪自動車道関係遺跡 平成7年度発掘調査概要

はじめに

第二京阪自動車道は、京阪間の新たな広域幹線ネットワークの形成を目的として、京都都市圏（京滋バイパス）と大阪都市圏（近畿自動車道）とを結ぶ総延長約30kmの自動車専用道路として計画されている。本自動車道建設事業に先立ち発掘調査の対象となる埋蔵文化財包蔵地は、京都府域で約8.8km、9遺跡に及ぶ。当調査研究センターでは、昭和63年度以来、継続してその発掘調査を実施している。

平成7年度発掘調査は、八幡市に所在する内里八丁遺跡を対象として実施した。内里八丁遺跡は、八幡市内里小字八丁・日向堂に所在し、これまでの発掘調査によって、木津川左岸の沖積地に存在する弥生時代～鎌倉時代の複合遺跡であることが確認されている。特に、遺跡地の南端付近で確認された弥生時代後期の稲株痕を残す水田跡は、全国的にも稀な調査成果であるとともに、南山城地域では数少ない古墳時代中期の集落跡や「古山陰道」などとの関連が注目される官衙的な色彩をもった奈良～平安時代の遺構・遺物など、数多くの貴重な資料が得られている^(注1)。

第二京阪自動車道建設事業に先立つ内里八丁遺跡の調査は、昭和63年度に試掘調査に着手することから開始された。試掘調査の結果からは、遺跡が広範囲にわたることや、弥生時代から鎌倉時代の遺構が3～4面にわたって重複して存在することなどが確認された。このため、道路予定部分における遺跡調査の完了には長期間を要すると判断され、対象地をA～Gの7地区に分け、継続して本格的な調査を進めることとなった。本格的な調査は、平成元年度以降、対象地南端のA地区から順次進め、これまでにA・B地区とD地区の南半部(D1地区)を終えている。

平成7年度の調査は、平成7年4月20日から平成8年2月28日までの間に実施した。D地区の北半部(D2地区)の面的な発掘調査(約2,350m²)を行うとともに、遺跡の北東部への広がりを見終確認する目的での試掘調査(約900m²)をH・I地区で行った(合計約3,250m²)。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美、同調査員八木厚之、森下 衛が担当し、多くの調査補助員、整理員の協力を得て実施した^(注2)。また、調査の実施に際しては、京都府教育委員会、京都府山城教育局、京都府立山城郷土資料館、八幡市教育委員会などの関係諸機関から多大な協力をいただいた。

なお、本発掘調査事業は、昭和63年度から平成5年度にわたっては建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施してきたが、平成6年度以降は日本道路公団大阪建設局の依頼に基づいて実施している。平成7年度調査においても同様であり、これに係る経費は日本道路公団が負担された。

本書は、調査に参加した調査補助員各氏の協力を得て、森下が執筆した^(注3)。

内里八丁遺跡

1. 遺跡の概要

先述のとおり、内里八丁遺跡は京都府八幡市内里小字八丁・日向堂に所在する。八幡市の北東部、木津川左岸の平野部にあたる。一帯は、現在では比較的平坦な水田地帯となっているが、地形図などを子細に観察すれば、木津川をはじめとする大小の河川の痕跡や、これらによって形成された自然堤防が、水田の形状などから確認することができる。そして、内里八丁遺跡が現在では水田下に埋没している自然堤防上に立地していることも、容易に確認される。

さて、遺跡の立地する平野部で最も注目される旧河道は、旧蜻蛉尻川と称される現防賀川の西側でこれに平行して走る河道の痕跡であり、これは内里八丁遺跡の立地する自然堤防の形成にも深く関わると考えられる。

この河道の痕跡は、現水田畦畔からすれば幅50m近くある大規模なもので、木津川の旧流路ともいわれる。河道痕跡のルートは、岩田集落の南東部で木津川から分岐し、一旦西方へ蛇行気味に流れた後、ほぼ直角に北方へ流れを変える。その後、内里集落の東側を北上し、上奈良集落の南側で再び西方へ直角気味に流れを変え、戸津集落の南側で北上し、川口集落付近から旧木津川へ戻る。

この旧流路によって形成された自然堤防は、現在ではすでに水田下に埋没しているものも多いが、平地部に点在する現集落の立地や数多くの集落遺跡の分布は、これに深く関わっている。すなわち、その東岸部では、岩田、上奈良、下奈良、二階堂などの現集落、そしてこれらを結ぶように点在する西岩田遺跡、内里八丁遺跡、上奈良遺跡、上奈良北遺跡、出垣内遺跡、今里遺跡、下奈良遺跡などが帯状に分布しており、明らかに自然堤防上に立地していることが確認される。また、西岸部では内里、戸津などの現集落と、これに一部重複して新田遺跡、内里五丁遺跡、戸津遺跡などが分布し、東岸部と同様のことが確認される。

このように、八幡市北東部の平地部の地形は上記の旧河道によって大きく二分され、ここに分布する数多くの集落遺跡も両岸に形成された自然堤防と深く結びついて立地しているのである。

さらに注目される点として、この旧河道を境に、東岸の岩田、上奈良、下奈良の集落がかつては久世郡に属していたらしいことが挙げられる。近年の南山城地域の古代条里制に関する研究でも、古代久世郡と綴喜郡との郡境が男山丘陵の先端付近から東方へいくと、上記の旧河道に沿うように復原されている^(註5)。こうした見解に従えば、旧河道西岸の新田遺跡、内里五丁遺跡、戸津遺跡などは古代綴喜郡有智郷に、東岸の内里八丁遺跡をはじめとする各遺跡は久世郡水主郷及び那羅郷に属していたこととなる。

従来からいわれるように、内里八丁遺跡は南山城地域では調査が広範囲で行われた数少ない平地部の遺跡である。その歴史的評価という意味では、ここに示したとおり、現在では木津川の対



第58図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------------|--------------|
| 1. 内里八丁遺跡 | 2. 上津屋遺跡 | 3. 新田遺跡 | 4. 女谷横穴群 | 5. 荒坂横穴群 |
| 6. 荒坂遺跡 | 7. 口仲谷古墳群 | 8. 木津川河床遺跡 | 9. 河口扇遺跡 | 10. 河口環濠集落 |
| 11. 下奈良遺跡 | 12. 戸津遺跡 | 13. 奥戸津遺跡 | 14. 今里遺跡 | 15. 出垣内遺跡 |
| 16. 上奈良北遺跡 | 17. 上奈良遺跡 | 18. 内里五丁遺跡 | 19. 西岩田遺跡 | 20. 金右衛門垣内遺跡 |
| 21. 狐谷遺跡 | 22. 狐谷横穴群 | 23. 美濃山横穴群 | 24. 美濃山廃寺下層遺跡 | |
| 25. 美濃山廃寺 | 26. 松井横穴群 | 27. 魚田遺跡 | 28. 散布地(遺跡名称未定) | |

岸となっている旧久世郡内での位置付けや、さらにはより広範囲に旧巨椋池南岸部を形成した地域の一つとしての視点も必要となろう。

なお、巨椋池の南岸部では、木津川をはじめとする大小多くの河川がその流路を幾度も変更しながら流入し、これによって形成された自然堤防や三角州が数多く存在する。巨視的にみれば内里八丁遺跡の立地する自然堤防もこれらの一つとして理解できると考えている。この遺跡ですでに弥生時代から人々の居住が確認されている点は、その特異性として理解されるものではなく、今後の調査・研究によっては久御山町から宇治市、城陽市の低地部(旧巨椋池南辺に相当する地域)に分布する微高地上でも、将来、これに似た状況が確認されると考えている。

特に、平安時代を中心として、巨椋池南岸の微高地には奈良園・奈癸園をはじめ、美豆牧や狭山江御厨など、皇室や貴族に関連する諸施設が営まれたことも確認される。中でも奈良園は久世郡那羅郷に所在したとされ、内里八丁遺跡の北方にある上奈良・下奈良集落との関連が考えられている。

また、足利健亮氏による「古山陰道」の復原ルート⁽¹⁸⁶⁾は、ここ八幡市北東部の平野部では、先にみた旧河道東岸の自然堤防上を通過することとなる。内里八丁遺跡は、まさにそのルート上に位置することとなり、ここで確認されている奈良～平安時代初頭の遺構・遺物は、こうした道路遺構もしくはこれに関連する公的な施設との関係を十分検討する必要があるだろう。

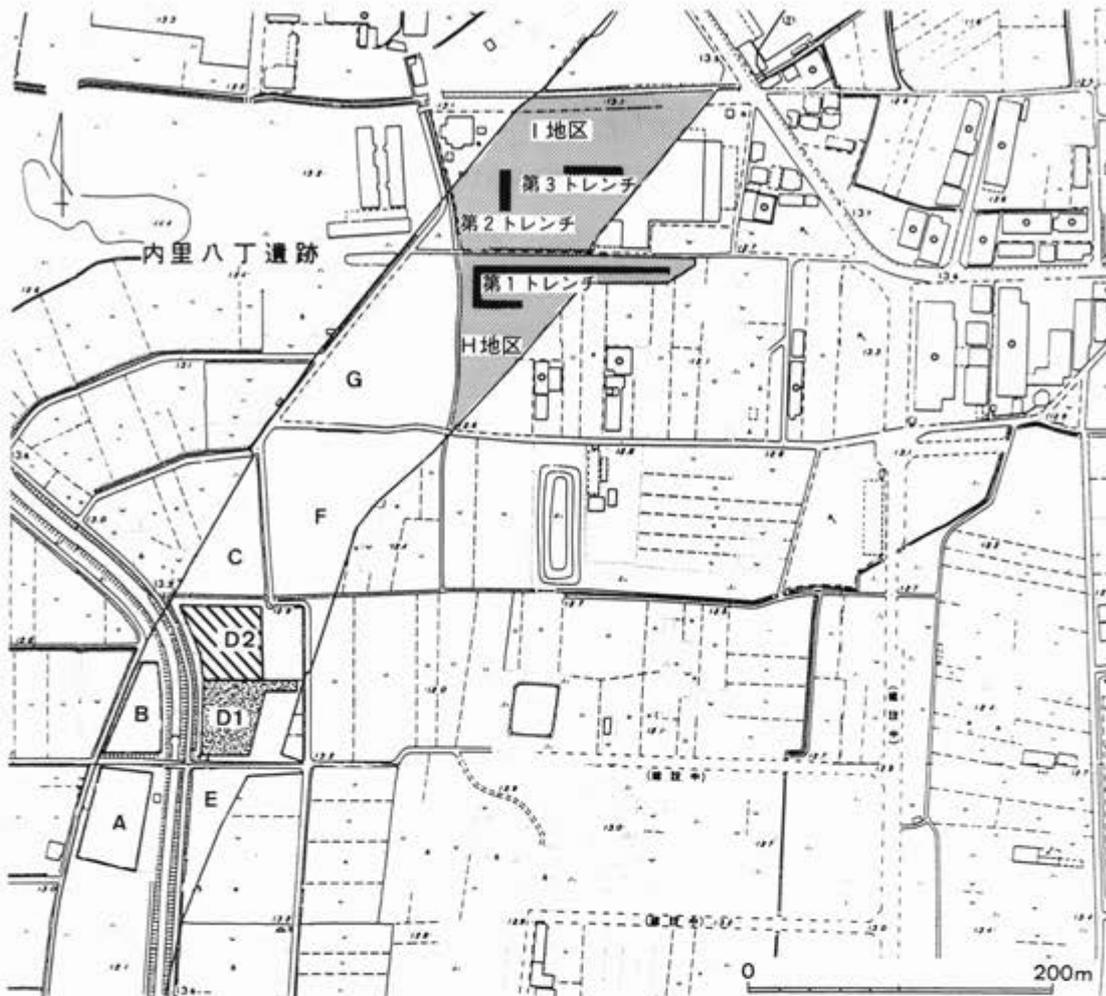
2. 調査経過

平成7年度の発掘調査は、平成7年4月20日からH・I地区の試掘調査に着手することから開始した。重機によって3本のトレンチ(第1～3トレンチ)を掘削した後、それぞれで人力による精査を行った。その結果、いずれのトレンチでも顕著な遺構・遺物は確認されず、この部分は内里八丁遺跡の範囲外であると判断し、5月中旬にはこうした試掘結果に係る記録作成を終え、引き続きD2地区の調査へと移った。

D2地区では、昨年度にその南側で行った調査(D1地区)で弥生時代後期末葉から鎌倉時代にわたる時期の遺構が4面の遺構面にわたって検出されており、今年度の調査でもこれに対応する遺構面を確認しつつ調査を進めることとした。

すでに、5月初旬から重機による表土掘削を進めており、この時点ではほぼ表土の除去が終了し、調査区の南北2か所で鳥畑の痕跡と考えられる暗黄灰褐色土の広がり確認された。鳥畑以外の部分には暗灰褐色土が堆積しており、この部分を引き続いて重機で掘り下げた。5月下旬にはほぼすべての重機掘削が終了し、調査区の南北2か所で鳥畑が明瞭に浮び上がった。また、これに平行して行っていた鳥畑部上面での遺構精査でも、平安時代末葉から鎌倉時代の掘立柱建物跡や土坑、畑作の痕跡と考えられる素掘り溝群などが検出された(第1遺構面)。7月中旬には、これら遺構の掘削並びに記録作成作業を終え、続いて下層(第2遺構面)の調査へ移った。

なお、鳥畑部分以外は、これを造成する際に大幅に削平されており、第2遺構面以下(後述する第3・4遺構面)の掘削はほぼ鳥畑部を中心に行った。



第59図 調査地位置図

第1遺構面から約20cmの掘り下げを行い、暗茶褐色土上面(第2遺構面)で奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡、井戸、溝、土坑などの遺構が検出されたのは8月中旬であった。その後、9月中旬までの間に遺構掘削、記録作成作業を実施し、第2遺構面の調査を終えた。なお、この間、9月7日には第2遺構面までの調査成果の報告のため、関係者説明会を開催した。

続いて約20cmの掘り下げを行い、さらに下層(第3遺構面)の調査へと移った。10月中旬にはほぼ全体の掘削が終了した。その後、明黄灰色土へ至り、遺構精査の結果、古墳時代中期末葉～後期初頭の竪穴式住居跡や溝・土坑などを検出した(第3遺構面)。この時点で、これまでの調査成果全体(第1～3遺構面)に関する現地説明会を11月16日に開催し、約60名の参加をみた。

この後、第3遺構面での検出遺構の掘削及びその記録作成を行い、11月下旬には第4遺構面の調査へ移った。12月中旬には、全体に約20cmの掘り下げを終了し、暗黄褐色土に至った。調査では、この土層上面を第4遺構面と判断し、精査を行った。しかし、ここでは土色・土質とも非常に識別が困難で、精査を繰り返し行ったものの、天候不順などの要因もあり、1月中旬までは古墳時代前期頃と考えられる素掘り溝群が検出されたのみであった。ようやく1月下旬に至り、弥

生時代後期末葉と考えられる竪穴式住居跡などを検出することができた。これら検出遺構の掘削、記録作成などの作業は2月中旬にはほぼ終了し、2月20日には最終的な調査成果の報告を目的として、今年度2回目の関係者説明会を開催した。

作業は続いて、さらに下層に遺構面が存在しないかどうかを確認する目的で、断ち割りなどの作業を行った。その結果、第4遺構面の約15cm下、暗青灰色土上面で弥生時代中期の土坑を2基確認した。このため、暗青灰色土上面を第5遺構面と考え、急遽、重機による掘削を行った。しかし、これら以外には顕著な遺構の広がり確認されず、遺物の出土も認められなかった。このため、重機掘削の範囲を調査区の約半分にとどめるとともに、2基の土坑に関して遺構掘削、記録作成作業を行い、これらの作業をもって2月28日にはすべての現地作業を終了した。

3. 試掘調査の成果(第60図)

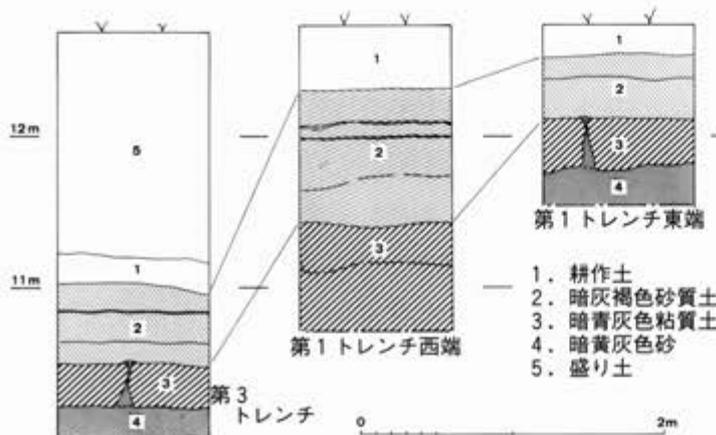
上記のとおり、H・I地区の試掘調査では、この地区は内里八丁遺跡の範囲外であることが明らかとなった。

設定した3本のトレンチでは、第2トレンチが隣接する工場移転の際に地表下約3mまで掘削され廃材が投棄されていたことから、土層の確認を行うことができなかったが、残る第1・3トレンチでは、それぞれ地表下2.5mまで掘削を行った。

第1トレンチ(H地区)では、耕作土下に暗灰褐色砂質土、暗青灰色粘質土、暗灰色砂の順で土層の堆積が確認された。各土層は、全体に西方へ向かって徐々に厚みを増す。暗灰褐色砂質土中には江戸時代以降の陶磁器類が、暗青灰色粘質土中には13世紀頃の瓦器椀や土師器羽釜の小片が包含されていた。

また、トレンチ東半部では、数か所で暗青灰色粘質土を破り、溝状に暗灰色砂が噴出しているところが認められた。周辺部での調査成果を考慮すれば地震による噴砂と考えられるが、明確にその時期を決定する手がかりを欠く。

暗灰褐色砂質土は、畑作に伴う耕作土と考えられるが、暗青灰色粘質土は沼状の地形部に堆積したものと考えられる。このため、調査区一帯が現在のように水田及び畑地として利用されるよ



第60図 試掘調査地土層図

うになったのは、この沼状地形の埋没以後と判断された。その時期は、上記の暗灰褐色砂質土、暗青灰色粘質土両土層中から出土した遺物からみて、近世初頭(15~16世紀頃)と判断している。

第2トレンチ(I地区)では、地表下約1.5mまで工場建設に伴う基盤土が堆積していたが、

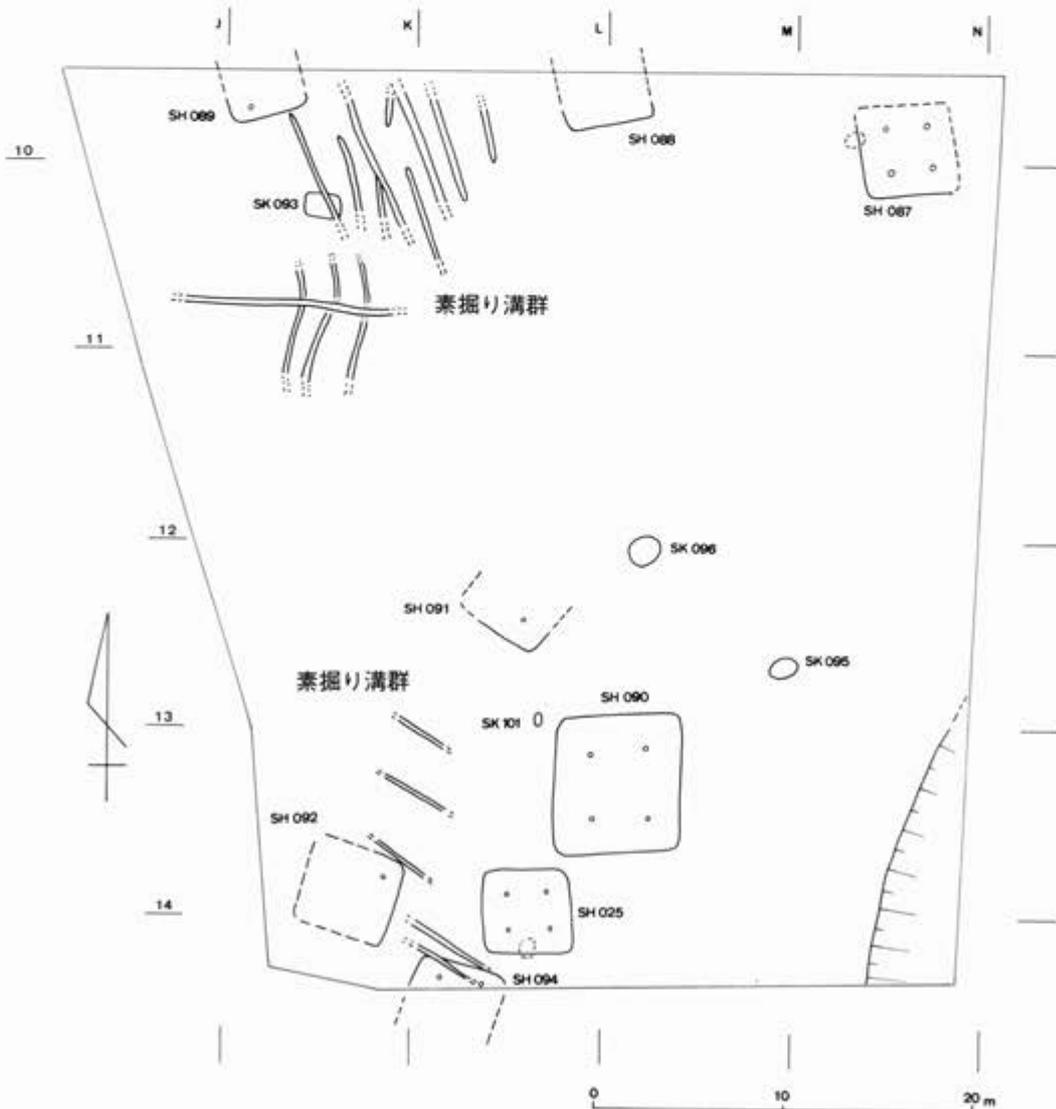
それ以下は厚みの差こそあれ、第1トレンチとはほぼ同様の堆積状況を呈していた。また、噴砂も数か所で認められた。

以上の調査成果から、当該地は長らく沼状の低湿地として存在したと考えられ、15～16世紀頃にこれが埋没し、その後に一帯が耕作地となったと判断した。

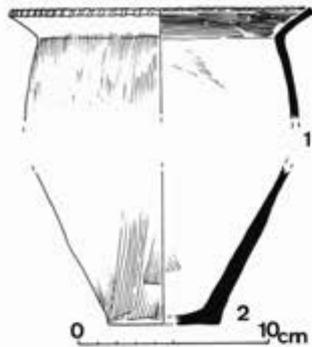
このように、試掘調査では顕著な遺構・遺物は認められず、内里八丁遺跡の範囲外と判断した。

4. D2地区の調査成果

D2地区の調査では、最終的に5面の遺構面(弥生時代中期、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭、古墳時代中期末葉～後期初頭、奈良時代後半～平安時代初頭、平安時代末葉～鎌倉時代)を確認し、それぞれの遺構面で遺構精査・掘削、記録作成といった作業を繰り返した。また、これら検出遺構を整理すると、6期に区分して捉えられる(弥生時代中期、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭、古墳時代中期末葉～後期初頭、奈良時代後半～平安時代初頭、平安時代末葉、鎌倉時



第61図 第4・5遺構面遺構配置図



第62図 出土遺物実測図(1)

代以降)。以下、最下層の弥生時代中期から時代を追って、調査成果の概略を報告する。

(1) 弥生時代中期(第5遺構面)

弥生時代中期の遺構は、第4遺構面の調査終了後の断ち割りによって確認しており、これを検出した暗青灰色土層上面を第5遺構面と判断した。ただし、第4遺構面自体が極めて遺構の識別が困難であったことや、暗黄灰色土の掘削の際に全く遺物が出土しなかったことなどから、この時期の遺構も本来は第4遺構面から穿たれていた

可能性がある。遺構としては、調査区の中央からやや東寄りの部分で検出した土坑2基がある(S K095、S K096)。

① 検出遺構(第61図)

S K095 1.5m×1mの楕円形をなし、深さ約0.2mが遺存する。埋土は、炭混じりの暗青灰色砂質土で、弥生時代中期の土器片が出土した。

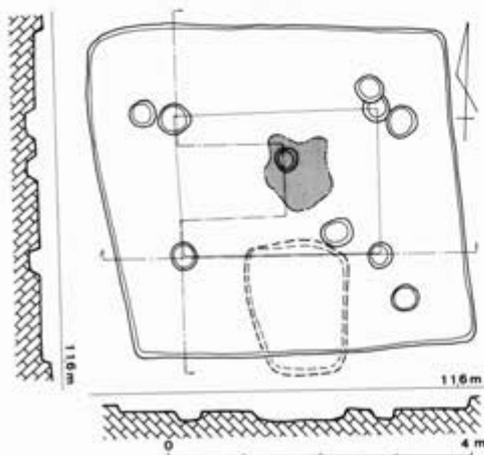
S K096 径約1.3mの円形の土坑で、深さ約0.2mが遺存する。埋土は、S K095と同一で、遺物は出土しなかったが、この時期の遺構と判断した。

② 出土遺物(第62図)

この時期の出土遺物には、S K095から出土した土器片がある。これには甕、壺などが認められたが、ここでは口縁端部に刻み目がめぐる甕口縁部片(1)と同底部片(2)の2点を図示した。この2点は同一個体の破片と考えられる。

(2) 弥生時代後期末葉～古墳時代初頭(第4遺構面)

弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の遺構は、暗黄灰色土層上面で検出した。検出遺構には、弥生時代後期末葉(庄内式期)に属すると判断している竪穴式住居跡8基・土坑2基、古墳時代初頭(布留式期)に属すると判断している素掘り溝群がある。竪穴式住居跡は、調査区の南半部で5基(S H25、S H89～S H93)、北端部で3基(S H87～S H89)を検出した。



第63図 S H025実測図(アミカケ部は炭)

① 検出遺構(第61図)

S H025 調査区の南端付近で検出した一辺約4.2mの隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。深さ約20cmが遺存する。床面では、周壁溝は確認されなかったが、中央付近で炭の充満したピットを検出しており、炉跡ではないかと考えている。また、支柱穴は4か所で確認した。いずれも径約30cm前後を測る。なお、南辺中央付近で、住居跡に重複する1m×0.6mの楕円形の土坑を検出した。土色の変化を確認するとともに、土器の細片が出土したことから土坑と判断したが、住居

跡への出入口に関するもので、土坑ではない可能性もある。

S H087 調査区の北東隅付近で検出した。遺存状況が悪く、一辺4 m以上の隅丸方形の竪穴式住居跡と考えられるが、南西コーナー以外は確認できなかった。深さは最もよく残っている部分で5 cm程度である。床面では、周壁溝は確認されなかったが、4か所で支柱穴を検出するとともに、住居跡の中央付近で炭の広がり、と、炉跡と考えられる径約30cmのピットを確認した。

また、ここでもS H025と同様、西辺上でこれに重複して1.2m×0.8mの楕円形の土坑を検出した。やはり、これも土坑ではなく、住居跡の出入口に関するものではないかと考えている。

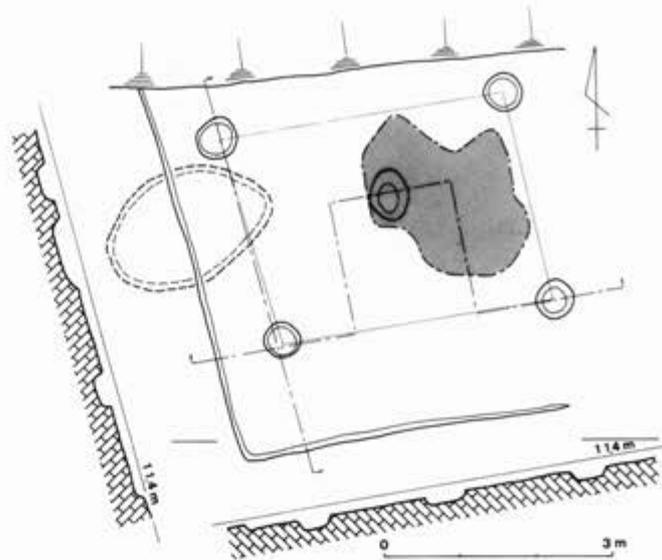
S H088 調査区の北辺中央付近で検出した。大半が調査区外へ及んでおり、隅丸方形を呈する竪穴式住居跡の南辺部を確認したにとどまる。床面では、周壁溝、支柱穴とも確認されず、南辺が約4.2mを測り、深さ約0.1mが遺存するほか、詳細は不明である。

S H089 調査区の北西隅付近で、隅丸方形を呈する竪穴式住居跡の南東コーナー付近を検出した。床面では周壁溝は確認できず、南東隅の支柱穴を1か所検出したにとどまる。南辺は、約4 m・深さ約0.1mが遺存する。

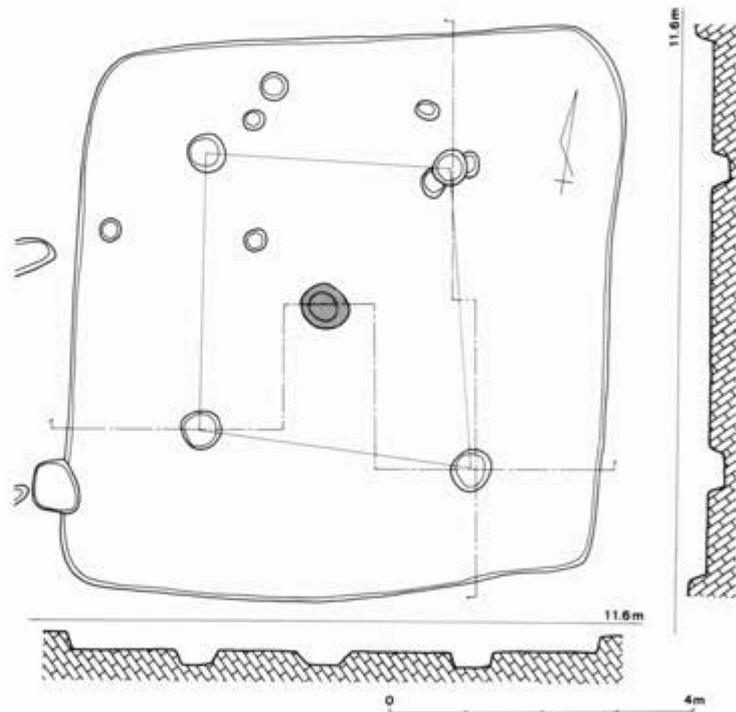
S H090 調査区の南半部中央付近で検出した大型の竪穴式住居跡である。一辺約7 mを測り、深さ約0.2mが遺存する。周壁溝は確認されなかったが、4か所で支柱穴を検出するとともに、中央付近で炉跡と考えられる径約30cmのピットを確認した。

S H091 S H090の北側で検出した。その大半はすでに削平を受けており、南側コーナー付近を確認したにすぎない。コーナー部の北側1 mで、支柱穴と考えられるピットを1か所検出した。

S H092 S H025の西側で検出した。3分の1程度を残すにすぎないが、一辺約4 mの隅丸方



第64図 S H087実測図(アミカケ部は炭)



第65図 S H090実測図(アミカケ部は炭)

形の竪穴式住居跡であったと考えられる。深さ約0.2mが遺存し、周壁溝は確認されなかったが、北東コーナー付近で支柱穴を1か所検出した。

S K 093 S H 089の南側約5mで検出した。1m×0.9mの方形の土坑である。深さ約0.15mが遺存する。埋土中から壺口縁部片が出土した。

S H 094 S H 025の南側で、隅丸方形を呈する竪穴式住居跡の北側約2分の1程度を確認した。北辺で約4mを測り、深さ約0.15mが遺存する。支柱穴を2か所で確認した。

S K 101 S H 090の北側で検出した。径約0.4mの円形を呈し、土坑とするよりピットと認識すべきかもしれない。埋土中からは土器片は出土しなかったが、白色の粘土塊が出土した。

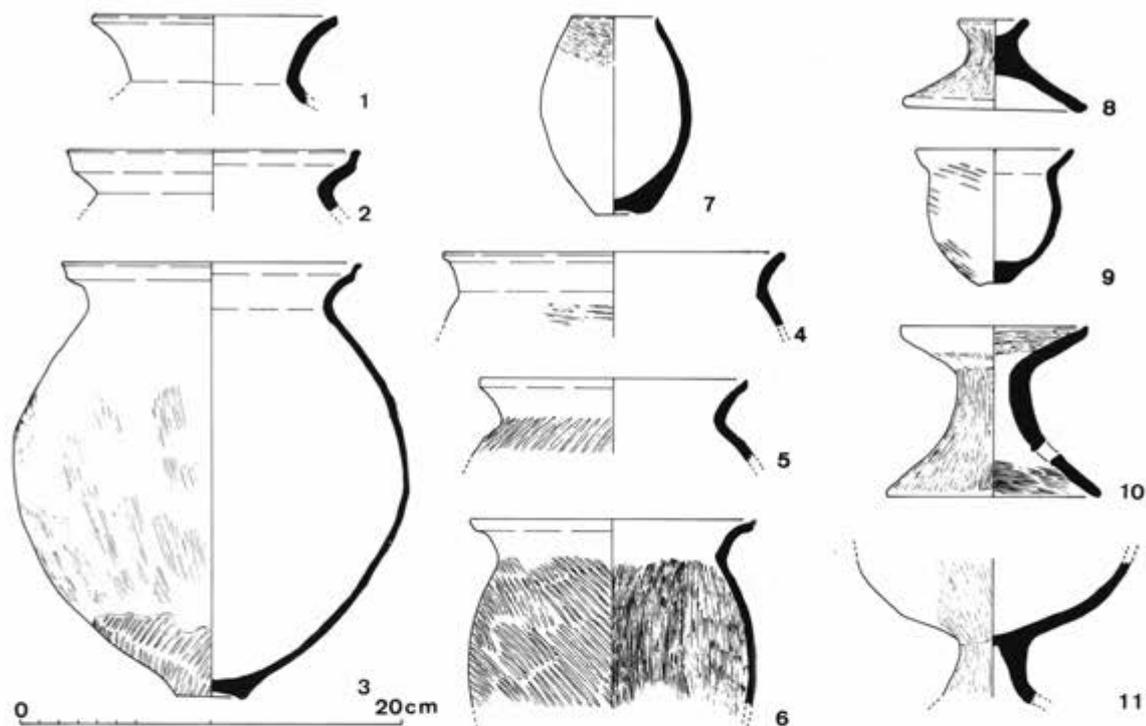
素掘り溝群 主に調査区の西半部で検出したが、特に北西部に集中する。北西部のものは蛇行気味に南北にのびるものが多く、南半部のものは北西-南東方向に直線的にのびるものが多い。幅20~30cm・深さ10cm前後を測り、埋土は明乳灰色砂質土で、弥生時代後期末葉とした上述の遺構群とは明らかに異なる。また、竪穴式住居跡とは切り合い関係をもち、明らかに素掘り溝群が後出であることも確認される。時期を決定する明確な手がかりを欠くが、遺構検出段階で布留式土器片がわずかながら出土しており、このことから古墳時代初頭に属するものと考えている。また、その性格については、畑作の痕跡を示す畝溝と判断している。

このほか、調査区の南西隅付近を中心として第3遺構面から第4遺構面にわたり、完形近くに復原される土器がまとまって出土した。精査を繰り返し、これに係る遺構の検出に努めたが、顕著な遺構は確認されなかった。出土土器の示す時期は、弥生時代後期末葉を中心としており、器種としては二重口縁壺や甕、鉢類がある。その内容は、墳墓に伴うものの可能性が高く、結果的に遺構の検出に至らなかったが、調査区の南西隅部もしくはその周辺にこの時期の周溝墓などが存在した可能性が高い。

②出土遺物

当該期の出土遺物には、竪穴式住居跡の埋土中や、先に述べたように調査区南東隅付近からまとまって出土したものなどがある。そのうち、ここではS H 087・S H 092の2基の竪穴式住居跡から出土したものを中心に図示した。

1は、広口壺の口縁部片である。口径12.5cmに復原される。S H 092から出土した。7は、口径4.4cm、器高10.6cmを測る無頸壺である。蛸壺様の特異な形態をなす。器壁の磨滅が著しく、調整痕は明瞭に観察できないが、体部から口縁部外面にはヘラ磨きの痕跡が確認される。S H 087から出土した。2・3は、受け口状の口縁部をもつ甕である。2は、口径15.4cmに復原される口縁部片である。3は完形品で、口径15.5cm・器高24cmを測る。2に比べ、器壁は薄く仕上げられている。器壁の磨滅が著しいが、底部外面にタタキ、体部外面には縦方向のハケ目調整が確認される。S H 092から出土した。4~6は、「く」の字状に外反する口縁部を有する甕である。4は、口径16.8cmに復原される口縁部片で、端部はやや外側へつまみ出した後、丸く終わる。器壁の磨滅が著しいが、体部外面にタタキの痕跡を認める。5・6は、口縁端部を上方へつまみ上げるもので、5は口径14cm、6は口径14.5cmに復原される。5は、体部に右上がりのタタキが施



第66図 出土遺物実測図(2)

される。6は、口縁部の外反度が5に比べて強く、体部外面には左上がりのタタキが施される。4はSH092から、5・6は調査区北半部の明黄灰色土中からそれぞれ出土した。8は、突出するつまみ部と傘形に開く口縁部をもち、蓋と考えている。完形品で、口径8.8cm・器高5cmを測る。外面にはヘラ磨きが施され、内面はナデ調整によって仕上げる。SH092から出土した。9は、口径8.1cm・器高7.2cmを測る、小形の甕である。「く」の字状に外反する口縁部をもち、底部はわずかな平底状をなす。体部外面にはタタキ、内面はナデ調整を施す。SH087から出土した。10は、口径10cm・器高9.1cmを測る、小形器台である。およそ2分の1が遺存する。脚柱部は中空で、外面をヘラ磨き、内面をハケ目調整によって仕上げる。口縁部には、外面にハケ目の後ヨコナデ、内面にヘラ磨きを施す。SH092から出土した。11は、半球状をなす碗形の杯部と裾部が大きく開く脚部を有する高杯の破片である。杯部から脚部の外面にはヘラ磨きが施される。SH092から出土した。

以上の土器群は、一括資料というわけではなく、すべて同一時期といえるものではないが、およそ弥生時代後期終末期に属すると考えられる(いわゆる庄内式期の中段階を中心とすると考えている)。内里八丁遺跡では、これまでの調査でもこの時期の遺構が検出され、多くの土器類が出土している。こうした資料の位置づけを明確にするためにも、今後これらを詳細に整理し、その様相を報告したいと考えている。

(3) 古墳時代中期末葉～同後期初頭(第3遺構面)

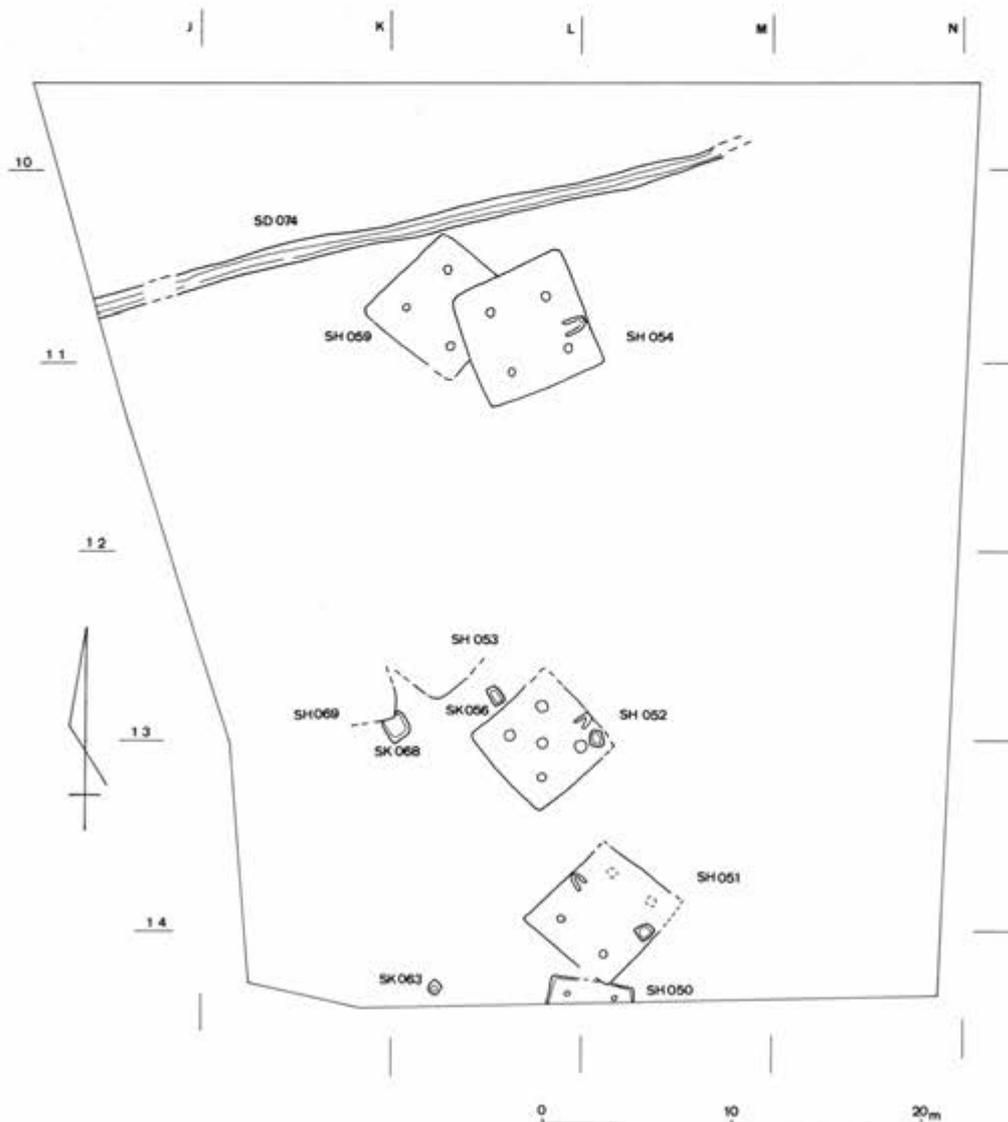
古墳時代中期末葉～同後期初頭の遺構は、黄灰色土上面(第3遺構面)で検出した。主な検出遺

構には、竪穴式住居跡7基、溝1条、土坑3基がある。なお、この遺構面は、中世の鳥畑造成時に調査区の中央部一帯が大幅な削平を受けており、ここには遺構が遺存していなかった。このため、上記の遺構は南北2群に分れて分布することとなる。

南側の一群は、南東部から北西方向へ向かって円弧を描くように検出された5基の竪穴式住居跡(SH050～SH053、SH069)を中心とし、3基の土坑(SK056、SK063、SK068)が伴う。北側の一群は、中央付近で重複して検出された竪穴式住居跡2基(SH054、SH059)とその北側で確認された東西溝(SD074)からなる。

①検出遺構

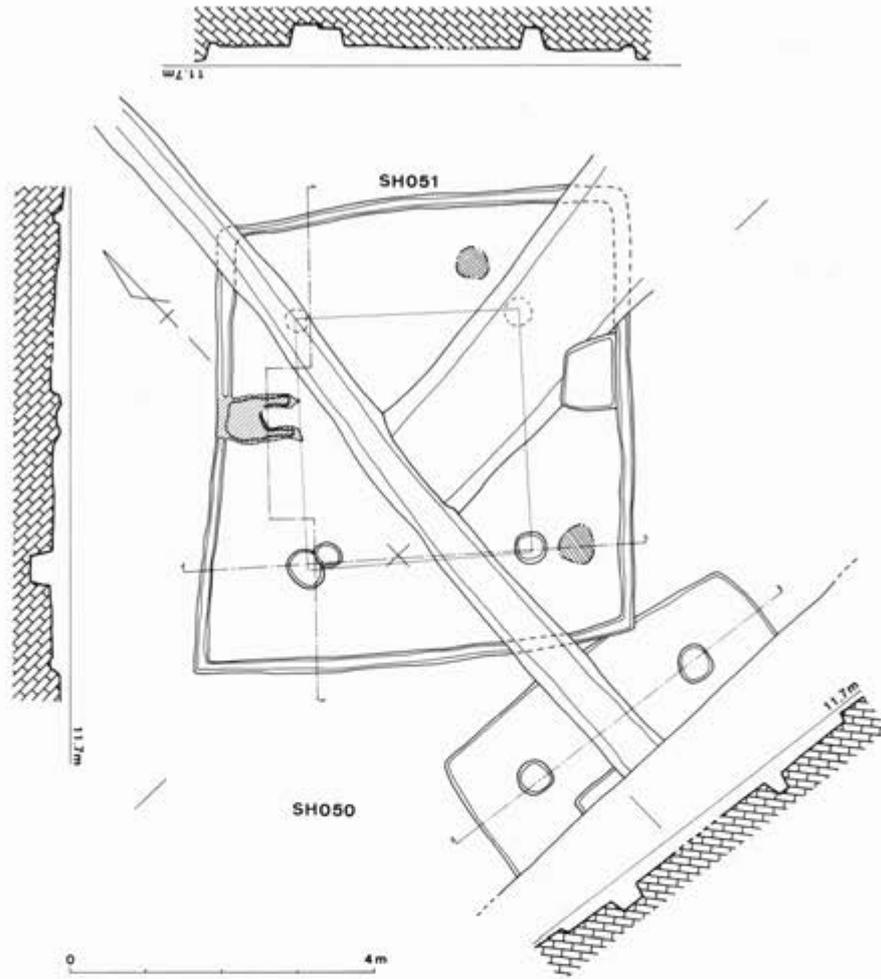
SH050 調査区南端で北側約2分の1を検出した。中央を中世の溝によって削平されているが、一辺約4.6mの方形をなすと考えられる。深さ約0.1mが遺存し、床面で支柱穴を2か所確認した。後述するSH051と一部重複し、これに先行することが確認されるが、時期を確定する出



第67図 第3遺構面遺構配置図

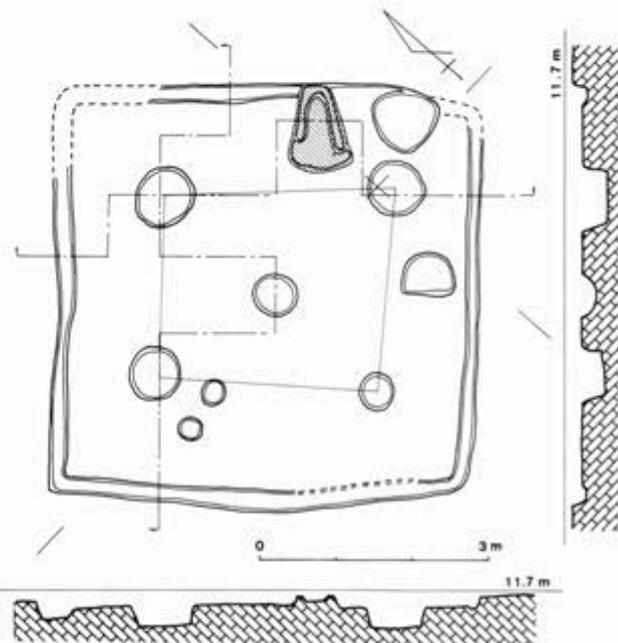
土遺物はない。

S H051 調査区の南端付近、S H050の北側で検出した。北・東コーナー付近を中世の溝によって削平されるが、北東辺が5.4m、他の辺が5.8mの台形に復原され、深さ約0.15mが遺存する。床面では周壁溝、竈、貯蔵穴、支柱穴を検出した。周壁溝は、幅約0.1mを測る。竈は、北西辺の中央付近で検出した。当初は検出面で土師器甕1個体が破片となって出土し、その下方で良好に遺存していると予想されたが、立ち上がり部を含め大半がすでに崩壊しており、最終的には馬蹄形をなす焼土塊として確認された。焼土の広がり、北西壁から長さ約1.3m・最大幅約0.7mを測り、燃焼部と思われる部位で支柱として利用された小型甕が倒立状態で出土した。貯蔵穴は、南東辺で検出した。1m×0.8mの長方形の土坑で、埋土内から土師器甕が出土した。支柱穴は、削平のため2か所で確認したにとどまる。径0.3mの円形のピットである。なお、住居跡床面では、このほかに北東辺、南東



第68図 S H050・S H051実測図(アミカケ部は炭)

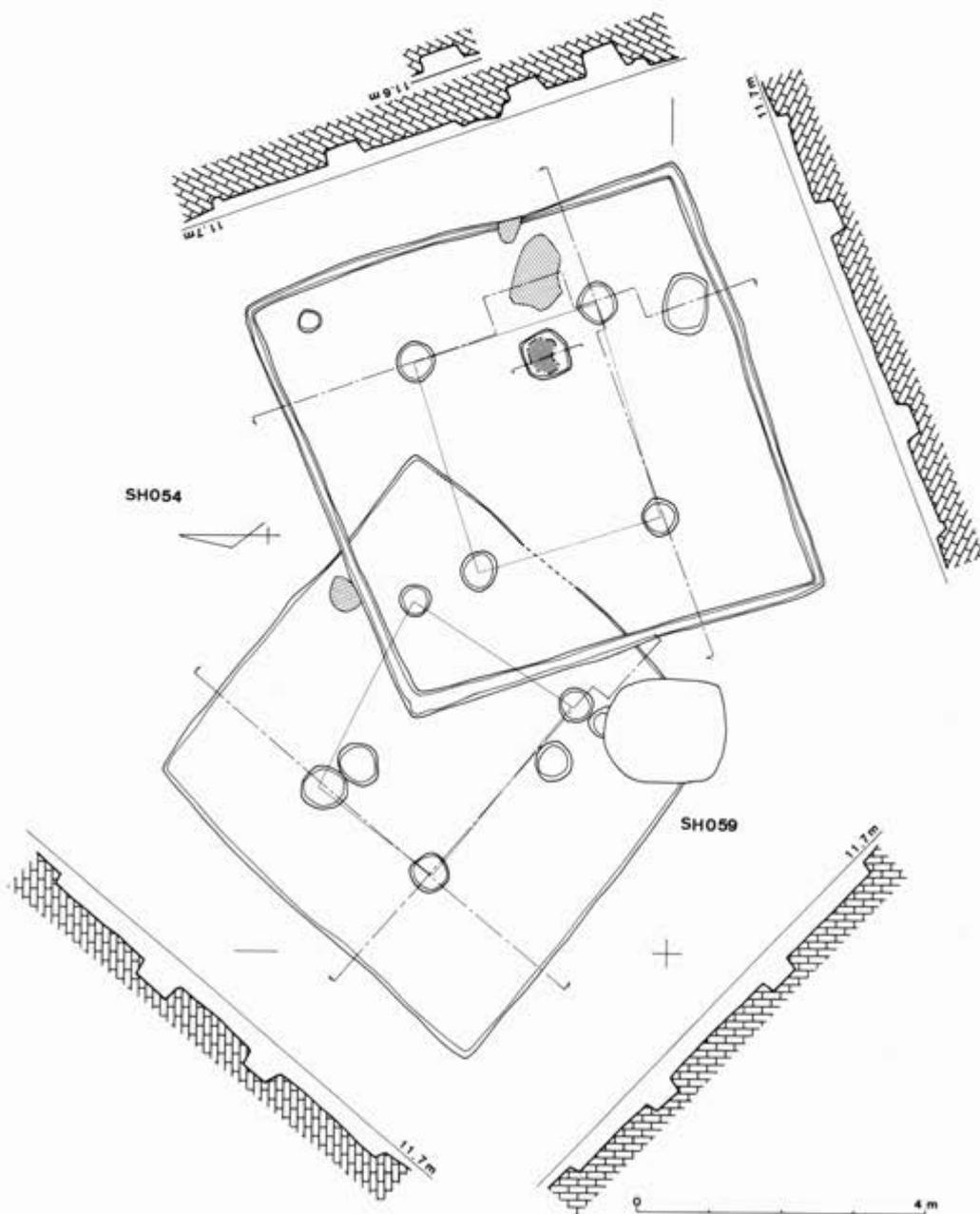
が破片となって出土し、その下方で良好に遺存していると予想されたが、立ち上がり部を含め大半がすでに崩壊しており、最終的には馬蹄形をなす焼土塊として確認された。焼土の広がり、北西壁から長さ約1.3m・最大幅約0.7mを測り、燃焼部と思われる部位で支柱として利用された小型甕が倒立状態で出土した。貯蔵穴は、南東辺で検出した。1m×0.8mの長方形の土坑で、埋土内から土師器甕が出土した。支柱穴は、削平のため2か所で確認したにとどまる。径0.3mの円形のピットである。なお、住居跡床面では、このほかに北東辺、南東



第69図 S H052実測図(斜線部は焼土)

辺それぞれに沿って、径約40cmの円形に焼土が広がる部位が確認された。竈の痕跡とも考えられ、竈の造り換えがあったと判断している。

S H052 S H051の北側で検出した。北東コーナー付近が一部削平されているが、一辺約5.4mの方形を呈するものと考えられる。深さ約0.1mが遺存し、床面では周壁溝、竈、貯蔵穴、支柱穴を検出した。周壁溝は、幅約0.1mを測る。竈は、北東辺中央付近で検出した。長さ約1.2m・幅約0.6mの馬蹄形をなす。貯蔵穴は、竈の南側で検出した。0.6m×0.5mの長方形の土坑である。支柱穴は4か所で検出した。径約0.4mの円形のピットである。また、中央で炉跡と考えられる径約0.3mのピットを確認している。なお、竈の北側に接するように、径約0.4mの円形の範囲に焼土、灰が集積されているか所を認め、その中から製塩土器が出土している。



第70図 S H054・S H059実測図(アミカケ部は炭、斜線部は焼土)

S H053 S H052の北側で、わずかに南側コーナーを検出したのみで、詳細は不明である。

S H054 調査区の北半部中央で検出した。一辺6.2mの方形を呈し、深さ約0.15mが遺存する。周壁溝は確認されなかった。東辺中央付近で竈を確認したが、遺存状況は悪く、東壁中央から約1m内側のところで、0.8m×0.6mの楕円形の範囲に広がる焼土塊を確認したにとどまる。焼土中からは、支柱に利用された甕が倒立した状態で出土している。床面中央付近と南壁付近で、貯蔵穴と思われる土坑を2基検出した。いずれも、一辺0.6m前後の方形の土坑である。

S H059 S H054と重複して検出したもので、S H054に先行することが確認される。一辺6m前後の方形を呈し、約0.1mが遺存する。東壁中央付近で竈の痕跡と思われる焼土を確認したが、大半がS H054によって削平されていた。床面では、周壁溝は確認されていない。支柱穴は、並びがやや歪つながら4か所を確認した。なお、この竪穴式住居跡は、その検出段階で、中央付近を中心に焼土や灰の集積が認められ、その中には土師器甕や製塩土器などが含まれていた。

S H069 S H053の西側で検出した。南東コーナー付近を確認したにすぎず、詳細は不明である。

S D074 S H059の北側、調査区の北端近くを東西に走る。幅約1m・深さ0.3mを測る。溝底の高低差は西がやや高い。北東隅近くでは、削平のため遺存していなかった。

S K056 S H052の北側で検出した。1.3m×1mの長方形を呈し、深さ約0.3mが遺存する。

S K063 S H050・051の西側、調査区南西隅付近で検出した。1m×0.8mの長方形を呈し、埋土中には焼土がブロック状に入る。

S K068 S H069と一部重複して検出したもので、これに先行する。幅約1m、長さは遺存部で1.5mを測る。深さ約0.3mが遺存する。

②出土遺物(第71・72図)

当該期の出土遺物には、竪穴式住居跡などの各検出遺構の埋土中から出土したものが主体をなす。時期的には、須恵器杯身・同蓋などの形態から5世紀末葉～6世紀前半(T K47前後)に位置づけられると判断している。ただ、数量的には決してまとまっているとはいえない。ここでは、S H051・S H052・S H054の3基の竪穴式住居跡から出土した遺物のうち、主なものを図示して出土遺物の概要を報告する。

なお、第71・72図に示したうち、3・6・11・12・14・15・17はS H051、4・5・7・8・13・18がS H052、1・2・9・10・16・19・20がS H054からそれぞれ出土した。

1～10は、須恵器で、1～3は杯蓋である。1・2は、丸みのある天井部から口縁部が下がり、口縁端部は内面に凹面をもつ。1は、口径12.4cm・3.9cmを測り、2は口径13cmに復原される破片である。3は、平らな天井部をなす破片で、口径12.4cm・器高3.5cmに復原される。

4・5は杯身で、ともに口縁部が高く立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。4はほぼ完形で、口径10.9cm・器高4.4cmを測り、5は口縁部付近の破片で、口径11.8cmに復原される。

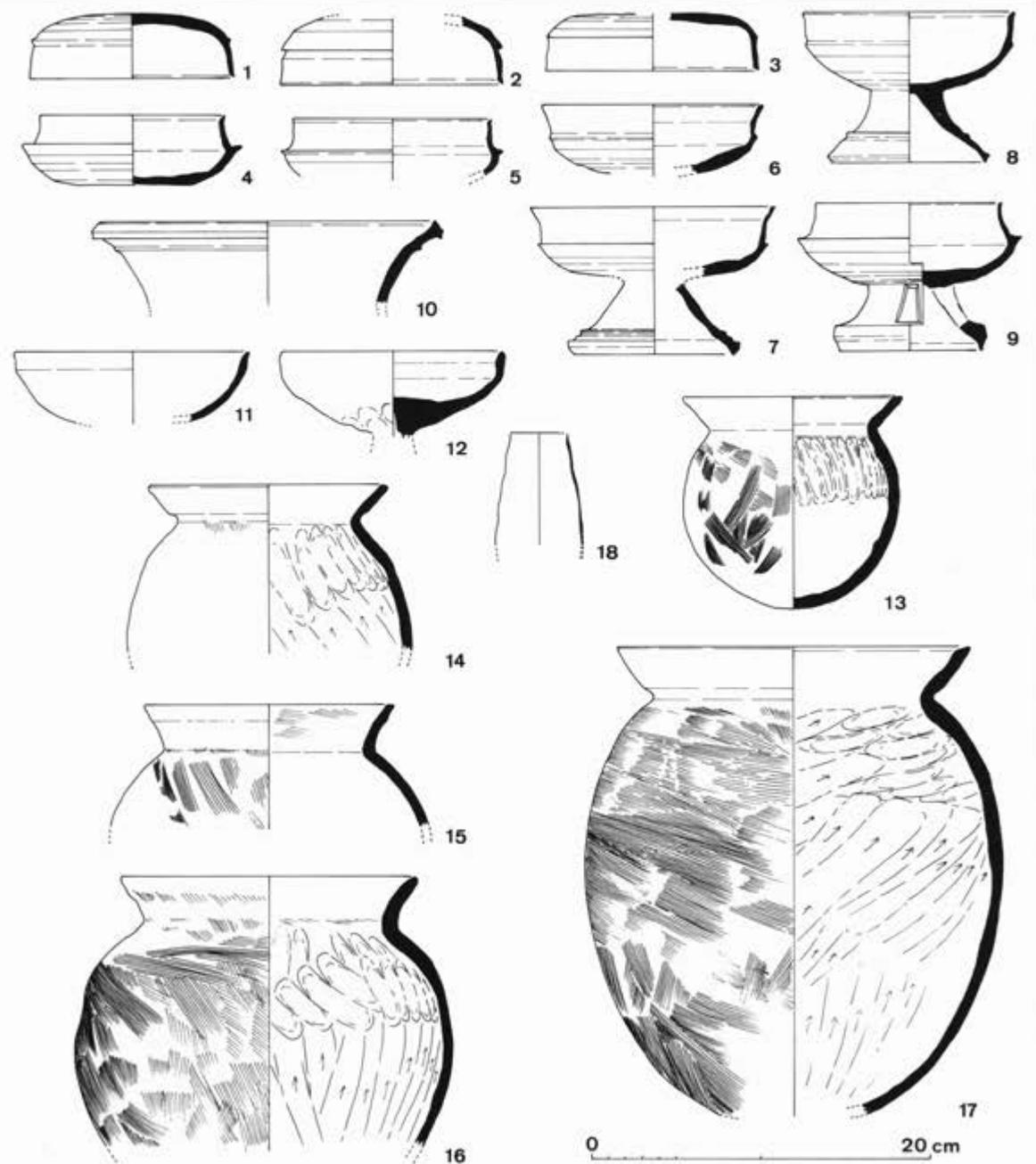
6～8は、無蓋高杯である。6・7は、外反気味に口縁部が立ち上がる。6は、口縁部付近の破片で、口径13cmに復原される。7は、口縁端部は上方に面をなし、「ハ」の字状に開く脚部をもつ。口径14.4cmを測り、同一個体と思われる脚部と図上で復原している。8は、杯蓋と区別が

つかない形態の杯部をもつ。ほぼ完形に近く、口径12.4cm・器高9.1cmを測る。

9は、有蓋高杯である。口径10.8cm・器高8.9cmを測る。脚部には4方向に透かしを穿つ。10は壺口縁部片で、「ハ」の字状に大きく開き、端部は上下に拡張される。口縁端部下方に1条の突帯がめぐる。

11~17は、土師器である。11は、杯身で、口径13.6cmに復原される口縁部片である。丸みのある体部からゆるやかに外反する口縁部を有する。

12は、高杯で、口径12.8cmを測る杯部の破片である。丸みのある底部から垂直気味に立ち上がる口縁部を有する。脚部との境で欠損しているが、欠損部には、脚柱部側から杯底部直下にまで及ぶ径0.5cm程度の孔が認められる。

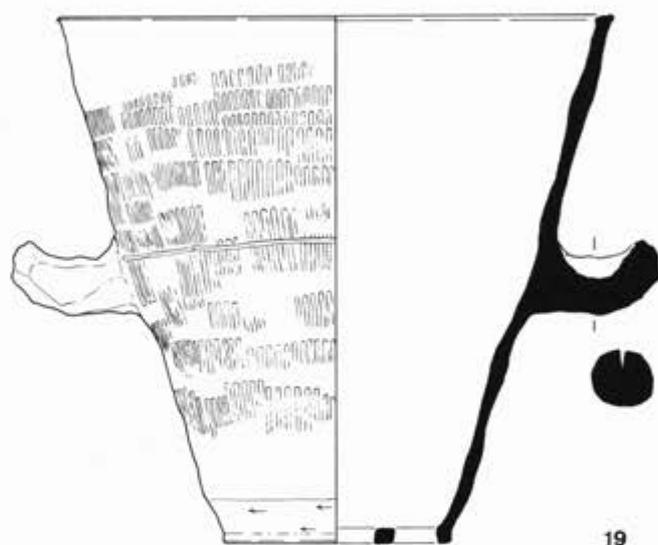


第71図 出土遺物実測図(3)

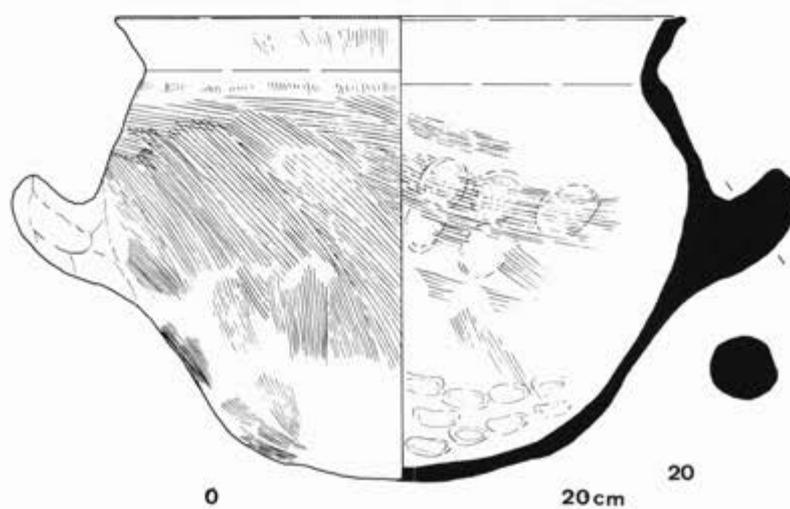
13～17は、甕である。甕には、口径12.8cm(器高12.5cm)を測る小型品(13)、口径16cm前後を測る中型品(14～16)、口径20cmを越える大型品(17)の三者がある。それぞれで形態や調整手法の細部に若干の差異も認められるが、基本的に口縁部は強く外反し、端部はさらに強く外方もしくは上外方へつまみ出され、内傾する面をもつ。体部外面はハケ目、内面は下半部にヘラ削り、上半部はナデによって仕上げられるものが多い。ただ、16などのように、やや肩の張った球形に近い体部をもち、口縁端部のつまみ出しが顕著でないものも少数ある。

18は、製塩土器である。口径3.2cmに復原され、下膨れの体部を有する。器壁は0.1cm前後と薄く、ナデ調整が施される。

19は、甕である。口径29cm・器高27.8cmを測る。上方が開く円筒状の体部を有し、体部中位には一対の把手が付される。平らな底部には、中央に円形、その周囲に楕円形の蒸気孔を1+4に配置する。暗黄褐色を呈し、硬質な土師器との感を受けるが、体部外面にはタタキが施され、中位に1条の浅い凹線がめぐる。また、把手の上面には溝が切られるなど、韓式系土器とされるものの幾つかの要素を備える。



20は、鍋である。口径29.8cm・器高24.8cmを測る。扁球状の体部から外反する口縁部を有しており、口縁端部は外側へ強くつまみ出される。体部中位に一対の把手が付される。



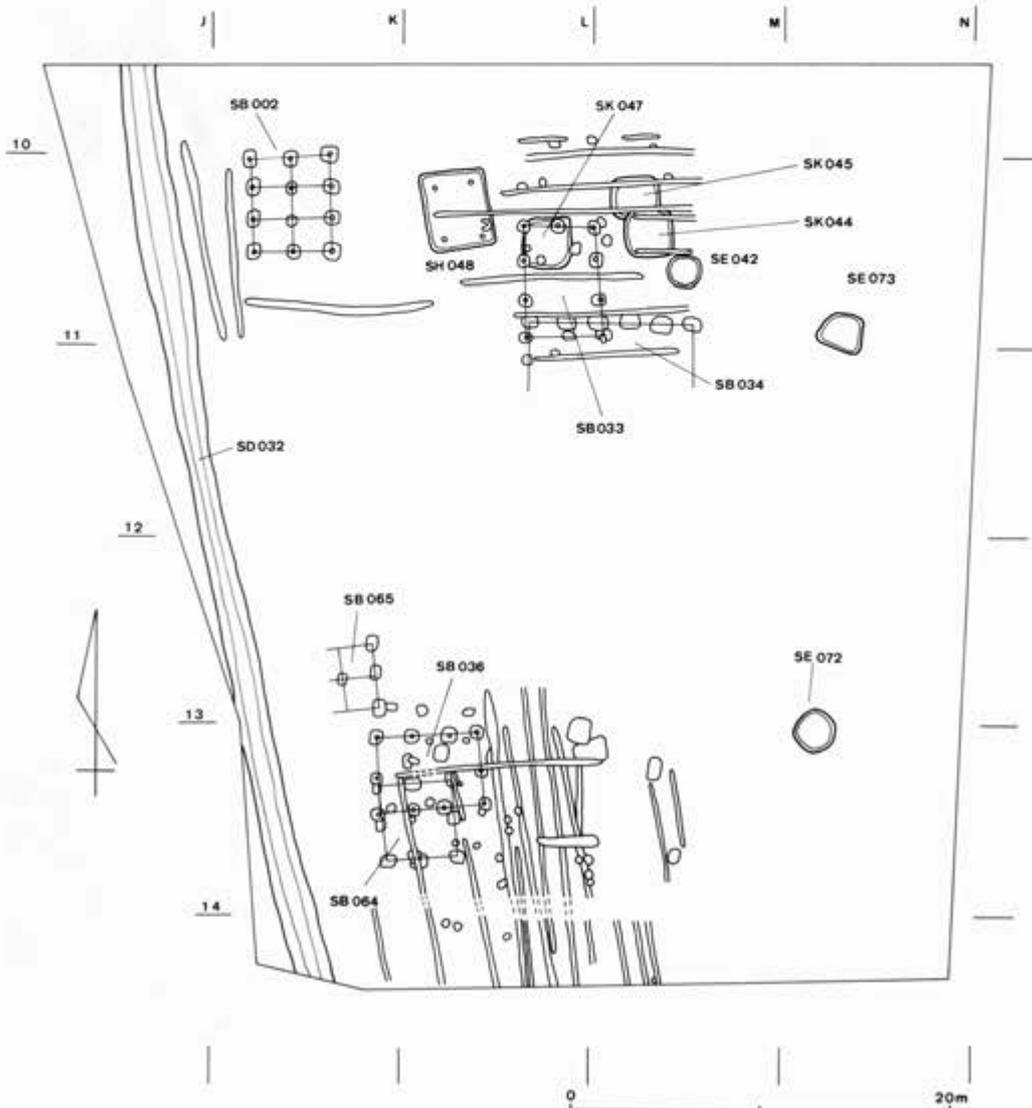
第72図 出土遺物実測図(4)

(4)奈良時代～平安時代初頭(第2遺構面)

奈良時代～平安時代初頭の遺構は、暗茶褐色土上面(第2遺構面)で検出した。掘立柱建物跡6棟、竪穴式住居跡1基、井戸3基、土坑3基、溝1条のほか、畑作の痕跡と考えられる素掘り溝群がある。なお、この時期の遺構も、中世の鳥畑造成に伴う削平のため、南北2か所の鳥畑部を中心に遺存していた。掘立柱建物跡は、調査区の北半部・南半部で3棟ずつを検出した。本来、さらに多くの建物跡があったと思われるが、削平のため確認できなかった。竪穴式住居跡は、北半部の中央付近で検出した。また、この東側で方形土坑を3基確認した。いずれも、遺存状況は悪かったが、床面に火を受けた痕跡が認められた。井戸3基は、調査区東半部で検出した。

①検出遺構

SB002 調査区北西部で検出した2間×3間の竪柱建物跡である。柱間は、東西(梁間)約4.2m(1間;約2.1m等間)、南北(桁行)約5.3m(1間;1.7~1.8m)を測る。柱掘形は、一辺0.8m前後の隅丸方形をなし、いくつかには径20m前後の柱痕跡を認めたが、南辺の柱穴には柱の抜き

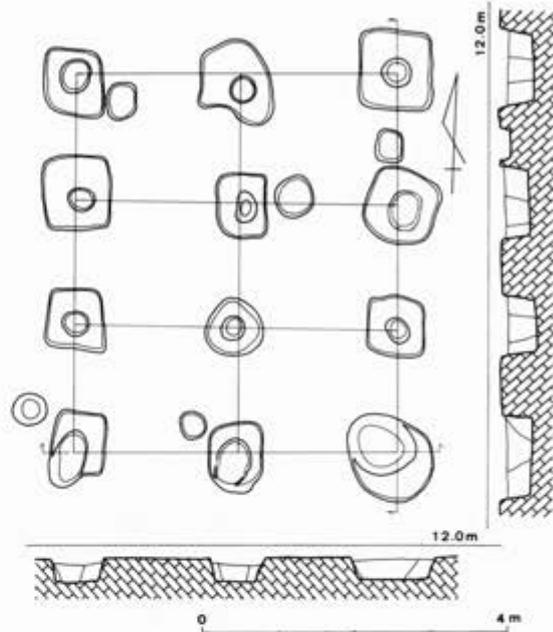


第73図 第2遺構面遺構配置図

取り痕跡が認められた。建物跡の主軸は、 $N-2^{\circ}-W$ である。

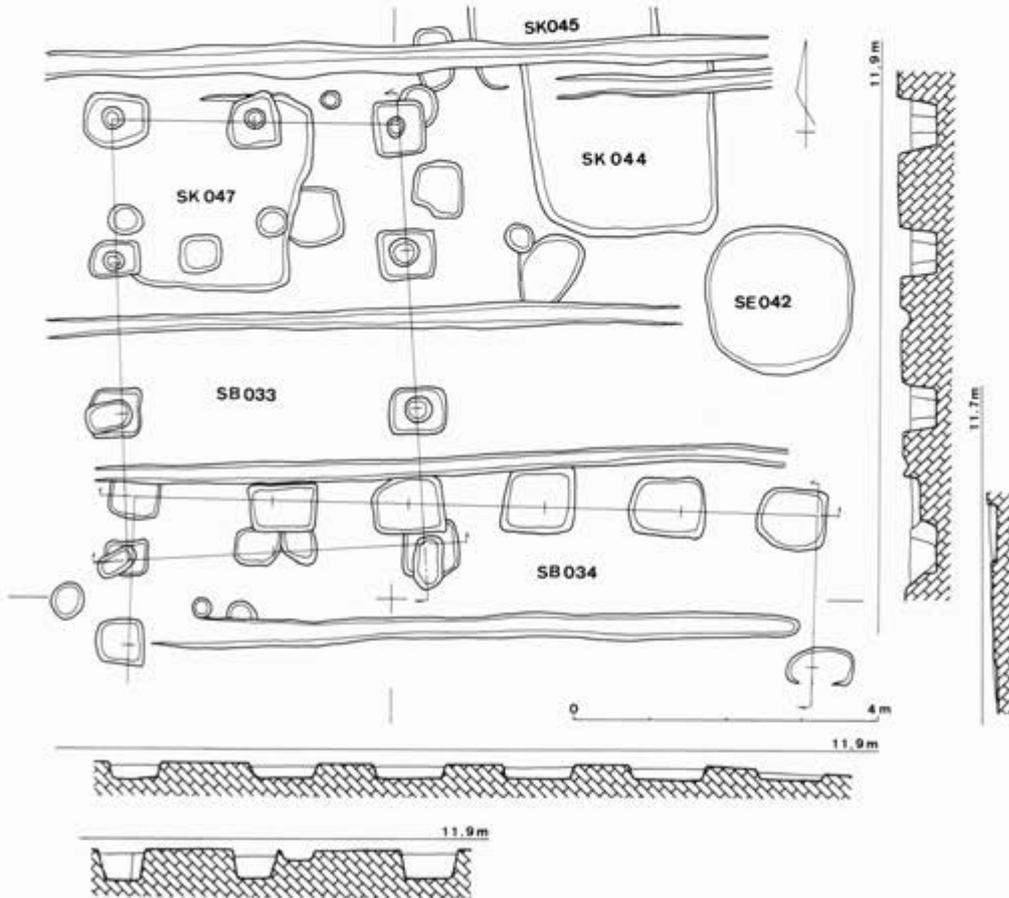
S B 033 調査区北半部中央付近で検出した2間×3間の南北棟建物跡である。柱間は、東西(梁間)約4m(1間;約2m等間)、南北(桁行)約5.7m(1間;約1.9m等間)を測る。柱掘形は一辺0.6m前後の隅丸方形をなし、大半は径15cm前後の柱痕跡を認めるが、いくつかの柱穴には、柱の抜き取り痕が認められた。建物跡の主軸は、 $N-2^{\circ}-W$ である。

S B 034 S B 033と一部重複して検出した。南半部が削平を受けているが、東西5間、南北1間以上の東西棟建物跡と考えられる。柱間は東西(桁行)約9m(1間;約1.8m等間)、南北約2.1m以上(1間;2.1m)を測る。柱掘形は、一辺0.6m×0.8mの長方形をなす。建物跡の主軸は $N-2^{\circ}-E$ である。

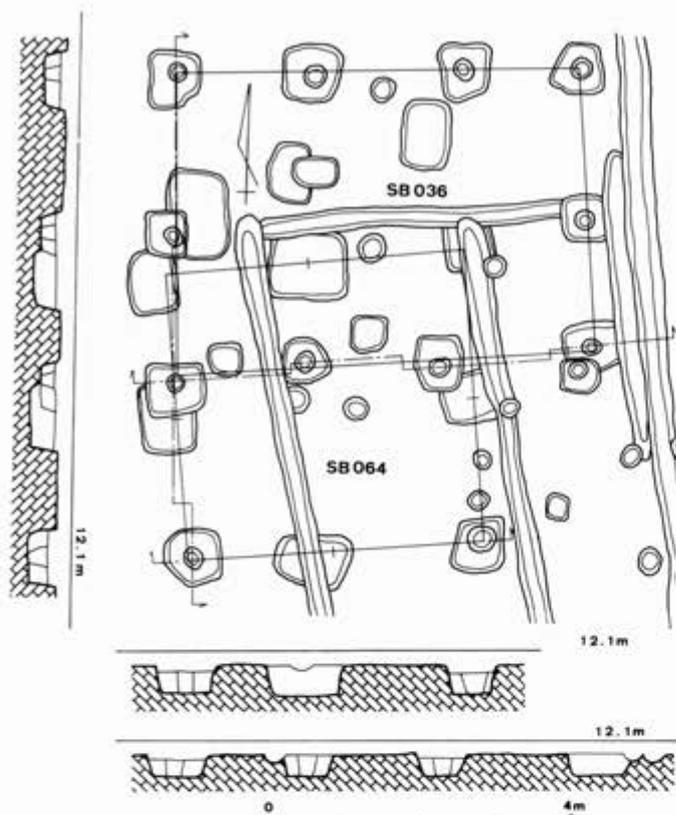


第74図 S B 002実測図

S B 036 調査区南西部で検出した2間×3



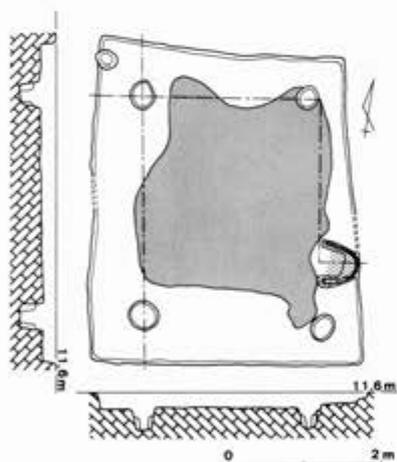
第75図 S B 033・S B 034実測図



第76図 SB036・SB064実測図

間の東西棟建物跡である。柱間は、東西(桁行)約5.4m(1間;約1.8m等間)、南北(梁間)約4.2m(1間;約2.1m等間)を測る。柱掘形は、一辺約0.6mの隅丸方形で、径約15cmの柱痕跡を認める。また、南辺の柱穴には柱の抜き取り痕跡が認められた。建物跡の主軸はN-2°-Wである。

SB064 SB036と重複して検出した。2間×2間で、柱間は、東西約3.8m(1間;約1.9m等間)、南北約4m(1間;約2m等間)を測る正方形に近い建物跡である。柱掘形は、一辺0.6m×0.8m前後の隅丸方形をなす。総柱の倉庫と考えたが、中央の柱穴は確認できなかった。建物跡の主軸はN-6°-Wである。



第77図 SH048実測図
(アミカケ部は灰、斜線部は焼土)

SB065 SB036の北側で検出した。後世の削平のため、南北2間以上・東西1間以上の総柱建物跡であることを確認したにとどまる。柱間は、東西・南北とも1間が約1.8mを測る。柱掘形は、一辺0.5m前後の隅丸方形をなす。建物の主軸は、N-6°-Wである。

SH048 調査区の北半部、SB002とSB033の中間で検出した。東西約3.3m・南北約4.2mの長方形の竪穴式住居跡である。東辺やや南寄り、長さ・幅とも0.4mの馬蹄形状に広がる焼土塊を確認し、竈の痕跡と考えている。床面には炭・灰層の広がりが認められた。また、4か所で主柱穴を確認している。

SK044・045・047 調査区北半部東寄り、SK047がSB033と重複し、SK044・045がその東側で検出された。いずれも遺存状況は悪く、全様が確認されるものはSK044のみだが、およそ一辺2m前後の隅丸方形を呈すると考えられる。深さは、5cm前後が遺存するにすぎない。床面は、火を受けたように淡青灰色に変色していた。

SD032 調査区西辺部を南北に流れ(N-10°-W)、幅約2m・深さ約1mを測る。断面は、ゆるやかな「U」字状をなす。昨年度のD1地区の調査でも、この南側延長部が確認されており、南端部は和同開珎などが出土した池状遺構へ流入する。

SE042 調査区北東部で検出した。一辺約2mの掘形をもち、深さ約2mが遺存する。井戸枠は遺存していないが、一辺約1.2mの方形の井戸枠痕跡を認めた。

SE072 調査区南東部で検出した。径約1.5mの掘形をもち、深さ約1.5mが遺存する。内部に径約1mの井戸枠の痕跡を確認した。

SE073 調査区北東隅付近で検出した。一辺約2mの掘形をもち、深さ約1.5mが遺存する。その内側には、一辺約1.2mの方形に組まれた井戸枠が遺存していた。井戸枠は、四隅に杭を打ち、長さ約1.2m・幅約0.2mの板材を各辺に2段に積みあげており、底部には曲物を置く。曲物は、すでに大きく変形していた。

素掘り溝群 各遺構と重複して素掘り溝群を検出した。畑作の痕跡と理解しており、多くは幅約20～30cmを測り、数条が並んで検出された。単位としては2m前後の間隔が想定される。切り合い関係から、掘立柱建物跡などが廃棄された後に設けられたものであることが確認され、この時点で一帯が耕作地へと転用されたことがうかがわれる。なお、その方向は、調査区の南半部で検出したものが北北西—南南東の方向にのび、SD032とほぼ同一の方向をもつもの(N-10°-W)からやや振れの少ないもの(N-7°-W)が認められる。一方、北半部で検出したものは東西方向にのび、ほぼ座標の東西軸にのる。

②出土遺物(第78～80図)

当該期の出土遺物は、時期的に大きく2時期に大別される。ほぼ、8世紀中葉を中心とするものと、8世紀末葉から9世紀中葉を中心とするものである。これを遺構群の様相と重ね合わせたとき、現状では、前者に掘立柱建物跡群を、後者にSD032を中心に、これと方位を同じくする素掘り溝群を対応させて考えている。ただし、掘立柱建物跡については柱掘形内などから、時期を示す遺物の出土がなく、その特定は困難な状況にある。今後、より広範囲な調査成果のなかで、主軸方位やこれに対応する時期を示す出土遺物の把握を行った上で、十分検討を加えていきたい。

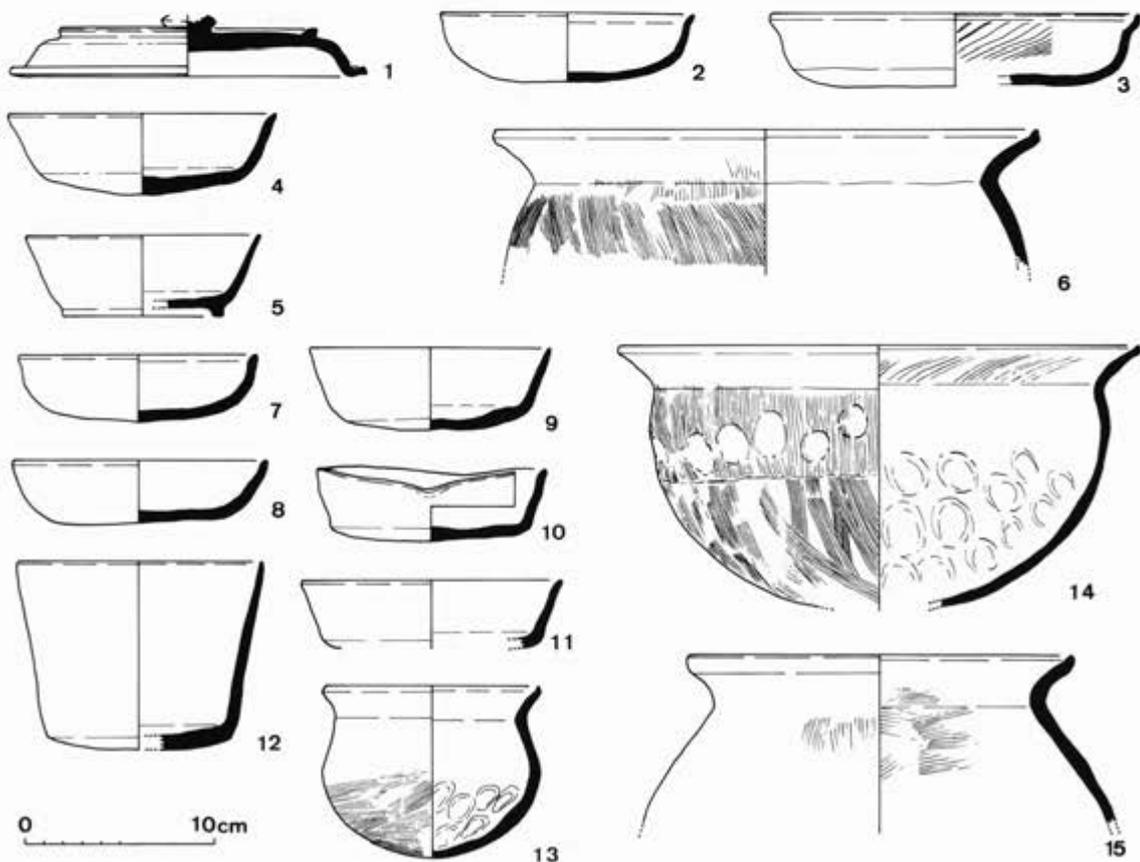
なお、以下では、上記の2時期に対応する遺物を、竪穴式住居跡(SH048)、井戸(SE042)、溝(SD032)出土資料に若干の包含層出土品を加え提示することとした。第78図には8世紀中葉を、第79図には9世紀前～中葉を中心とするものを示した。

SE042出土土器(第78図4～6) 4・5は、須恵器杯身である。4は、口径14cm・器高4.3cmを測る。丸みのある底部と外反気味に立ち上がる口縁部からなる。5は、口径12.3cm・器高5.4cmを測る。口縁部は、斜め上方へ直線的に立ち上がり、底部と口縁部の屈曲部付近に高台を付す。6は、土師器甕の口縁部片で、口径28cmに復原される。口縁部は強く外反し、端部は上方へつまみあげる。遺存する体部上半には、縦方向のハケ目が施されており、口縁部はハケ目調整の後、ナデによって仕上げられている。

SH048出土土器(第78図7～15) 7・8は、土師器杯身である。7は、口径12.4cm・器高3.5cmで、全体に丸みのある形態をなし、口縁端部はわずかに外反する。8は、口径13.4cm・器高3.4cmで、やや平らな底部からゆるやかに屈曲して口縁部が立ち上がる。9～11は、須恵器杯身である。9は、口径12.8cm・器高4.3cmで、丸みのある底部と外反気味に立ち上がる口縁部か

らなる。10は、口縁部の一端を外方へつまみだして片口状としたもので、全体として歪んだ形態をなす。口径12cm・器高3.9cmを測る。11は、口縁部片で、口径15.6cmに復原される。12は、口径13cm・器高10cmを測り、深身でコップ形を呈する。平底で、外反気味に口縁部が立ち上がる。13・15は、土師器甕である。13は、口径11.2cm・器高9.2cmを測る小型品で、鉢とすべきかもしれない。半球状の底部から体部上半が内傾して立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は上方につまみあげられる。体部下半外面にハケ目が確認される。15は、口径20.4cmに復原される口縁部片である。丸みのある体部から、口縁部はゆるやかに外反し、端部は上方へつまみあげる。14は鍋である。扁球状の体部と、外側へ強く外反する口縁部からなる。口径27.2cmを測り、体部外面には縦方向のハケ目、内面にはナデが施され、口縁部は、内面に横方向のハケ目が認められる。体部中位には粘土接合痕が確認される。

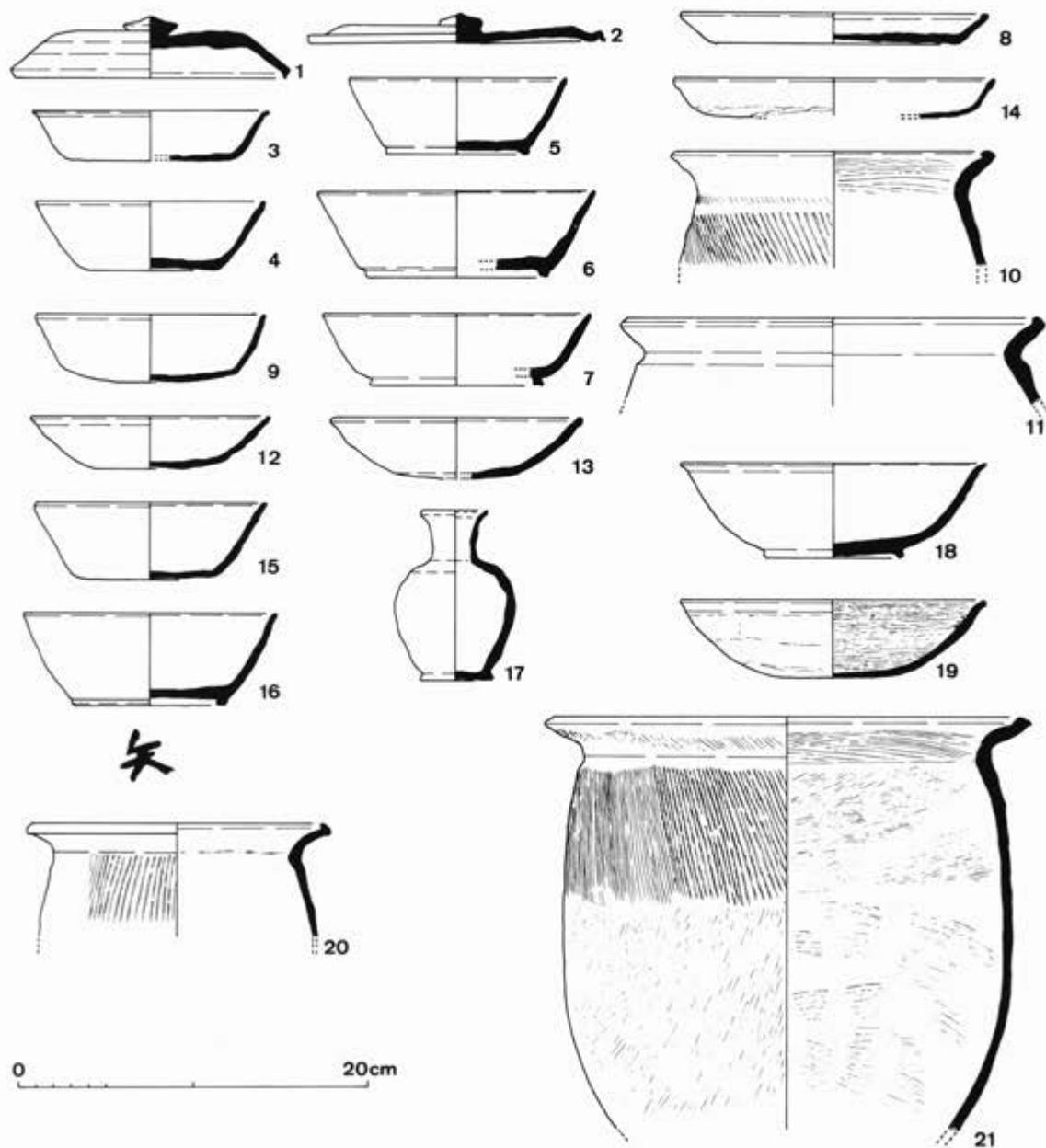
包含層出土土器(第78図1~3) 1~3は、調査区北半部の包含層(暗黄灰褐色土)から出土した。1は、須恵器杯蓋で、天井部の周縁に突帯がめぐり、いわゆる「環状突帯付蓋」である。口径18.8cmを測り、器高はつまみ部を欠損するが、3.5cm前後に復原される。2・3は、土師器杯身である。2は、先の7と同様に丸みのある底部と、端部がわずかに外反する口縁部からなる。口径13.2cm・器高3.5cmを測る。3は、平らな底部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部付近で一旦外反した後、端部は内側に小さく折り返される。口縁部内面には放射状の暗文が施される。口径19.2cmを測る。



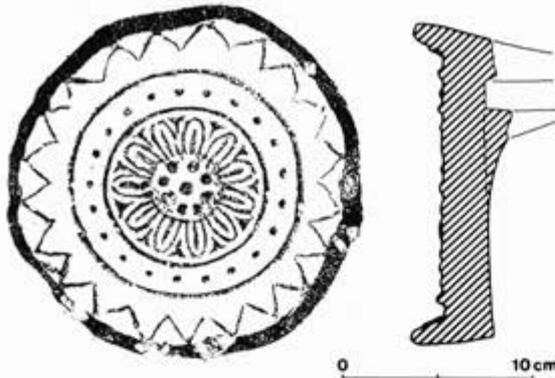
第78図 出土遺物実測図(5)

S D032出土土器(第79図) 1~11は、その埋土中から出土したものであるが、12~21は出土状況から、溝の肩部に重複して穿たれた土坑状の遺構に伴うものの可能性が高いと考えている。出土資料には、やや時期がさかのぼると考えられるもの(1・7)もあるが、ほぼ9世紀前半から中葉のものが主体をなす。

1・2は、須恵器杯蓋で、1は少し焼け歪んでいるが、平らな天井部からゆるやかに屈曲して口縁部が下がる。口径15.3cm・器高3.6cmを測る。2は、口径16.9cm・器高1.7cmを測り、扁平な器形をなす。内面に墨の痕跡が確認され、器壁も磨滅し平滑となっていることから、転用硯と考えている。3~7は、須恵器杯身である。3・4は高台がなく、5~7は高台を付す。3は、口径13.4cm・器高2.9cmを測り、口縁端部は短く上外方へ開く。4は、口径13.1cm・器高3.9cmを測



第79図 出土遺物実測図(6)



第80図 出土遺物実測図(7)

り、口縁部は上外方へ直線的に立ち上がる。5は口径12.6cm・器高4.5cm、6は口径15.8cm・器高4.9cmで、いずれも平らな底部から口縁部は上外方へ直線的に立ち上がる。7は、口径15.3cm・器高4.2cmに復原される破片であるが、5・6に比べ底部から口縁部への屈曲はゆるやかで、高台も屈曲部からやや内側に付される。8は、須恵器皿である。口縁端部が内側に折り返され肥厚する。口径17.4cm・器高1.8cmを測る。9は、土師器杯身である。一見、須恵器の杯身を思わせる形態をなす。口縁部をていねいなヨコナデ調整によって仕上げるが、ロクロが使用された積極的な痕跡は認められない。口径13cm・器高4cmを測る。10・11は、土師器甕の口縁部片である。10は、口径18.6cmに復原される。口縁端部は内側へ折り返し、大きく肥厚する。体部外面に縦方向の、口縁部内面に横方向の粗いハケ目が施される。11も同様の形態をなすが、口径23cmとやや大きく、口縁部と体部の境を強くヨコナデするため、明瞭な段を形成する。12・13は、土師器杯身である。ともに丸みのある底部からゆるやかに屈曲して口縁部がのび、端部は内側に折り返し肥厚する。12は口径13.7cm・器高3cm、13は口径14.9cm・器高3.7cmを測る。14は、土師器皿の破片で、口径18.2cmに復原される。口縁端部を内側へ折り返し、玉縁状をなす。15・16は、須恵器杯身である。15は、口径13.6cm・器高4.4cmを測る。16は、口径14.6cm・器高5.3cmを測り、底部外面に「矢」の墨書がある。17は、須恵器小壺である。口径3.6cm・器高9.7cmを測る。底部に糸切り痕を残す。18は、灰釉陶器碗である。底部に輪高台を付し、口縁部はわずかに外反しておわる。内面全体に釉がかかる。口径17.6cm・器高5.4cmを測る。19は、黒色土器碗である。内面のみが黒色となり、内面にヘラ磨き、外面にヘラ削りが施される。口径17.4cm・器高4.5cmを測る。20・21は、土師器甕である。口縁端部が内側へ折り返され肥厚するもので、体部外面には縦方向の粗いハケ目が施される。口径16.7cmを測る。21は、口径28.6cmを測る大型品で、口縁端部の肥厚は断面三角形に近い。基本的に粗いハケ目調整によって仕上げられ、体部内面下半のみ同心円文叩き具の痕跡が粗く残る。

以上のほか、今年度調査では、調査区全体から古瓦の破片が比較的多く出土している。その多くは平瓦片で、遺構に伴うものは少ない。平瓦はすべて一枚造りで、凸面は縦位の縄タタキが施された後、一部をナデ消す。また、これに加え、SE072の底部付近からは、平瓦片とともに軒丸瓦が出土した(第80図)。単弁十一葉蓮華文軒丸瓦で、内区文様は平面的で、やや窪んだ中房には1+8の蓮子を配し、線で表現された花卉はその間に配された弁間文といびつな配置となる。こうした内区文様に対し、外区は非常に凹凸に富む。外区内縁には大粒の蓮子がめぐり、断面三角形に近い外縁には線鋸歯文が配される。文様は、平城宮跡の6134Cに近似する。^(註9)

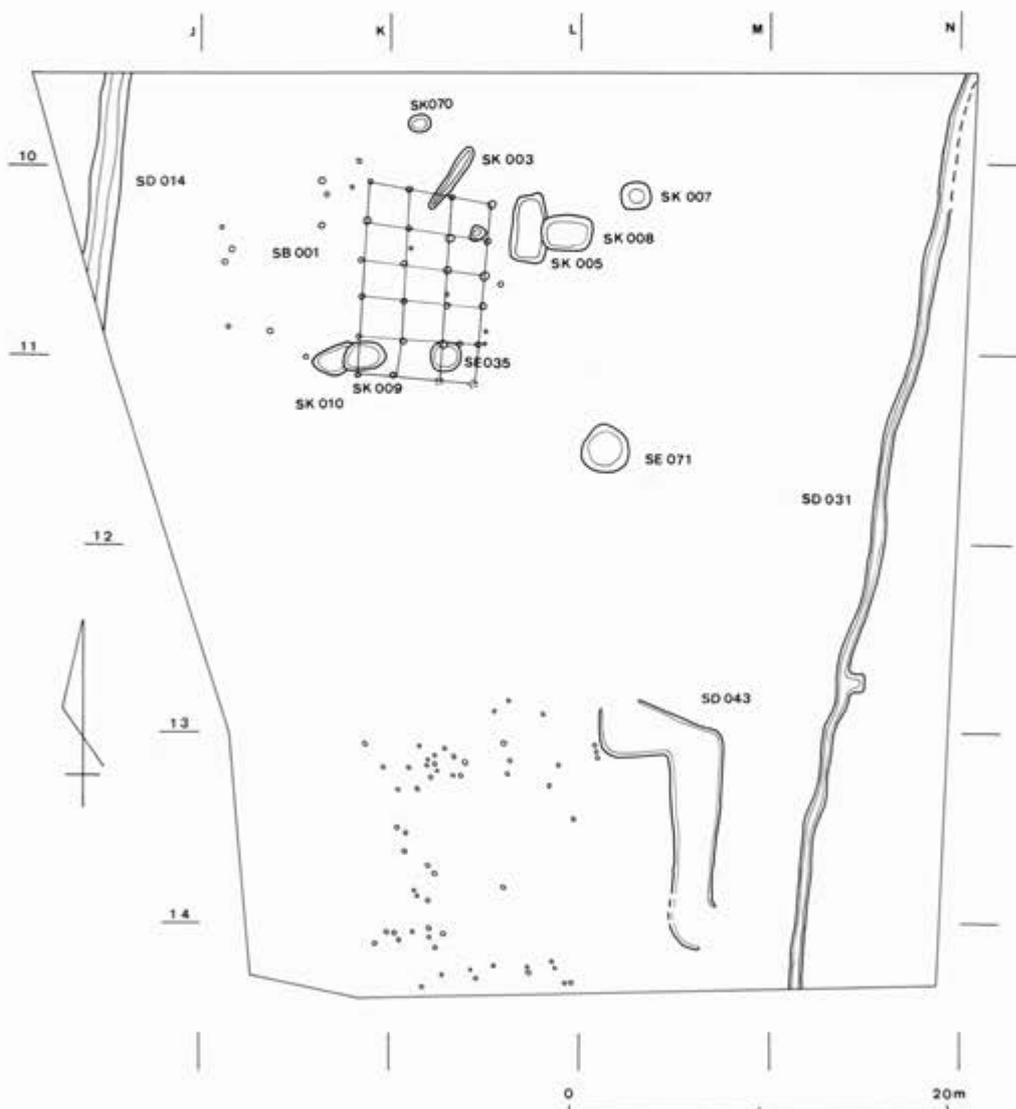
(5)平安時代末葉～鎌倉時代初頭(第1・2遺構面)

平安時代末葉～鎌倉時代初頭の遺構は、第1遺構面を中心として検出した。ただ、一部、検出が困難であったものや、重複などの関係から第1遺構面調査段階で掘削ができなかったものについては、第2遺構面で掘削を行ったものもある。

主な検出遺構には、掘立柱建物跡1棟、井戸2基、土坑7基、溝2条のほか、調査区南半部を中心に検出した素掘り溝群などがある。これらの遺構は、出土遺物や切り合い関係などから、さらに3時期に細分される(11世紀末葉～12世紀初頭、12世紀中葉～後半、12世紀末葉～13世紀初頭)。なお、11世紀末葉～12世紀後半の遺構配置図は第81図に、12世紀末葉以後の遺構は第84図に示した。

①検出遺構

A. 11世紀末葉～12世紀初頭の遺構 この時期の主な遺構には、井戸1基(S E 035)、土坑1基(S K 070)などがある。



第81図 第1・2遺構面遺構配置図(11世紀末葉～12世紀後半)

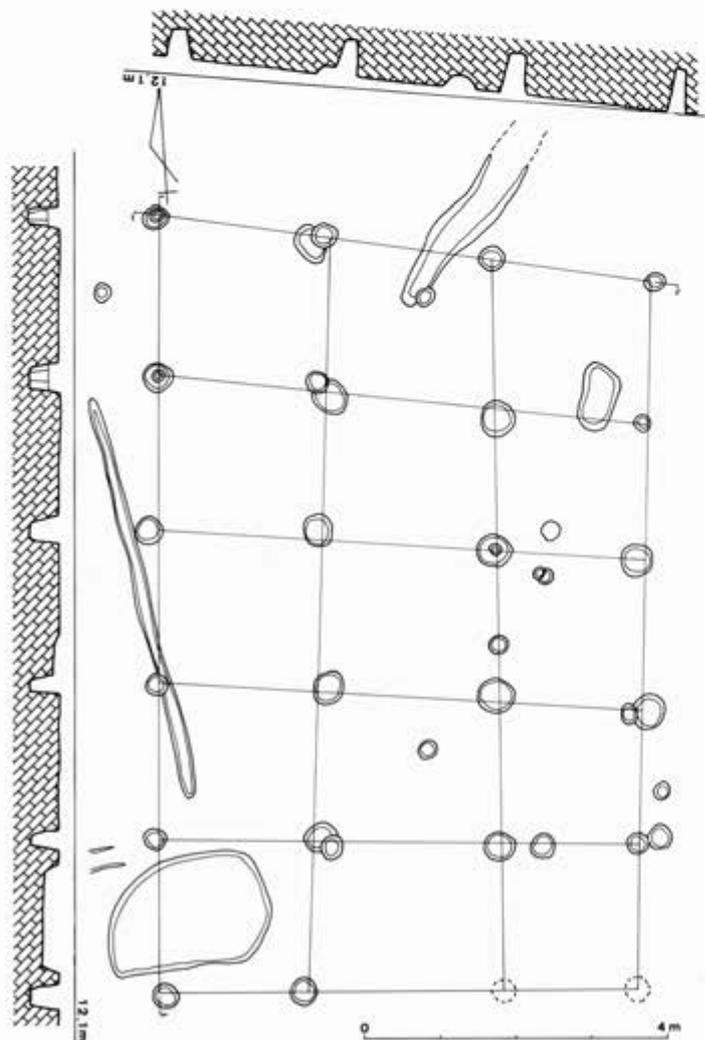
S E 035 調査区北半部中央で検出した。後述する S B 001 の柱穴と重複していたため、最終的に掘削したのは第 2 遺構面に至ってからであった。径約 1.5m の掘形をもち、深さ約 2 m が遺存する。内側では、径約 1 m の井戸枠の痕跡を確認した。

S K 070 調査区北辺中央で検出した。1.3m × 1 m の楕円形を呈し、深さ約 1.3m が遺存する。

B. 12世紀中葉～後半以降の遺構 この時期の主な遺構には、掘立柱建物跡 1 棟 (S B 001)、井戸 1 基 (S E 071)、土坑 6 基 (S K 003、S K 005、S K 007～010)、溝 3 条 (S D 014、S D 031、S D 043) などがある。

S B 001 調査区北半部中央で検出した 5 間 × 3 間の南北棟総柱建物跡である。柱間は、東西 (梁間) 約 6.3m (1 間; 約 2.1m)、南北 (桁行) 約 10.5m (1 間; 約 2.1m) を測る。柱穴は、径 30cm 前後の円形のものが多い。埋土中に炭が混入するものが多い。柱痕跡が確認されるものでは径約 10cm を測る。柱筋はやや歪つて、南東隅付近の 2 か所の柱穴は、後世の削平のため確認できなかった。主軸は、N-4°-E である。

S K 003 S B 001 の北辺でこれに重複して検出した。幅約 0.6m ・長さ約 2.5m を測る溝状を呈する。深さは約 0.2m が遺存し、埋土中から瓦器碗、土師器皿などが出土した。S B 001 に伴う土器溜まりと考えている。



第82図 S B 001実測図

器溜まりと考えている。

S K 005・008 S B 001 の東側で検出した長方形の土坑である。一部が重複し、S K 008 が先行する。S K 008 は南北約 2 m × 東西約 1.3m の長方形を呈し、深さ約 0.2m が遺存する。また S K 005 は、東西 1.5m ・南北約 0.8m の長方形を呈し、深さ約 0.2m が遺存する。S K 005 では、検出面で瓦器碗がうつ伏せに置かれた状態で出土した。

S K 009・010 S B 001 の西側で検出した楕円形の土坑である。一部が重複し、S K 010 が先行する。S K 009 は、0.8m × 0.7m を測り、深さ約 0.1m が遺存する。また S K 010 は、0.8m × 0.6m (遺存部分) を測り、深さ約 0.1m が遺存する。

S K 007 調査区北東部で検出した径約 0.6m を測る円形の土坑

である。深さ約0.3mが遺存する。

S D 014 調査区北西隅を南南西―北北東(N-4°-E)に走る溝である。幅約1.5m・深さ約0.5mを測り、断面はゆるやかな「U」字形をなす。

S D 031 調査区の東辺近くを南南西―北北東(N-4°-E)にのびる。幅約0.4m・深さ約0.3mを測り、埋土は暗黄灰色砂である。埋土中からは出土遺物がなく、時期決定の確証を欠く。

S D 043 調査区の中央やや東寄りから南方へ向かって鍵の手状に折れ曲がってのびる。幅約2m・深さ約0.6mを測るが、東肩部から南側延長部は削平を受け遺存していない。このため、ここでは溝としたが、どのような性格を有していたか、詳細は不明である。

S E 071 S B 001の南側で検出した。掘形は、径約2mの円形で、深さ約1.5mが遺存する。底には、径約50cm前後の曲物が二段に組まれて設置されていた。

C. 12世紀末葉～13世紀初頭の遺構 この時期の検出遺構は、調査区南半部を中心に検出した素掘り溝群及び、これらと一部重複する溝2条(S D 012、S D 013)である。

S D 012 調査区の南半部、後述する島畑1上で、これを南北に縦貫するように検出した。S D 013とは島畑1中央付近で交差し、これに後出することが確認される。北・南両端は削平のため、遺存していない。幅約1m・深さ約0.4mを測り、断面「U」形をなす。

S D 013 調査区の南半部、後述する島畑1上を東西に横切るように検出した。東・西両端は削平のため、遺存していない。幅約1.2m・深さ約0.6mを測り、断面「U」形をなす。

このほか、多数検出した素掘り溝群は、南半部を中心に遺存している。前段階(奈良時代～平安時代初頭)と同様に、調査区南半部では南北方向、北半部では東西方向にのびる。やはり、畑作の痕跡を示すと考えられる。

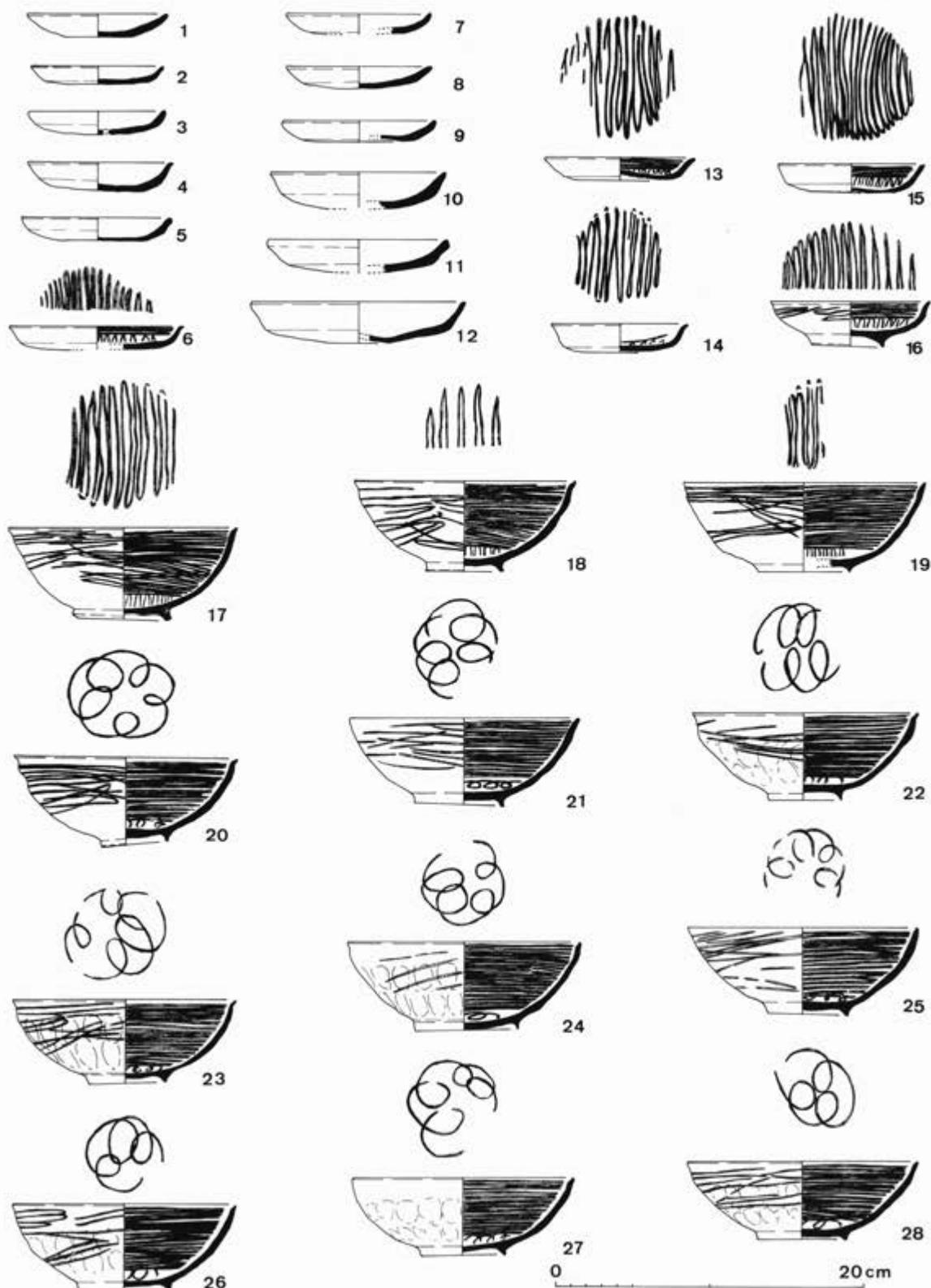
②出土遺物(第83図)

この時期の出土遺物は、井戸、土坑、溝及び掘立柱建物跡の柱穴などから出土した。それぞれ、上記の3期に対応するものがあるが、12世紀末葉～13世紀初頭のものには小片が多く、図化できるものが限られた。このため、ここでは遺存状況が良好な、土坑(S K 003)及び井戸(S E 035、S E 071)から出土した11世紀末葉から12世紀後葉までの資料の中から主なものを図示することとした。

S E 035出土土器(1～6・17・18) 土師器皿(1～5)・瓦器椀(17・18)・同皿(6)がある。土師器皿には、口径9cm前後・器高1.4cm前後を測るもの(1～3)と、口径10cm前後を測るもの(4・5)がある。後者は、口縁端部が外側へわずかにつまみ出される。なお、3には、底部中央付近に径5mm程度の円形の穴が穿たれている。瓦器皿(6)は、やや大形の土師器皿とほぼ同様の形態をなす。口縁部付近の小破片で口径約11.5cmに復原される。内面見込みにはジグザグ状の暗文を施す。瓦器椀(17・18)は、口径14.5cm前後・器高6cm前後を測り、いずれも底部に断面台形に近い高台を付す。内面のヘラ磨きは密に施され、内面見込みにはジグザグ状の暗文を施す。外面のヘラ磨きは、下半部にまで及ぶ。楠葉型瓦器椀のI期でも後半期(11世紀末葉～12世紀初頭)に属すると考えられる。

S K 003出土土器(7～11・13・19～25) 土師器皿、瓦器椀、同皿、須恵器ねり鉢などがある。

ここでは、土師器皿(7~11)・瓦器碗(19~25)・同皿(13)を図示した。土師器皿には、口径9.5~10cm前後・器高1.5cm前後を測るもの(7~9)と、口径11.5cm前後を測るもの(10・11)がある。瓦器皿(13)は、形態的には前者に近く、口径9.8cm・器高1.5cmで、底部がやや窪む。内面見込み



第83図 出土遺物実測図(8)

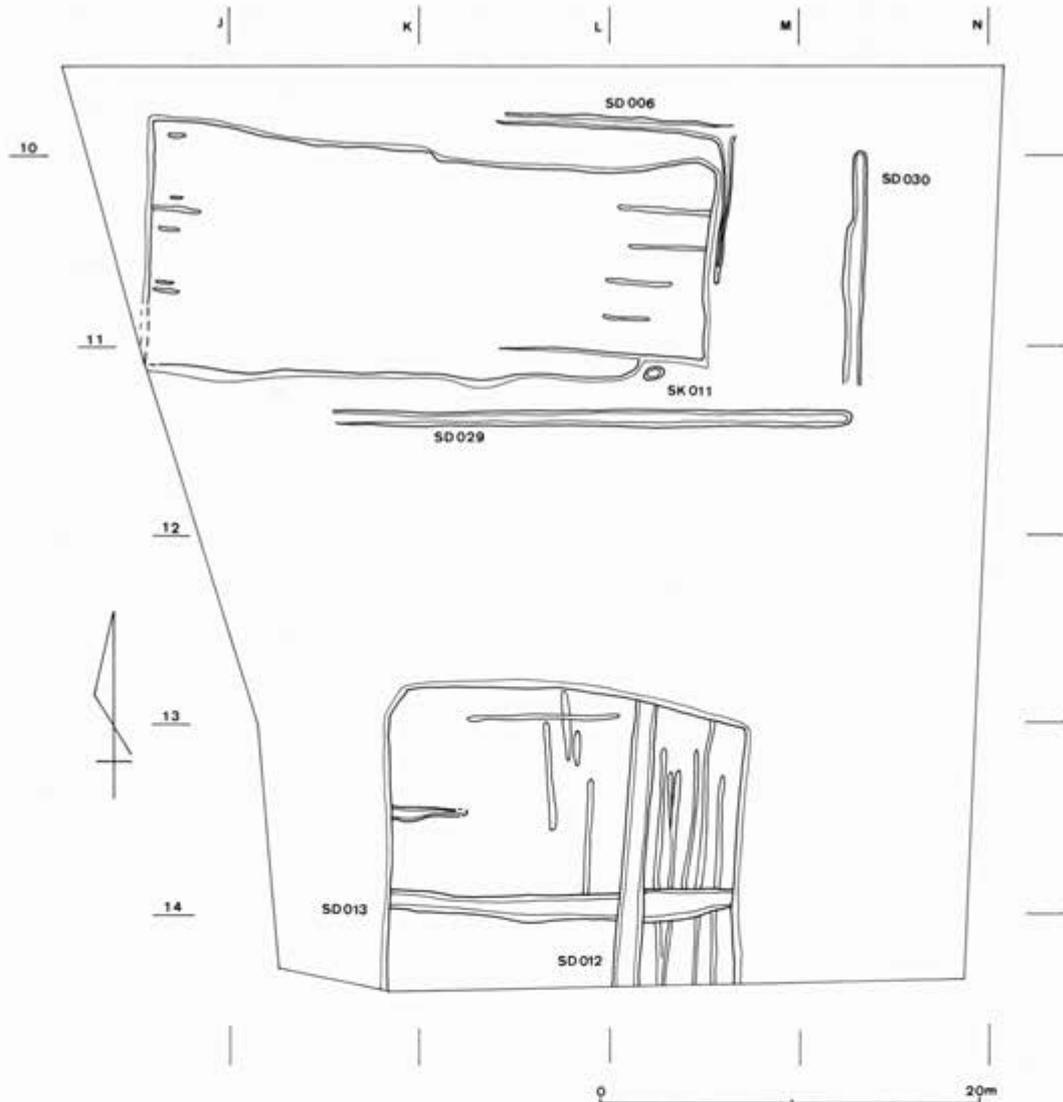
にはジグザグ状の暗文を施す。瓦器椀(19~25)は、口径14.5~15cm・器高5.6~5.8cmを測るものが多い。なかに、口径15.6cmに復原されるもの(19)などもある。高台は、断面三角形に近くなる。内面には密にヘラ磨きが施され、見込みには連結輪状の暗文が認められるものが大半であるが、先述の19のようにジグザグ状の暗文をもつものが1例認められた。外面は中位やや下方までヘラ磨きを施すが、上記のS E 035出土例のような分割性は失われつつある。19など、わずかに古相を呈するものも含まれるが、楠葉型瓦器椀のⅡ期でも前半期(12世紀中葉を前後する時期)に属する資料と考えられる。

S E 071出土土器(第83図12・14~16・26~28) 土師器皿(12)・瓦器椀(26~28)・同皿(14~16)がある。土師器皿(12)は、口径13.7cm・器高2.7cmを測る大形品である。瓦器皿(14・15)は、14が口径9cm・器高2cm、15が9.6cm・器高1.9cmを測る。内面見込みにはジグザグ状の暗文を施す。瓦器椀は、口径15.4~15.8cm・器高5.2~5.6cmを測る。内面見込みには連結輪状の暗文が施される。外面のヘラ磨きは、器壁の遺存状況が悪いせいもあるが、一層分割性が失われる傾向を認める。なお、27には外面のヘラ磨きは認められない。形態的に、先述のS K 003出土資料と大きな差異は認められないが、器高がやや低くなることや外面のヘラ磨きの状況などから、これに若干後出するもので、楠葉型瓦器椀のⅡ期でも後半期(12世紀後葉)に属すると考えている。

(6) 鎌倉時代以降(第1遺構面)

鎌倉時代以降の遺構としたのは、すでに再三にわたってふれている調査区の南北2か所で検出した鳥畑と、これに伴うと考えている数条の溝などである。

鳥畑は、現在も一帯で認められる、周囲の水田より一段高く形造られた畑地である。この地区では、調査着手段階ですでに上方部が削平された状態となり、水田下に埋没していた。このため、表土を除去した段階で、土色の変化によって鳥畑の存在が確認できた。また、上方部が削平されていたこともあり、ここで鳥畑として検出した遺構は、鳥畑が造成されはじめた初期の状態を示している。すなわち、こうした鳥畑の多くは、同一か所にかさあげを繰り返しつつ、現在まで営まれ続けているが、ここでは造成以後にかさあげされた土砂はすでに削平されていたため、造成以後の状況は確認できなかつたといえる。なお、その造成に際しては、もともと広範囲な微高地であった部分で、鳥畑部の周囲を削りとり、その土砂を鳥畑部に盛り上げる作業が行われていた。このため、再三述べたように、鳥畑以外の部位では第4遺構面近くまでが大幅な削平を受けることとなった。南側で検出した鳥畑1は、昨年度の調査で検出した鳥畑の北側延長部分に当たる。その成果と合わせ、南北約60m・東西約25mの南北に長い長方形を呈することが明らかとなった。また、北側の鳥畑2は、東西約30m・南北約13mを測る東西に長い長方形を呈し、面積では鳥畑1の約4分の1である。両鳥畑上では、最も新しい時期の遺構として、13世紀初頭の素掘り溝群などが確認されており、出土遺物もこの頃のものを最後に激減する傾向を認める。こうしたことから、ここで確認した鳥畑の造成時期は、13世紀後半頃を想定している。また、鳥畑の周囲は水田として利用されていた。ここで検出した溝(S D 029・030など)は、いずれも鳥畑の周囲を囲む



第84図 第1遺構面遺構配置図(13世紀以降)

ようにあり、水田部と鳥畑部との区画に関するものであったと考えている。ここには0.6mに及ぶ水田耕作土としての暗灰褐色土の堆積を認めたが、この中にはわずか数mmの厚さであるが、洪水による堆積物と思われる乳灰色砂層が間層として幾層も認められた。鳥畑造成以後、一帯が被った洪水の頻度を物語っているのであろう。

5. ま と め

以上、平成7年度発掘調査の概要である。

今年度の調査では、まず試掘調査によって最終的に内里八丁遺跡の範囲が確定された。すなわち、H・I地区とした部位が遺跡の範囲外であることが確認され、第二京阪自動車道建設事業に伴う事前調査では、G地区以南の部分調査範囲として確定することができた。

また、D2地区の調査では、昨年度の調査に引き続き、弥生時代から鎌倉時代にわたる一帯の土地利用の変遷が明らかとなった。以下では、D2地区の主な調査成果をか条書きに記し、まと

めとしたい。

①まず、特筆すべき点として、弥生時代中期の土坑が確認されたことがあげられる。従前の調査では、弥生時代後期末葉までは遺構・遺物が確認されていたものの、これをさかのぼる時期の遺構は皆無であった。今回の調査では、土坑を2基検出したにとどまる。しかし、状況から見て、近隣にこの時期の集落が営まれていたことは確実と判断される。

②続く弥生時代後期末葉(庄内期)には、この地に集落が営まれた。今年度の調査で8基、昨年度に5基の合計13基の竪穴式住居跡を検出したこととなる。さらに、今年度調査区の北端で3基の竪穴式住居跡が検出されたことは、集落跡がこの北側へも広がっていることを示している。むろん、出土土器を細かくみていけば、これらは単一時期とはいいがたい面もあるが、徐々に場所を変えながら庄内併行期を中心に集落が広がっていたと理解される。なお、集落跡が立地しているのは微高地の南端部に相当しており、過去の調査成果でこの時期の水田遺構や方形周溝墓が検出されたのは、微高地の縁辺に相当する部分である。

③古墳時代前期に至ると集落は別の場所へ移動したようで、この時期に相当する遺構はわずかに畑作の痕跡と考えられる素掘り溝群が検出されたにすぎない。

④古墳時代中期末葉～後期初頭と考えている時期には、再びこの地に集落が営まれた。今回の調査で7基、昨年度に3基の合計10基の竪穴式住居跡が検出された。削平部分を含めると、さらに多くの住居が営まれたと考えられる。この時期の集落跡は、特に南山城地域では発見例が少なく、今後この地域の古墳時代を考える上で、きわめて貴重な資料といえる。

⑤奈良～平安時代には各種の遺構が認められるようになる。この時期の遺構としては、これまでの調査でも多くの掘立柱建物跡などが検出されており、本文中でもふれたように、現状では建物跡の帰属する細かな時期区分を明確にすることが急務である。今回の調査では、掘立柱建物跡(6棟)、竪穴式住居跡(1基)をはじめ、溝、土坑などを検出した。検出した遺構群に関しては、ほぼ、掘立柱建物跡が8世紀中葉を中心とする時期で、溝(S D032)及びこれと方向を同じくする素掘り溝群が9世紀前葉を中心とするものと判断している。すなわち、9世紀頃にこの地は、居住区から耕作地へと転化されたようである。こうした土地利用の変遷からすれば、掘立柱建物跡が、足利健亮氏のいう「古山陰道」との関連を検討すべきであると同様、素掘り溝群の存在は「延喜式」に記載された「奈良園」との関連を十分に検討すべきと思われる。

⑥平安時代後半以後、この地は耕作地としての土地利用が主流となる。調査では、12世紀中葉頃の掘立柱建物跡を検出しており、一時期は居住区として利用されていたことは確認される。しかし、それも長くは続くことはなく、12世紀後半以後は、近年まで耕作地として利用されてきた。

⑦平安時代末葉以後の耕作地としての土地利用の変遷過程において最も注目されるべき点は、鳥畑の造成であろう。これまでの調査成果でもふれられているが、ここで検出される鳥畑は、洪水による堆積物を掻き上げることで形成されたのではなく、明らかにその周囲を削り取って造成されたのである。こうした面では、この地域における鳥畑造営に関して、近くを流れる木津川の洪水といった面がその形成に大きく関係したことは十分考えられるが、もともと水係りの悪い微

高地であるこの地における中世の水田開発といった面からも検討する必要があるだろう。

(森下 衛)

注1 過去の内里八丁遺跡の調査成果に関しては、下記の報告を参照されたい。

「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990、「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991、「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992、「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993、「京都市南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994、「京都市南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995、「京都市南道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要(1)内里八丁遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第67冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 調査参加者は以下のとおり。

奥平廣子、福田玲子、辻井和子、栃木道代、森田千代子、与十田節子、平井真由美、坪内達雄、小川正志、長谷川洋、上田真一郎、小嶋ふゆ子、吉永直子、前田 穰、吉田 幸、高島明日香、永沢拓志、高橋あかね、菅谷友一、細山田章子、北村伊佐子、堀ノ内淳、宮本美紀、打矢泰之、大林祐司、前野博史、本多伯舟、市原信幸、浦島華代、渡辺 努、山端紀明、中村幸子、永濱寛子、長島広美

注3 特に、高橋あかね、上田真一郎、小川正志の3名には、原稿・挿図作成に関し、多大な協力を得た。

注4 以下に記す一帯の地形に関しては、下記の文献を参考としている。なお、遺跡の立地などに関しては、多分に私見を交えている。

中塚 良「木津川下流域の表層地質と遺跡立地—八幡木津川河床遺跡・新田遺跡を例に一」(『京都考古』第33号 京都考古刊行会) 1984

注5 鳥居治夫「山城国久世郡・綴喜郡・相楽郡に於ける条里の考察」 1986

注6 足利健亮「日本古代地理研究」 1985

注7 八幡市教育委員会が、近隣で実施した発掘調査でも同様の噴砂が確認されており、そこでは慶長の大地震に伴うと考えられている。

「内里遺跡発掘調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第13冊 八幡市教育委員会) 1994

注8 甕の体部内面上半に施されるナデ調整としているものは、指などによるとは限らず、板状の硬質のものが使用されているものを含んでいる。

注9 「平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧」 奈良市教育委員会 1996

注10 瓦器碗に関しては、森島康雄の教示を得た。また、記述に関しては、下記の文献を参考とした。

森島康雄「瓦器碗」(『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会) 1995

5. 木津地区所在遺跡平成7年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、当調査研究センターが、多年にわたって住宅・都市整備公団の依頼によって、関西文化学術研究都市関連の開発地域に所在する遺跡群を対象に実施している。平成7年度は、京都府相楽郡木津町大字木津小字釜ヶ谷に位置する釜ヶ谷遺跡の調査を行った。

釜ヶ谷遺跡は、昭和59年度(第1次調査)に5か所、平成6年度(第2次調査)に2か所の試掘トレンチ調査を実施し、奈良時代～中・近世の遺物を含む包含層や、奈良時代の流路跡を検出して^(注1)いる。これらの調査の結果を踏まえ、本年度は、木津新池南側の1番地から21番地にかけて9か所のトレンチ(以降、トレンチの位置をbtと略称する)を配置した。その結果から、6～9bt、17・18・21btを拡張して、奈良時代の墨書人面土器などを含む流路を確認した。

調査期間は、平成7年4月17日～同年8月21日で、調査面積は約1,800㎡である。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同調査員有井広幸が担当し、本報告を有井が執筆した。調査及び報告書の作成にあたっては、多くの調査補助員・整理員の協力をいただいた^(注2)。また、調査期間中は、京都府教育委員会・木津町教育委員会など関係機関のほか、多方面の方々から御協力・助言をいただいた。なお、本調査に関わる経費は、住宅・都市整備公団(関西文化学術研究都市整備局)が負担した。

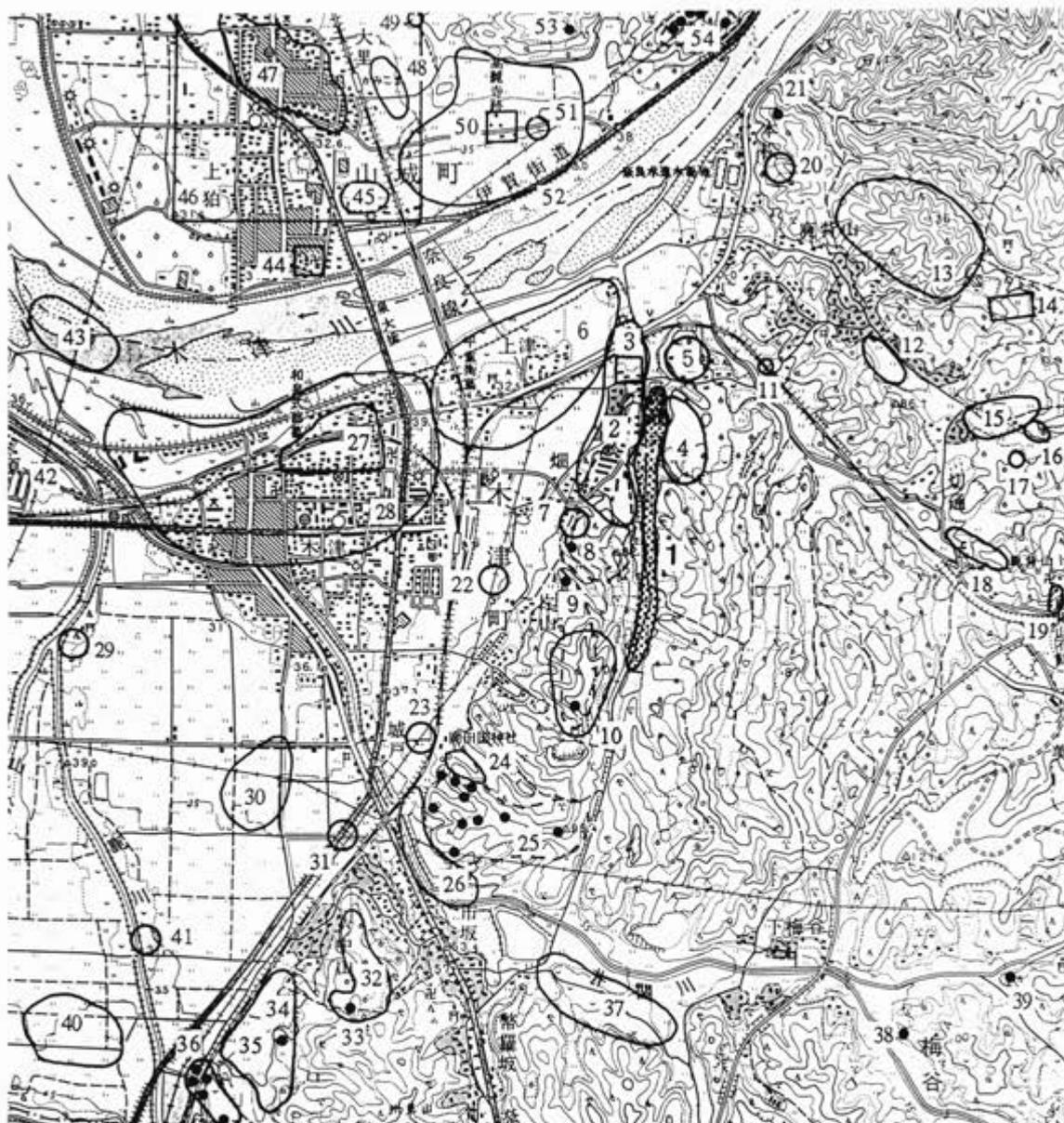
釜ヶ谷遺跡第3次

1. 調査の経過(第85・86図、図版第41-(1)・(2))

釜ヶ谷遺跡は、木津町東部に広がる丘陵地帯の西端をほぼ南北に貫く、全長約2km・最大幅約100mの細長い谷間の北半に位置し、遺跡の全長は約1kmに及ぶ。標高は南側で約55m、北側で約42mを測り、北へ向かってゆるやかに傾斜している。現況の谷内には、支谷も含め、何か所かにため池が築かれており、残りのほとんどの部分に、棚田状の水田が広がっている。谷内を流れる釜ヶ谷川は用水化され、遺跡付近では、谷の西端を北流し、木津川へ注ぐ。

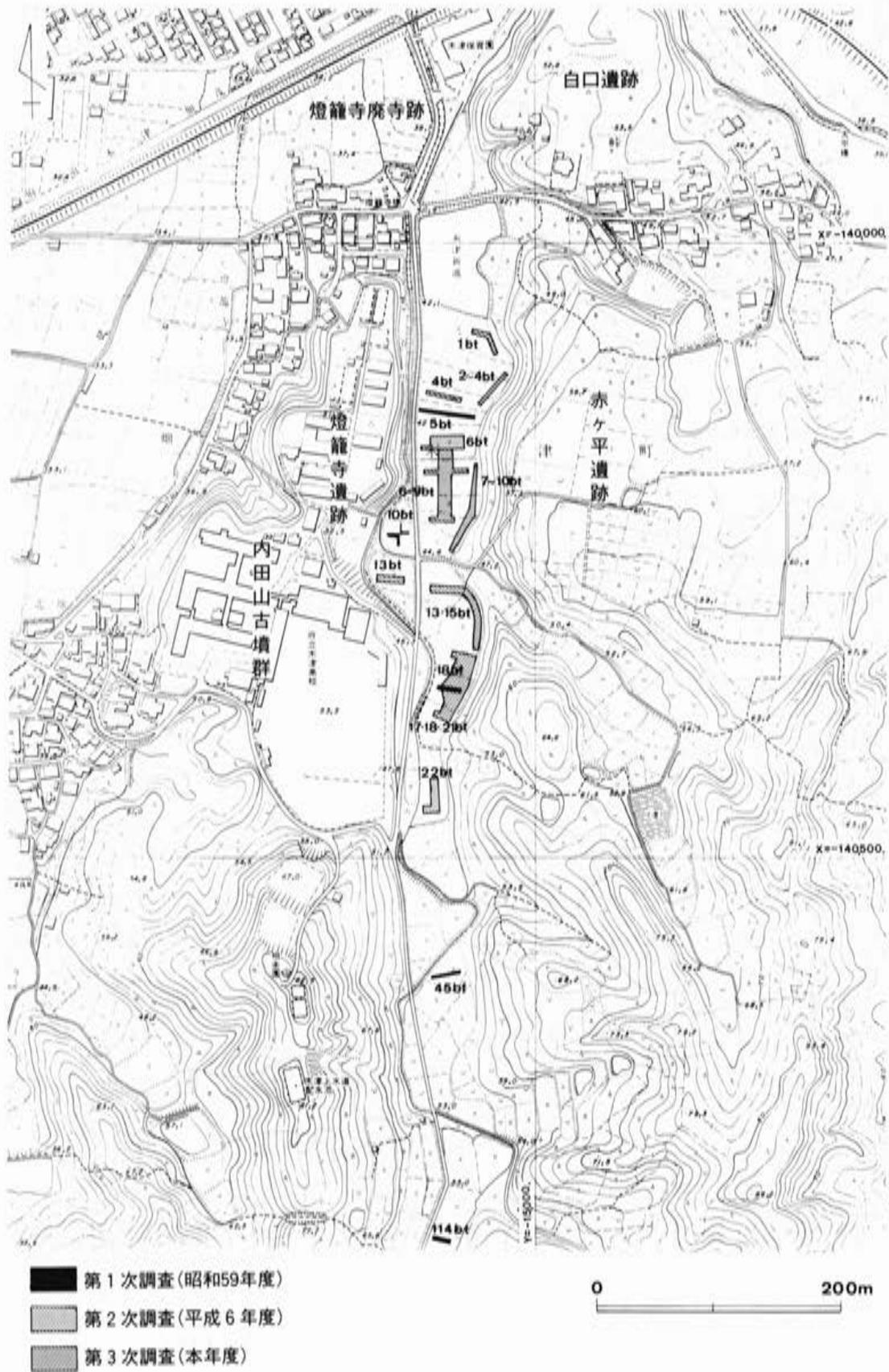
谷の西側の丘陵は、標高約50～105mを測り、木津地域はもとより南山城一帯を望める場所である。この丘陵地には多数の遺跡が分布するが、特に、現在府立木津高等学校が所在する北端一帯は、弥生時代後期の竪穴式住居跡群・方形周溝墓、古墳時代中～後期の古墳群、奈良時代の遺構も分布しており、複合遺跡(燈籠寺遺跡・内田山古墳群)として知られる。また、釜ヶ谷遺跡の

北側に所在する燈籠寺廃寺の調査では、縄文時代中期～後期の土器、7世紀の軒平瓦、奈良時代の須恵器・土師器、山城国分寺と同様な軒瓦などが出土している。東側の丘陵上の赤ヶ平遺跡は、^(注3)標高約60mを測り、すでに須恵器・土師器の散布地として知られ、また昭和59年度の調査では、



第85図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | | | |
|-------------|------------|-----------|-------------|------------|
| 1. 釜ヶ谷遺跡 | 2. 燈籠寺遺跡 | 3. 燈籠寺廃寺 | 4. 赤ヶ平遺跡 | 5. 白口遺跡 |
| 6. 上津遺跡 | 7. 内田山遺跡 | 8. 内田山古墳群 | 9. 片山古墳群 | 10. 木津城跡 |
| 11. 鹿背山瓦窯跡 | 12. 車谷遺跡 | 13. 鹿背山城跡 | 14. 鹿山寺跡 | 15. 巾ヶ谷遺跡 |
| 16. 巾ヶ谷窯跡群 | 17. 鹿背山焼窯跡 | 18. 柳谷遺跡 | 19. 鹿背山不動窯跡 | 20. 藪ヶ浦遺跡 |
| 21. 荒堀古墳 | 22. 片山遺跡 | 23. 岡田国遺跡 | 24. 大谷窯跡 | 25. 天神山古墳群 |
| 26. 文廻池遺跡 | 27. 木津平城跡 | 28. 木津遺跡 | 29. 田中遺跡 | 30. 入後遺跡 |
| 31. 奈良道遺跡 | 32. 西山遺跡 | 33. 西山塚古墳 | 34. 瓦谷遺跡 | 35. 瓦谷古墳 |
| 36. 上人ヶ平遺跡 | 37. 菩提遺跡 | 38. 中山古墳 | 39. 北中ノ谷古墳 | 40. 弓田遺跡 |
| 41. 古川遺跡 | 42. 吐師津遺跡 | 43. 木津北遺跡 | 44. 泉橋寺 | 45. 鶴白遺跡 |
| 46. 山城国府推定地 | 47. 狛城跡 | 48. 野田芝遺跡 | 49. 高井手窯跡 | 50. 高麗寺跡 |
| 51. 高麗寺瓦窯跡 | 52. 上狛東遺跡 | 53. 平ノ畑古墳 | 54. 千両岩古墳群 | |



第86図 トレンチ配置図(1/5,000)

サヌカイト製石器などが出土している。このように、釜ヶ谷遺跡は、さまざまな要素を含むこれらの遺跡に囲まれ、その影響を受けていることが推察できる。

釜ヶ谷遺跡では、すでに行われた昭和59年度の調査において、弥生時代の石器、奈良時代の土馬・須恵器・土師器、中世の瓦器・陶磁器などが出土している。また、平成6年度の調査では、6btで、奈良時代の河川跡と墨書人面土器・土馬などを確認している。

今回の調査では、昨年度検出した奈良時代の河川跡を中心に調査範囲を拡張することと、窯跡などの分布の有無の確認を主な目的として、山裾沿いに試掘トレンチを配置した。また、恭仁京に関連して、この谷筋が南北に道路として利用されたとする説もあり^(註4)、道路遺構にも注目して谷を横切るように幾つかのトレンチを配置した^(註5)。

2. 調査の概要

(1) 基本層序(第87図)

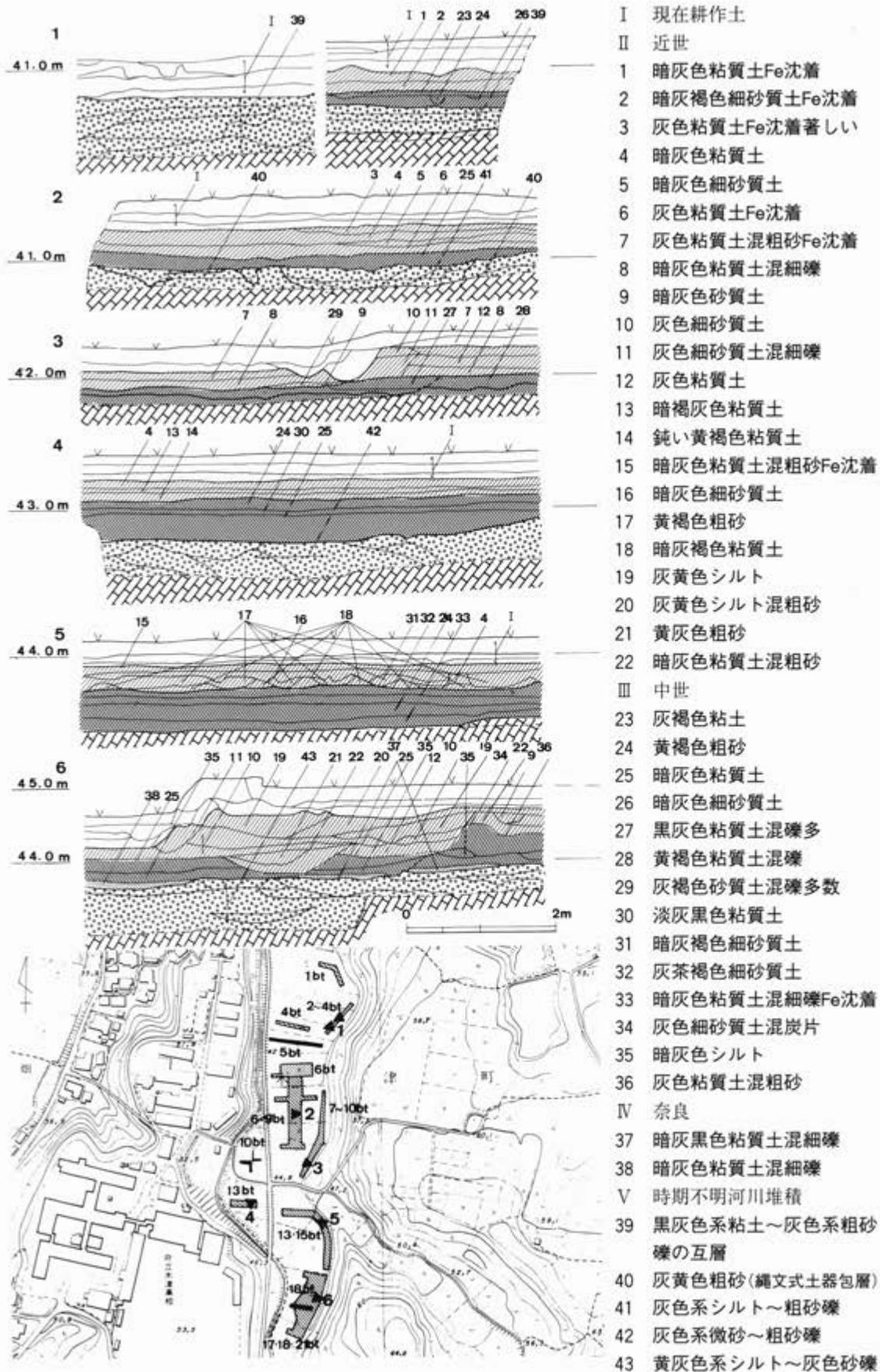
釜ヶ谷遺跡内の地層は、大きく耕作土関係の堆積層と、河川関連の堆積層に分けられる。耕作土関係の堆積層は、中世遺物包含層から始まり、近世遺物包含層、現在の水田耕作土と、場所によりそれぞれ厚さを変化させるが、ほとんどのトレンチで確認できた。ただし、1～2bt付近では、現在の耕作土層の下は、植物遺体を含む粘土と砂の互層が厚く堆積しており、この付近は木津新池関連の沼状地形が長く続いていたと考えている。中・近世包含層は、ほぼ水平堆積をしており、旧水田耕作土と考えている。各層の重なりは上層ほど分布域が広がり、水田が大型化しているようすが観察できた。中世包含層は、暗灰色系～灰黒色系粘質土または細砂質土であり、近世包含層は灰色系粘質土または細砂質土が主で、鉄分の沈着が著しい。いずれの層でも含まれる遺物は、小片化しており、ほとんど図化できない。

河川関連の堆積層は、奈良時代の自然河川であるNR01の堆積が主となる。NR01の堆積土は、灰色系微砂～砂礫であり、場所によって鉄分沈着が見られる。砂礫は、礫径が10cm未満で、21bt付近から15bt付近までに堆積が目立つ。この層が分布する範囲では、流路の底も深く、傾斜も下流に比べ急である。13bt以北の下流では、微砂～粗砂の堆積が主となる。流路の幅は広くなり、底も浅くなる。埋土内に植物遺体はほとんど含まれていない。

地山に相当する層も何か所かで確認できた。18bt付近では、東側で堅く締まった礫の混在する黄褐色粘質土がNR01の肩になっていたし(標高約44m)、7～10btでも同様の層を確認した。2bt付近では、堅く締まった青灰色粘土質シルトを標高40m前後で確認した。

(2) 各トレンチの概要

1bt(図版第41-(3)) 調査地北端、木津新池南岸から約10m南に、長さ約25m・幅約4mの規模で配置した。地形に合わせ、中央で折れ曲がった平面形となった。深さは地表下約1.6mまで下げたが、遺構・遺物は出土しなかった。現耕作土直下で、造成土が厚い部分で約0.7mほど堆積している。さらに下層は、植物遺体を含む粘土と砂の互層の堆積があり、この付近が近・現代に沼地状の地形を造成して水田化したと判断した。



第87図 第3トレンチ断面図

2～4bt(図版第41-(4)) 1btとの南側約10mの東斜面掘付近に、長さ約30m・幅約3mの規模で配置した。土の堆積状況は、北側と南側で大きく変わる。北側は、1bt同様の堆積状況であるが、4bt付近から南は、包含層の水平堆積状況が観察できた。

出土遺物は少ない。南側のNo.38層から奈良時代の須恵器片が1点出土し、さらに、上層の中世包含層から瓦器小片が出土した程度である。

4bt(図版第42-(1)) 2～4btの西側に、長さ約30m・幅約3mの規模で配置した。地表下約1.5mまで掘り下げ、標高40.5m前後で明黄褐色砂質土の地山と判断した層に達した。その上層では、中世以降の包含層が水平に安定した状況で堆積している。トレンチ西側の地山面では、水田耕作に関連すると考えている牛足跡と判断した偶蹄目の足跡が散在した。地山面は、トレンチ中央から東側が徐々に下がり、その上面に灰黒色粘質土の沼状堆積層が現われる。この層は、瓦器片を含み、1bt・2～4btの沼状堆積層につながると考えている。

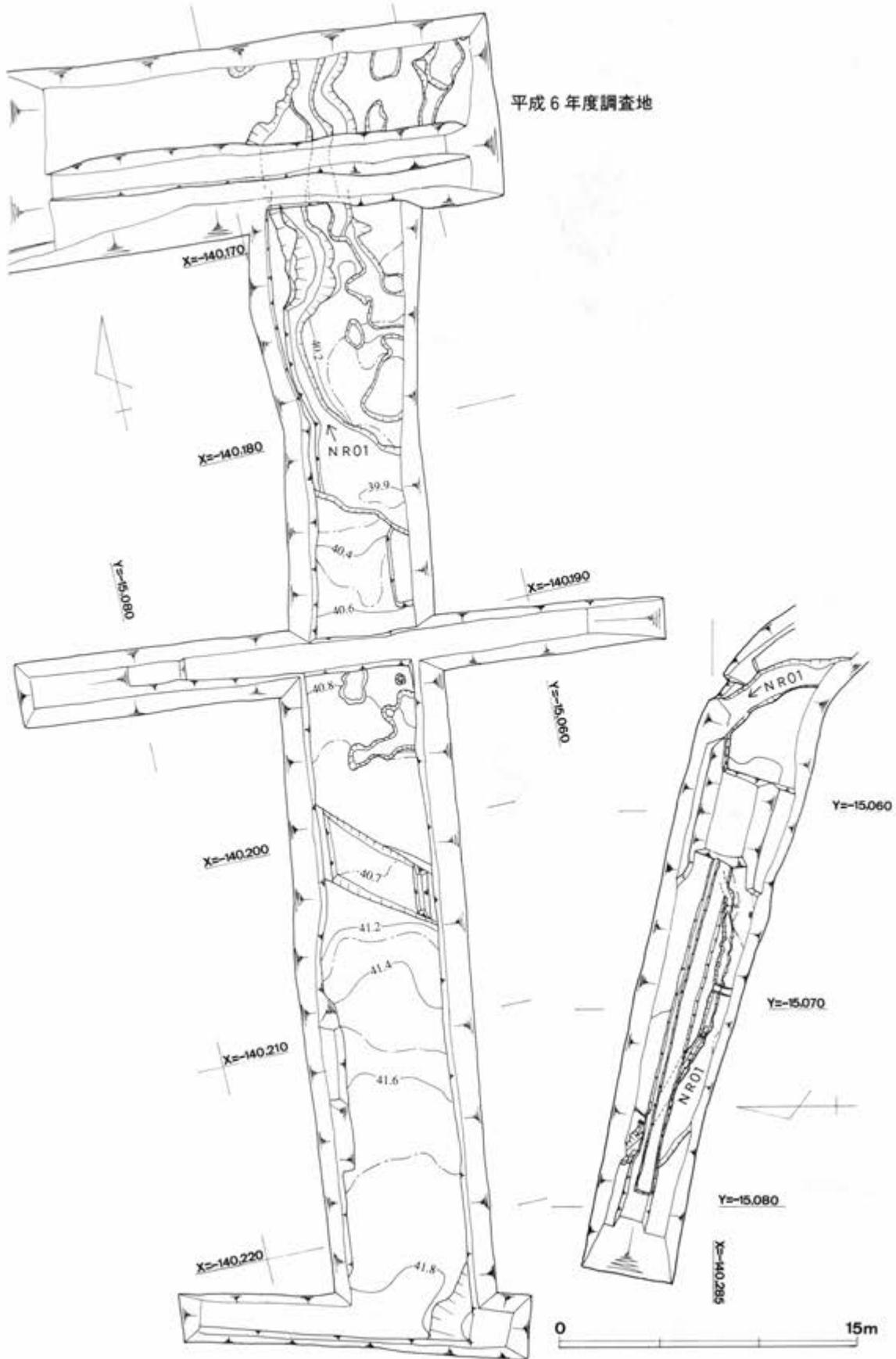
出土遺物は、包含層から瓦器・土師器・須恵器の小片が少量出土した。

6～9bt(第88・89図、図版第45) 昨年度調査した6btに続いて調査域を南方向に拡張して設けた、長さ約58m・幅約8mの規模のトレンチである。中世以降の包含層の堆積は、南側では比較的浅く、現地地表下約0.8mで、黄褐色砂礫の地山層となる。北側では現地地表下約1.5mに及ぶ。検出遺構は、トレンチ北端部分で、奈良時代の流路であるNR01が、トレンチ東側壁から北側の昨年度調査地方向へ流れる。この他、7bt付近では、時期不明の流路が南東から北西方向へ流れ、東南隅で時期不明の流路の西岸を一部確認した。また、流路としては確認できなかったが、7bt中央東壁の灰黄色粗砂層から縄文時代晩期の深鉢片(141)が出土しており、縄文時代までさかのぼれる河川関連堆積層が分布している可能性がある。

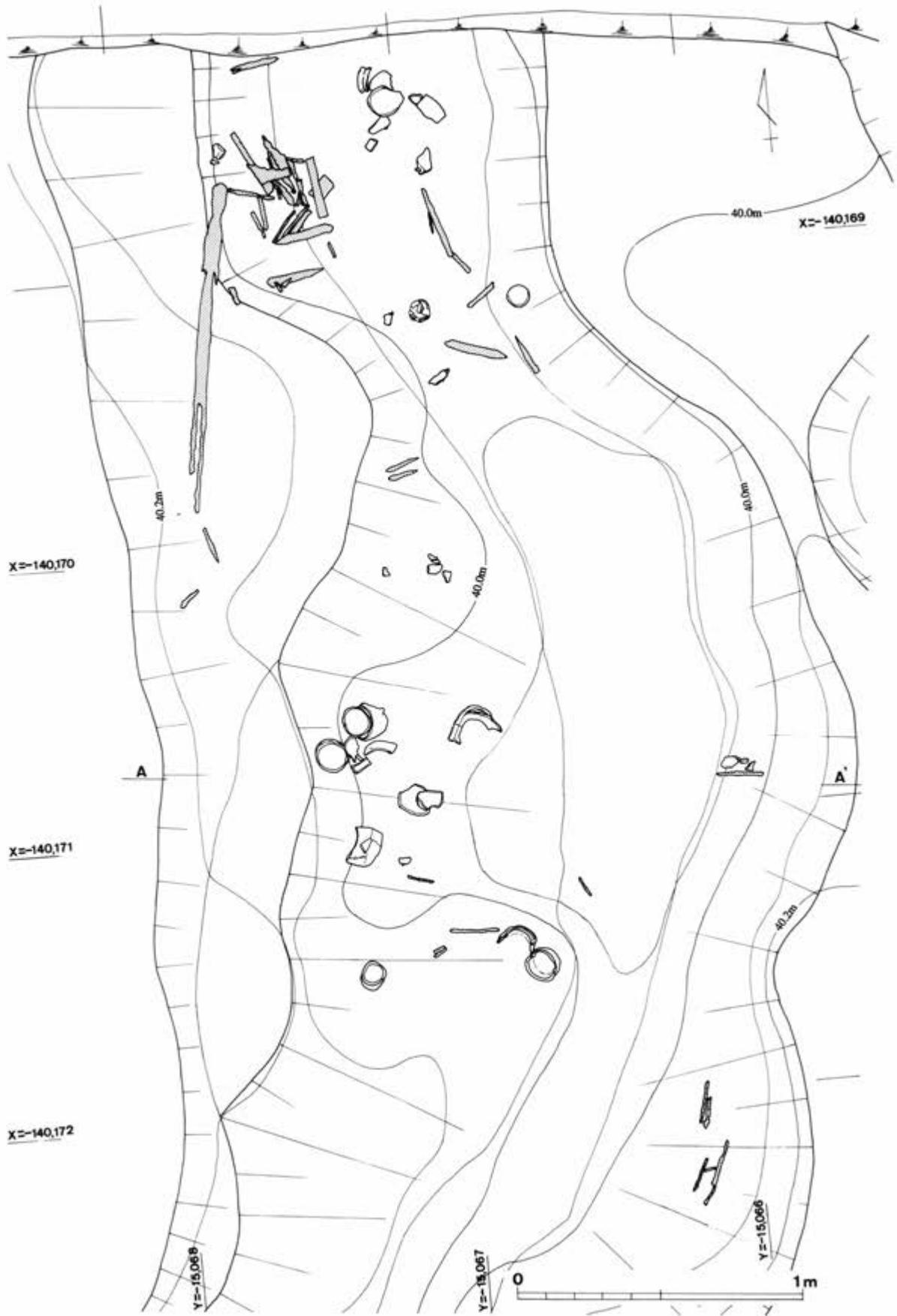
トレンチ北端部で検出した奈良時代の流路(NR01)は、幅約2.1m・深さ約0.4mの規模で、断面は弓形である(第91図C-C')。流路内の埋土は、灰色微砂～砂礫が主で、西岸寄りに灰黒色シルト層が分布する。この付近からは、葦とされている植物遺体が流路に沿って多数出土しているので、湿地状になっていた部分にゆるやかな流れがあったと考えている。

遺物の出土は、流路の西岸から中央付近にかけて、トレンチ北端から長さ約4.5mの範囲に集中し、それ以南からは墨書土器の小片(31～33)が少量出土したにすぎない。遺物がまとまって出土した地点の南端には、斎串が数点出土し、その内3点は斜めに刺さったような状態で出土した。その北側にミニチュアカマド類がまとまって出土した。カマド・カマコ・甌は、この付近で2セット出土しており、特に98のカマドと92のカマコは、98に92が組み合わせられた状態で、流路西肩から中央に向けて倒れたように出土している。また、その周辺から墨書人面土器(24・25)と、それと同形式の土器(55・56)もまとまって完形で出土しており、一括遺物と考えている。

この土器群の北側には、斎串がさらに数点出土し、その北側で人形と、斎串などの木製品が重なって出土し、その付近の流路内から墨書人面土器などが何点か出土した。人形は、頭部を北へ向け、流路の西肩よりやや下がった場所から出土した。頭部と脚部にかけてはほぼ水平状態であった。他の木製品は、流路中央の底付近から、広葉樹の葉の遺体と重なりあって出土した。墨書



第88図 6～9bt、13・15bt平面図(1/300)



第89図 6 bt 平面図 (1/20)

人面土器類は、26・27・35、及びそれと同形式の土器(52・60)などがその東側から完形に近い状態で出土している。

また、転用硯と考えている須恵器杯蓋(107)や、墨書のある須恵器杯片(36)もこの付近の出土である。107と同一個体と考えている破片は、昨年度の調査でも出土しており、この付近で使用したものを投棄したと考えている。

このほかの出土遺物は、包含層から、銅銭(159)・瓦器・土師器・須恵器の小片が出土している。また、NR01東側の浅い窪地内の灰色砂礫層からは、弥生時代後期の壺底部(145・147)などが何点か出土しており、この時期の流路も重複している。

7～10bt(図版第42-(2)) 6～9btの東側山裾沿いに、長さ約65m・幅約3mの規模で配置した。トレンチ北端で地表下約0.6m、南端で約0.8mで地山と判断した礫混じりの明黄灰色粘質土に達した。近世及び中世包含層は、断続的に厚さを変化させながらも分布する。浅い鋤溝が南端で確認できたほかは、顕著な遺構は検出できなかった。

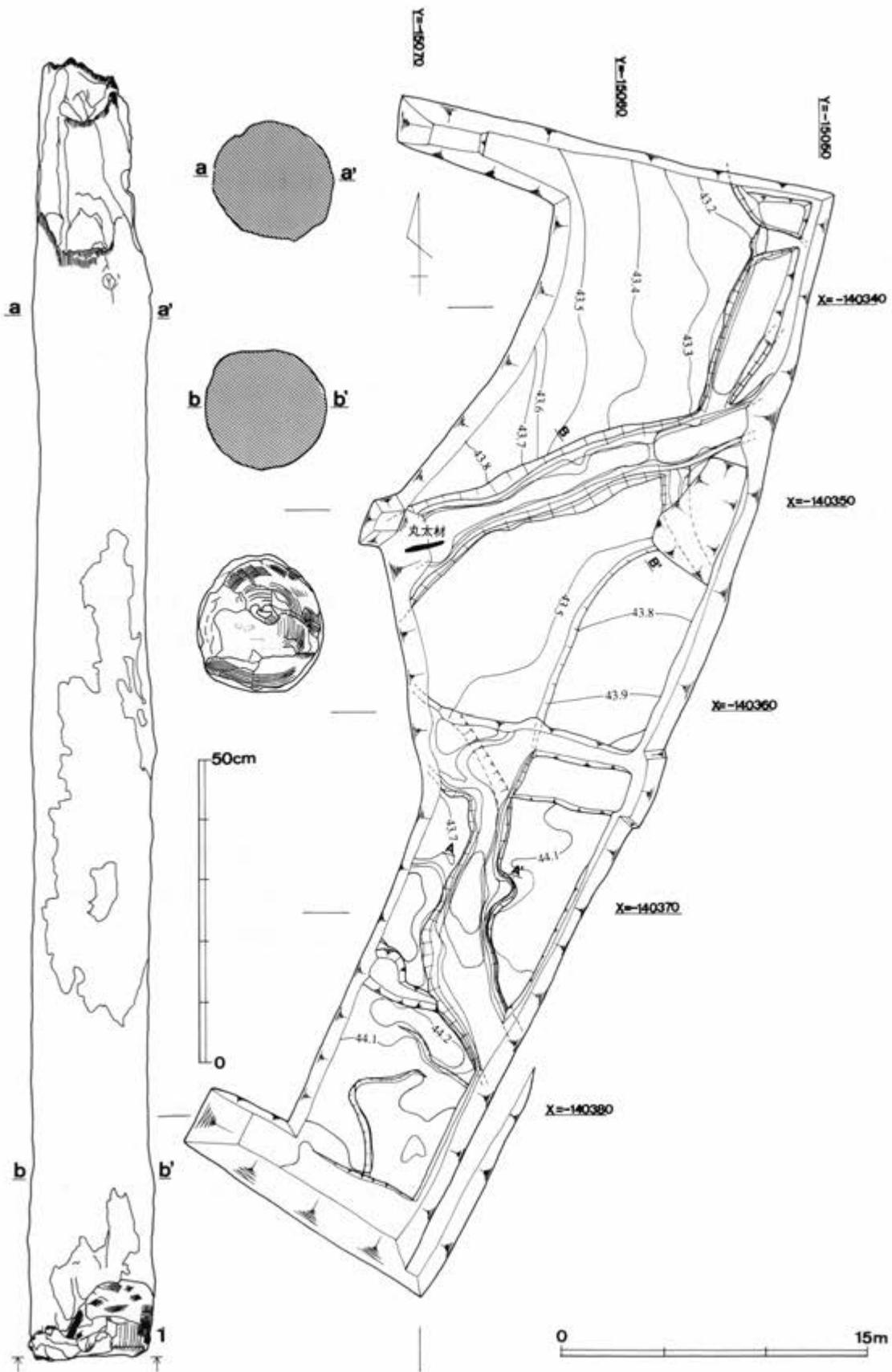
出土遺物は、土師器の小片が多く、瓦器片・須恵器片が散在する。

13bt(図版第42-(3)) 13btは、谷が曲折する西側に、東西方向で長さ約20m・幅約4mの規模で配置した。西端は、地表下約0.8mで黄灰色微砂～礫の堅く締まった地山層になる。中・近世包含層は、東側に向かって徐々に厚くなる。トレンチ中央から東端では、地表下約1.2～1.8mにかけて瓦器片を包む灰色粗砂礫層があり、今回の調査で唯一、中世の流路が存在した可能性がある部分である。この付近は、谷が西に曲がりながら広がっている部分にあたり、流路が位置を変えやすい場所と考えている。この層の上には、中世包含層がほぼ水平に約0.6m堆積しており、中世頃に流路の位置を西側山裾へ変え、谷中央に水田が造られたと考えている。

13・15bt(第88図、図版第42-(4)・43-(1)) 13btから道路を挟んで約25m東側の地点から東西方向と、東側に山裾沿いにかけて弓なりになった部分を合わせて、折り曲げた形でトレンチを配置した。全長は約75m、幅は約4mの規模である。地表下約1.2mで、奈良時代の流路検出面となる。トレンチ中央の折曲部付近では、近世頃の整地土が弧状の断面を見せながら連続して広がる。弧状の堆積は、整地作業の単位を示していると考えている。中世包含層は、約0.5m前後と厚く堆積しており、土色は、この付近が水はけが悪いため、青灰色を帯びている。

15bt付近の曲線は、釜ヶ谷川が攻撃面を削って形成したと考えられ、NR01はこの曲線に沿って向きを変える。15bt付近ではトレンチの西側を南北方向に流れ、15bt北端付近で西へ大きく曲がり、13bt付近では、東から西へゆるやかな右曲がりのカーブを描くように流れ下っていく。流路は浅くなり、流路中央の小溝内の底のレベルは、折曲部付近から西端までの約25m間で約0.1mしか低くならない。また、トレンチ幅を越えて流路内の埋土である灰色粗砂～微砂が広く堆積し、流路の幅はかなり広がっていた。

遺物は、15bt北端から13bt内で多く出土した。深さ約0.1m・幅約0.3mの流路中央部や、南北両肩に被さっていた灰色微砂～粗砂に混じって、完形に近い墨書土器や、土馬の破片が点々と出土した。内面に漆の付着した壺(42)もこの付近から出土している。この周辺で出土した墨書土器



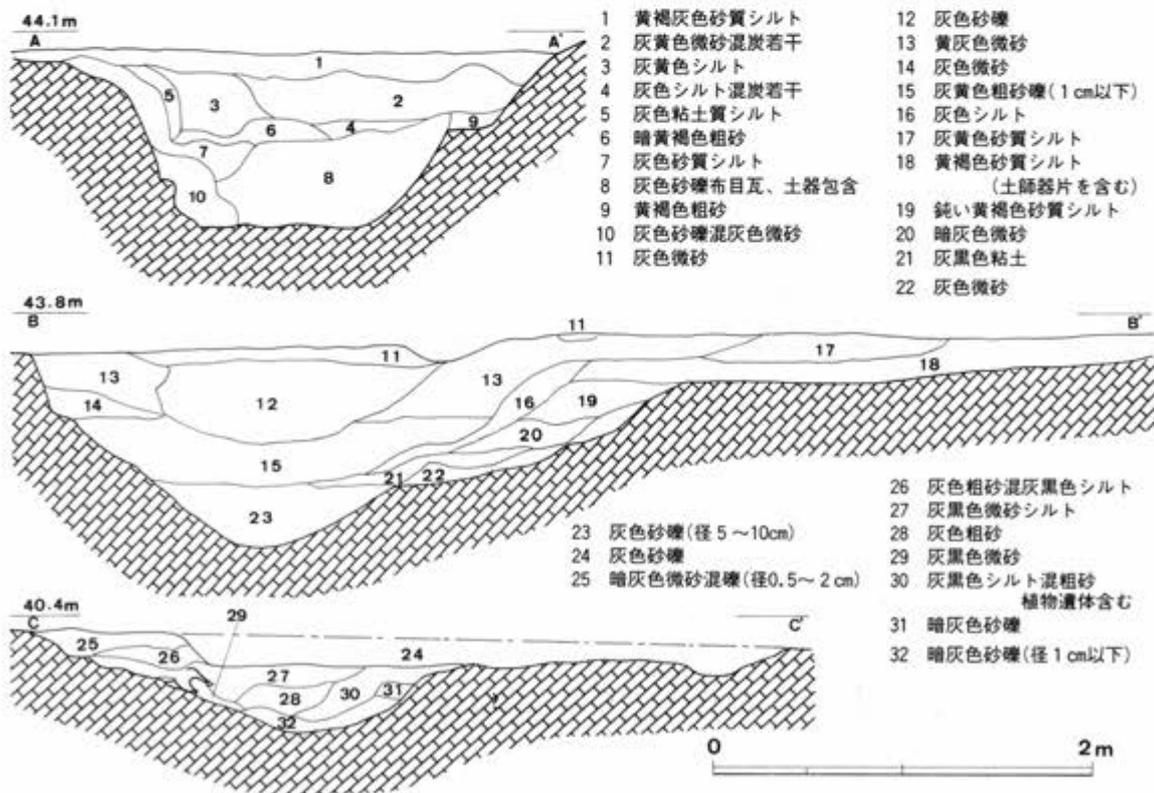
第90図 17・18・21bt平面図(1/300)、出土遺物実測図(1)

は、人面を描いている例(18・19・34)もあるが、土器の外面に縦横に交叉する線を表現する例(20~23)が多い。また、18のように、2つの壺を口縁で接合した俵形の特異な墨書土器も、この付近で出土した。ミニチュアカマドでは、94・95のような極小型のものも出土している。瓦も15bt付近から上流の17・18・21btにかけて出土量が増加し(付表5参照)、15bt北端の流路内、灰色砂礫層から、丸瓦(152)が出土した。

17・18・21bt(第90図、図版第43-(3)・44) 今回の調査地では、最も上流部分にあたり、谷幅が広がり始める場所にあたる。全長約55m・幅約8~15mを測り、トレンチ東側は山裾、西側は現釜ヶ谷川に接する。土の堆積状況は、他のトレンチと変わらないが、13bt付近から21bt付近にかけて、部分的に中世包含層とNR01の堆積層との間に、灰黒色粗砂~シルトの奈良時代包含層が広がるのが特徴である。この層には植物遺体を含んでいるため、この付近が奈良時代~中世にかけて一時湿地状になっていたと考えている。NR01の検出面までは、17bt付近では現地表面から約1m、21bt付近では約1.5mを測る。21bt付近で土層が厚いのは、この付近は現代に、水道工事などの残土を使って水田の整地を行っているためである。また、トレンチ中央付近は、すで

付表5 瓦出土点数表

	2bt		4bt		6~9bt		13・15bt		17bt		18bt		21bt	
	包含層	包含層	包含層	NR01	包含層	NR01	包含層	NR01	包含層	NR01	包含層	NR01	包含層	NR01
丸瓦	—	—	1	1	1	3	—	1	—	4	1	1		
平瓦	1	2	4	9	5	5	6	31	2	53	3	8		
不明	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—		



第91図 NR01断面図(1/40)

に試掘調査された部分(18bt)である。この付近でNR01は西壁へ抜け、その北側の丸太材出土地点で北東に向きを変えて流れる。

NR01は、このトレンチ内で3回折れ曲がっている。主な流路は、18bt南端で幅約2.5m・深さ約1.1m、17bt中央付近で幅約3m・深さ約1.1mである。流路の下層では、灰色砂礫が堆積し、上層ほど砂粒が細くなっていく傾向がある。埋土の状況からすると、土砂が大量に流れた時期があり、礫によって流路が半ば埋まった(下層)後、ゆるやかな流れの時期(上層)があったと考えている。流路の上層では、18bt付近のトレンチ中央で、墨書土器と須恵器が浅い流路内に細長い列をなして出土している(図版第43-(4))。

遺物は、流路内からの出土が大部分を占める。トレンチ中央西壁付近で出土した丸太材(1)は、北側に倒木根があり、これに引掛かった状況で出土した。斧によると考えている切断痕の残る端を下流に向けて、その端部が流路の底付近にまで斜め下りになって出土した。流路底部に打ち込んだ形跡がないので、水利施設ではないと考えている。

瓦の出土は、このトレンチの流路内で顕著である。特に、下層の灰色砂礫内の出土が多い。出土破片数は付表5のとおりである。軒平瓦(151)は、断面B-B'南側の流路東岸肩付近で、他の瓦片を伴わずに出土した。この断面観察用の畔を挟んで北側の流路東岸で、緑釉小壺片が出土している。これらの出土レベルにはほとんど差はない。

土器類、土馬の出土状況は、流路の上・下層、上・下流では大きな差はないが、折曲部付近にまとまる傾向はある。墨書を施した例は、土師器甕(29・30)が少量出土した。その一方で完形で出土した例の多い小壺類には、墨書痕跡を認める例はほとんどない。はじめから墨書を行わず、祭祀の一環として流された可能性もある。土馬は、破片出土がほとんどで、破片数は多いが接合によって完形になる資料は今回なかった。102の土馬だけは、17btの流路内灰色砂礫に混じって完形で出土した。他の例が破片出土であるのに対し、完形で出土した点は特異である。

(3)出土遺物(第90・92～97、付表6、図版第46～52)

1は、17・18・21bt出土の丸太材である。全長2.14m・太さ23cmで、樹種はマツである。根元側は、斧によると考えている切断痕が良好に残る。切断は、主に2方向から斧が打ち込まれている。先端側は、埋没中に腐ったと考えられ、芯を中心に不整形に細くなっている。表面は、樹皮が付着したまま出土し、切断痕以外に加工痕はない。

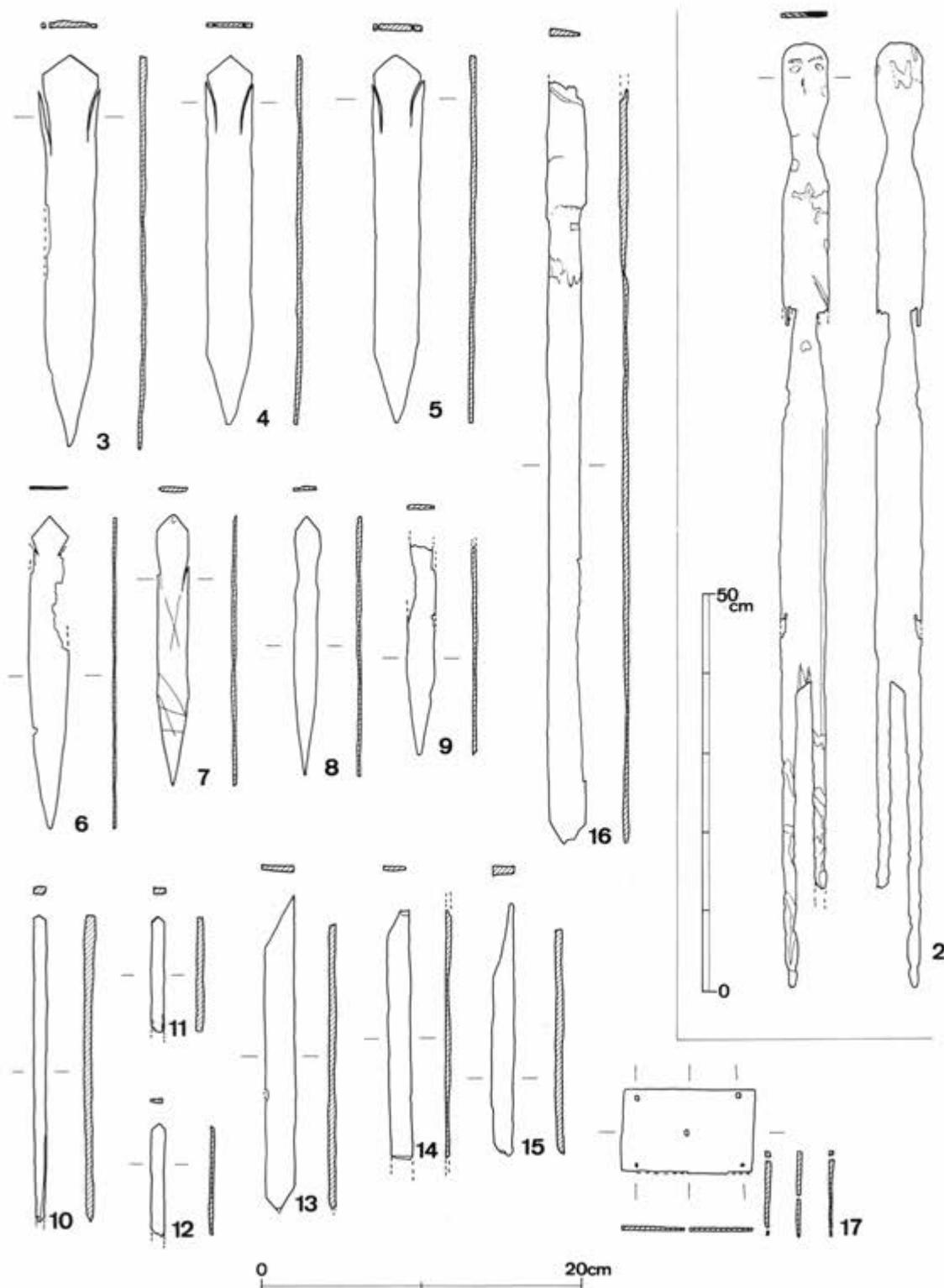
2は、6bt出土の人形である。全長120cm・最大幅6cm・厚さ0.7cmで、樹種はヒノキと考えている。両手、片足などの部分的に腐朽による欠損があるが、全体の姿はよく残っている。頭部片面に眉毛・目・鼻の表現と見える薄い墨痕跡が残る。

3～16・160～166は、6bt出土の斎申類である。出土総点数は、破片を含め33点である。

3～9は、全長23～25cm・幅2～3cm・厚さ0.2～0.4cmを測り、上端よりやや下で、両側から切れ目を入れ、下端は両側より尖らせる。7は、片面に浅い直線上の刻みが6本観察できる。10～12は、厚さ0.4～0.5cmと他に比べやや厚みがある一方で、全体に細く、下端部を欠損する。

13～15・164～166は、先端を片側から切除する例である。16は、他と比べて長く、全長48cmを

測る。17・167~169は、不明木製品である。17は、長辺8.4cm・短辺5.2cm・厚さ0.3cmの長方形の板に5か所の小穴を片面から開けている。図面上での下端に段差があり、他の板材と組み合わせて容器になっていた可能性もある。



第92図 出土遺物実測図(2) 木製器(すべて6 btより)

18～36は、墨書痕が残る土器類である。18は、カマコ状の土師器を二個体口縁で接合し、依形に作り上げる。頂部口縁部は、穴を開けた後、粘土を足して円形に立ち上げる。外面は、ハケメ調整を行う。両長側面にそれぞれ人面を描く。19～35は、土師器壺・甕に墨書した例である。20～23は、外面に交叉する線表現のある例で、土器全体にめぐらされる。24・25は、人面を1つのみ描く。25の底部外面には、ヘラによる線刻がある。34は、把手付甕に2つの人面を描く。35は、3つの人面を描いている。24・25・35は、6btで出土したが、描かれた顔の表現は大きく違い、書き手が複数いたと考えている。36は、須恵器杯底部外面に墨書がある。

37～74は、墨書人面土器に類するものの内、墨書が確認できなかった例である。ほとんどの例は底部が平底で、表面の調整は指オサエの後ナデを行う。一部ハケ目調整やヘラ削りを行う例がある。器壁に粘土紐の単位がわかる接合痕が明瞭に残る例が多い。小型壺は、口径と器高の違いで、3タイプ(A；37～47・52、B；48～51・53～63、C；68・71・74)に分けられる。出土状況で顕著な点は、6bt付近では、Aタイプのものは出土していない。

42は、内面全体に漆膜が付着していた。小型壺に漆が付着している例は、下流の燈籠寺廃寺の調査でも自然流路内から墨書土器などに混じって3点出土している^(注6)。今回の出土例とともに祭祀に関連した遺物と考えている。

75～83は、甎のミニチュア品である。75～79は、底部に内面から棒状器具により、1つ穴が開けられている。80～83は、底部をヘラ切りした状況で大きく開口している。器壁表面は、小型の例では指オサエの後ナデを行い、81～83では、ハケ目調整を行う。

84～93は、カマコである。84～87は、小型の例で指頭痕が目立ち、甎の小型品と同様の作りである。88～93は、内外面とも指オサエの後ナデを施し、部分的にハケ目調整を行う。平底のものが多く、91・92は丸底である。

94～99は、カマコのミニチュア品である。94～97は小型の例で、粘土紐を板状にして積み上げ、指頭痕が目立つ。甎、カマコの小型品とセットになる一群の例で、13bt以南の上流域で出土している。98・99は、前述例に比べやや大型の例である。粘土紐を積み上げ、指オサエの後内外面ともハケ目調整を施す。側面開口部は、製作最終段階にヘラ状工具で切り取っている。

100～104は、ミニチュア土馬である。胎土は密で、焼成はやや軟質、色調は淡黄褐色の例が多い。出土品は、1例を除いて破片になって出土した。いわゆる大和型の土馬の例で、頭部は粘土板を貼り、目、鼻を浅い円形刺突で表現する。この粘土板の陰になるような頸部上端に、細い粘土紐を貼って手綱を表現する。頸部は板状になっているが、101の例では、頸部上辺を指で薄くのばして鬣を表現する。胴部は、背中部分をナデ押さえて鞍を表現する。尾部は、根元付近でやや立ち上がり、その後ほぼ水平に先端までのびる。101は、尾部が根元で立ち上がらず、先端をやや下げるように作る。脚部は、胴部と粘土の単位が同じ例が多いが、101では、両前脚、両後ろ脚をそれぞれ胴部に貼り付けるように接合しているようすが、欠損部で観察できた。101は、先述の特徴から他の土馬より時期が若干古くなる可能性がある。

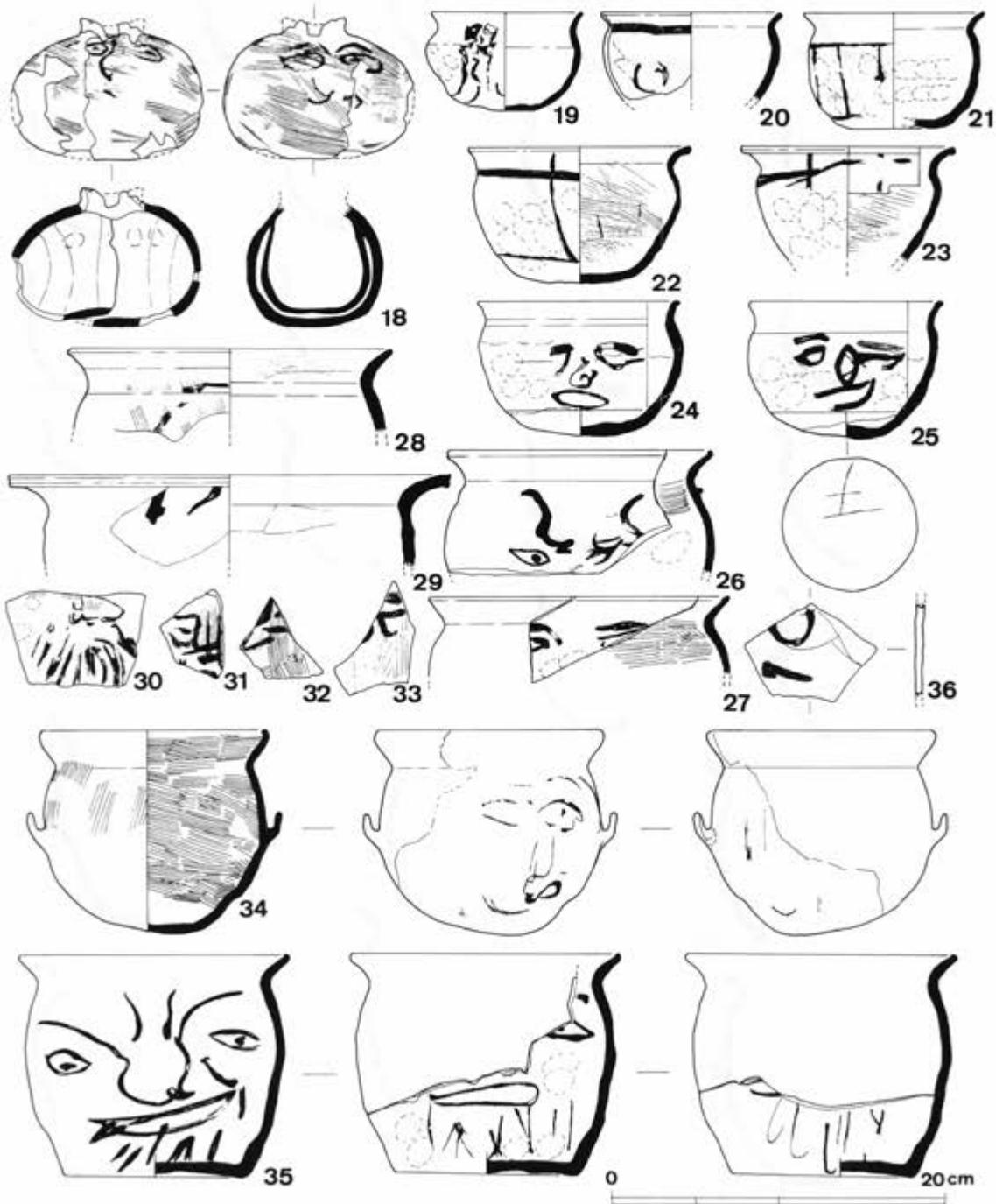
105は、緑釉小壺の破片である。釉薬の剥落部分が多く、軟質の下地がのぞく。

106～125は、NR01から出土した須恵器類である。107は、杯蓋の口縁部片である。内面に墨が付着しており、転用硯と考えている。114・121は完形で出土している。

126～138は、NR01から出土した土師器類である。杯類は、小型品が多く、出土点数も少ない。

139～141は、縄文土器の破片である。139は、深鉢の口縁部分で沈線が施されている。141は、口縁付近に突帯がめぐる深鉢の破片である。いずれも晩期頃のものと考えている。

142～147は、NR01から出土した弥生土器である。142は、口縁部から底部にかけて破片がま

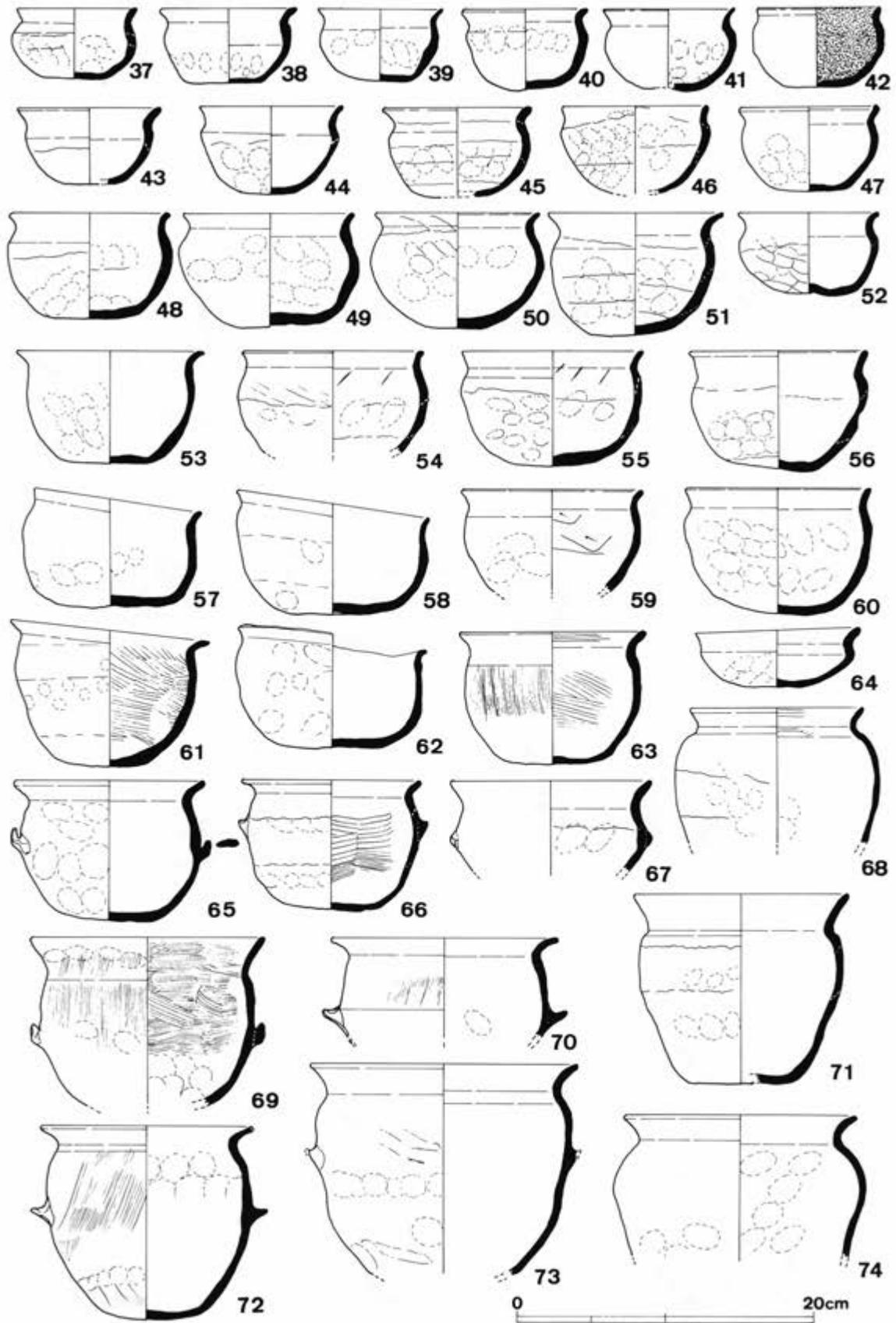


第93図 出土遺物実測図(3) NR01墨書土器

6～9bt : 24～27・31・33・35

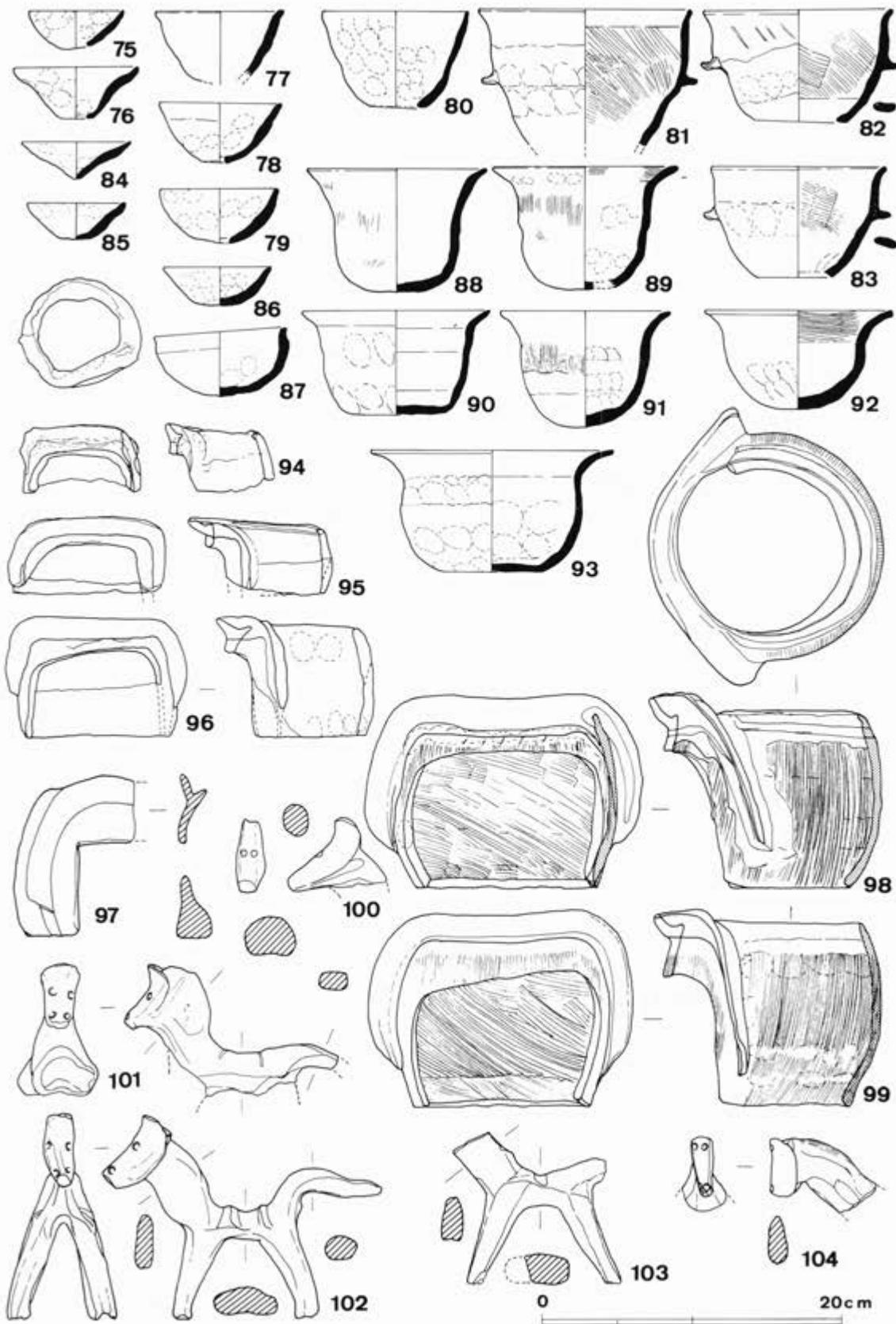
13・15bt : 18～23・28・34

17・18・21bt : 29・30



第94図 出土遺物実測図(4) 土師器

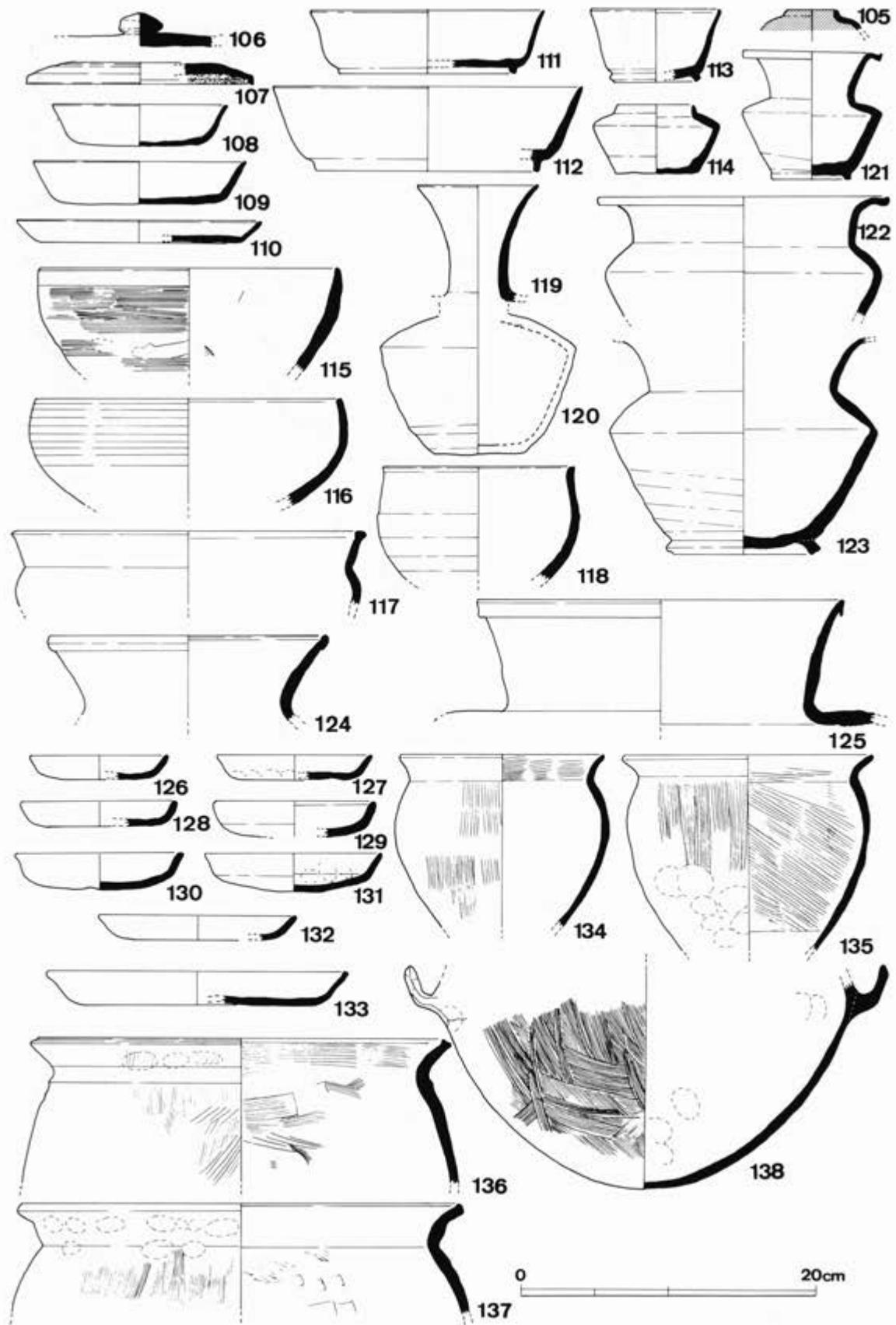
6 bt : 52・55・56・60 13・15bt : 40~42・45~47・51・62~64・69
 17・18・21bt : 37~39・43・44・48~50・53・54・57~59・61・65~68・70~74



第95図 出土遺物実測図(5)

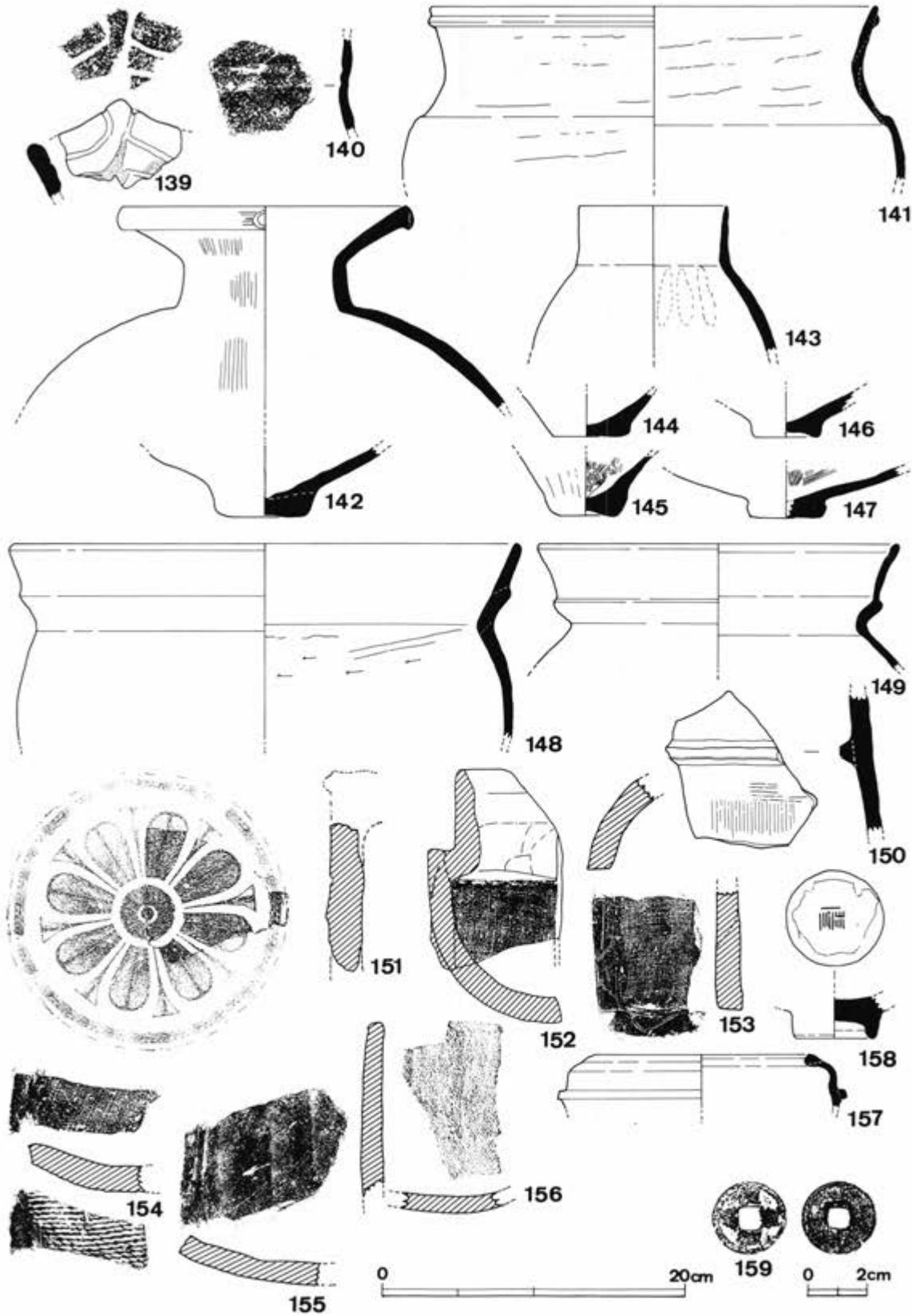
土師器(6bt: 82・83・92・93・98・99 13・15bt: 86・89・94)

その他(17・18・21bt: 75~81・84・85・87・88・90・91・95~97 15bt: 103 17・18bt: 100~102・104)



第96図 出土遺物実測図(6)

須恵器：106～125(3bt：114 6bt：107・118 13・15bt：120・122・124 17～21bt：105・106・108～113・115～117・119・121・123・125) 土師器：126～138(13bt：130 17・18・21bt：126～129・131～138)



第97図 出土遺物実測図(7)

縄文土器139~141(17・18・21bt : 139・140 6~9bt : 141)
 弥生土器142~147(17・18・21bt : 142・146 13・15bt : 144 6~9bt : 143・145・147)
 土師器148・149・157(17・18・21bt : 148・149 6bt : 157) 円筒埴輪150(17・18・21bt)
 瓦151~156(17・18・21bt : 151・153~156 13・15bt : 152) 青磁椀158(17・18・21bt) 銅銭159(6~9bt)

付表6 出土遺物観察表

No	口径	器高	胎土	焼成	色調	69	15.6	残11.4	密	良好	淡褐色
18		8.5	やや粗	やや軟	淡黄褐色	70	15.0	残6.8	粗	軟質	淡茶褐色
19	8.7	5.4	やや粗	やや軟	淡黄茶褐色	71	14.3	12.8	粗	軟質	淡茶色
20	10.7	残5.5	密	良好	淡褐色	72	14.2	13.2	粗	軟質	淡茶色
21	10.8	7.1	密	良好	褐色	73	18.0	14.2	粗	軟質	淡茶褐色
22	13.2	8.3	密	良好	褐色	74	15.4	残9.7	粗	軟質	茶色
23	12.7	残6.9	密	良好	黄土色	75	6.2	2.6	密	良好	褐色
24	11.9	8.2	密	良好	淡茶褐色	76	8.2	3.4	密	良好	淡褐色
25	11.4	8.3	密	良好	淡茶褐色	77	8.6	4.7	やや粗	やや軟	淡黄褐色
26	15.4	残7.5	粗	軟質	淡茶色	78	8.2	4.0	密	良好	淡褐色
27	18.0	残4.8	粗	軟質	淡茶灰色	79	7.7	3.6	密	良好	淡赤褐色
28	19.0	残5.0	密	良好	黄土色	80	9.6	6.5	密	良好	淡褐色
29	26.4	残5.5	粗	軟質	淡茶色	81	14.0	残9.1	粗	軟質	淡茶色
34	13.8	12.4	やや密	やや軟	淡黄褐色	82	12.4	7.7	密	良好	淡茶褐色
35	16.0	13.6	粗	良好	淡茶褐色	83	11.5	7.3	粗	軟質	淡茶灰色
36			密	良好	灰色	84	7.2	2.5	密	良好	淡褐色
37	8.0	4.8	密	良好	淡赤褐色	85	6.4	2.4	密	良好	淡褐色
38	9.3	5.1	やや粗	やや軟	淡黄褐色	86	7.1	2.6	密	良好	淡白褐色
39	8.3	4.9	密	良好	淡褐色	87	8.8	4.7	密	良好	淡黄褐色
40	8.0	5.5	密	良好	灰褐色	88	11.5	8.1	やや粗	やや軟	淡黄褐色
41	8.9	5.5	やや粗	やや軟	淡黄褐色	89	12.4	7.2	やや粗	やや軟	淡黄褐色
42	8.7	5.4	やや粗	やや軟	淡黄茶褐色	90	12.3	7.0	粗	軟質	淡茶色
43	9.5	5.2	密	良好	赤褐色	91	11.0	7.8	密	良好	褐色
44	9.4	6.0	粗	軟質	淡茶灰色	92	12.2	6.7	やや粗	良好	淡茶灰色
45	9.8	6.1	密	良好	灰褐色	93	16.0	8.0	粗	軟質	茶褐色
46	9.6	5.8	密	良好	褐色	94	8.1	4.4	粗	軟質	淡茶褐色
47	9.0	5.7	密	良好	褐色	95	10.5	5.2	密	良好	淡褐色
48	10.2	7.2	密	良好	赤褐色	96	9.5	8.0	密	良好	黄褐色
49	11.2	7.8	粗	軟質	茶褐色	97	8.0	10.8	粗	軟質	淡茶色
50	10.9	7.8	粗	軟質	淡茶褐色	98	11.4	12.9	やや密	やや軟	淡茶褐色
51	11.6	8.4	密	良好	褐色	99	11.7	13.0	やや粗	良好	淡明茶色
52	9.3	5.7	密	良好	淡茶褐色	105	3.8	残1.35	やや粗	やや軟	淡黄淡褐色
53	12.2	7.6	密	良好	褐色	106		残2.3	密	やや軟	淡灰色
54	11.8	残7.0	粗	軟質	淡茶色	107	15.2	残1.5	密	良好	灰色
55	12.2	7.8	密	良好	淡茶褐色	108	11.8	2.9	密	良好	紫灰色
56	11.9	8.2	密	良好	淡茶褐色	109	14.3	2.9	密	やや軟	灰色
57	11.5	8.1	やや粗	やや軟	淡黄褐色	110	16.5	1.5	密	良好	灰色
58	13.3	6.4	やや粗	やや硬	淡黄褐色	111	16.0	4.4	密	硬質	淡灰色
59	12.1	残6.8	密	良好	淡赤褐色	112	20.9	5.7	密	良好	濃灰色
60	12.5	8.5	粗	軟質	淡茶灰色	113	8.8	5.0	密	良好	濃灰色
61	13.5	8.7	やや粗	やや硬	淡黄褐色	114	5.2	4.6	密	硬質	淡灰色
62	12.8	8.3	やや密	硬質	淡黄褐色	115	19.7	残7.1	密	良好	暗灰色
63	12.4	9.0	密	良好	褐色	116	20.7	残7.2	密	良好	淡褐灰色
64	11.0	4.1	やや粗	良好	淡褐色	117	23.2	残5.2	密	良好	灰色
65	12.6	9.5	粗	軟質	茶色	118	12.8	残7.7	密	良好	灰色
66	12.0	8.8	粗	良好	淡明茶褐色	119	8.2	残7.9	密	硬質	淡灰色
67	13.4	残6	粗	軟質	淡茶色	120	底6.05	残9.6	密	硬質	淡灰色
68	11.4	残9.2	密	良好	白褐色	121	9.4	8.8	密	硬質	淡灰色

122	19.6	残8.2	密	良好	暗灰色	137	13.5	13.0	やや粗	軟質	淡茶褐色
123	底10.4	残14.5	密	硬質	淡灰色	138			密	良好	褐色
124	18.7	残5.6	やや粗	良好	茶灰色	139			粗	良好	暗褐色
125	24.8	残8.5	密	良好	灰色	140			粗	やや軟	黒褐色
126	9.3	1.7	密	良好	淡褐色	141	29.2	11.4	密	良好	淡褐色
127	10.4	1.7	密	良好	白褐色	142	18.8	13.4	やや粗	良好	灰褐色
128	10.3	1.8	密	良好	淡褐色	143	9.6	9.6	密	良好	灰褐色
129	10.8	2.5	密	良好	淡赤褐色	144	底5.0	残2.9	密	良好	灰褐色
130	11.4	2.5	やや密	やや硬	淡黄褐色	145	底5.0	残4.0	密	良好	灰褐色
131	11.9	2.7	粗	軟質	淡茶色	146	底4.6	残3.1	密	良好	赤褐色
132	13.2	1.6	密	良好	淡赤褐色	147	底5.2	残3.3	密	良好	淡褐色
133	20.0	2.3	密	良好	赤褐色	148	33.0	残10.2	粗	軟質	茶色
134	13.6	残11.8	粗	軟質	淡茶色	149	23.4	残8.2	密	良好	淡赤褐色
135	16.8	残13.3	粗	軟質	淡茶褐色	157	14.0		密	良好	淡褐色
136	27.3	残9.7	密	良好	淡褐色						

(cm) 底…底部 残…残存高

とまって、18btのNR01西肩付近で出土したが、胴部片が形にならなかった。弥生時代後期のものと考えている。148は、土師質の鉢状の土器である。器壁は厚く、口縁は2段になっている。149は、二重口縁の土師器甕である。150は、古墳時代中期の円筒埴輪片である。

151～156は、流路内出土の瓦片である。151は、素弁八弁蓮華文軒丸瓦である。出土部位は、瓦当面の向かって右側の外縁から中房にかけての破片である。中房の蓮子は、中央の1点のみで、あまり立体的でない。全体に淡黄灰色を呈し、焼成はやや軟質である。152は、褐色、やや軟質の丸瓦片である。玉縁部分を貼り付け、接合部内面付近に削り痕がある。153は、須恵質に焼けた丸瓦端部の破片である。154～156は、平瓦片である。155は、模骨痕が明瞭に残る。

157は、6bt包含層出土の土師質羽釜片である。158は、17bt包含層出土の青磁碗の底部である。見込みに印文を施す。

159は、6bt包含層出土の銅銭である。北宋銭(熙寧元宝?)であると考えているが、鋳上りが悪いのと、磨滅で特定は困難である。

3. まとめ

釜ヶ谷川は、奈良時代までは自然流路として、谷内を東西に蛇行して北流していた。この時期以後の流路は、13bt付近で中世の流路の一部を確認しただけである。釜ヶ谷川は、中世の頃から谷内が水田開発されるに伴い、用水化して現在の位置に制御され続けたと考えている。なお、谷内の水田開発の時期は、上流ほど新しくなる傾向が、第1次調査で指摘されている。

奈良時代を主とした河川跡を調査地全域で確認した。この川の辺では、土馬や墨書人面土器などを用いた祭祀が、奈良時代前半から中頃にかけて盛んに行われていたことが、出土した遺物の量で類推できる。また、祭祀に用いた土器類も、出土地点によって多少の違いが指摘できる。

墨書人面土器類のうち、小型壺の出土状況では、13・15btから17・18・21btにかけて口径10cm以下・器高7cm以下の例の出土が顕著であるが、6btでは出土していない。墨書の内容にも変化

が見える。6btでは人面に限られるが、13・15btでは交差する線を書く例が多い。

このほか、ミニチュアカマドのセットも、13・15btから17・18・21btで出土した例は、6bt出土例に比べると粗製の小型品がほとんどである。土馬の出土量も、6btでは昨年度に少量出土したのみで、上流の出土量よりかなり少ない。これらの違いを時期差と考えれば、祭祀の場所が、上流から下流へ移動した可能性もあり、祭祀の内容も変化していると言えよう。

6btで出土した人形、齋串、ミニチュアカマド類、墨書人面土器などは、一括遺物と考えている。土器の出土状況からすると、祭祀を行った場所にほとんどの遺物がとどまっていると判断している。したがって、齋串を地面にさして、祭祀を行う場所をきめ、カマド類や人形を並べ、土器などに人面をその場で描いて流したようすが遺物から想定される。今後、他の出土例とともに検討すれば、具体的に祭祀のようすを復原することも可能と思っている。

この他、17・18・21btを中心に、須恵質や、赤橙色軟質の布目瓦片や素弁八弁蓮華文軒丸瓦が、NR01から出土している。この地域に瓦片が集中して出土したことで、谷を挟んだ東西の丘陵上に寺などの施設が7世紀中頃にあった可能性を示しているかもしれない。

今後、この谷の特徴と周辺部の遺跡との係わりを考え、この地域の遺跡の実態がさらに明らかにされることを望む。

(有井広幸)

注1 松井忠春他「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

石井清司「木津地区所在遺跡平成6年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注2 五百磐和代・五百磐顕一・井ノ口雄三・木下町子・木本昌英・久田 亨・新谷二三代・田島 肇・林 益美・菱田直実・福永美千代・古川良子・山木真理子・芳谷典子・吉永清美(五十音順、敬称略)

注3 伊賀高弘「燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注4 岩井照芳「恭仁京賀背山西道と上ツ道延長道」(『京都考古』第76号 京都考古刊行会) 1994

注5 現在この谷には、南北の道路沿いに、奈良市水道、木津町水道、農業用送水管が南北方向に埋設されており、付近にトレンチを設けられなかった点を付言しておきたい。

注6 注3文献と同じ。79頁。

版 圖

図版第1 黒部遺跡



(1)仲谷地区全景（西から）



(2)A地点全景（北から）



(1) 黒部2号製鉄炉排滓坑近景及び1号製鉄炉近景(東から)



(2) 黒部1号製鉄炉近景(西から)



(1)黒部2号製鉄炉炉底滓検出状況（北から）



(2)黒部2号製鉄炉炉底滓検出状況（東から）



(1)黒部2・3号製鉄炉近景(南東から)



(2)A地点炭窯全景(北西から)



(1)B地点製鉄炉全景（南から）



(2)黒部13号炭窯近景（北から）



(1)黒部5・6号製鉄炉近景(南南西から)



(2)黒部4・7号製鉄炉近景(北北東から)



(3)黒部5号製鉄炉内堆積状況(東から)



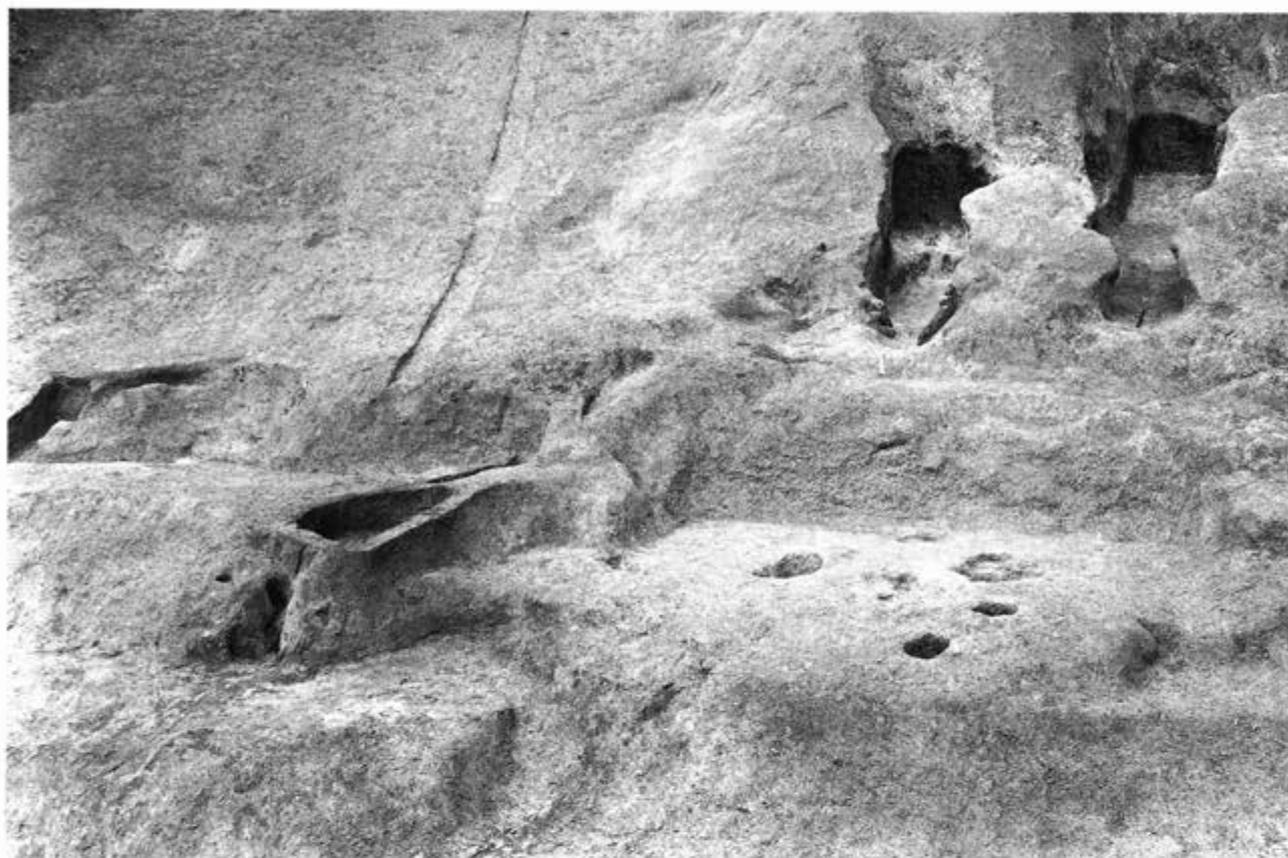
(4)黒部5号製鉄炉内堆積状況(南西から)



(1)黒部4号製鉄炉内堆積状況(南西から)



(2)黒部4号製鉄炉断ち割り状況(南西から)



(1)E地点全景(南から)



(2)黒部14号炭窯近景(南から)



(3)黒部15号炭窯近景(南から)



(1)F 地点全景 (南西から)



(2)黒部20～22号炭窯近景 (南西から)



(3)黒部23号炭窯近景 (南西から)



(3)黒部27号炭窯近景 (南西から)



(4)黒部5号住居跡近景 (南西から)



(1)黒部24号炭窯近景 (南西から)



(2)黒部24号炭窯内炭検出状況 (北東から)



(1)黒部29～35号炭窯遠景 (南西から)



(2)黒部29～35号炭窯全景 (南から)



(1)黒部29・30・32号炭窯近景(南南東から)



(2)黒部34・35号炭窯近景(南南東から)



(1) J地点全景 (南東から)



(2) 黒部38号炭窯近景 (南から)



(1)黒部46～48号炭窯全景（南西から）



(2)黒部47・48号炭窯近景（南西から）



(3)黒部46号炭窯近景（南西から）



(3)黒部39号炭窯近景 (南西から)



(4)黒部45号炭窯近景 (南西から)



(1)黒部1号炭窯近景 (西から)



(2)黒部44号炭窯近景 (北西から)



13



2



3



5



4



15



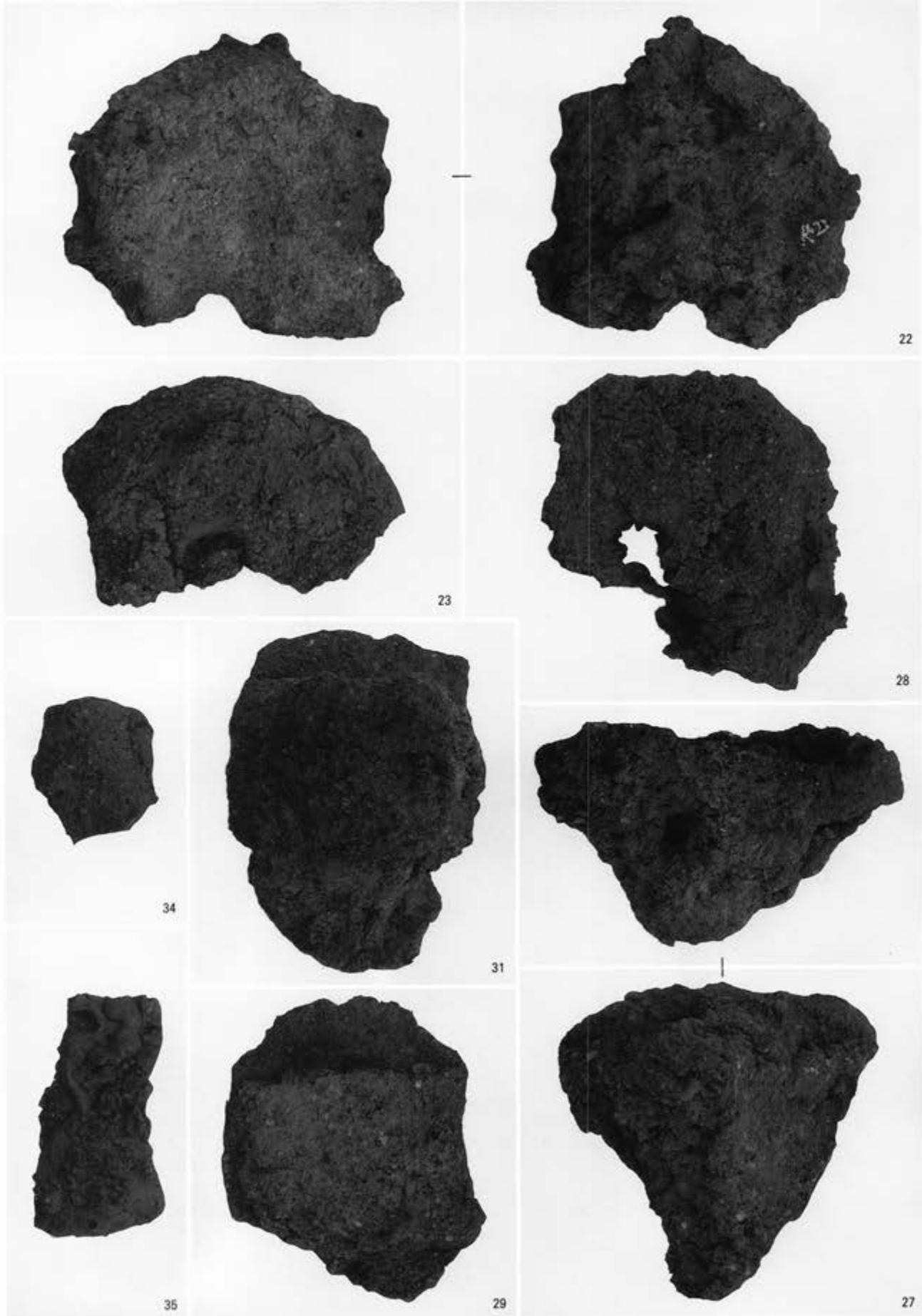
7



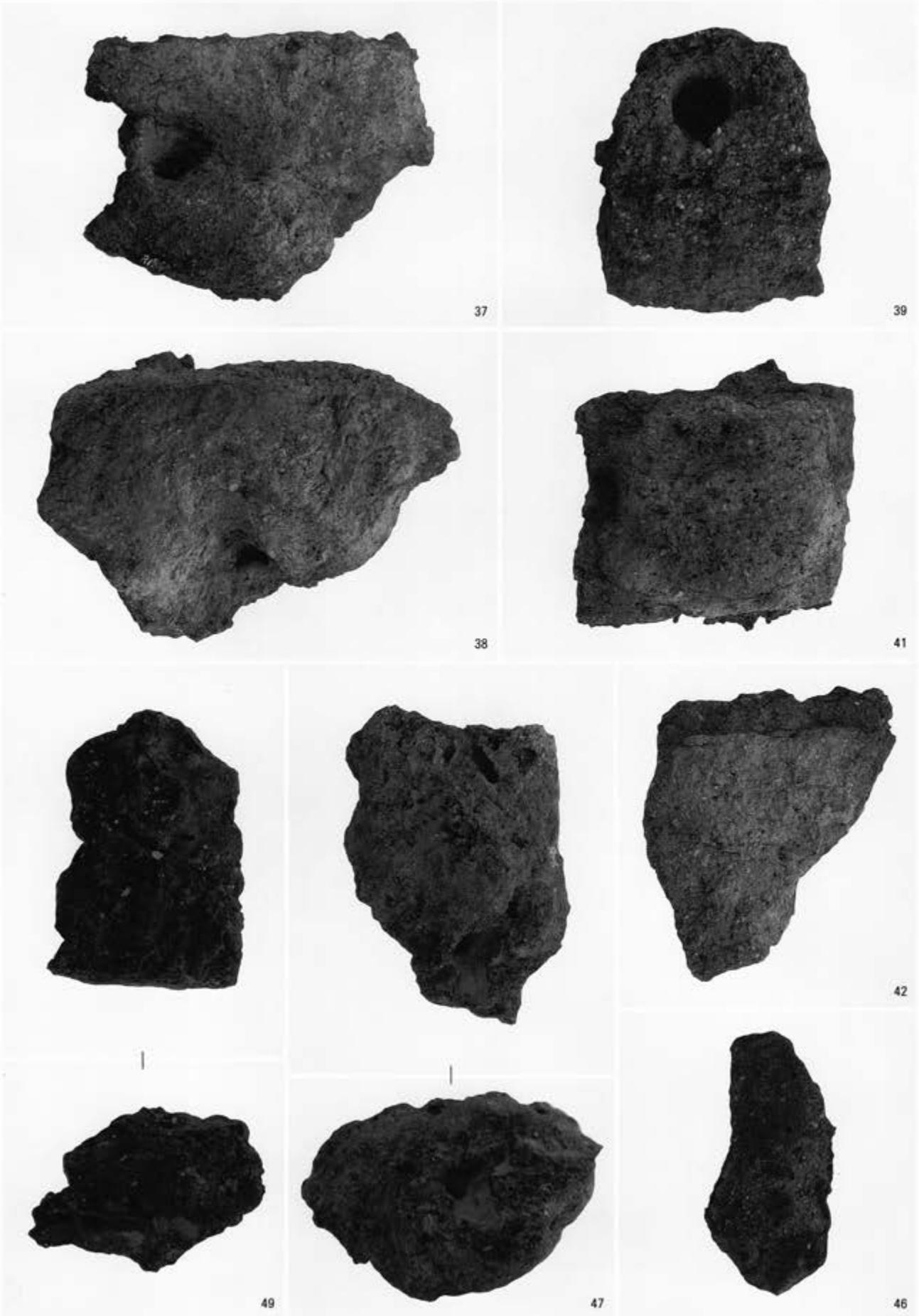
17



8



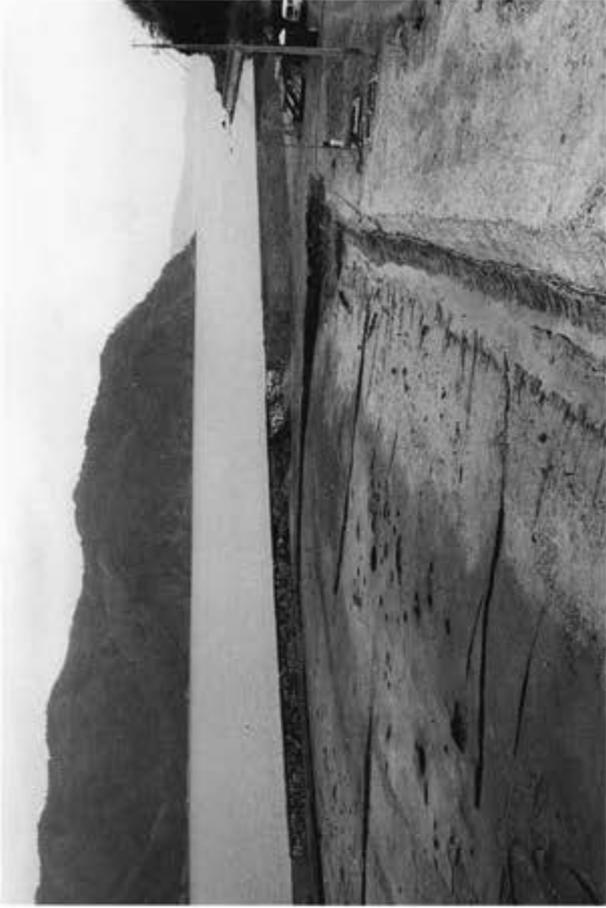
製鉄炉関係遺物（黒部1号製鉄炉炉壁・鉄滓）



製鉄炉関係遺物（黒部2号製鉄炉炉壁・炉底滓・鉄滓）



(1)嶋遺跡遠影(南東から)



(3)弥生時代海岸線検出状況(南西から)



(2)嶋遺跡遠景(北から)



(4)同上



(3)上層堆積状況



(4)作業風景



(1)弥生土器出土状況(前期)



(2)弥生土器出土状況(中期)



(1)調査前全景（南から）



(2)重機掘削状況（南から）



(1) S D52602検出状況 (北から)



(2) S D52602完掘状況 (北から)



(3) S D52602堆積状況 (東から)



(1)東壁土層堆積状況(西から)



(2)調査風景(北から)



(1)完掘状況(南から)



(2)南グリッド完掘状況(西から)



(1)試掘調査第1トレンチ全景(西から)



(2)試掘調査第1トレンチ土層堆積状況(南西から)



(1)試掘調査第1トレンチ噴砂検出状況(南から)



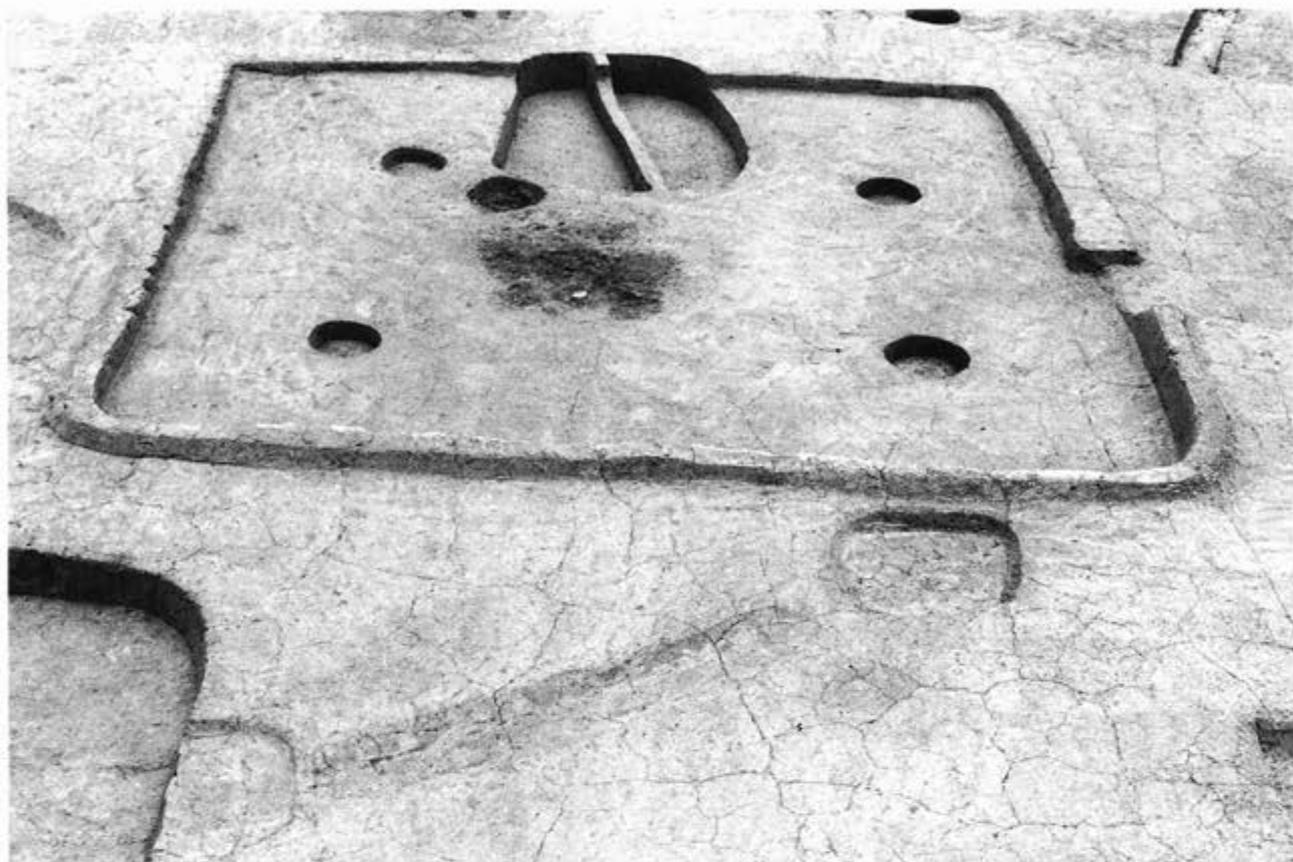
(2)試掘調査第3トレンチ全景(東から)



(1)D 2 地区第 4 遺構面遺構検出状況 (北上空から)



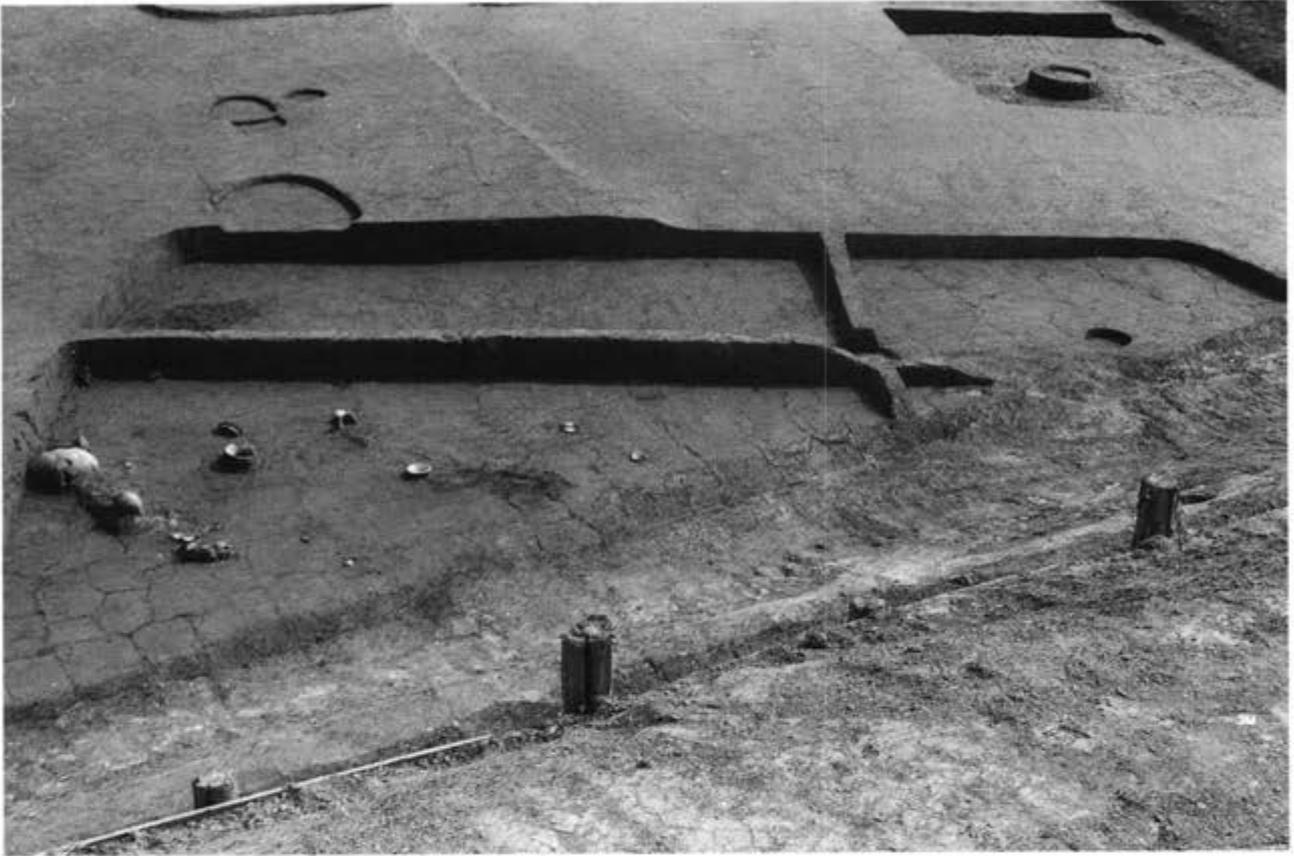
(2)D 2 地区第 4 遺構面遺構検出状況 (南から)



(1) D 2 地区第 4 遺構面 S H025 全景 (北から)



(2) D 2 地区第 4 遺構面 S H090 全景 (北から)



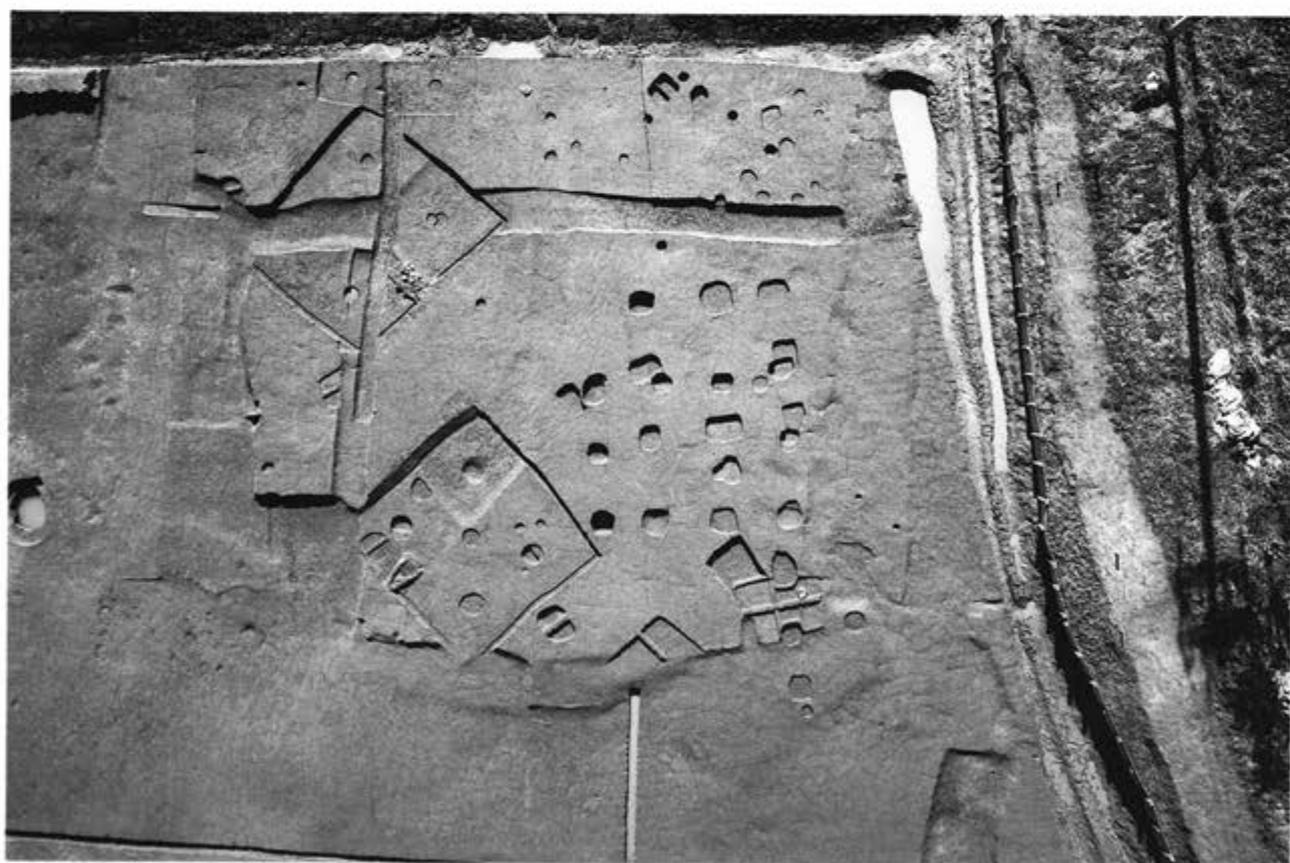
(1) D 2 地区第 4 遺構面 S H092 検出状況 (西から)



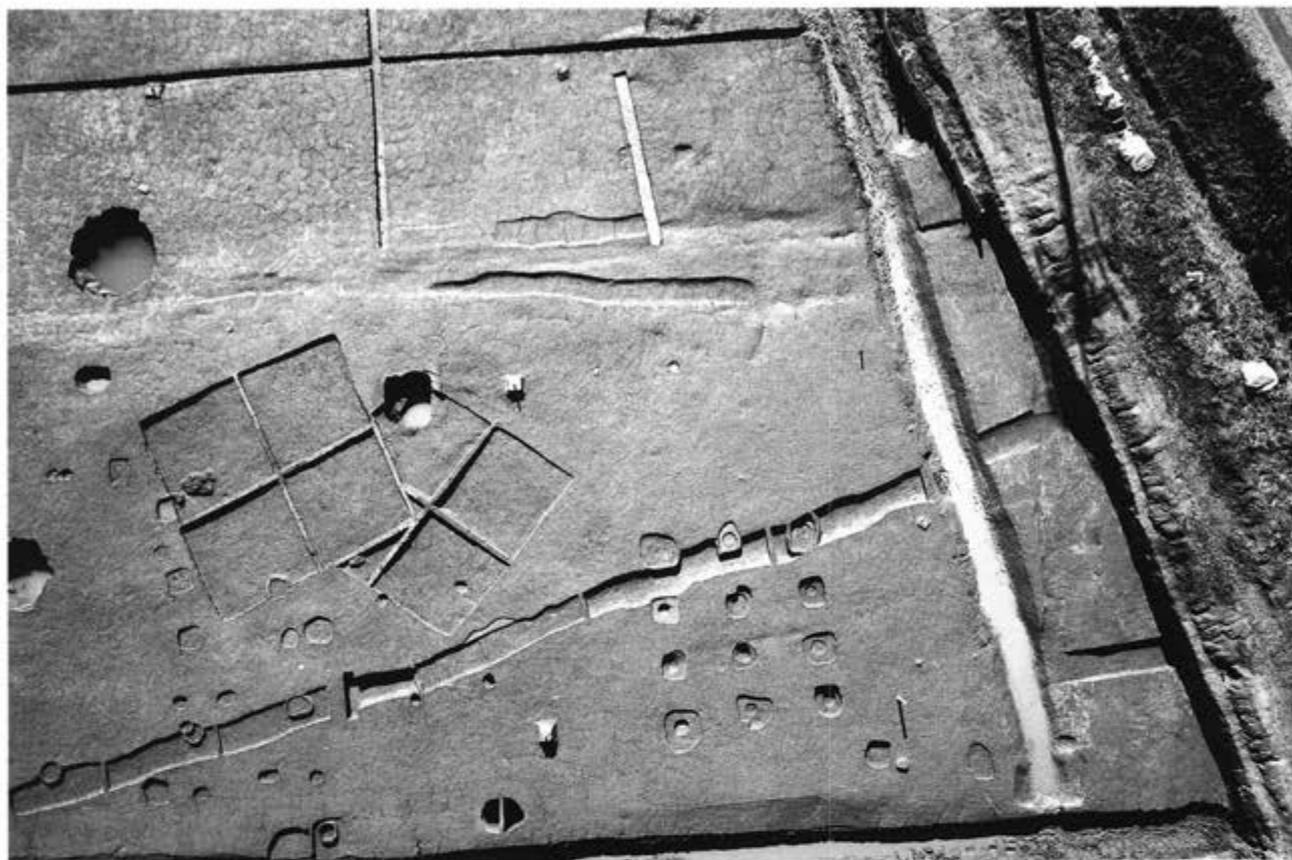
(2) D 2 地区第 4 遺構面 S H087 全景 (西から)



(1) D 2 地区第 3 遺構面遺構検出状況 (北上空から)



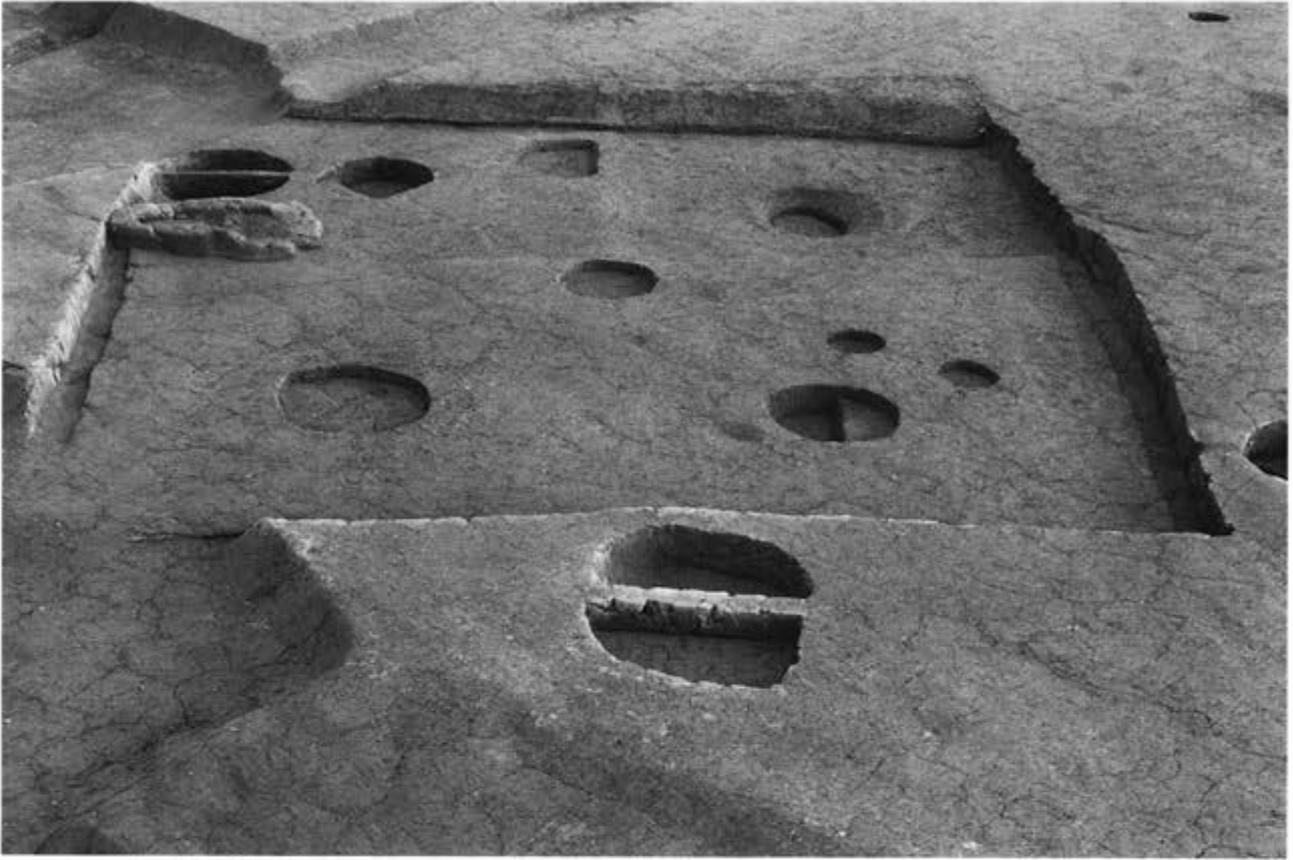
(2) D 2 地区第 3 遺構面調査地南半部遺構検出状況 (真上から)



(1) D 2 地区第 3 遺構面調査地北半部遺構検出状況 (真上から)



(2) D 2 地区第 3 遺構面 S H051 全景 (南東から)



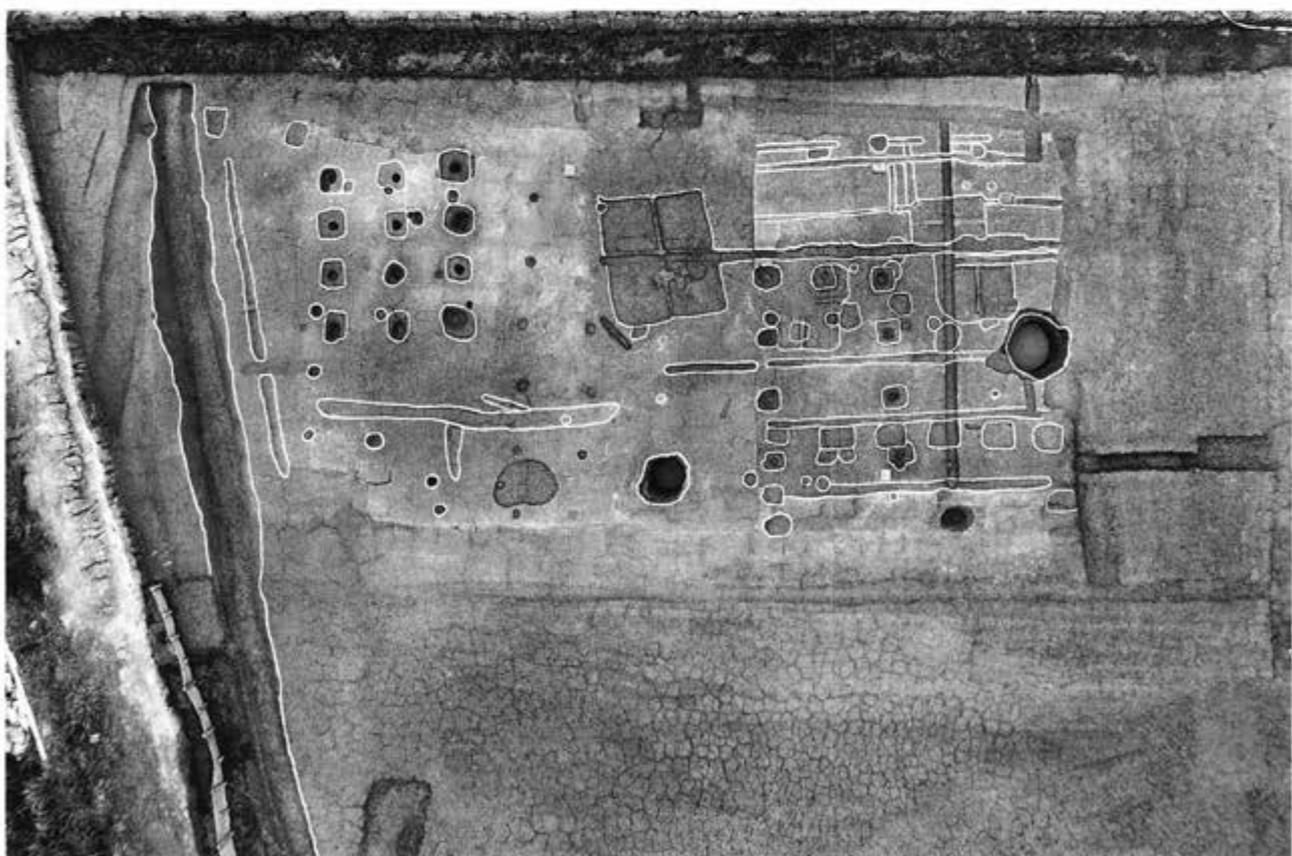
(1) D 2 地区第 3 遺構面 S H052 全景 (北西から)



(2) D 2 地区第 3 遺構面 S H054 全景 (南東から)



(1) D 2 地区第 2 遺構面遺構検出状況 (南上空から)



(2) D 2 地区第 2 遺構面調査地北半部遺構検出状況 (真上から)



(1) D 2 地区第 2 遺構面調査地南半部遺構検出状況 (真上から)



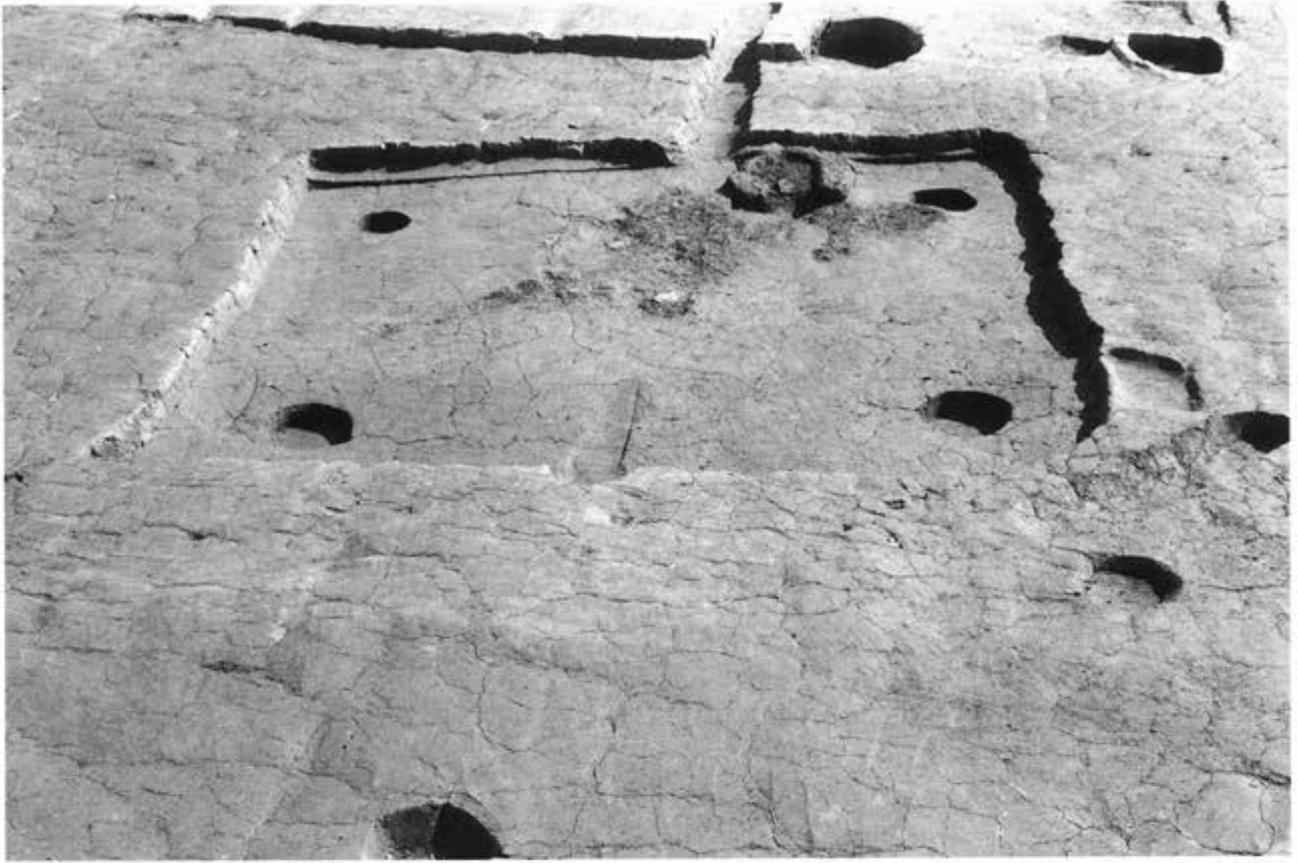
(2) D 2 地区第 2 遺構面 S B002 検出状況 (北から)



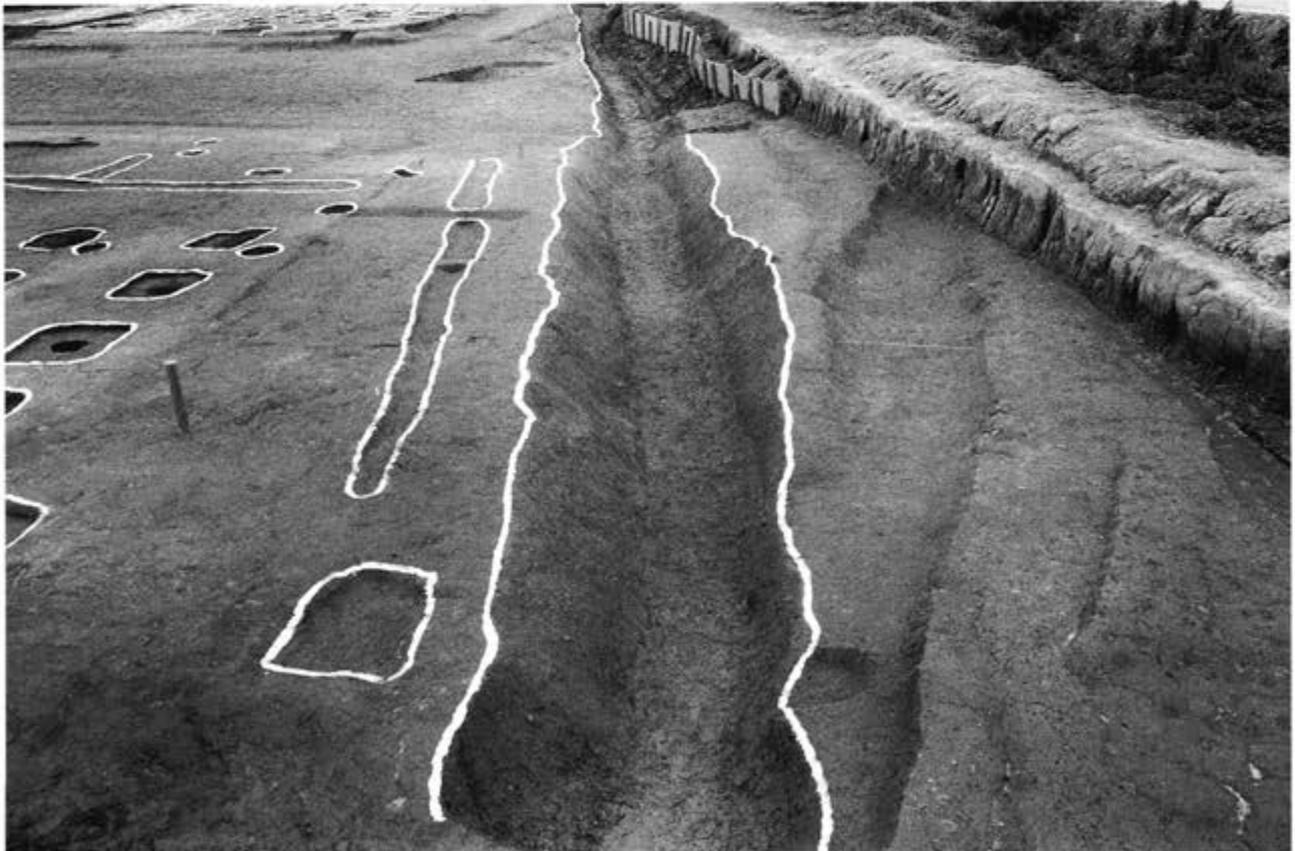
(1)D 2 地区第 2 遺構面調査区北東部遺構検出状況 (南から)



(2)D 2 地区第 2 遺構面 S B 036・S B 064 検出状況 (北から)



(1)D 2 地区第 2 遺構面 S H048 全景 (西から)



(2)D 2 地区第 2 遺構面 S D032 全景 (北から)



(1) D 2 地区第 2 遺構面 S E 042 検出状況 (南から)



(2) D 2 地区第 2 遺構面 S E 073 検出状況 (北から)



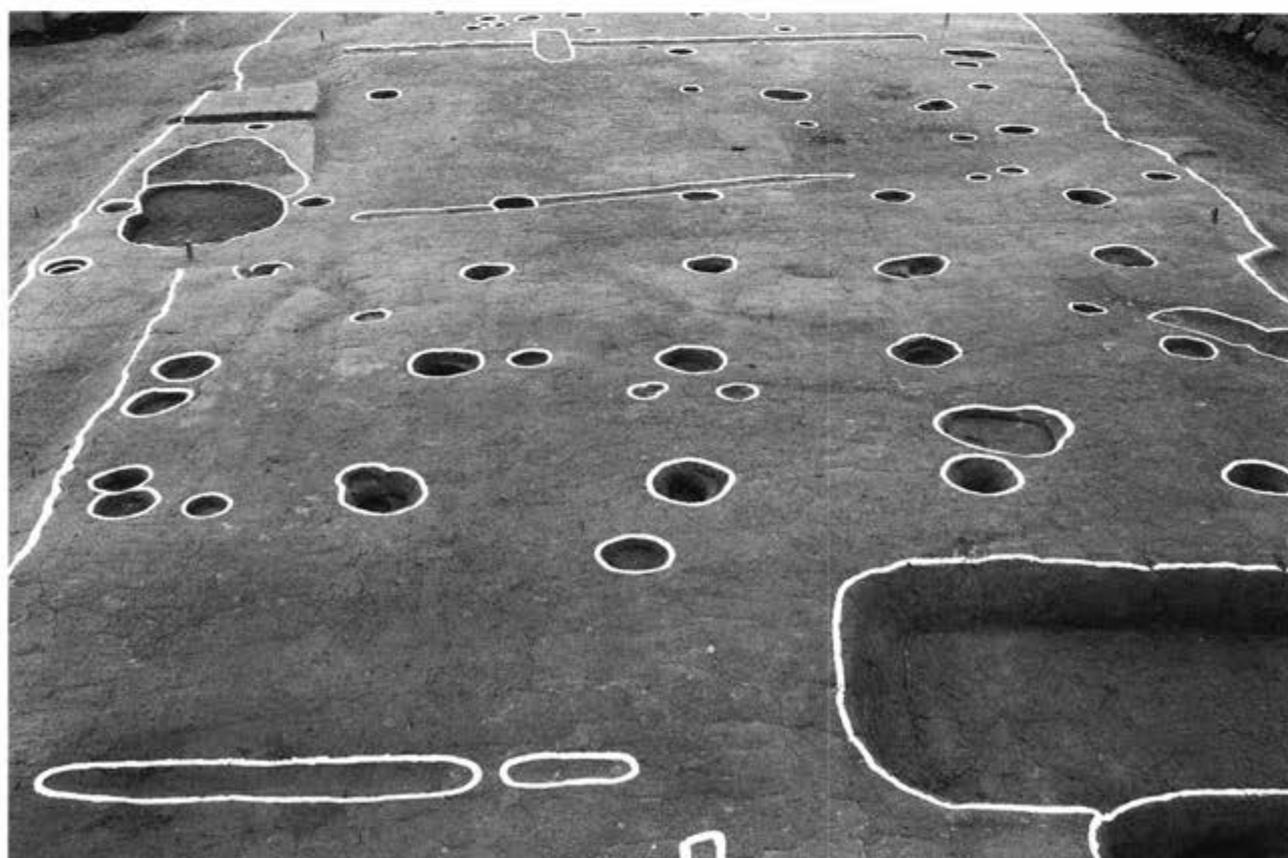
(1) D 2 地区第 1 遺構面遺構検出状況 (南から)



(2) D 2 地区第 1 遺構面鳥畑 2 検出状況 (東から)



(1) D 2 地区第 1 遺構面島畑 1 検出状況 (南から)



(2) D 2 地区第 1 遺構面 S B 001 検出状況 (東から)



(1)D 2 地区第 1 遺構面 S K003検出状況 (北から)



(2)D 2 地区第 1 遺構面 S E035完掘状況 (南から)



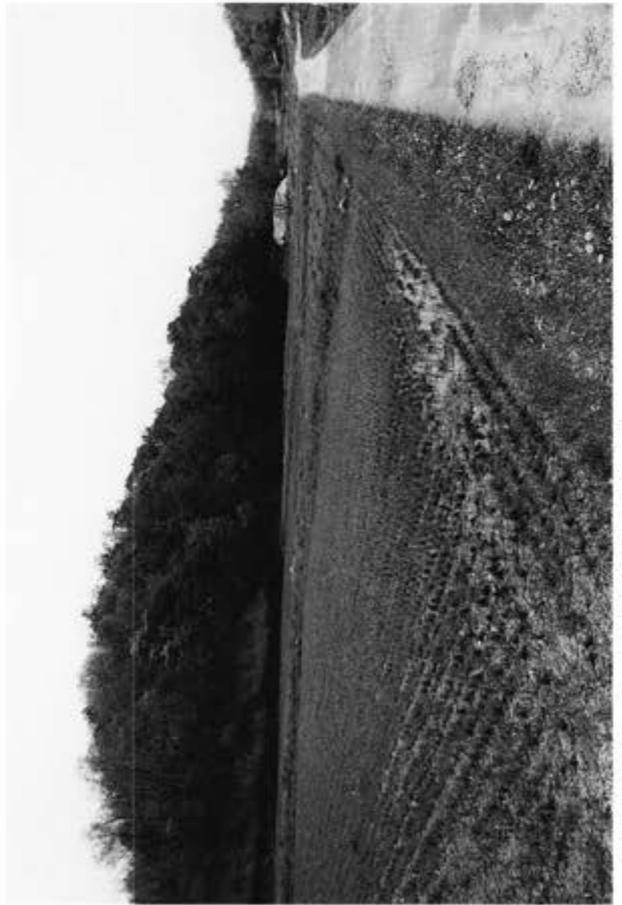
(3) 1 bt 全景 (北西から)



(4) 2 ~ 4 bt 東壁 (南西から)



(1) 調査前風景 1 ~ 13 bt 付近 (南西から)



(2) 調査前風景 13 ~ 21 bt 付近 (北西から)



(3)13 bt 全景 (西から)



(4)13・15 bt 全景 (東から)



(1)4 bt 南壁 (北西から)



(2)7~10 bt 東壁 (北西から)



(3)17・18・21 bt 全景 (北から)



(4)18 bt 付近 NR01 上層遺物出土状況 (南西から)



(1)13・15 bt NR01 全景 (西から)



(2)17・18・21 bt 全景 (南から)



(3)NR01断面 (17 bt 付近、南から)



(4)17・18・21 bt 北壁NR01遺物出土状況 (南西から)



(1)NR01断面弥生土器出土状況 (18 bt 付近、南から)



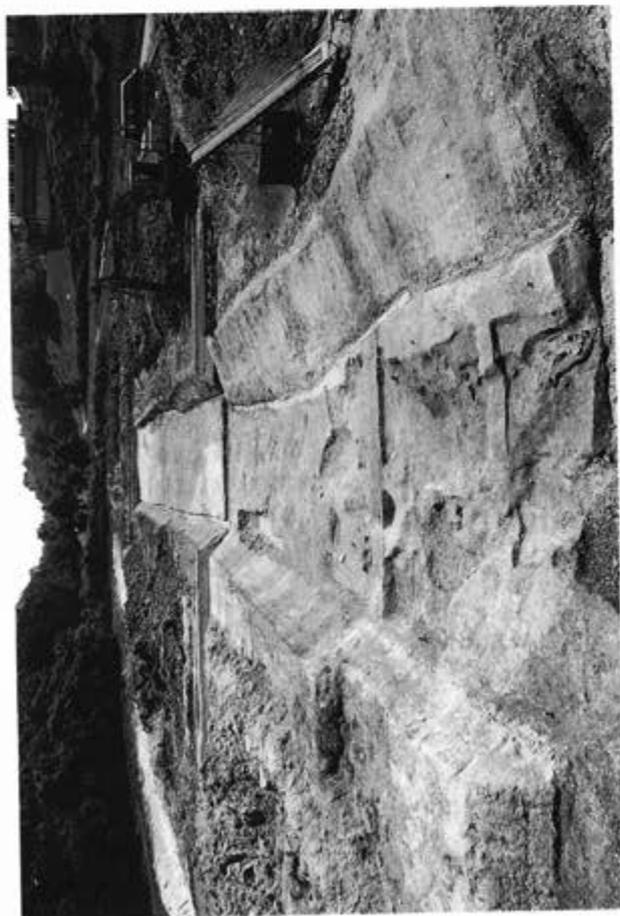
(2)17・18・21 bt NR01丸太材出土状況 (東から)



(3) 6～9 bt NR01遺物出土状況2 (東から)



(4) 6～9 bt NR01遺物出土状況3 (東から)



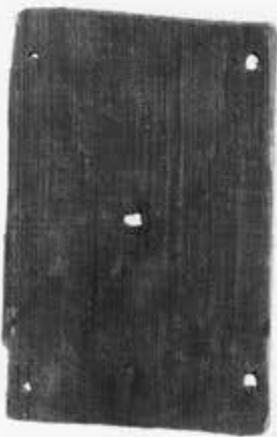
(1) 6～9 bt 全景 (北から)



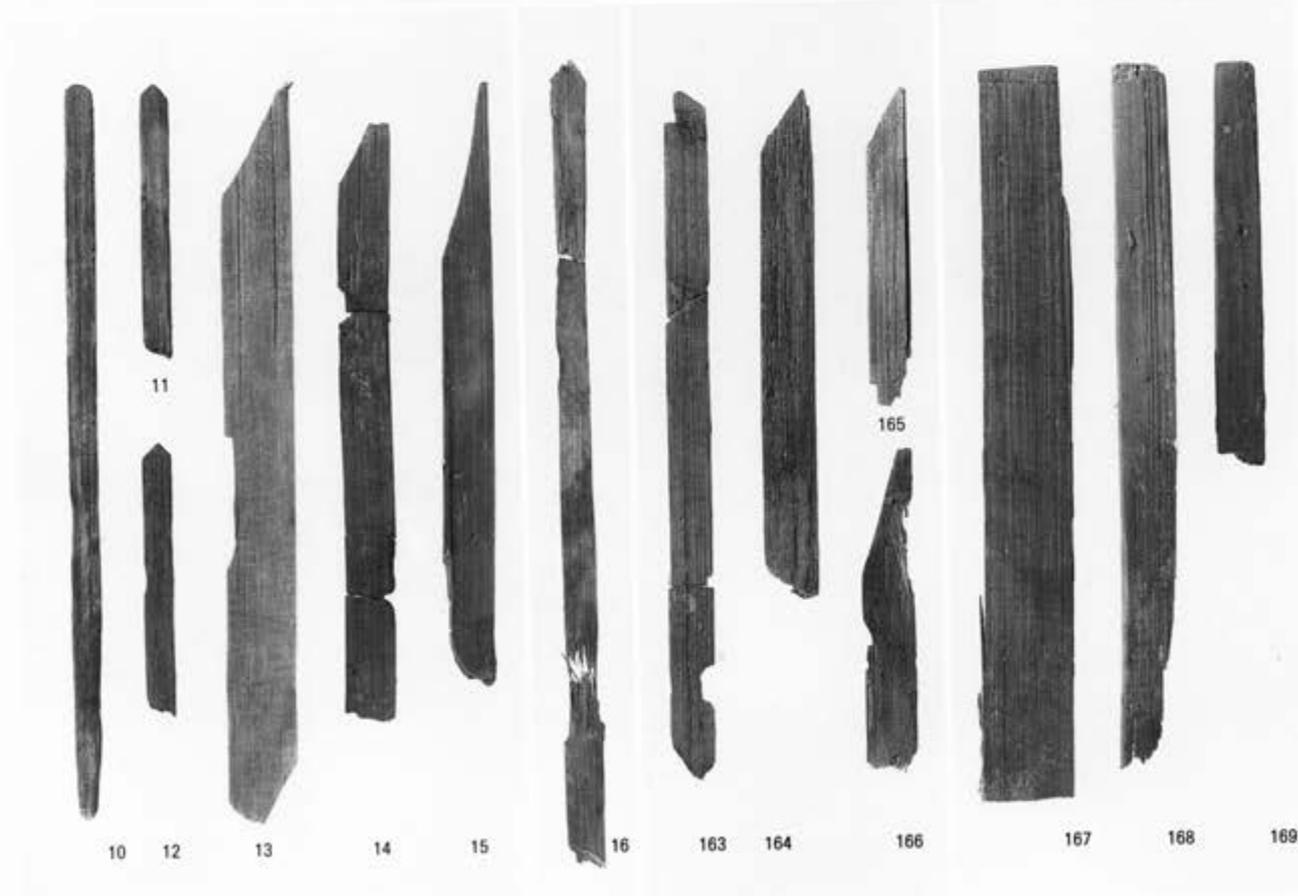
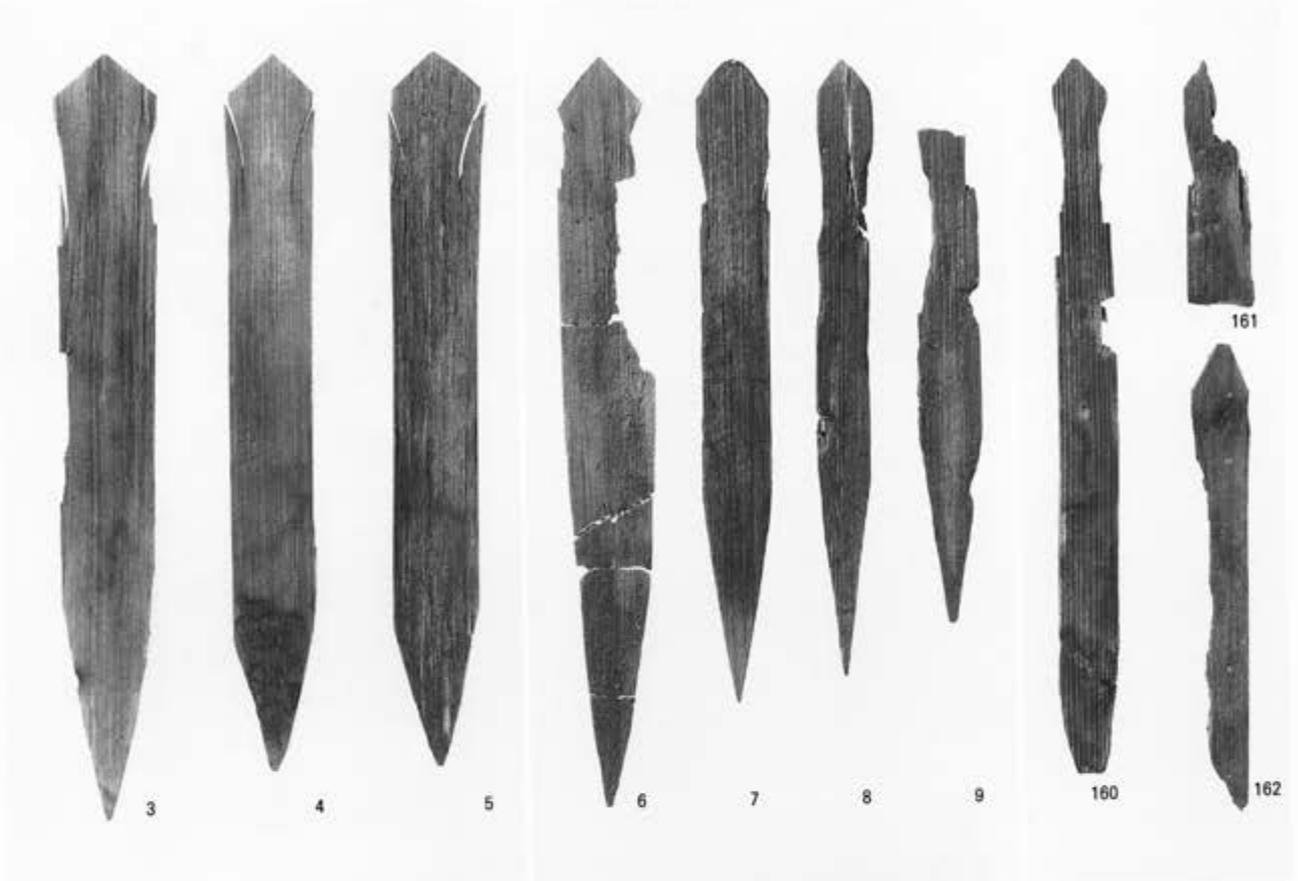
(2) 6～9 bt NR01遺物出土状況1 (北から)



2



17





18



19



22



24



25



35



34





65



69



66



75



85



78



86



80



88



82



89



83



92



94



95



98



99



102



113



114



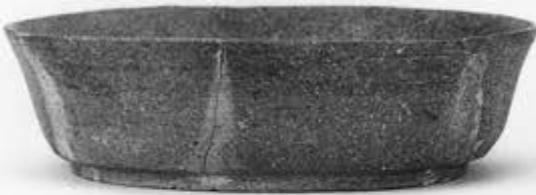
121



108



130



112



131



120



123



139



140



141



151

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第73冊							
編著者名	増田孝彦・岡崎研一・柴 暁彦・田代 弘・竹下士郎・森下 衛・有井広幸							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1996 年		12 月		26 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 " ' "	東経 " ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろべいせき 黒部遺跡	たけのぐんやさか ちようおおあざく ろべ 竹野郡弥栄町大字 黒部小字仲谷	503		35° 40' 17"	135° 7' 30"	19940418 ～ 19950711	1,000	国営農地造成
しまいせき 嶋遺跡	まいづるしおおあ ざちとせこあざし ま 舞鶴市大字千歳小 字嶋	202		35° 31' 11"	135° 20' 39"	19950619 ～ 19951222	3,200	火力発電所 建設工事
ながおか きょうあと うきょうだ い526じ 長岡京跡右 京第526次	ながおかきょうし てんじんいっちょ うめ 長岡京市天神一丁 目	209	91	34° 55' 8"	135° 41' 34"	19960523 ～ 19960712	280	道路建設
うちさと はっちょう いせき 内里八丁遺 跡	やわたしうちさと こあざはっちょ う・ひゅうがどう 八幡市内里小字八 丁・日向堂	210	37	31° 51' 33"	133° 14' 51"	19950420 ～ 19960228	3,200	道路建設
かまがたに いせき 釜ヶ谷遺跡	そうらくぐんきづ ちようおおあざき づこあざかまがた に 相楽郡木津町大字 木津小字釜ヶ谷	362		34° 43' 53"	135° 50' 7"	19950417 ～ 19950821	1,800	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒部遺跡	生産遺跡	奈良、平安	製鉄炉8基、炭窯48基	須恵器、土師器、炭	
嶋遺跡	集落	弥生	土坑	弥生土器(前期・中期)	弥生の海岸線を現海面下約1.5mで検出
長岡京跡右京第526次	都城	?	溝、欄列	土師器、陶磁器	
内里八丁遺跡	集落	弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉	竪穴住居、掘立柱建物、溝、井戸、鳥畑	土師器、須恵器、弥生土器、黒色土器、瓦器	
釜ヶ谷遺跡	散布地	奈良、鎌倉、南北朝、室町	流路	墨書人面土器、土馬ミニチュアカマド、緑釉小壺、瓦類、須恵器、土師器、人形齋串、縄文土器、弥生土器	

京都府遺跡調査概報 第73冊

平成8年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)